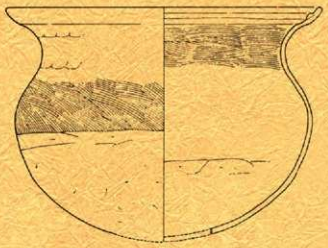
近畿自動車道(勢和～伊勢)

埋蔵文化財発掘調査報告

第 3 分 冊

楠 ノ 木 遺 跡



1991・10

三 重 県 教 育 委 員 会
三重県埋蔵文化財センター

近畿自動車道(勢和～伊勢)

埋蔵文化財発掘調査報告

第 3 分 冊

楠ノ木遺跡航空写真

南方上空から

西方上空から

序

近畿自動車道関・伊勢線にかかる現地の埋蔵文化財発掘調査は第８次区間（久居～勢和）が昭和63年度に終了し、その年度後半から第９次区間（勢和～伊勢）が開始され現在に至っております。第９次区間は多気町・玉城町・伊勢市に所在する30遺跡の調査を対象とし、昭和63年度から調査を行ってまいりました。

第９次区間については平成５年に予定されている伊勢神宮式年遷宮、及び翌年の祝祭博開催を臨んだ県行政の大幹に関連した道路建設でもあり、当事業にかかる埋蔵文化財の保護とその円滑な調整については鋭意努力いたしている処であります。

第９次区間の路線となる前述の市町が所在する地域は、古来から伊勢神宮との関連が深いことが分かっております。この地域に考古学的なメスを入れることは、当該地域の歴史を考えていくうえで、重要な資料を提供することとなりましょう。またこの調査によって得た資料を基に、当該地域の歴史を考えていくことも発掘調査を行った我々の大きな責務のひとつであり、ここに公刊する楠ノ木遺跡についても同様であります。開発と文化財の保存との接点を学術的な方面に求めることも重要なことといえましょう。

調査に際しては日本道路公団、三重県土地開発公社、多気町・玉城町・伊勢市の各関係機関、県土木部近畿道対策室、及び地元各位の多大なるご理解とご協力を得ることができました。文末となりましたが、ここに心からの御礼を申し上げます。

1991年10月

三重県埋蔵文化財センター
所長　中林昭一

例　　言

1．　本書は、平成３年度に三重県教育委員会が日本道路公団名古屋建設局から委託を受けて実施した、近畿自動車道関・伊勢線第９次区間（勢和～伊勢）建設予定地内に所在する埋蔵文化財発掘調査（整理・報告書作成業務）にかかる報告書（第１～５分冊）のうち、犬ノ木遺跡（第３分冊）の報告書である。

2．　当遺跡は度会郡玉城町勝田字楠ノ木・下山・ヤケ山・二ノ谷・三ノ谷を中心として所在し、発掘調査は平成元年５月から同年11月にかけて実施した。調査にかかる費用は日本道路公団の全額負担による。

3．　調査は次の体制で行った。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター

（平成元年度）

主幹兼調査第２課長　山澤義貴・主査　新田　洋

主事　田村陽一・主事　河北秀実

主事　小椋宣広・主事　山崎信哉

主事　江尻　健・主事　伊藤裕偉

主事　角谷泰弘（伊勢市教育委員会から派遣）

主事　榊本賢治（多気町教育委員会から派遣）

主事　前川嘉宏（玉城町教育委員会から派遣）

（室内整理員）

谷久保美知代　釆野妙子　山分孝子　宮村直子

白石みよ子　反町登子　竹内由美　田中智子　反町有子

（平成３年度）

調査第２課長　新田　洋

主事　河瀬信幸・主事　河北秀実

主事　角谷泰弘（伊勢市教育委員会から派遣）

主事　榊本賢治（多気町教育委員会から派遣）

主事　前川嘉宏（玉城町教育委員会から派遣）

（室内整理員）

谷久保美知代　釆野妙子　反町登子　田中ゆかり

現地調査については第１次調査を田村陽一が、第２次調査を伊藤裕偉が担当した。

4．　本書作成にあたっては菅原正明（和歌山県文化財センター）、西山要・（奈良大学）、千葉豊（京都大学埋蔵文化財研究センター）、中野晴久（常滑市歴史民俗資料館）、奥義次（三重県立松阪高等学校）、広瀬和久・原正之（三重県農業技術センター）の各氏をはじめ多くの方々の助言を頂いた。

5．　本書の執筆者は目次に示した。航空写真以外の写真撮影および本書の編集は伊藤裕偉が担当した。

6．　当遺跡については、すでに『きんき道調査ニュース』№24（1989）、および『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅵ（1990）を公表しているが、当報告をもって正式報告とする。

7．　本書で報告した記録および出土遺物は三重県埋蔵文化財センターにて保管している。

8．　当遺跡群の位置は国土座標第Ⅳ系に属している。挿図の方位は全て座標北で示している。真北は座標北のN０°21′W、磁北は座標北のN６°41′Wである。

9．　当報告書での用語は以下のように統一した。

どこう……用語としては「土壙」あるいは「土坑」があるが、「土坑」とした。なお、墓と考えられるものについては「墓壙」を用いた。

つ　き……用語としては「坏」があるが、「杯」とした。

わ　ん……用語としては「埦」あるいは「碗」があるが、「椀」とした。

尺　　……一尺は30.3cmとして考えた。

10．　遺構表現については、切り合い関係を重視した表現を用いている。したがって重複する遺構間の相対的な深さを示す表現は、原則的には用いていない。

11．　スキャニングによるデーター取り込みのため、若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

本 文 目 次

Ⅰ．前　　言 …… 1
1．近畿自動車道第９次区間の調査経過 …… 新　田　1
2．楠ノ木遺跡の調査経過と調査方法 …… 伊　藤　4

Ⅱ．地理的・歴史的環境－問題の所在 …… 伊　藤　9

Ⅲ．調査の成果－層位と遺構 …… 伊　藤　14
1．Ａ地区の層位と遺構 …… 14
2．Ｂ地区の層位と遺構 …… 37
3．Ｃ地区の層位と遺構 …… 48

Ⅳ．調査の成果－出土遺物 …… 伊　藤　53
1．中世集落形成以前の遺物 …… 53
2．中世の遺物 …… 53
3．近世以降の遺物 …… 59
4．出土遺物の観察 …… 76

Ⅴ．調査試料の化学分析 …… 116
1．分析の目的 …… 伊　藤　116
2．土壌分析結果報告 …… 三重県農業技術センター　117
3．鉄滓に関する分析調査 …… パリノ・サーヴェイ株式会社　119
4．中・近世土師器胎土分析調査 …… パリノ・サーヴェイ株式会社　123

Ⅵ．調査のまとめと検討 …… 伊　藤　131

図 版 目 次

ＰＬ．１　Ａ地区全景
ＰＬ．２　Ａ・Ｂ地区航空写真
ＰＬ．３　Ａ地区土層(1)
ＰＬ．４　Ａ地区土層(2)
ＰＬ．５　Ａ地区建物跡集中部分(1)
ＰＬ．６　Ａ地区建物跡集中部分(2)
ＰＬ．７　Ａ地区掘立柱建物１
ＰＬ．８　Ａ地区掘立柱建物２・３
ＰＬ．９　Ａ地区掘立柱建物２・４・９および土坑ＳＫ７
ＰＬ．10　Ａ地区土坑ＳＫ17
ＰＬ．11　Ａ地区土坑ＳＫ20・38
ＰＬ．12　Ａ地区土坑ＳＫ36・37付近
ＰＬ．13　Ａ地区土坑ＳＫ36
ＰＬ．14　Ａ地区土坑ＳＫ36・37
ＰＬ．15　Ａ地区土坑ＳＸ９・ＳＫ63
ＰＬ．16　Ａ地区土坑ＳＫ61およびその周辺
ＰＬ．17　Ａ地区井戸ＳＥ２
ＰＬ．18　Ａ地区溝ＳＤ１・２・３
ＰＬ．19　Ｂ地区調査前および作業風景
ＰＬ．20　Ｂ地区全景
ＰＬ．21　Ｂ地区土層
ＰＬ．22　Ｂ地区近景
ＰＬ．23　Ｂ地区掘立柱建物１・２
ＰＬ．24　Ｂ地区中世墓ＳＫ25
ＰＬ．25　Ｂ地区中世墓ＳＫ33・43・44
ＰＬ．26　Ｂ地区中世墓ＳＸ３
ＰＬ．27　Ｂ地区落ち込みＳＫ１、土坑ＳＫ２・32
ＰＬ．28　Ｂ地区土坑ＳＫ31および井戸ＳＫ30
ＰＬ．29　Ｃ地区調査前全景
ＰＬ．30　Ｃ地区全景
ＰＬ．31　Ｃ地区土層
ＰＬ．32　Ｃ地区掘立柱建物１・２付近
ＰＬ．33　Ｃ地区焼土坑ＳＫ11・土坑ＳＫ８
ＰＬ．34　Ｃ地区土坑ＳＫ４・13
ＰＬ．35　Ｃ地区井戸ＳＫ７・溝ＳＤ５
ＰＬ．36　出土縄文土器
ＰＬ．37　出土石器・建物根石
ＰＬ．38　出土鉄・銅製品
ＰＬ．39　出土鉄製品
ＰＬ．40　出土鐘の羽口・貨幣
ＰＬ．41　各地区出土土器　土師器類
ＰＬ．42　各地区出土土器　土師器・陶器類
ＰＬ．43　Ａ地区出土土器(1)
ＰＬ．44　Ａ地区出土土器(2)
ＰＬ．45　Ａ地区出土土器(3)
ＰＬ．46　Ａ地区出土土器(4)
ＰＬ．47　Ａ地区出土土器(5)
ＰＬ．48　Ａ地区出土土器(6)
ＰＬ．49　Ａ地区出土土器(7)
ＰＬ．50　Ａ地区出土土器(8)
ＰＬ．51　Ａ地区出土土器(9)
ＰＬ．52　Ａ地区出土土器(10)
ＰＬ．53　Ａ地区出土土器(11)・各地区出土羽釜
ＰＬ．54　Ａ地区出土土器(12)
ＰＬ．55　Ｂ地区出土土器(1)
ＰＬ．56　Ｂ地区出土土器(2)
ＰＬ．57　Ｂ地区出土土器(3)
ＰＬ．58　Ｂ地区出土土器(4)
ＰＬ．59　Ｂ地区出土土器(5)
ＰＬ．60　Ｂ地区出土土器(6)
ＰＬ．61　Ｃ地区出土土器(1)
ＰＬ．62　Ｃ地区出土土器(2)
ＰＬ．63　Ｃ地区出土土器(3)

挿　図　目　次

fig. 1　近畿自動車道第９次区間（勢和～伊勢）内遺跡遺跡位置図
fig. 2　事業地および第１次・第２次調査区位置図
fig. 3　国土座標第Ⅳ系と調査区の関係
fig. 4　本線部分小地区設定図
fig. 5　遺跡位置図
fig. 6　19世紀末頃の勝田地区周辺地形図
fig. 7　調査区周辺採集遺物
fig. 8　調査区周辺の現小字割り図
fig. 9　Ａ地区平面図
fig. 10　Ａ地区東・北壁土層断面図
fig. 11　Ａ地区建物跡集中部分平面図
fig. 12　Ａ地区建物１付近平面・土層断面図
fig. 13　Ａ地区建物２・３付近平面図
fig. 14　Ａ地区建物４平面図
fig. 15　Ａ地区建物５・６平面図
fig. 16　Ａ地区土坑ＳＫ７他平面・土層断面図
fig. 17　Ａ地区建物８付近平面図
fig. 18　Ａ地区建物９付近平面図
fig. 19　Ａ地区建物10平面図
fig. 20　Ａ地区土坑ＳＫ５土層断面図
fig. 21　Ａ地区土坑ＳＫ17（ｗ・ｅ）平面・土層断面図
fig. 22　Ａ地区土坑ＳＫ20平面・土層断面図
fig. 23　Ａ地区土坑ＳＫ36平面・土層断面図
fig. 24　Ａ地区土坑ＳＫ37他土層断面図
fig. 25　Ａ地区拡張部土坑群・ピット集中部分・建物13平面図
fig. 26　Ａ地区土坑ＳＫ63平面・土層断面図
fig. 27　Ａ地区井戸ＳＥ２・ＳＫ21土層断面図
fig. 28　Ａ地区井戸ＳＥ１・ＳＫ３・22土層断面図
fig. 29　Ａ地区土坑ＳＫ61付近平面および遺物出土地点位置図
fig. 30　Ａ地区近世以降の遺構平面および等高線図
fig. 31　Ｂ地区平面図
fig. 32　Ｂ地区西・南・北壁土層断面図
fig. 33　Ｂ地区建物１平面・断面図
fig. 34　Ｂ地区建物２付近平面・断面図
fig. 35　Ｂ地区建物３・４付近平面・断面図
fig. 36　Ｂ地区中世墓ＳＸ３平面・立面図
fig. 37　Ｂ地区中世墓ＳＫ４・土坑ＳＫ２平面・立面図
fig. 38　Ｂ地区中世墓ＳＫ25・ＳＫ33・43・44平面・立面・土層断面図
fig. 39　Ｂ地区落ち込みＳＫ１土器・礫群出土状況平面図
fig. 40　Ｂ地区土坑ＳＫ31土層断面図
fig. 41　Ｂ地区土坑ＳＫ32土器出土状況平面図
fig. 42　Ｂ地区井戸ＳＫ30断面図
fig. 43　Ｃ地区平面図fig. 44　Ｃ地区西・北壁土断面図
fig. 45　Ｃ地区建物１・２付近平面・断面図
fig. 46　Ｃ地区焼土坑ＳＫ11平面・断面図
fig. 47　Ｃ地区井戸ＳＫ７土層断面図
fig. 48　出土縄文・弥生・奈良時代土器および石器
fig. 49　出土金属製品・鞴羽口実測図および貨幣拓影
fig. 50　出土砥石実測図
fig. 51　楠ノ木遺跡出土羽釜形土器分類図
fig. 52　Ａ地区土坑ＳＫ20・65他出土土器
fig. 53　Ａ地区井戸ＳＥ１・土坑ＳＫ17他出土土器
fig. 54　Ａ地区土坑ＳＫ５・７他出土土器
fig. 55　Ａ地区土坑ＳＫ55他出土土器
fig. 56　Ａ地区土坑ＳＫ37・ＳＸ９他出土土器
fig. 57　Ａ地区井戸ＳＫ３・ＳＥ２他出土土器
fig. 58　Ａ地区溝ＳＤ１・２・３出土土器
fig. 59　Ａ地区掘立柱建物・近世以降出土土器およびＡ・Ｂ地区出土土器拓影

fig. 60　B地区落ち込みＳＫ１、土坑ＳＫ18他出土土器
fig. 61　B地区中世墓ＳＫ25・43他出土土器
fig. 62　B地区土坑ＳＫ５他出土土器
fig. 63　B地区井戸ＳＥ30溝ＳＤ２・３他出土土器
fig. 64　C地区土坑ＳＫ10・11・12他出土土器
fig. 65　C地区土坑ＳＫ４・５他出土土器
fig. 66　C地区井戸ＳＫ７他出土土器
fig. 67　土壌サンプル採集地点
fig. 68　胎土分析試料実測図(1)（植ノ木遺跡を除く）
fig. 69　胎土分析試料実測図(2)（植ノ木遺跡を除く）
fig. 70　A地区Ⅰ・Ⅱ期主要遺構配置図
fig. 71　A地区Ⅲ期主要遺構配置図

写　真　目　次

pho. 1　第１次調査風景
pho. 2　A地点遠景
pho. 3　鉱滓の電子顕微鏡写真(1)
pho. 4　鉱滓の電子顕微鏡写真(2)
pho. 5　土器胎土中の重鉱物顕微鏡写真

表　目　次

tab. 1　近畿自動車道第９次区間（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査計画
tab. 2　A地区遺構一覧表(1)
tab. 3　A地区遺構一覧表(2)
tab. 4　A地区掘立柱建物一覧表
tab. 5　B地区遺構一覧表
tab. 6　B地区掘立柱建物一覧表
tab. 7　C地区遺構一覧表
tab. 8　C地区掘立柱建物一覧表
tab. 9　石製品類観察表
tab. 10　金属製品類観察表
tab. 11　出土土器観察表
tab. 12　土壌分析結果表
tab. 13　鉄滓中の繊維の観察結果
tab. 14　鉄滓中の繊維の同定結果
tab. 15　鉄滓の成分定性分析結果表
tab. 16　胎土分析試料一覧表
tab. 17　土器胎土重鉱物組成
tab. 18　土器胎土重鉱物組成ダイアグラム
tab. 19　土器胎土重鉱物組成ダイアグラム（時期別）

Ⅰ．前　　言

1．近畿自動車道第９次区間の調査経過

近畿自動車道関・伊勢線（伊勢自動車道）の第９次区間（勢和～伊勢）の建設計画については昭和47年に基本計画、57年に整備計画が、そして昭和60年２月に建設大臣から日本道路公団に施行命令が出されている。また、翌月の３月には実施計画認可と路線発表がなされている。

この第９区間は第８次区間（久居～勢和）の延長路線として、勢和、多気インターチェンジから仮称伊勢インターチェンジまでの延長21.5kmの建設計画であり、行政区画としては、勢和村、多気町、玉城町、伊勢市をほぼ東西に横断する形をとっている。

そして、この路線は、三重県の中・南伊勢と近畿、及び中部経済圏を結ぶ幹線道路として、一般国道23・42号の交通緩和とともに、伊勢湾岸と内陸部の産業、あるいは伊勢志摩・紀州への観光ルートとしての大きな使命をもつものといわれている。

そのうち、第８次区間（久居～勢和）については、平成２年12月に供用開始されている。

さて、この第９次区間（勢和～伊勢）建設にかかる埋蔵文化財の保護、調査協議については昭和50年段階に建設省名阪国道工事事務所、県道路建設課と県教育委員会文化課との協議と現地立会い調査という形で開始された。また、事業地内にかかる埋蔵文化財の分布調査については昭和53・55・56年度の３次にわたって県教育委員会が県文化財調査員等の協力を得て実施し、昭和56年３月14日付、教文第429号で道路建設課あてに「近畿自動車道伊勢線関係遺跡分布調査結果報告について」として文書通知をしている。　その後については、第８次区間（久居～勢和）の埋蔵文化財発掘調査の体制と諸準備に迫われた形となり、昭和59年度末には第８次区間の現地発掘調査を実施するに至った。そして、この８次区間の現地発掘調査には59年度を皮きり開始され、昭和63年度前半までの足かけ５年余の期間が費やされた。

さて、第９次区間の遺跡取り扱いについては、昭和61年度になって具体的に浮上し、試掘計画等について、日本道路公団松阪工事事務所と調整・協議するに至った。また、62年度初めには再度、第９次区間（勢和～伊勢）建設予定地についての遺跡確認と分布調査を実施した。この段階で公団あてに提示した遺跡は計26件、面積にして114,200㎡である。

なお、この第９次区間については、その後の新発見等の協議を経て、玉城町で１件（泉貢窯跡）、多気町で１件（佐奈水銀鉱山跡）、伊勢市内で２件（大谷古墳、古市・中之地蔵町遺跡）の遺跡が追加されている。

以上のような経過を経て、第９次区間の現地における埋蔵文化財発掘調査は昭和63年度の後半期から開始することとなった（tab.１参照）。

また、最後となりますが、調査の円滑推進にあたっては、日本道路公団松阪工事事務所、県土木部近畿道対策室、伊勢市近畿道対策室他、伊勢市・多気町・玉城町の各教育委員会に、現地にあっては各地元自治会長をはじめ、多くの方々のご理解とご援助を得ました。加えて、発掘業務については三重県土地開発公社のご協力をいただきました。文末ながらここに記して厚くお礼申し上げます。　　（新田　洋）

No.	遺跡名	所在地	確認面積（㎡）	調査面積（㎡） 昭和63年度 試掘	本調査	平成元年度 試掘	本調査	平成2年度 試掘	本調査	平成3年度 試掘	本調査	合計
1	王子谷遺跡	多気町前村字王子谷	1,000	48		144						192
2	桃谷古墳	〃 前村字桃谷、五桂字ツツジ	100			27						27
3	ツツジ古墳	〃 五桂字ツツジ	100			20						20
4	牛バサマA遺跡	〃 野中字牛バサマ・字定越	1,500	304			3,000					3,304
5	牛バサマB遺跡	〃 野中字牛バサマ・字ナルコ	4,700	336	(1,200)		5,500					5,836
6	ヒジヤ口遺跡	玉城町原字ヒジヤ口・国東河内	5,600	288								288
7	のせんじ遺跡	〃 積良字のせんじ・泉貫	1,000	96								96
8	浦の内遺跡	〃 積良字浦の内	2,800	192	(2,000)		2,500					2,692
9	上ノ垣内遺跡	〃 山神字上ノ垣内・坂ノ辻	3,400	196								196
10	篭ケ城跡	〃 山神字西老谷・老谷	2,000					286	2,180			2,466
11	山神東城跡	〃 山神字東老谷	2,700					441	3,922			4,363
12	黒山古墳	〃 山神字黒山・東岡谷・仲山	100			30						30
13	楠ノ木遺跡	〃 勝田字楠ノ木・二ノ谷・ヤケ山他	39,000			2,032	6,890					8,922
14	矢倉戸前古墳	〃 宮古字細谷	100			20						20
15	蚊山遺跡	〃 岩出字塚名・左郡	10,000	587			11,500					12,087
16	宮地遺跡	〃 岩出字塚名・所り垣	2,300	144			3,200					3,344
17	中ノ垣外遺跡	伊勢市佐八町字中之垣外	4,400			400	2,100					2,500
18	寺原B遺跡	〃 佐八町字寺原	2,400			224	500					724
19	ハノカ遺跡	〃 佐八町字向口、津村町字ハノカ他	10,000			792		147	2,800			3,739
20	落合古墳群	〃 津村町字口山田	1,200			151			3,165			3,316
21	井戸谷遺跡	〃 前山町字井戸谷	400			336						336
22	河原谷遺跡	〃 前山町字河原谷	100						100			100
23	世義寺跡	〃 前山町字亀谷郡	3,500			312			2,195			2,507
24	中起遺跡	〃 勢田町字中起	3,500					257				257
25	蟹尾遺跡	〃 久世戸町字蟹尾	520							32	520	552
26	奥辺跡	〃 植部町字奥	11,800					494				494
27	泉貫窯跡	玉城町積良字泉貫・向山丑岡	4,500			330			2,556			2,886
28	佐奈水銀鉱山跡	多気町前村字井戸谷	400				400					400
29	大谷古墳	伊勢市佐八町字大谷	120					120				120
30	古市・中之垣外町遺跡	伊勢市中之町・桜木町	5,000							112	2,500	2,612
	計		124,520	2,191	(3,200)	4,818	35,590	1,745	16,918	144	3,020	
	合計			2,191＋(3,200)		40,408		18,663		3,164		64,426

tab. 1　近畿自動車道第9次区間（勢和～伊勢）　埋蔵文化財発掘調査計画

fig. 1. 近畿自動車道第９次区間（勢和～伊勢）内遺跡位置図（scale＝$1/100000$）※番号はtab. 1と対応する。

2. 楠ノ木遺跡の調査経過と調査方法

調査の経過

楠ノ木遺跡が確認されたのは1979年のことであった。当時は近畿自動車道建設予定地内の分布調査を行っており、それに際して確認されたものである。事業地内確認面積は3 9,000㎡であった。

近畿自動車道の建設が進展し玉城町内に至った1989年5月に、主事田村陽一を担当として第1次調査（試掘）を行った。調査面積は2,032㎡である。その結果、遺構が確認されたところを中心とした3か所の地区（A・B・C地区）に調査区を集約することとなった。本調査（第2次調査）は主事伊藤裕偉を担当とし、1990年6月29日から同年11月17日にかけて行った。なお、調査途中の1時期に主事江尻健の補助があった。最終調査面積は、A地区が4,700㎡、B地区が1,420㎡、C地区が770㎡であり、全体で6,890㎡である。

当遺跡は、第1次調査（試掘）によって遺物包含層が薄く、そこに包含されている遺物も極めて希薄であることが確認されていた。そのため第2次調査では、表土直下から約20cmの堆積が認められる灰褐色系砂質土を、遺構検出面である淡黄灰色系砂質土の直上までバックフォーにて掘削した。遺構の検出・掘削は全て人力である。なお調査区壁面の土層観察を行うため、調査終了直前にバックフフォーにて危険が伴わない程度の掘削を行った。

調査にあたっては、三重県土地開発公社、工事受託の（株）桜井組（第1次調査）、（株）森組（第2次調査）、度会町上久具・棚橋地区の方々、および地元勝田地区の方々に多大なご援助とご協力を得ました。記して感謝の意を表します。

調査の方法

調査区内の小地区について

調査区は近畿自動車道本線部分（B・C地区）と玉城インターチェンジ部分（A地区）とに分かれており、さらにA地区とB地区との間には植林地が残る。このために3地区を通して小地区設定することは困難であった。したがって、B・C地区とA地区とに分けて小地区設定を行った。

B・C地区は自動車道工事センター杭STA573+80とSTA575+00とを結んだラインを軸線（hライン）とした。そしてSTA573+80を0とし、4m単位で1，2，3，4，5……と区切っていった。STA 575+00は530となる。このhラインを基準として同様に4m単位で勢和方向に向かって左側にg，f，e，d，c……とし、右側にi，j，k，l，m……としていった。

A地区はインター進入路のセンターラインであるAランプを基準（kライン）とし、KA．1を7とし、本線から離れるにしたがって4m単位で8，9，10，11，12……とした。同様に4m単位で、本線に向かって左側にj，i，h，g，f……とし、右側にl，m，n，o，p……とした。なお、左側は拡張のために一部aラインを越えるところが生じた。そのため、それより左側はア，イ，ウ，エ，オ……と続けることとした。

調査区内の遺構および遺物の取上げはこのメッシュが交差する4m×4mを1小地区とし、B・C地区については勢和方向を向いて左上の交点が示すものとしている。A地区についても本線に向かって同様のこととしている。また、大きめの遺構はこの小地区内では収まらないものがある。この場合、完結している遺構（土坑やピットなど）は、支障のない限りはどちらかの小地区を用いて記述している。完結しない遺構（溝など）の場合は、特に遺物取上げの際に各小地区単位で行っている。

なお、改めて述べるまでもないが、この小地区割りは座標軸とは無関係であるので注意されたい。

遺構の名称・実測について

遺構は検出時の状態によって土坑（SK）、井戸（SE）、溝（SD）、その他（SX）を便宜的に分け、最終的に確定した名称を記号の頭に付けている。土坑、落ち込み、墓、建物などの遺構はA・B・C地区毎で通し番号とし、ピットは各小地区毎で番号を付けた。したがって、各地区にSK1はひとつしかないが、SE1，SX1など末尾の数字が同一なものは存在するということになり、Pit 1は各小地区にはひとつしかないが、同一地区の別な小地区には存在する、ということになる。

また、土坑などで出土状況を実測した遺物は土器はｐ(pottery)、鉄製品はｉ(iron)、石はｓ(stone)で採り上げを行っている（木製品はない）。
遺構の実測はＡ地区のみ航空測量で他は1／20の手書きである。遺構の詳図として1／10を作成したものもあり、その大部分を今回掲載している。

整理方法について

近畿自動車道９次区間内にある遺跡の通し番号では、楠ノ木遺跡は「13」である。遺構に関連した実測図面は13-0001から13-0106までが存在する。これらの図面はＡ２版のファイルに収納し、図面番号・内容・縮尺を記入した表を作成している。全ての図面をマイクロ撮影し、別途保存している。

遺物は遺構の登録と同様全て通し番号とし、番号の頭に「13」をつけている。実測図は13-0001から13-0600まで存在するが、手違いによって同一の番号を付加してしまったものもある。それについては番号の後に「a.b」を付けることによって補っている。遺構図と同様、これらの図面はＡ２版のファイルに収納し、番号・種類・名称・出土地などを記入した表を作成している。全ての図面をマイクロ撮影し、別途保存している。

遺構写真はスライド・モノクロおよびデーター写真としてカラーを撮影した。また、６×７のカラースライドを撮影した遺構もある。遺物写真は６×７のモノクロを用いた。遺構写真のスライドは地区・遺構・方向を記入した台帳を作成している。

調査日誌抄

（第１次調査）

1989年５月16日　調査工事部門を（株）桜井組が落札。重機・作業員の手配を行う。
５月18日　調査坑の設定。雑木の清掃。
５月19日　調査の開始。
５月23日　Ｂ地区付近の調査。
５月25日　Ａ地区付近の調査。
５月26日　Ｃ地区付近の調査。
５月29日　Ａ地区にて掘立柱建物検出。
５月31日～６月２日　写真・略測。
６月５日　Ａ・Ｂ・Ｃ地区の設定。

（第２次調査）

６月26日　調査工事部門を（株）森組が落札。重機・作業員の手配を行う。
６月下旬　調査区の確認。
６月29日　調査の開始。Ｃ地区より行う。
６月30日　Ｃ地区の概況が出る。溝、土坑など。
７月４日　Ｂ地区の表土掘削。Ｃ地区の遺構検出。Ｃ地区の遺物に室町時代のものを確認。
７月５日　Ｃ地区建物１検出。Ｂ地区の包含層掘削中、大甕片が集中している箇所にあたる。後で中世墓（ＳＫ25）と判明。
７月６日　Ｃ地区建物２検出。
７月７日　Ｃ地区ＳＫ７はオーバーハングしたものとわかる。
７月11日　Ｃ地区ＳＫ11の掘削。底面には焼土はなく、遺物は皿類が多い。ＳＫ７から出土した常滑産の甕はＳＫ８から出土したものと接合した。
７月12日　Ｂ地区の遺構検出。南側は遺構密度が薄い。Ｃ地区ＳＫ７の断ち割り。
７月13日　Ａ地区の一部について表土を掘削。
７月14日　Ｃ地区の清掃・写真。
７月17日　Ｂ地区の遺構掘削。ＳＸ３から鉄刀・土師器小皿が出土。中世墓と考えられる。また、埋土からは爪型文のある縄文土器が出土した。
７月18日　Ｃ地区遺構平面図作成。Ｂ区の遺構検出・掘削。日照り続きで検出困難極める。
７月21日　Ｂ地区の遺構掘削。ＳＤ２に石鏃が混入していた。

pho. 1　第１次調査風景（Ａ地区）

7月26日　台風にもかかわらず作業するが、余くはかどらず。

7月28日　B地区の遺構検出全て終了。C地区建物のピット断ち割り。

7月29日　C地区壁面の断ち割り。

7月31日～8月2日　日照り続きのあと雨ばかりで全く作業進展せず。

8月3日　B地区SK25の掘削。建物2を検出。

8月5日　B地区SK43から瀝美産と思われる完形の壺出土。今まで完形品が少なかったので、作業員の人々色めき立つ。

8月9日　SK43・44の遺物取上げ。

8月10日　B地区の清掃・写真。

8月17日　盆休み後、調査を再開する。A地区の表土掘削。

8月21日　A地区の遺構検出と掘削。B地区の実測のための段取り。

8月22日　B地区の遺構平面図作成。

8月28日　A地区の遺構掘削。SK20から瓦器片出土。

8月30日　A地区SD11から三筋壺出土。

8月31日　A地区建物1の写真撮影。

9月5日～8日　長雨で中止。

9月11日　調査区を東寛に拡張。鉄滓が大量に認め

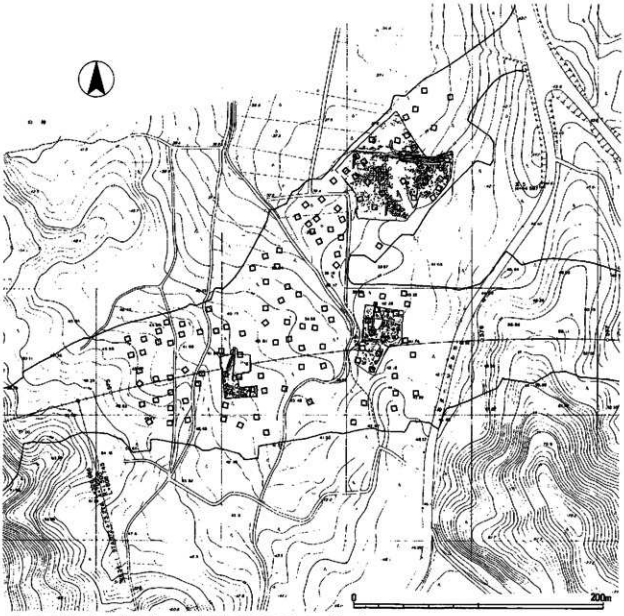


fig.2．事業地および第1次・第2次調査区位置図（scale＝1/3,000）

られるところあり。

9月14日　A地区SK36からは土嚢袋で4袋の鉄滓が出土した。

9月18日　SK36・37の掘削。底面にはピット多い。

9月21日　A地区建物9が見つかる。

9月25日　A地区SK49から古銭4枚以上出土するが、腐敗がひどい。A地区の航空測量のための現地説明会を行う。

9月26日　SK37の続きを確認するため、再度東側へ拡張する。その南寄りで完形の陶器平茶椀が出土するも割ってしまった。作業員の非難多し。

9月27日　A地区の調査終了部分の清掃を開始する。先日拡張したところから、陶器卸皿の完形品出土。作業員の反応多大。

9月29日　拡張部分の遺構検出・掘削。

10月2日～5日　現地説明会のための清掃をA・B地区について行う。

10月6日　リフト車にてA地区の写真撮影。玉野総合コンサルタントによる航空測量のための杭打ち。

10月7日　現地説明会。雨であったが、約30人の参加があった。

10月9日　伊藤所用のため、江尻健が代理をする（～17日）。航空測量のための清掃。拡張部分の遺構掘削。現地説明会の後片付け。

10月13日　A地区の航空測量。

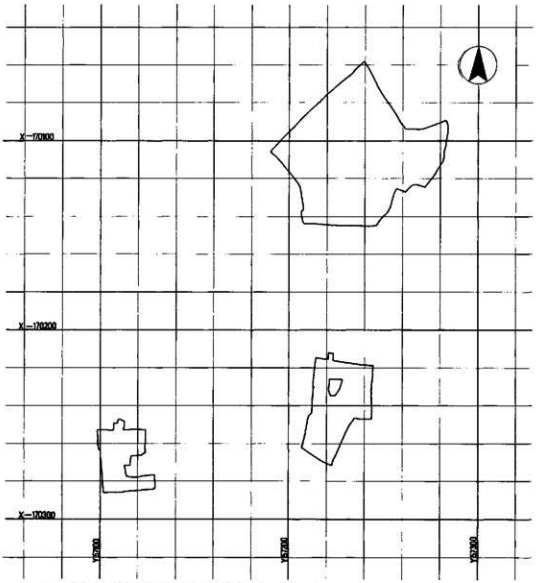


fig. 3．国土座標第Ⅳ系と調査区の関係（scale＝1/2,000）

10月16日　Ｂ地区壁際の断ち割り。

10月18日　現場日和であるが、斎宮歴史博物館がオープンのため、作業中止。

10月20日　Ａ地区ＳＥ２、Ｂ地区ＳＫ30・ＳＥ１の断ち割り。

10月24日　Ａ地区ＳＥ２を－３ｍまで下げる。岩盤に当たる。下層から輪の羽口の良好なもの出土する。

10月25日　Ａ地区ＳＥ２が掘り上がる。北寄りで一段下がり、可能な限り掘削するが、湧水のために途中で断念する。

10月26日　Ａ地区拡張部分の写真。

10月30日　拡張部分遺構平面図のための段取り。

11月１日～７日　拡張部分の遺構平面図作成。

11月９日　Ａ地区壁際の断ち割り。ピット（模石）を持つものの掘削。

11月10日　Ａ地区ＳＥ１の断ち割り。底付近から完形のねり鉢出土。ＳＫ22も井戸と判明した。

11月11日　断ち割りした遺構の埋め戻し。本日にて掘削作業は終了した。

11月12日～17日　土層図その他の作成。

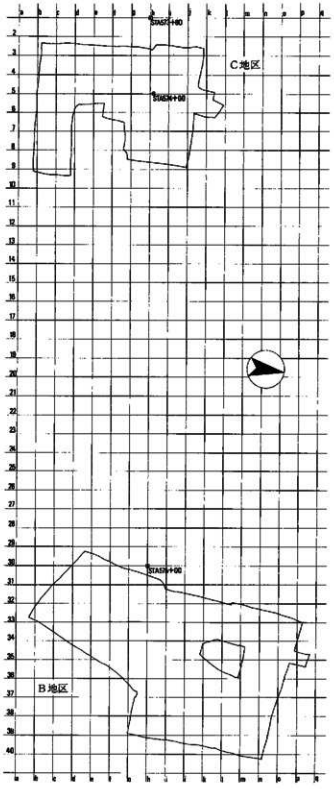


fig. 4．本線部分小地区設定図（scale＝1/800）

Ⅱ．地理的・歴史的環境－問題の所在－

楠ノ木遺跡周辺の環境

楠ノ木遺跡は、巨視的に見れば宮川の中流左岸にそびえる大日山山塊から北へ派生する数条の尾根に囲まれたところに位置している。大日山から流れ出た水のうち、宮川とは反対方向の外城田川に向かって流れる側にこの遺跡は所在している。遺跡から北方を望むとちょうど正面に田丸城跡があり、さらに北には土器製作遺構を多く検出している明和町有爾中・袋村地区に続く丘陵が望める。

この遺跡の立地を微視的に見ると、地理的には谷底平野に相当するところを中心に立地している。丘陵が平坦地へと移ったところにA地区が、丘陵斜面の先端に相当するところにB・C地区が位置している。現在はぶどう畑や植林地として利用されており、人間の居住を示すようなものは全く見られない。遺跡の北側には江戸時代に造成されたという大池と通称する貯水池がある。

街道から見た楠ノ木遺跡

この遺跡の地域的な立地状況をみるために、旧大日本帝国陸地測量部作成の地形図（fig.6）を見てみよう。当該地域は圃場整備以前には条里地割りが良好に残存していたところである。今回の楠ノ木遺跡調査区付近、特にA地区周辺は方圃地割りが認められるところであり、条里がこの付近まで及んでいた可能性を推定させる。当該地域の条里には道との関係や集落立地のことなど多くの興味深い事実が隠されているようであるが、主題から外れるしその検討を行う力量はないのでここでは触れない。

さて、fig.6 の地図では、道の表示に 4 種類認め

fig.5．遺跡位置図（scale＝1/50,000）（国土地理院 1/25,000『国束山』『伊勢』から）

注．中世に限る。トーンは集落推定地及び城館跡。
□は延喜式内社（神宮橋・末社を含）1．御船神社　2．櫛原神宮　3．行蓮神社 4．津布良神社　5．蚊野神社　6．田乃家神社
7．楊神社　8．坂子国生神社 9．楊下神社　10．奈良波良神社　11．狭田国生神社　12．小社神社　13．園内神社
単独数字は城館跡　1．笠木館跡　2．坊主山館跡　3．山神城跡　4．田丸城跡　5．岩出城跡　6．寺山城跡
※矢野地区には小ばし遺跡、野鍋地区には仲垣内・赤垣内遺跡、小社・山岡・曽根地区には中ノ切遺跡、岩出地区には蚊山遺跡、
津村地区には中新田・中ノ垣外遺跡、佐八地区には佐八藤波遺跡をそれぞれ含む。

られる。2本の実線・実線と破線・2本の破線・1本の破線、である。これらは当時の街道が2本の実線で表現されていることから、この順序で重要な道路を示したものであると考えられる。注意すべきことは山神集落から楠ノ木遺跡に至る山裾の道があり、実線と破線で表現された2級道路として存在していることである。この道（以下、集落間道）は先述の方画地割りに制限され、「権八」「大グルワ」「ヤケ山」と「のま垣外」「小清水」のあいだを直線的に走っている。現在この道は幅2mに満たない、丘陵部分では切り通し状を呈するものである。細かく見ると丘陵を縦断するようなかたちで存在していることが判る。現在ではほとんど機能していないようで、笹が生い茂っている状態にある。現在山神集落から東へ行く場合には、集落から北上して田宮寺集落から大池へと通じる道を利用している。

さて、この集落間道は楠ノ木遺跡の東で度会町棚橋へ通じる熊野脇街道（現県道度会・玉城線）[1]と交差している。この道以外にも楠ノ木遺跡付近には多くの道が交錯している状況が看過される。要するに楠ノ木遺跡は交通の要所に位置しているのである。この集落間道がかつて街道に準ずるものとして機能し、そして廃絶していった背景を考えるには、楠ノ木遺跡の動向が無視できないであろう。

楠ノ木遺跡の規模

このような立地条件にある楠ノ木遺跡は、遺跡の広がりについてもかなり広範囲であることが想定できる。まず、先述した大池南岸の「小清水」では陶器椀（fig.7－3）を、「土山口」でも陶器椀（fig.7-4）を、A地区に隣接する「ヤケ山」の丘陵部斜面では土師器皿（fig.6－1～2）をそれぞれ採集している。また、現県道度会・玉城線の東に位置する通称サニーロードの拡幅に伴って「下山」で遺構かと思われるものを確認した（A地点　pic.2）。さらに小字の名称には、調査区の北側や西側に「のま垣内」・「大グルワ」などの、人間の居住を想定させる地名[2]が存在している（fig.8）。「のま垣外」とはあるいは「沼垣外」の転訛したものかと思われるが、もしもそうであれば大池の前身として沼状地が存在していたのかも知れない。

これらのことから、当遺跡は東端は「下山」の丘陵部分、西端は「土山口」から「三ノ谷」付近、南端は「車谷口」「三ノ谷」付近、北端は大池付近という、調査区の位置する谷状地にかなり大規模に広がっているものと考えることが出来よう。したがって現在複数の小字にわたっているこの谷に一定の集落が存在していたものと考えられることから、この谷の集落跡の総称として「楠ノ木遺跡」の呼称を用いたい。このような状況であるために開発に際しては細心の注意が必要かと思われる。

なお地元の伝承では当遺跡近辺は「下山千軒」と呼ばれている。この伝承がどこまで事実かは分からないが、何らかの意味合いがある可能性は充分にあり、注意を要する。これが中世における状況を描写したものとすれば、当遺跡は質的にもかなり大規模であった可能性がある。

楠ノ木遺跡周辺の遺跡

つぎに楠ノ木遺跡の中心である中世の当該地域の状況を概観してみよう。当該地域の通史的な遺跡分布については東浩成氏によって詳述されている[3]ので、そちらを参照されたい。

中世の文献史料中に地名あるいは村名として存在の確認できるものと、現在遺跡として確認できるものを集落想定地とし、さらに延喜式内社（神宮摂末社）と城館跡を示した（fig.5）。古代以降、当該地域は伊勢神宮の所領である「神三郡」内に位置しており、神宮関連の文献[4]には「原」、「積良」、「山上（山神）」、「矢野」、「野篠」、「狩田（刈田、苅田、勝田ともう）」、「田邊（上田辺・下田辺）」、「玉丸」、「宮子（宮古）」などの地名のほか、「田宮寺」などの名称も散見される。また中世では上記の地名のほか「田宮」という現田宮寺集落に相当するかと考えられるものも認められる。これらの地名は現在の大字に相当する旧村と見て大過ないものである。このことから、現在確認されている遺跡の他に、現在の集落と重複するかたちで集落跡が存在する可能性が充分に想定できるのである。この想定をもとに楠ノ木遺跡周辺の中世遺跡想定地を、既に確認されている遺跡に迷わされずに図示してみるとこのようになる（fig.5）。

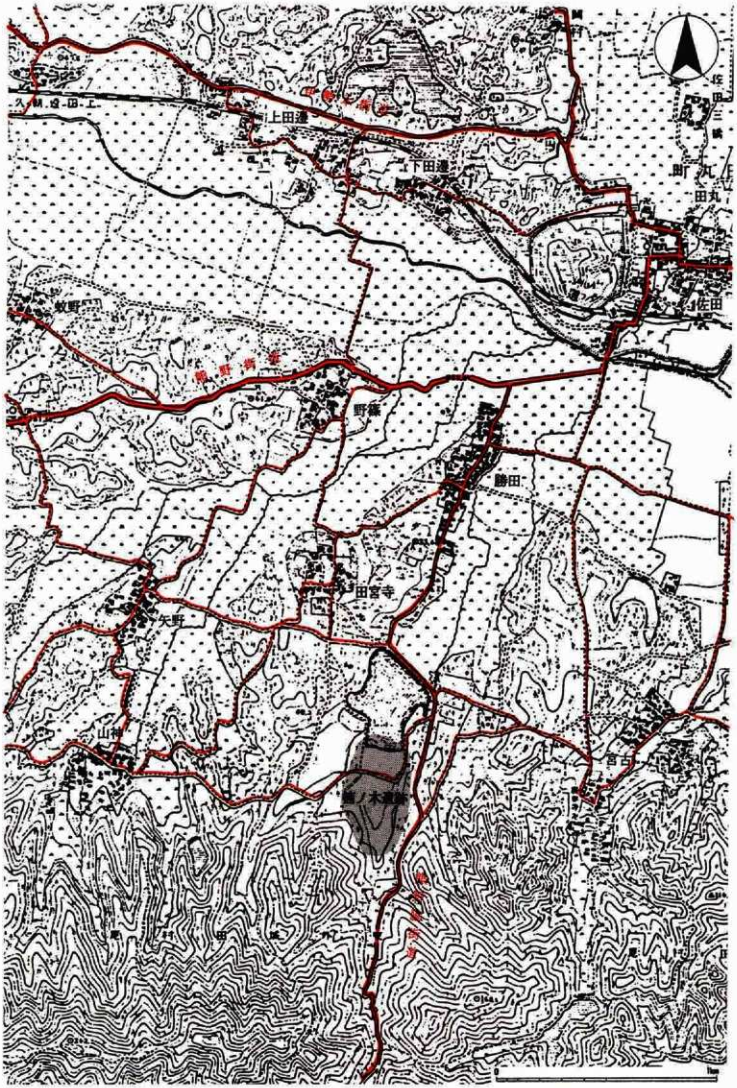


fig. 6．19世紀末頃の勝田地区周辺地形図（scale＝1/20,000）（大日本帝国陸地測量部作成地形図から）

赤太線は主要幹道（街道）赤細線はそれに準じるもの。

中世の城館跡以外の遺跡立地に関しては大きく2者に分類できることが分かる。すなわち、丘陵部を利用して集落を営むもの（原・野篠・田邊・狩田など）と、丘陵に挟まれた谷部に集落を営むもの（積良・山神・宮子など）である。楠ノ木遺跡は後者の部類に属する。

これらのことを考え合わせると、楠ノ木遺跡は近辺の村と比較しても遜色なく、そして規模も大きいことが判明する。それにもかかわらず、楠ノ木遺跡は現在まで集落として存続することなく廃絶しているのである。このことは、当地の歴史的背景のなかで、当遺跡がどのように位置付けられるのかということの問題を示していると考えられるのである。

当該地域の村は古代以来、神宮との関わりのなかで発展してきた可能性が極めて高いことが文献史料から想定されるのであるが、神宮以外の勢力が15世紀中葉以降、新たに進出してくる。戦国大名として成長しつつある北畠氏である。北畠氏関連の遺跡はfig.5に示すように主に城館跡であるが、文献史料からは当該地域に北畠氏関係の所領が存在していたことは明白である。ただし集落は以前のものをそのまま継承することが自然であり、この時期の当該地域の画期は城館の築造が増加することに求められるにしても新たな集落の発生を想定することは困難であろう。

さて北畠氏の中心となるのは田丸城跡(4)である。これは南北朝時代から室町時代にかけて利用されたものである。また北畠氏によって楠ノ木遺跡に隣接する山神地域が攻撃された事実も認められ、山神城(3)はその時期の城館跡であろうとされている。当遺跡の西方には多気町・笠木館跡(1)や玉城町・坊主山館跡(2)が所在し、東方には岩出城跡(5)が存在している。これらは北畠氏関連の城館跡と想定されており、笠木館跡からは鍋第3段階[6]以降の遺物が採集されている[5]ことから、その可能性は高いと思われる。

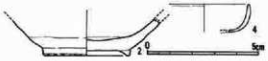


fig.7．調査区周辺採集遺物（scale＝¼）

このように中世の当該地域は中世前期においては伊勢神宮と、中世後期においては神宮および北畠氏と、多分に係わっていることは確実であり、楠ノ木遺跡の考察には両者を避けて通ることはできないのである。[7]

（註）

(1) 三重県教育委員会『歴史の道調査報告書Ⅰ　熊野街道』(1981)

(2) 「垣内」については、全国的に見れば厳密には居住地を示すものと断定することはできない（水野章二「平安期の垣内－開発と領有－」『史林』65巻3号　1982）。しかし三重県内では「垣内・垣外」などの地名が認められる付近に中世の集落遺跡が存在する場合が多いことは事実である。

(3) 東浩成・倉田直純『勝田遺跡発掘調査報告』(三重県教育委員会　1988)

(4) 『氏経神事記』（『神宮年中行事大成』前篇　大神宮叢書　臨川書店　1976）、『氏経卿引付』（『日本塩業大系』2巻　古代・中世史料篇）、『光明寺古文書』（神宮文庫所蔵氏経直筆本写真版）など。なお、文献史料の詳細は小林秀氏の御教示を得た。

(5) 大橋紀元・安室正彦「笠木館址測量調査報告」（『ふぴと』34　三重大学歴史研究会　1978）

(6) 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Miehistory』vol.1　1990）

(7) fig.5 の作成にあたっては、以下の文献を参考とした。

『角川日本地名大辞典』24三重県（角川書店　1983）

皇学館大学考古学研究会『玉城町南部の遺跡』（1982）

三重県教育委員会・三重県文化財連盟『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』(1979)

三重県教育委員会『昭和56年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』(1982)

三重県教育委員会『昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』(1984)

三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査概報』VI・VII(1990 1991)

三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報』5・11・14・16・17(1975 1981 1984 1986 1987)

岩中淳之『佐八藤波遺跡発掘調査報告』（伊勢市教育委員会 1990）

pho.　2　A地点遠景（南から）

fig. 8. 調査区周辺の現小字割り図（1/6,000）

Ⅲ．調査の成果－層位と遺構－

ここでは調査区の層位的状況と検出した遺構について報告を行う。遺構の時期についてはⅣ章での分類にしたがっているので、参照して頂きたい。

1．A地区の層位と遺構

層位（fig.10）

A地区は東および南側に派生する低丘陵の裾部分に相当し、標高約39mの平坦地である。層位は表土直下の灰褐色系砂質土および赤褐色系砂質土が遺物包含層となり、その下の黄灰色系土層が中世の遺構基盤層に相当する。黄灰色系土層は部分的に砂質土層と粘質土層に分けられ、粘質土層の方が上部に堆積する。このうち砂質土層の部分には縄文土器片が混入している。この層が縄文時代の遺物包含層に相当するものと考えられるがその含有度は極めて薄いものの、調査区土層図（fig.10）にみるように、この層を切り込んでいる、中世よりは確実に古いといえる遺構状のものがある。しかし、これらからはまったく遺物が出土しなかった。

黄灰色系土層の下には順に黒色系土・暗褐色系土が堆積し、地山である明黄～明黄赤色系粘土に達する。中世の遺構検出面から地山までの深さは、調査区南東隅では約0.6mと浅いが井戸ＳＥ２付近で約３ｍとなり、調査区の北側ほどレベルが下がっているものと考えられる。このことからも当遺跡は山側から流出してきた土砂が堆積した土壌の上に遺跡が形成されたものとすることができる。

遺構

A地区の遺構は中世のものを中心としている。確認できた遺構は、掘立柱建物13棟の他、ピット群、土坑多数、井戸５基、溝20数条である。時期的に大きくみると、おおよそ平安時代末から室町時代前半のもので、一部江戸時代以降のものを含む。

中世（平安時代末～室町時代）の遺構

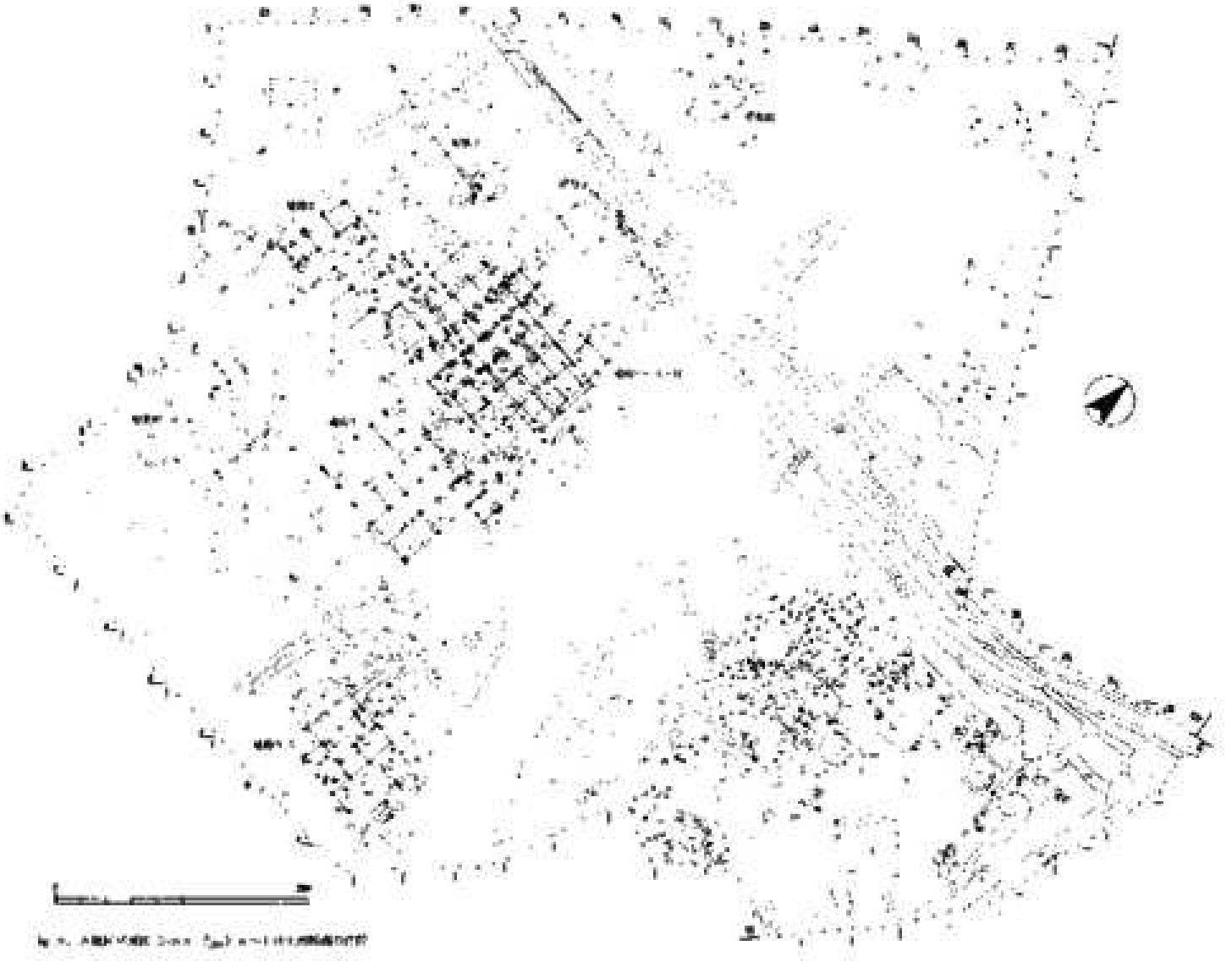
掘立柱建物およびピット

建物はおもに調査区中央付近に集中して認められる。この部分に確認できた建物の大部分があり、東側の空白地を挟んでさらに多くのピットが認められる部分がある。便宜上、前者を「建物集中部分」、後者を「ピット集中部分」とする。A地区の建物跡はこの２か所にほぼ集約出来る。

ピット集中部分のピットには模石を持つものもあるため、建物が存在していたことは確実と考えられる。この部分は隣接する鉄滓を大量に出土した土坑ＳＫ36との関係上、工房に相当する建物を想定したのであるが、明瞭な建物はほとんど確認することができなかった。ピットの並びが不整然であることや工房跡であることを想定すれば、現在我々のイメージしている建物とは違ったものが存在することも考えなければならないであろう。このことからあまり無理をして建物を復元することは差し控えた。

建物集中部分（fig.11）では、特に建物４・５・６・10などは柱通りがほとんど揃っており、建物のひとつひとつを特定するのは極めて困難な状況にある。そのために、これらの建物の確認は一案を示しているものと考えて頂きたい。これらの建物群は建物８を除いて柱通りをほぼ真北に向けている。

建物１（fig.12）は建物集中部分の南側に相当する。東西棟で、桁行５間（約10m、約33尺）、梁間４間（約6.7m、約22尺）の主屋部分の北東に東西２間（約3.5m、約11.5尺）、南北２間（約3.5m、約12尺）ないしは３間の付属施設（以下、「施設」と呼称）が取りつくものと考えられる。施設は独立した建物の可能性も否定しきれないが、建物１と遺構的に重複する状況は見出せない。それよりも南端の桁行を建物１の北端の桁行と重複していることと、柱通りも比較的良く通っていることから、建物１に付随して造られたものと見做すのが妥当であろう。主屋部分には部分的ではあるが根石が認められるため、本来は全てに根石が存在していた可能性が高い。主屋部分は、桁行の５間がそれぞれ全て等間に設定されているのに対し、梁間は南から６・5.5 ・5.5 ・５尺に設定されている。また、南西端の２間×３間の部分は中央部に柱が認められず、「土間」的な機能を想定し得る。さらに、南東隅の１間×２間の部分は土坑（ＳＫ27）が認められ、所謂「南東隅土坑」



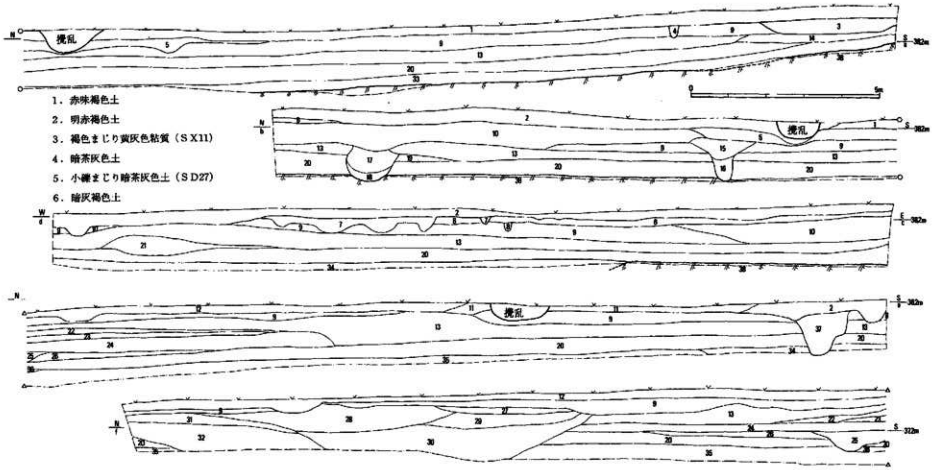


fig.10. A地区北・東壁土層断面図（scale=1/100）

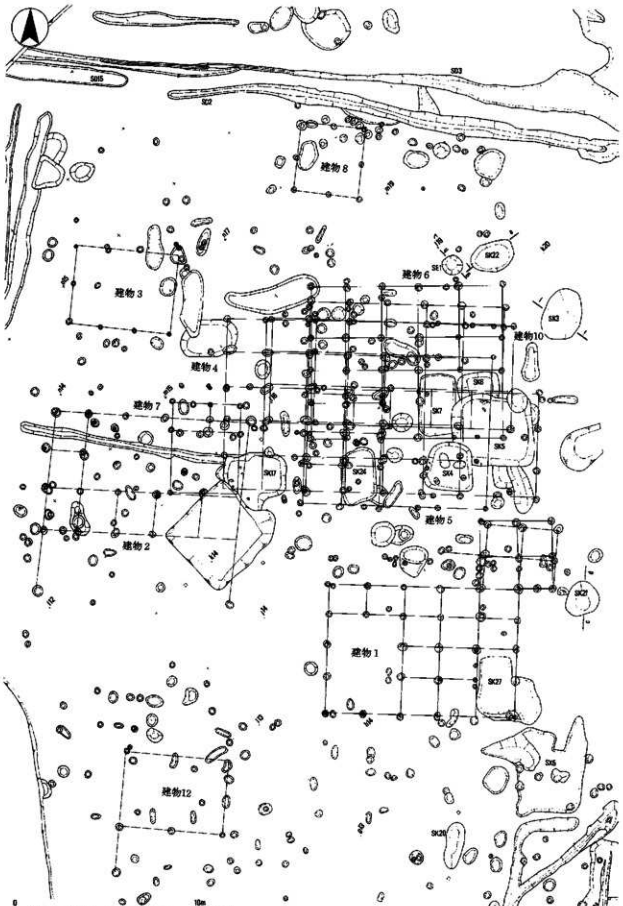


fig.11. A地区建物跡集中部分平面図（scale=1/200）※SE1、SK3・21・22の断面はfig. ・ に対応する。

に相当するものと考えられる。この土坑は柱間内に収まるものではなく、一部が建物の東側に突出している。

なおこの建物内の土坑ＳＫ27出土の土器は、近接している井戸ＳＫ21およびやや離れる井戸ＳＫ３から出土した土器と接合している（fig.57－12）。これらは時期的に近接したものと考えられ、位置的にも井戸ＳＫ21が建物１に伴う井戸である可能性は極めて高いであろう。g15Pit1からは輪の羽口の破片(PL.54)が出土している。建物１は後述するＳＫ36などと時期的に並行し、鍛冶に従事した人々が居住していた可能性も考えられる。建物１の時期はピット内から出土した土器やＳＫ27から出土した土器、さらに輪の羽口の存在から、南北朝時代頃（Ⅱ期後半～Ⅲ期）以降と考えられる。

建物２（fig.13）は建物集中部分の西に近接している。東西棟で桁行５間（約10.4m、約34尺）、梁間３間（約6.3m、約21尺）を中心の建物としている。この南には東西端の梁間の延長11尺（約3.3m）のところにもピット（j13pit1）があるので何らかの施設が存在していた可能性がある。建物の南東隅は試掘時の土層確認のために残っていない。各柱通り

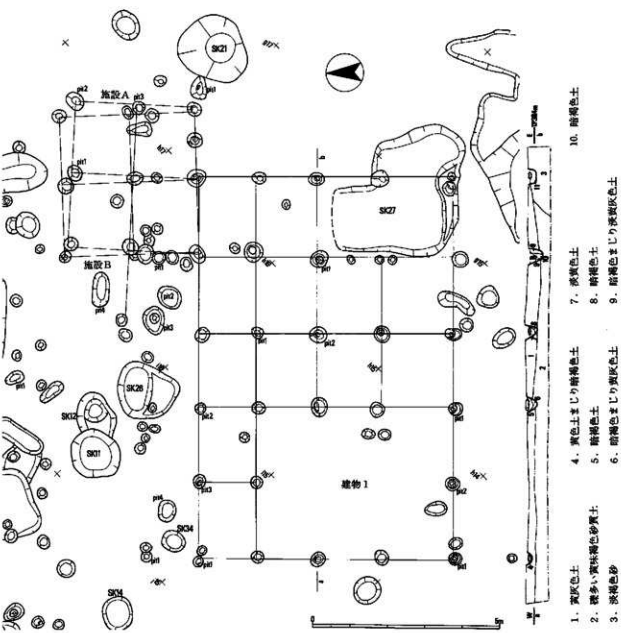


fig.12. A地区建物１付近平面・断面図（scale＝1/100）

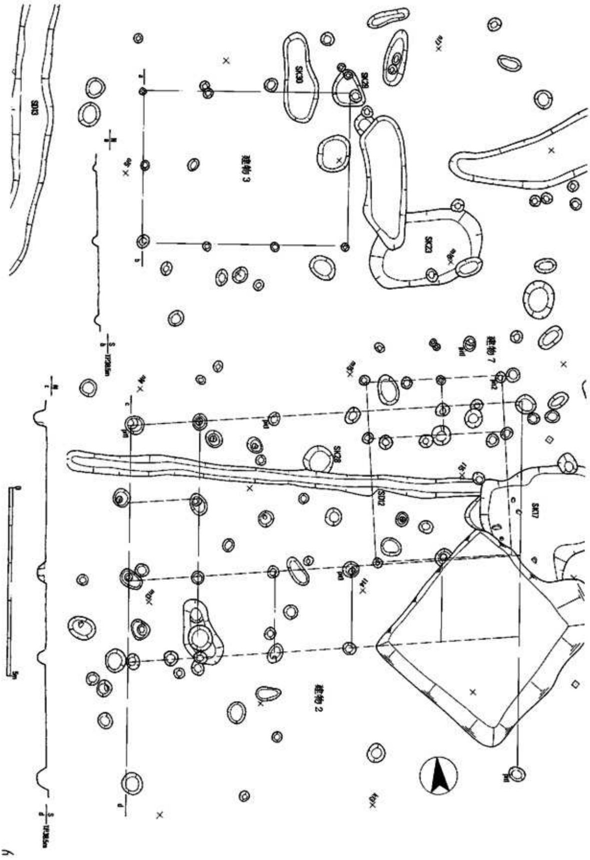


fig.13.　A地区建物２・３・７付近平面・断面図（scale＝$\frac{1}{100}$）

は良く揃っているが、そのまま復元すると全体の形態はやや平行四辺形となる。これは建物設計時の間違いと考えられるが、ここでは現状の状態で提示している。建物３と並列するものと見做してよいであろう。建物の中央から南と西の１間を除く広い部分（４間×２間分）はその中央部分に柱列が存在しないものである。柱掘形は径0.3 m内外の比較的大きいものであるが、根石は全く認められなかった。

建物２の時期は出土土器から平安時代末（Ⅰ期）と考えられる。なお、この建物内にある土坑ＳＫ28出土土器は当建物のピットのm14Pit1出土の土器と同一個体と考えられ、建物の廃棄時に同一土器をそのピット内に投棄していることも考えられる。

建物３（fig.13）は建物集中部分の西にあり、建物２の北に相当する。東西棟で桁行３間（約5.7m、約18尺）、梁間２間（約4.2m、約14尺）である。西端の梁間の北４尺（約1.2m）のところにピットがあり、建物２と同様、何らかの施設が付随するのかも知れない。東端の柱列は土坑等の存在により明確には確認されなかったが、これ以上東に伸びることはないと考えられる。柱掘形は径0.2m内外のもので、根石は認められなかった。出土土器が全くなく時期の特定は困難であるが、建物２の北15尺の位置にそれと平行して造られているので、建物２と同時期と見做してよいであろう。

建物４（fig.14）は建物集中部分にあり、中でもその西寄りに存在する。東西棟で桁行８間（約12.7m、約55尺）梁間５間（約９m、約30尺）で、北端には５間（33尺）×１間（３尺）の廂かと思われるものが付く。この部分については概報で「建物７」として取り扱っていたが、当報告では建物４に伴うものとして扱うこととした。建物４は調査区内では最も大きいものである。部分的に根石が認められる。建物の南西隅に相当する部分には土坑ＳＫ17（W）があり、当建物に付属する土坑の可能性も想定できるが、建物の敷地を越えて存在していることやこの土坑に伴うと考えられる溝

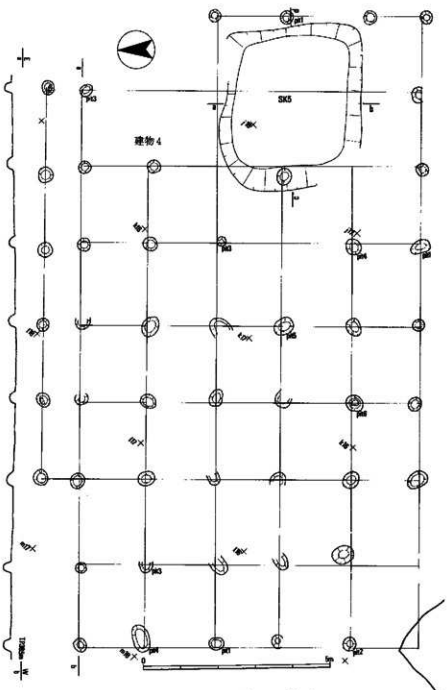


fig.14. A地区建物４平面・断面図（scale＝1/100）

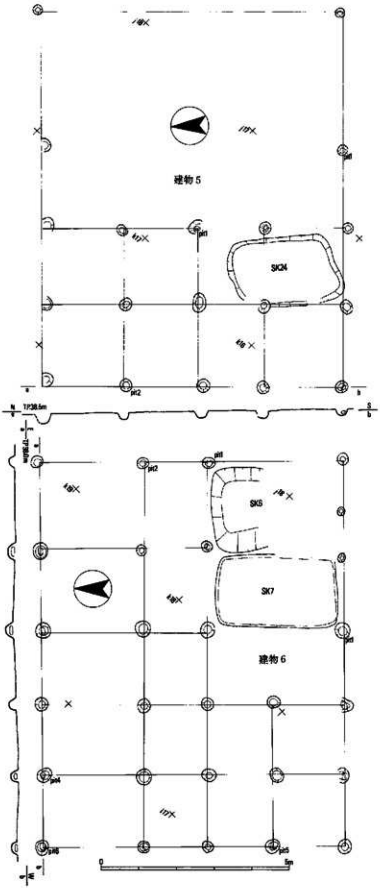


fig.15. A地区建物5・6付近平面・断面図（scale=1/100）

ＳＤ12が当建物のピットと重なっていることなど、建物に付随する施設とするには問題点もある。また建物の南東に位置する土坑ＳＫ５は、建物４やそれ自身の規模の点からもこの建物に伴う土坑である可能性は極めて高い。土坑ＳＫ７と重なるピット（ｊ17Pit３）はＳＫ７埋没後に掘削されており（fig.16）、当建物がＳＫ７よりは新しいことがいえる。時期はピットと土坑ＳＫ５出土土器から鎌倉時代後葉から南北朝時代頃（Ⅱ期後半～Ⅲ期前半）の比較的長期にわたる 建物と考えられる。建物10のピットと重なっているピットから出土した土器は土坑ＳＫ５よりも古い傾向があり、この土器を建物10の所属時期を示すものと考えれば上記の時期比定が可能である。そうするとほぼ同じ時期となる建物１の付属施設とあまりにも近接するが、前述のように建物１の付属施設は拡張と考えられるので無理はないものと考える。

建物５（fig.15）は建物集中部分にあり、なかでもその南寄りに存在する。土坑ＳＫ24を当建物に伴う土坑と想定すると南東隅土坑である可能性が想定し得る。そうするとこの土坑以東の柱列はひとつの可能性を示すものとなる。この柱列が妥当であれば東西棟、土坑ＳＫ24を南東隅土坑と考えれば南北棟となる。東西棟とすれば桁行４間ないしは５間（約9.7m、約32尺）、梁間４間（約7.9m、約26尺）で、桁行の東端は１か所のピットを検出したのみである。根石は部分的に残存している。出土土器から平安時代末（Ⅰ期）と考えられる。

建物６（fig.15）は建物集中部分にあり、そのなかでも北寄りに位置する。東西棟で桁行５間（南端は６間　約10m、約33尺）、梁間４間（約7.9m、約26尺）である。梁間は付属施設と考えられる土坑ＳＫ７や土坑ＳＫ６などのためか、不統一となっている。土坑ＳＫ７（fig.16）は２間×１間分の大きさで、壁面がほぼ垂直に掘られてい

る特殊なものである。埋土の状況からは人為的に埋め戻されているようである。時期は出土土器から鎌倉時代後半（Ⅱ期後半）と考えられ、建物４に伴うピット（j17pit3）と土坑ＳＫ７との関係から、建物６は建物４に先行するものと見做し得る。

建物７（fig.12）は東西２間（約3.6m、12尺）、南北３ないしは４間（約4.8m,16尺）の規模である。西側桁行は溝ＳＤ12に若干の歪みがある部分を柱穴の痕跡と考えた。出土土器は小片であるが、時期は鎌倉時代（Ⅱ期）の範疇と考えられる。

建物８（fig.17）は建物集中部分の北側、溝ＳＤ２の南で確認された。棟方向は不明であるが、東西２間（約3.6m、約12尺）、南北２間（約3.6m、約12尺）の規模である。根石は全く認められなかった。この大きさからはＡ地区内での一般的な建物とは言い難い。出土土器から鎌倉時代後半（Ⅱ期後半）以降かと考えられる。

建物９（fig.18）は建物１の南に位置する。東西３間（約5.5m、約18尺）南北３間（約6.4m、約21尺）を確認したが、東西方向にもう少し伸びる可能性がある。例えばa 14Pi 1の北にあるピットはこの建物のものである可能性が大きい。ただし、遺構検出時にはこのピットと同じ南北方向の柱列は確認できなかった。現状よりは東に広がるとすれば、土坑ＳＫ38はこの建物に伴うものと考えられ、所属時期でも問題はない。部分的ではあるが根石の残るピットも認められる。時期は出土土器から鎌倉時代前半（Ⅱ期前半）と考えられる。ピット内には土師も含まれており、興味深い。

建物10（fig.19）は建物集中部分の北寄りに位置している。東西棟で、桁行６間（約12.8m、約42尺）、梁間３間（約5.5m、約18尺）である。東側の柱列は見つからず、建物が東へさらに伸びる可能性もある。建物の構造は建物２に類似し、建物の中央部北寄りの５間×２間分は柱列が認められない。根石は認められなかった。ピット出土土器は建物４と重なっているピットからのもののみで、前述のようにこれらは建物10に伴う土器と考えるのが妥当である。時期は鎌倉時代前半（Ⅱ期前半）と考えられ、建物２との類似からそのなかでも早い時期と想定される。

建物11（fig.９）は区画溝群の北方にある唯一の建物である。土坑ＳＫ40周辺に数個のピットが存在しており、調査の段階では全体を確認することができなかったが、検出したピットから東西方向２間（約4.3m，約14尺）南北方向３間（約6.4m，約21尺）が確認できる。棟方向は不明であり、調査区外へ広がることも考えられる。土坑ＳＫ40を南東隅土坑とする建物であろうか。土坑ＳＫ40はやや不整形な長方形を呈し、長軸約4.3m、短軸約2.4mを測る。断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは約0.2mである。時期は土坑ＳＫ40出土土器から平安時代末（Ⅰ期）と考えられる。

建物12（fig.11）は調査区南西隅近くに位置し、建物集中部分からはやや離れる位置にある。東西棟で桁行３間（約5.5m，約18尺）、東の梁間２間、西の梁間１間（約4.5m，約15尺）である。この規模からは主要な建物と見做すことはできない。西の梁間を南に８尺延長したところにピットがあり、建物に付随するものかあるいは建物が南へさらに広がる

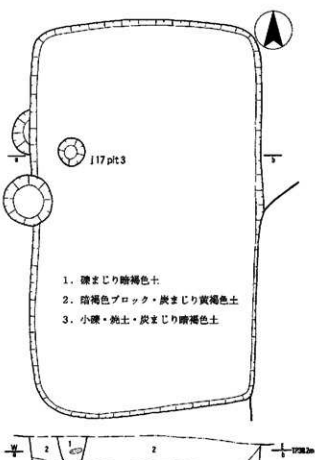


fig.16. Ａ地区土坑ＳＫ７他平面・土層断面図（scale=1/30）

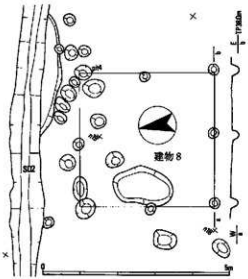


fig.17. A地区建物8付近平面・断面図
(scale=1/100)

ものかと考えられる。出土土器が全くないので正確な所属時期は不明である。

建物13(fig.25)はピット集中部分で確認できたものである。南北棟で、桁行3間（約6.4m, 約21尺)、梁間2間（約3.6m, 約12尺）である。建物主軸は他の建物と異なり、西へ若干振れている。時期は出土土器から鎌倉時代後葉（Ⅱ期後半）と考えられる。なお、先述のようにこの周辺ではまだかなりの建物が存在するものと考えられ、ピット出土土器は圧倒的にⅢ期のものが多い。

土坑および落ち込み

建物に付随するものとして記述した土坑以外の主なものについて触れておく。

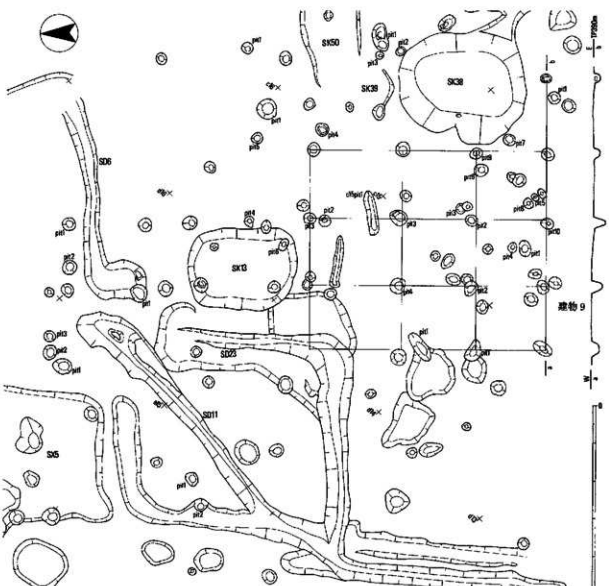


fig.18. A地区建物9付近平面・断面図（scale=1/100）

土坑ＳＫ４は調査区中央部の建物集中部分の南東寄りに位置する。やや歪んだ方形で、１辺約2.4mである。断面形は皿状を呈する。埋土は灰褐色系土で、焼土は認められなかった。遺構の位置からはいずれかの建物に伴う土坑である可能性は高いであろう。時期は出土土器から鎌倉時代後半から南北朝時代（Ⅱ期後半～Ⅲ期）と考えられる。

土坑ＳＫ５（fig.20）は調査区中央部の建物集中部分の北寄りに位置する。東西にやや長い方形のプランで、長辺約4.3m、短辺約3.6mである。断面形は皿状を呈し、全体の形状は竪穴住居を思わせる。埋土には焼土が自然堆積状に認められたが、木炭は少量であった。切り合い関係からＳＫ６・７・９・10よりは新しく、ＳＫ４よりは古いことが言える。遺構の位置からは建物４に伴う可能性は極めて高いが、南東隅土坑とするには少々大きすぎるようにも思う。時期は出土土器から鎌倉時代後半から南北朝時代（Ⅱ期後半）と考えられる。

土坑ＳＫ９・10は土坑ＳＫ５の南で切り合い関係にあるものである。２基の土坑として検出をしたが、本来は１基のものかも知れない。埋土には多量の焼土を含んでいた。時期は出土土器から鎌倉時代前半（Ⅱ期）でも初期と考えられる。

土坑ＳＫ13は調査区中央部やや南寄りの、建物９の北に位置する。隅丸長方形を呈し、長辺約2.9m、短辺約2.1mである。断面形は皿状を呈する。出土土器から平安時代末（Ⅰ期）と考えられる。

土坑ＳＫ17（fig.21）は建物集中部分の南隅に位置する。土坑の南西部分は第１次調査時の土層確認のために破壊されている。土坑は２基が重なっていると考えてよいが、検出時には不定形土坑として検出してしまったために前後関係は層位的には確認できなかった。しかし、出土遺物の時期をみると、東側が新しく西側が古いことがわかる。便宜上、東側をＳＫ17E, 西側をＳＫ17Wとする。共に断面形は逆台形を呈し、ややＳＫ17Wの方が深いがほぼ同者とも検出面から約0.35mの深さである。。ＳＫ17E

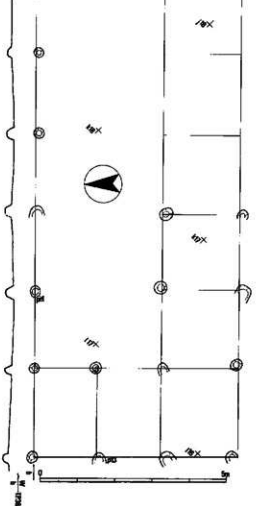
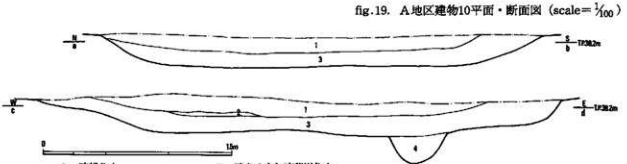


fig.19. Ａ地区建物10平面・断面図（scale＝1/100）



1．暗褐色土　　3．礫多く含む暗黄褐色土
2．焼土塊含む暗褐色土　　4．赤味暗褐色土

fig.20. Ａ地区土坑ＳＫ５土層断面図（scale＝1/50）土層位置はfig.14

では埋土に焼土層が堆積している。時期は出土土器から鎌倉時代後半（Ⅱ期後半）と考えられる。ＳＫ17Wでは土器類がまとまって出土したが、焼土層は認められなかった。この２基の土坑には溝ＳＤ12が付属するものと考えられるが、どちらの土坑に伴うものかは不明である。時期は出土土器から鎌倉時代前半（Ⅱ期前半～後半）と考えられる。

土坑ＳＫ20（fig.22）は建物１の南約６ｍの位置にある。長楕円形を呈し、長軸約2.4ｍ、短軸約0.9ｍの規模である。底面は舟底状で、北側ほど深くなる。最も深いところで検出面から約0.25ｍである。深い部分に集中して土器類や礫群が認められ、礫群の下から大和か伊賀産と思われる瓦器片が出土した。出土土器か

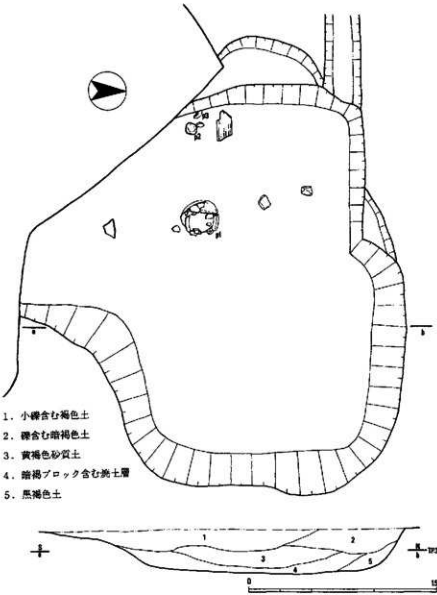


fig.21. Ａ地区土坑ＳＫ17（Ｗ・Ｅ）平面・土層断面図（scale＝1/30）

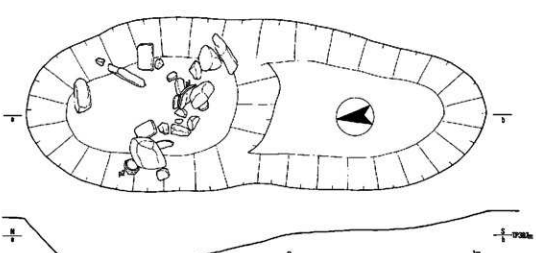


fig.22. Ａ地区土坑ＳＫ20平面・断面図（scale＝1/20）

ら平安時代末（Ⅰ期）と考えられる。

土坑ＳＫ24は建物集中部分の南寄りに位置する。検出面からの深さは約0.15mと非常に浅いものであるが、建物に伴う土坑の可能性がある。隅丸長方形を呈し、長軸約2.9m、短軸約1.9mを測る。出土土器から平安時代末（Ⅰ期）と考えられる。

土坑ＳＫ35は建物３の北側に位置する。平面形は台形状を呈し、長軸約1.8 m、短軸約1.5mで、検出面からの深さは約0.65 mである。鉄釘が２本、土師器小皿が３枚出土しており、墓の可能性がある。時期は出土土器から鎌倉時代前半（Ⅱ期前半）と考えられる。

土坑ＳＫ36（fig.23～25）はピット集中部分の南に位置する。円形を呈し、直径約3.3mである。検出面からの深さは約0.2 5mである。埋土上層の南側には大量の鉄滓（約90kg）が認められ、鞴の羽口片を３個体分ほど含んでいた。土器はほとんどないが、最下層 の淡黄色粘質土内に陶器甕片が認められた。時期はⅢ期（室町時代前半）と思われる。

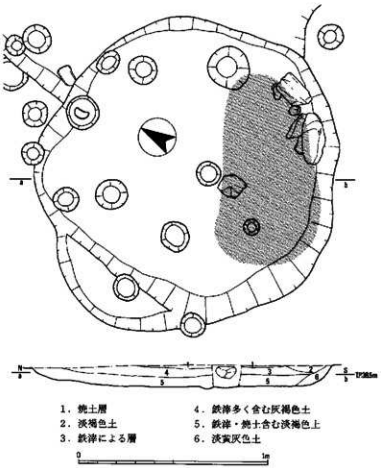


fig.23. A地区土坑ＳＫ36平面・断面図（scale＝1/40）
※トーンは鉄滓集中部分

土坑ＳＫ37(fig.24 ～25）はピット集中部分の南に近接して存在する土坑である。検出時には不定形な落ち込み（ＳＸ７）としていたが、掘削を行っていくにしたがって方形の形状を呈することが判明した。規模は上面で長軸約3.2m,短軸約2.6mである。断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは約0.6mである。土坑底面には長さ約0.3mほどの礫が多数認められた。埋土は中層から下層にかけて焼土・炭を多く含む。出土遺物には用途不明の銅製品や鉄釘、少量の鉄滓の他、土器類が多く認められた。時期は室町時代前半（Ⅲ期後半）と考えられる。

土坑ＳＫ48（fig.24）は土坑ＳＫ37と切り合い関係にあるものである。両者の前後関係は平面的には把えられなかったが、土層の観察からはＳＫ37が後出することが判明した。形態は落ち込み状を呈し、全体の形態は不明である。出土土器から鎌倉時代後葉（Ⅱ期後半）と考えられる。

土坑ＳＫ49は調査区東壁寄りの溝ＳＤ20の北に位置する。平面は楕円形を呈し、長軸約1.2m、短軸約0.8mである。断面形は皿状で、検出面からの深さは約0.15mである。埋土内からは中国北宋期の銅銭が５枚以上出土した。これらのことから墓である可能性も想定できるが決定要素を欠く。出土土器から鎌倉時代後半（Ⅱ期後半）と考えられる。

土坑ＳＫ55は土坑ＳＫ48の東に隣接するものである。土層の観察によってある種の掘り込みを確認したためそれをＳＫ55として扱った。この付近（ＳＸ７およびＳＫ37～ＳＸ９に至る部分）は全体的に落ち込み状で個々の遺構が錯綜しており、明確な判断が行いにくい。ＳＫ55もその１つである。規模は不明である。出土土器は鎌倉時代後半から室町時代前半にかけてのものがあり、特定が困難である。

土坑ＳＫ61(fig.29)は調査区拡張部の東端にある。土坑東端は調査区外に出るがさほど広がるものではないであろう。検出面からおよそ0.05mを確認できたに止まるが、土坑の上に長軸約0.3mの石と土師

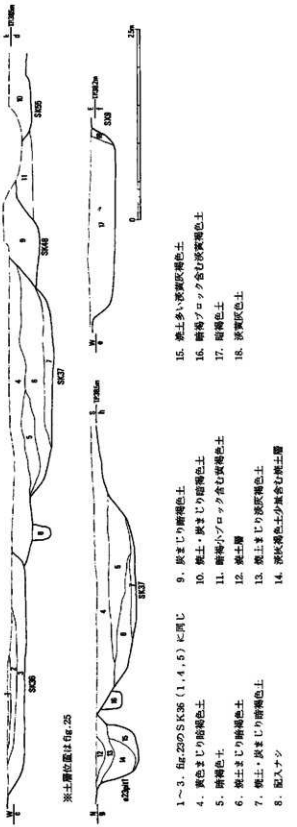


fig.24. A地区土坑ＳＫ37他土層断面図（scale=1/50）

器小皿があり、埋土に焼土と少量の木炭を含むことやこの付近の遺物出土状況から、墓の可能性が想定できる。時期は出土土器が少量で断定しがたいが、室町時代前半（Ⅲ期）と考えてよいであろう。

土坑ＳＫ62は土坑ＳＫ37の南側に位置している。平面は長方形を呈し、長軸約3.0m、短軸約1.6mである。検出面からの深さは約0.15mである。埋土最下層は焼土層であった。少ない出土土器から推定すれば、時期は鎌倉時代に収まるであろう。

土坑ＳＫ63(fig.26)は、調査区拡張部の北東部分、溝ＳＤ１が途絶える付近に位置する。平面は方形を呈し、長軸約3.m、短軸約2.7mである。検出面からの深さは約0.2mで、断面形は逆台形である。埋土は２層に分けられ、下層は淡黄色系の砂質土で、基盤層（黄色粘質土）と近似したものである。このような土層のあり方はＡ地区土坑ＳＫ37・土坑ＳＸ９、Ｂ地区土坑ＳＫ31などにも認められる。出土土器は極めて少量で時期の判定は困難である。

土坑ＳＸ９(fig.23 ～24)は調査区拡張部の土坑ＳＫ55の東側に位置する。平面は方形を呈し、１辺約2.4mである。検出面からの深さは約0.35mである。埋土の状況は土坑ＳＫ63に類似する。出土土器から室町時代前半（Ⅲ期後半）と考えられる。

落ち込みＳＸ１は調査区中央付近、溝ＳＤ３の北側に位置する。不定形で南北に長い形状を呈するが、溝ＳＤ19と接続しているので溝である可能性も大きい。鉄鏃が出土している。出土土器からは鎌倉～室町時代と考えられる。

落ち込みＳＸ５は調査区中央付近の建物１の南側に位置する。方形を基本としたプランのようで土坑とした方が良いかも知れない。西と北に突出する溝状のものがある。これが本来の形態かどうかは土器の出土量が少ないために判断できなかった。しかし、２基から４基の遺構が重なっていると考えるのが妥当であろう。出土土器には平安時代末（Ⅰ期）のものが認められる。この中には土師器の羽釜も認められるが、出土状態は記録していないため確実なことは言えない。

落ち込みＳＸ７は調査区拡張部南寄りに位置する。東端は井戸ＳＥ２付近まで広がる。不定形の落ち込みとして検出したが、東半部分では下部から数基の

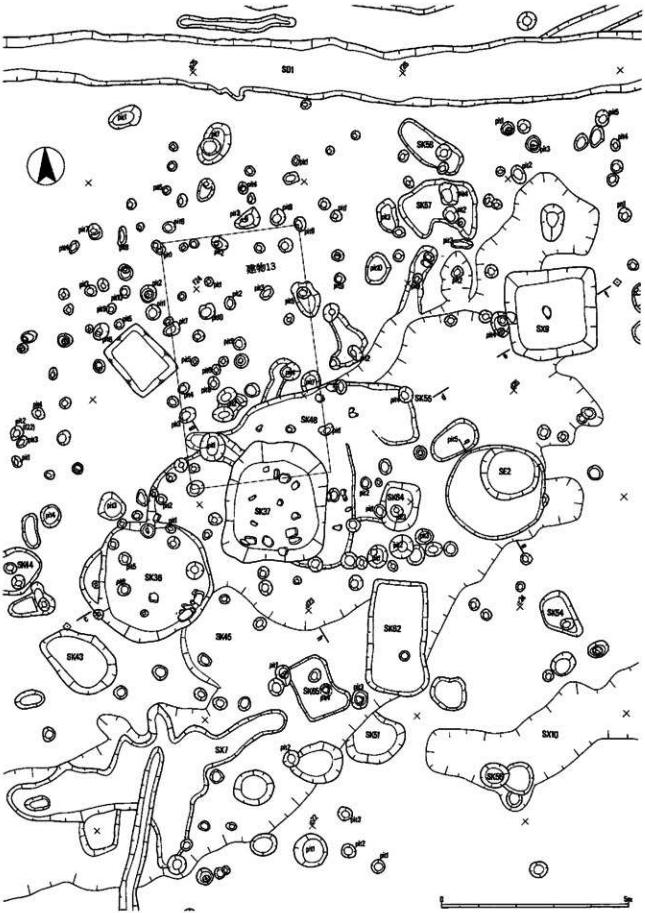


fig.25. A地区拡張部土坑群・ピット集中部分・建物13平面図（scale＝1/100）

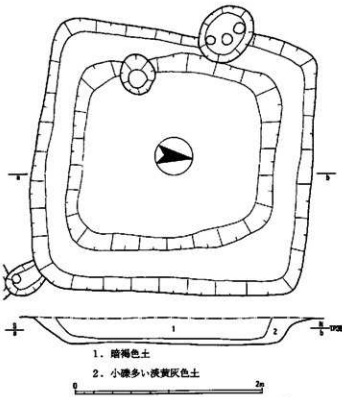


fig.26. A地区土坑ＳＫ63平面・断面図（scale＝1/40）

遺構を検出した。埋土中には比較的多くの鉄滓（約５kg）を含んでいた。遺物にはⅠ期のものとⅢ期のものがあるが、前者は土坑ＳＫ65などに伴うものと考えられる。

井戸（fig.27～28）

井戸は合計５基確認できた。大きくみると建物集中部分に位置するもの（ＳＥ１・ＳＫ３・21・22）と、調査区拡張部に位置するもの（ＳＥ２）とに分けられる。全て素掘りのものである。

井戸ＳＥ１（fig.28）は建物集中部分の北に近接して存在する。直径約0.8mである。検出面からの深さは約3.3mである。埋土下層から土器類がまとまって出土している。土器の時期は鎌倉時代前半（Ⅱ期前半）である。

井戸ＳＫ３（fig.27）は建物集中部分の東に近接して存在する。検出時には長軸約2.0m、短軸約1.7mの楕円形を呈していたが、

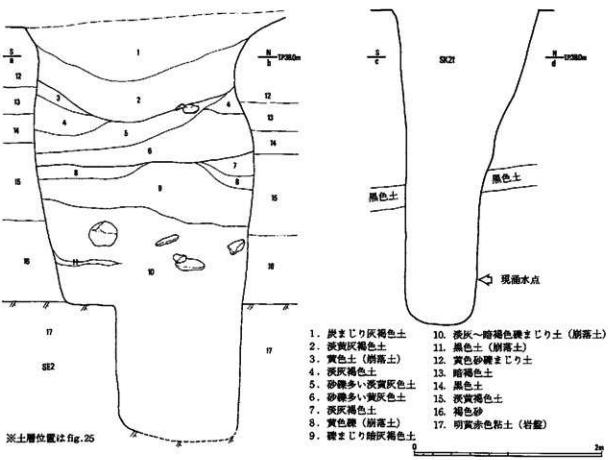


fig.27. A地区井戸ＳＥ２・ＳＫ21断面図（scale＝1/40）

断ち割りを行ったところ径約0.8mのものが崩れて大きくなっていることが判明した。検出面から約3.2mまで確認したが、それ以下は危険なために調査を中止した。出土土器は鎌倉時代後半以降室町時代(Ⅱ期後半～Ⅲ期後半)までのものが認められる。なお、この井戸から出土した陶器甕(fig.57－22)は、土坑ＳＫ４、落ち込みＳＸ３、土坑ＳＫ26から出土したものと、別の陶器甕(fig.57－12)は土坑ＳＫ27、井戸ＳＫ21から出土したものと、それぞれ接合している。

井戸ＳＫ21(fig.27)は建物１の東に近接している。検出時には長軸約1.8mの不整楕形を呈していたが、断ち割りの結果、径約0.8mのものが崩れたことが判明した。検出面から約3.3mの深さまで確認したが、それ以下は不明である。しかし、検出面から約2.8mで現在の湧水点に達するため、さほど深くないところで底に達するものと考えられる。土器は鎌倉時代前半から南北朝時代のもの(Ⅱ期前半～Ⅲ期前半)がある。出土土器に別の遺構と接合関係にあるものが存在することは建物１・井戸ＳＫ３の項で触れたとおりである。

井戸ＳＫ22(fig.28)は建物集中部分の北に隣接し、井戸ＳＥ１の東にある。遺構掘削時には土坑と考えており、断ち割りの際に井戸であることが判明した。検出時には長軸約2.3m、短軸約1.mの楕円形を呈しており、ややオーバーハングして下方へ伸びている。検出面から約3.0mまで確認したが、当初のプランは不明であった。出土土器は少量で、鎌倉時代前半(Ⅱ期前半)のものが認められる。

井戸ＳＥ２(fig.27)は調査区拡張部の中央付近に位置する。土坑ＳＫ37付近の土坑群と同様の落ち込み遺構の中に含まれている。検出時には径約2.6mの円形を呈しており、そこから約0.3m下で若干オーバーハングしている。検出面から約2.9mで地山(岩盤)に達し、その部分は南から西にかけてがテラス状となっている。そして北寄りの径約1.3mの部分が岩盤を突き破って掘削されている。堀土は、

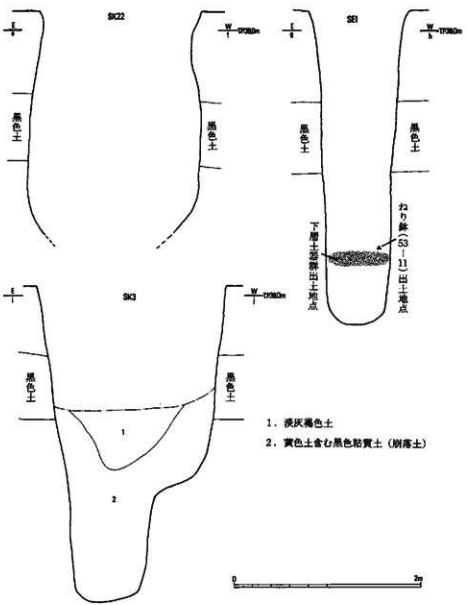


fig.28. Ａ地区井戸ＳＥ１・ＳＫ３・22断面図(scale＝1/40)

崩落土（下層）・崩落土と堆積土の互層（中層）・堆積土（上層）に大きく分けられる。下層には長軸0.3m以上の大礫が多数認められたが石組はない。出土土器は南北朝時代から室町時代にかけてのもの（Ⅲ期）が認められ、室町時代のものが主体のようである。その他の遺物には鐙の羽口や鉄滓などが認められる。

溝（fig. 9）

中世に掘削されたと考えられる溝は約22条認められる。それらは正確上、区画溝と考えられるもの（ＳＤ１・２・３・15・16・19）、建物ないしはそれに付随するものと関連すると考えられるもの（ＳＤ６・11・12・23）、溝とするよりは落ち込みに近いもの（ＳＤ４）などがある。これらのうち、主なものについて記述する。

区画溝ＳＤ１・２・３・15・16・19は調査区中央やや北寄りを東西方向に走る溝である。これらの溝の埋土は赤褐色系土を基本としている。溝の断面形は逆台形を呈する。ＳＤ２は近世以降の溝ＳＤ８と交差する付近から西側にかけて深くなっている。同様のことがＳＤ３についても認められ、これは東側の拡張部に至る手前から東にかけて深くなっている。これらは再度掘削されたことを示しているのかも知れない。また、ＳＤ２は西端でやや南に曲がっており、それに平行するかたちでＳＤ１６が認められるとともに、途切れたところからおよそ２ｍでＳＤ15が始まっている。これは、この部分がある種の通路ないしは入口に相当すると考えられる。出土土器から時期を考えると、ＳＤ１は鎌倉時代前半～室町時代前半（Ⅱ期～Ⅲ期後半）、ＳＤ２は平安時代末～

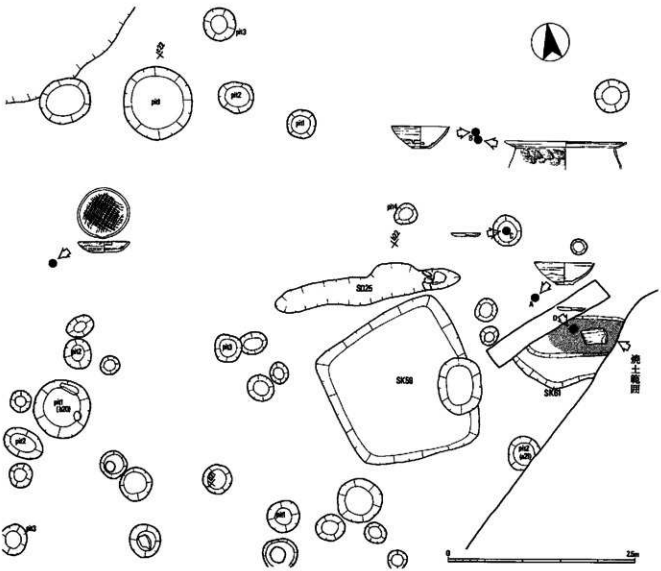


fig.29. Ａ地区土坑ＳＫ61付近平面および遺物出土地点位置図（scale=1/50、遺物は1/10）

鎌倉時代前半（Ⅰ期～Ⅱ期前半）、ＳＤ３は鎌倉時代後半～室町時代（Ⅱ期後半～Ⅲ期後半）、ＳＤ15は鎌倉時代、ＳＤ16・19は不明である。

溝ＳＤ27は拡張部の東端に認められるものである。東側の肩は調査区外にあるようである。前述の区画溝と直行するかたちになるために、区画溝の可能性を想定し得るが、ＳＤ27の東は丘陵部と谷状地（湿っぽいところ）があるので、ことさら区画を行う必要がないとも考えられる。溝底には部分的に礫群が認められた。時期は出土土器から鎌倉時代～室町時代前半と考えられる。

溝ＳＤ11・23は調査区南側の、建物９と重なって確認されたものである。溝ＳＤ23は方形に巡るもので、長いところで約６ｍ、短いところで約5.5ｍである。南西隅からは、西辺に相当する溝と平行する溝が南方向に２条伸びている。北東隅は鋭がっておらず、その間を溝ＳＤ11が斜めに伸びて、南東隅で交差している。溝ＳＤ11からはほぼ完形に復元できる常滑産の三筋壺がちらばって出土した。時期的には両者とも近接しており、ともに平安時代末（Ⅰ期）と考えられる。

溝ＳＤ12は建物の項で触れた。

落ち込み状を呈する溝ＳＤ４は調査区中央から南にかけて認められるものである。検出時には溝と考えたが、南側ほど浅く不明瞭となり、落ち込みと考えた方が妥当であろう。出土土器は細片ではあるが比較的多く、鎌倉時代前半以降（Ⅱ期～）のものが認められる。

その他のもの（fig.29）

特に取り上げるものとして、拡張部南端の部分についてのことがある。この部分には明確な遺構は認められなかったが、陶器の平茶碗２点と鉢皿１点、さらに土師器小皿の完形品が３点認められた（fig.29）。この地点は南から派生する小尾根の先端部分に相当し、立地条件からは墓域の可能性が想定できる。時期的には室町時代前半（Ⅲ期後半）と考えら

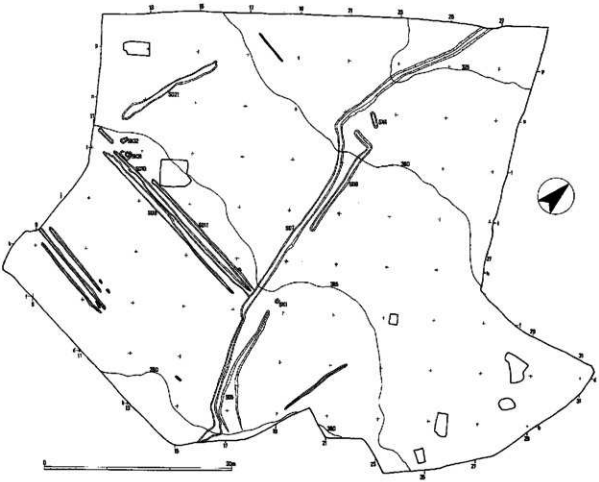


fig.30. Ａ地区近世以降の遺構および等高線図（scale＝1/600）

れる。

近世以降の遺構（fig.30）

近世以降のものには土坑３基と溝数条がある。土坑ＳＫ１は調査区中央付近にあり、土師器鍋の良好なものが認められた。溝は３条単位でまとまるものと調査区中央部を南北に走るものとがある。溝ＳＤ９・10・11は耕作に伴うものと思われる。溝ＳＤ７・８は小字の境目あたりに認められるもので、そういう意味では区画溝に相当するものであろう。これらは時期的には江戸時代から昭和初期までのものと考えられる。

Ａ地区のまとめ

Ａ地区では平安時代から室町時代前半に至る時期の遺構が認められた。これらは大別すると居住域と生産域、さらに可能性として墓域とがある。

居住地は建物集中部分に想定でき、おおよそ５棟ほどの重なりが認められる。これらは棟方向がほぼ揃っており、時期的にも接近したものであるために同一集団（家族？）によって建て替えが行われた「屋敷地」とみられる。「屋敷地」として存在していたのは、Ⅰ期からⅡ期まで（平安時代末～室町時代）で、それ以降は廃絶しているようである。この「屋敷地」の北は区画溝が存在しており、建物11付近は別の居住域と考えるのが妥当であろう。

区画溝南側の遺構群には「居住地」を示すものと「工房」を示すものとがあり、両者は同一の集団によるものと考えられる。このことは違った遺構から出土した土器が接合していることや、建物１に鞴の羽口片が認められることからも窺われるであろう。

「工房」に関するものには、直接にそれを示す炉などの遺構は見つからなかった。しかし、土坑ＳＫ36に認められた大量の鉄滓と、井戸ＳＥ２や建物１（ピット）から出土した鉄滓や鞴の羽口は、この遺構が造られた時期に確実にこの生産が行われていたことを示すものである。出土した鉄滓からは鉄器の鍛造に関わるものと考えるのが妥当かと思われる。工房の存在時期はⅢ期（南北朝時代～室町時代）は確実であり、それ以前にも存在していた可能性も想定される。

溝は平安時代末～室町時代のものが認められる。溝堆土に含まれる平安時代末の土器は山茶椀が多く、土師器甕などはほとんど含まない。なお、溝ＳＤ２から出土した平安時代末以前の甕の存在は、当地の区画がその時期まで遡る可能性を含んでいる。しかし、掘削時がその時期まで遡る可能性は調査による結果からは確認することができなかった。

墓域はその可能性が想定できるのみであるが、後述するＢ地区の状況からは可能性が大きいと思われる。土坑ＳＫ61の存在もそれを裏付けるものではないだろうか。

近世以降は遺構こそ存在するものの、土器の型式が中世と連続しないことや遺構がまばらでまとまらないことから中世と連続性をもつものと考えることはできない。したがってＡ地区の遺構群は中世後期（室町時代前半）に至って廃絶したものとすることができよう。

遺構番号	小地区	性　格	時　期	そ　の　他	
ＳＫ１	f 18	土　坑	江戸時代～		＊
ＳＫ２	e 20	土　坑	Ⅱ期前半		＊
ＳＫ３	j 19	井　戸	Ⅱ期前～Ⅲ期	ＳＫ４.21.27.26.ＳＸ３.ＳＤ13と接合関係。鉄滓少量。	＊
ＳＫ４	i 17	土　坑	Ⅲ　期	方形	＊
ＳＫ５	i 17	土　坑	Ⅱ期後半	方形　建物４に伴う？　焼土層あり鉄滓少量　青磁６点	＊
ＳＫ６	j 18	土　坑	Ⅱ期後半	建物６に伴う？　青磁２点	＊
ＳＫ７	j 17	土　坑	Ⅱ期前半	建物６に伴う？　青磁６点	＊
ＳＫ８	j 16	小土坑	Ⅱ期前半		＊
ＳＫ９	i 17	土　坑	Ⅰ　期	焼土含む。	＊
ＳＫ10	i 17	土　坑	Ⅰ　期	焼土含む。	＊
ＳＫ11	i 15	土　坑	Ⅱ期後半		
ＳＫ12	i 15	土　坑	Ⅱ　期		
ＳＫ13	d 15	土　坑	Ⅱ期前半		
ＳＫ14	j 15	小土坑	Ⅱ　期	皿類多い。	
ＳＫ15	i 18	小土坑	Ⅱ　期		

遺構番号	小地区	性　格	時　期	そ　の　他	
SK16	j18	落ち込み	Ⅱ期？	鉄滓少量。	
SK17	k15	土　坑	Ⅱ期前半	2基が重なる。建物に伴う土坑	*
SK18	m19	土　坑	Ⅱ期以降		
SK19	l20	土　坑	Ⅲ期前半		
SK20	f13	土　坑	Ⅰ　期	中世墓？瓦器含む。	*
SK21	g17	井　戸	Ⅱ期後～Ⅲ期	SK3.27と接合関係。	*
SK22	k19	井　戸	Ⅱ期前半		
SK23	m16	落ち込み	Ⅰ　期	鉄滓少量。	
SK24	j16	土　坑	Ⅰ　期	建物に伴う土坑？	*
SK25	j17	落ち込み	Ⅱ　期		
SK26	i16	小土坑	Ⅱ期後半	SK3.SX3.SD13と接合関係。	
SK27	g15	土　坑	Ⅱ期後～Ⅲ期	SK3.SK21と接合関係。	*
SK28	l14	小土坑	Ⅰ　期		
SK29	n16	土　坑	不　明		
SK30	n16	落ち込み	Ⅱ　期		
SK31	k12	土　坑	近世～近代		
SK32	l12	土　坑	近世～近代		
SK33	j10	土　坑	Ⅱ　期	中世墓？	
SK34	i15	小土坑	Ⅱ期後半		
SK35	p15	土　坑	Ⅱ期前半？	中世墓？　釘2点	*
SK36	d22	土　坑	Ⅲ　期	鉄滓多量に含む。輪羽口少量　釘1点。	*
SK37	d23	土　坑	Ⅲ期後半	鉄滓含む。SD1と接合関係。	*
SK38	b15	土　坑	Ⅱ　期	鉄滓少量。青磁2点	*
SK39	b15	落ち込み	Ⅱ期後半		
SK40	p20	土　坑	Ⅰ　期		
SK41	p21	土　坑	Ⅰ　期		
SK42	m20	土坑？	Ⅰ～Ⅱ期前半		
SK43	d21	土　坑	Ⅲ期？	鉄滓少量	
SK44	e21	土　坑	Ⅲ期？	SD1・SK58と接合関係。	
SK45	d22	落ち込み	Ⅰ～Ⅱ期	鉄滓少量	
SK46	a15	落ち込み	Ⅱ期前半		
SK47	a15	落ち込み	Ⅱ　期	青磁1点	
SK48	e23	土　坑	Ⅱ期後半	釘2点	*
SK49	k26	土　坑	Ⅱ期後半	北宋銭5枚以上。中世墓？	*
SK50	b16	落ち込み	Ⅱ期後半		
SK51	c22	土　坑	Ⅲ期前半	鉄滓少量。	
SK52		欠　番			
SK53	g22	土　坑	Ⅱ期後半		
SK54	b24	土　坑	Ⅱ期後～		
SK55	d24	土　坑	Ⅱ期後～Ⅲ期	2時期重複？鉄滓少量。青磁6点白磁2点。	*
SK56	a24～b24	落ち込み	Ⅱ　期	SX10と同一。　青磁1点。	
SK57	e25	落ち込み	Ⅱ期以降		
SK58	e25	土　坑	Ⅱ期以降	SD1・SK44と接合関係。	
SK59	a21	土　坑	Ⅲ期後半		
SK60	e27～d27	落ち込み	Ⅱ期後半？		
SK61	a22	中世墓？	Ⅲ期？	焼土炭層あり	*
SK62	c23	土　坑	Ⅲ期前半	焼土層あり。鉄滓少量。	*
SK63	c27	土　坑	Ⅲ期前半		*
SK64	d24	小土坑	Ⅱ　期		
SK65	c22	土　坑	Ⅰ　期		
SK66	d27	土　坑	不　明		
SX1	l22	落ち込み	Ⅱ～Ⅲ期	鉄滓少量。	
SX2	k22	溝	Ⅱ期～	SD19に接続する。	
SX3	l22	落ち込み	Ⅱ　期	SK3.26.SD13と接合関係。	
SX4	m22	落ち込み	近世以降		

tab. 2　楠ノ木遺跡A地区遺構一覧表　　＊は文中にて記述している遺構

遺構番号	小地区	性　格	時　期	そ　の　他
ＳＸ５	ｆ15	不定形土坑	Ⅰ～Ⅱ期前	２～３基の重複？　＊
ＳＸ６		欠　番		
ＳＸ７	ｃ21	落ち込み	Ⅱ～Ⅲ期	鉄滓少量。　＊
ＳＸ８	ｋ24	土　坑	Ⅲ期前半	縄文土器混入。
ＳＸ９	ｄ25	土　坑	Ⅲ期後半	鉄滓少量。
ＳＸ10	ｂ23	落ち込み	Ⅱ　期	ＳＫ56と同一。鉄滓少量。
ＳＸ11	ア23	落ち込み	Ⅲ期前半	
ＳＥ１	ｋ18	井　戸	Ⅱ期前半	＊
ＳＥ２	ｃ24	井　戸	Ⅲ期後半	鉄滓多い。良好な輪羽口あり　＊
ＳＤ１	ｈ23～	区画溝	Ⅱ期～Ⅲ期後	ｉ22．ｆ25に鉄滓少量。　＊
ＳＤ２	ｉ23～	区画溝	Ⅱ　期	＊
ＳＤ３	ｊ23～	区画溝	Ⅱ期後半～	ｉ23．ｋ23．ｈ24に鉄滓少量。　＊
ＳＤ４	ｄ19～	溝	Ⅱ　期	落ち込み状。　鉄滓少量。　＊
ＳＤ５	ｅ18～	溝	Ⅱ期？	
ＳＤ６	ｄ16～	溝	Ⅰ期？	縄文土器混入。
ＳＤ７	ｈ18～	溝	近世～近代	
ＳＤ８	ｌ21～	溝	近世～近代	耕作に伴うもの？
ＳＤ９	ｉ14～	溝	近　世	耕作に伴うもの？
ＳＤ10	ｉ14～	溝	近　世	耕作に伴うもの？
ＳＤ11	ｄ15～	溝	Ⅰ　期	三筋碗出土。
ＳＤ12	ｌ14～	溝	Ⅱ期前半	土坑ＳＫ17に伴うもの？　＊
ＳＤ13	ｐ15～	溝	Ⅱ期以降	ＳＫ３・４・26．ＳＸ３と接合関係。
ＳＤ14	ｏ14～	溝	近・現代	Ⅱ期の土器混入。
ＳＤ15	ｑ16～	区画溝	Ⅰ～Ⅱ期	＊
ＳＤ16	ｑ16～	区画溝	不　明	＊
ＳＤ17	ｂ19～ｃ20	溝	近・現代？	
ＳＤ18	ｆ25～ｇ25	溝	Ⅰ　期	
ＳＤ19	ｊ24～	区画溝	Ⅲ期以降	＊
ＳＤ20	ｊ26～	溝	Ⅲ期？	
ＳＤ21	ｍ12～ｏ15	落ち込み	不　明	
ＳＤ22	ｎ12～ｎ13	落ち込み	Ⅱ　期	
ＳＤ23	ｄ15～ｅ14	溝	Ⅰ　期	方形に巡る。
ＳＤ24	ｃ29～	溝	Ⅲ期後半	ＳＤ１のつづきか？
ＳＤ25	ａ21～ｂ21	小溝	Ⅱ期？	
ＳＤ26	ア25～ａ25	溝	不　明	落ち込み状。
ＳＤ27	ｂ29～	溝	Ⅱ期～Ⅲ期前	区画溝か？　＊
ＳＤ28	ｉ24～	区画溝	不　明	

tab. 3　楠ノ木遺跡Ａ地区遺構一覧表　　＊は文中にて記述している遺構

遺構名	棟方向	主軸方向	規　模 桁行（ｍ）×梁間（ｍ）	根石の有無	時　期	備　考
建物１	東西棟	Ｎ１°Ｅ	５間（10.0m）×４間（6.3m）	有	Ⅱ期後半～Ⅲ期	付属施設（２間×２～３間）が伴う。土坑ＳＫ27が伴う。
建物２	東西棟	Ｎ３°Ｅ	５間（10.3m）×３間（6.3m）	無	Ⅰ　期	土坑ＳＫ28は関連遺構か？
建物３	東西棟	Ｎ６°Ｅ	３間（5.7m）×２間（4.2m）	無	Ⅰ期？	
建物４	東西棟	Ｎ２°Ｅ	８間（12.7m）×５間（9.0m）	有	Ⅲ期？	土坑ＳＫ５が伴う。廂あり
建物５	東西棟	Ｎ５°Ｅ	４～５間（9.7m）×４間（7.9m）	有	Ⅰ　期	土坑ＳＫ24が伴う。
建物６	東西棟	Ｎ１°Ｅ	５～６間（10.0m）×４間（7.9m）	有	Ⅱ期後半	土坑ＳＫ６・７が伴う。
建物７	南北棟	Ｎ２°Ｅ	４間（4.8m）×２間（3.6m）	無	Ⅱ　期	
建物８	不　明	Ｎ７°Ｅ	２間（3.6m）×２間（3.6m）	無	Ⅱ　期	
建物９	南北棟	Ｎ２°Ｅ	３間（6.4m）×３間（5.5m）	有	Ⅱ　期	土坑ＳＫ38は関連遺構か？
建物10	東西棟	Ｎ３°Ｅ	６間（12.8m）×３間（5.5m）	無	Ⅱ　期	
建物11	不　明	Ｎ２°Ｅ	３間（6.4m）×２間（4.3m）を確認	無	Ⅰ　期	土坑ＳＫ40が伴う。
建物12	東西棟	Ｎ５°Ｅ	３間（5.5m）×２間（4.5m）	無	不　明	
建物13	南北棟	Ｎ７°Ｗ	３間（6.4m）×２間（3.6m）	有	Ⅱ期後半	工房？根石は小礫の集まりである。

tab. 4　Ａ地区掘立柱建物一覧表表

2．B地区の層位と遺構

層位（fig.32）

B地区は北方へ派生する尾根が終結する先端の北側とその尾根の西斜面に相当する地点にあり、標高約40～42mである。層位的にはA地区の状況と類似する。表土は暗灰褐色系の砂質土で約0.2～0.3m堆積しており、その下の暗黄灰色系砂質土層が中世の遺構基盤層に相当する。井戸ＳＫ30の断ち割りの際に確認した層位では、表土下約0.6mと約1.2mの部分に２層の黒褐色系の粘土層がある。この層は調査区南西方向に位置する尾根に近づくほど薄くなることから、調査区北方の平坦地側でレンズ状に堆積していることが分かる。井戸ＳＫ30付近では、表土下約2.6mで地山（マンガンを含んだ黄色粘土層）に達する（fig.42）。

層位で注目されるのは調査区北壁の土層（fig.32）に認められる、黒褐色系粘質土が不連続なことである。この土層では西側の層が上方へ掻ね上げられたような状況を呈している。これはあるいは地震の際の断層とも考えられるが、地質学的な検討を行うだけの力量はないので断定することは避けたい。

遺構（fig.31ほか）

検出した遺構には中世の以降が大部分で、１基のみ奈良時代のものがあった。また、それらの遺構に縄文土器・弥生土器が少量混入しており、地山までの層のどれかが、あるいは縄文・弥生時代の遺物包含層に相当するのかも知れないが、それを特定することはできなかった。

中世の遺構には掘立柱建物・土壙墓・土坑・井戸・溝などがある。記述の便宜上地形的状況から溝ＳＤ２・３以南を「南側斜面」、以北を「北側平坦部」とする。

掘立柱建物、その他ピット

掘立柱建物は５棟確認できたが、検出したピットの数から、さらに数棟存在しているものと考えられる。これらは、北側平坦部に存在しており、南側斜面には、確認できなかった。斜面上には、たとえ存在していたとしても１～２棟で、平坦地に比べれば少ないと考えられる。

建物１（fig.33）は北側平坦部の北西に存在する３間×２間のもので、南北棟と考えられる。柱間は全体に不統一であるが、桁行はおよそ16尺（約4.7m）、梁間はおよそ10尺（約３m）である。ピットは直径0.3m内外のものである。時期はピットから出土した土器から、室町時代後半（Ⅳ期）と考えられる。なお、全調査区のなかで当該時期に比定できる確実な建物はこれのみである。

建物２（fig.34）は北側平坦部のほぼ中央、溝ＳＤ４の南側に存在する。北から２列目までの柱間は明瞭に確認できた。しかしそれ以南は釈然とせず、東側に２か所ピットを確認できたに止まる。出土土器からは溝ＳＤ４より新しいが、溝ＳＤ４の埋土上にピットは認められなかった。このことから、中央の調査ができなかった部分に広がりを持つことも考えられるが、一応４間×２間の建物と考えておきたい。東西棟と考えると柱間は桁行がおよそ22尺（約6.6m）梁間がおよそ11尺（約3.3m）である。ピットの中には部分的に石が認められ、根石をもつものであることが窺われる。時期的には鎌倉時代末～南北朝時代（Ⅲ期前半）頃と考えられる。なお、この建物と切り合い関係にある中世墓ＳＫ25とは、出土土器を比較すると建物２の方が後出するものであると考えられる。

建物３（fig.35）は北側平坦部の南側、斜面寄りに位置する３間×２間のものである。東西棟と考えると桁行15尺（約4.5m）、梁間14尺（約4.2m）となる。出土土器は極めて細片であるため、所属時期は不明であるが、建物４と規模が類似し、切り合い関係にあるため、それと前後する時期の築造が想定される。

建物４（fig.35）は北側平坦部の南側、建物３と重なって検出された。東西棟と考えると桁行17尺（約5.1m）、梁間13尺（約3.9m）である。梁間の柱間は食い違っているようであるが、本来そのようなものであったのかどうか分からない。南西隅に相当するピット（i36pit1）から土師器小皿４枚と陶器椀片がまとまって出土した（fig.60-1～5）。時期は出土土器から鎌倉時代末～南北朝時代（Ⅱ期後半あるいはⅢ期前半）と考えられる。

建物５は北側平坦部の北寄りで確認した。１間×２間分を確認したが、建物の大部分は中央の未調査

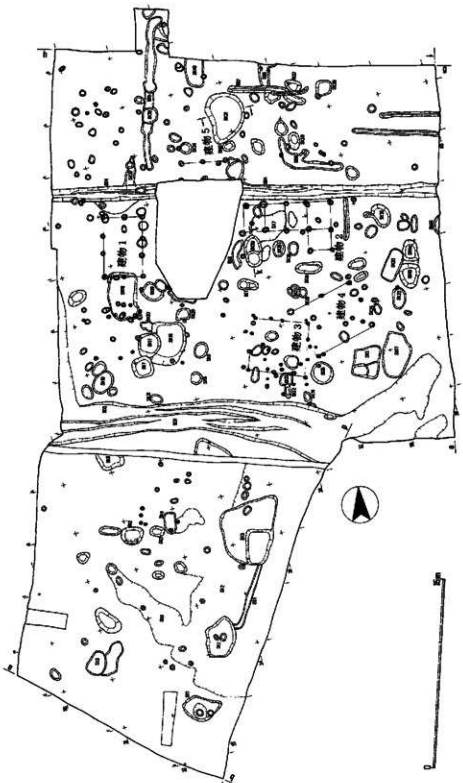
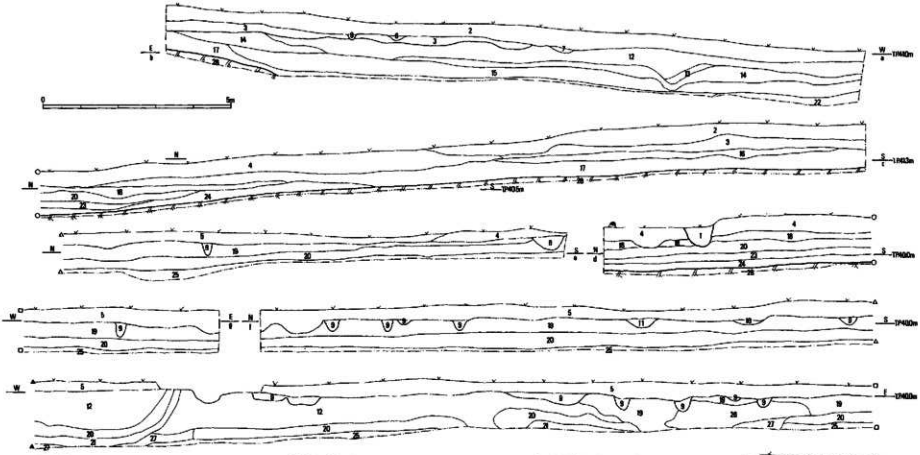


fig.31. B地区平面図（scale＝$\frac{1}{300}$）土層 a～h は fig.32、i～j は fig.40、k～l は fig.42

Fig. 32. B地区西・南・北壁土層断面図（scale=1/100）



1．現代層
2．赤味褐色粘質土
3．赤黄色暗灰褐色粘質土
4．濃褐色粘質土
5．暗灰褐色土
6．褐色粘質土（遺構埋土）
7．赤味暗灰褐色土（遺構埋土）
8．淡褐色粘質土（遺構埋土）
9．暗灰褐色土（遺構埋土・5とほぼ同質）
10．焼土層（ＳＫ45埋土）
11．赤褐色粘質土（ＳＤ４埋土）
12．小礫まじり淡黄灰色土（中世遺構基盤層）
13．白灰色粘土
14．黒色ブロック含む礫まじり暗褐色土
15．礫まじり暗灰～黒色粘質土（20と対応）
16．黄味褐色粘質土
17．暗灰褐色粘質土
18．茶灰色粘質土
19．礫多い淡黄灰色粘質土（12と基本的に同じ）
20．礫多い黒褐色粘質土
21．暗灰色粘質土（20と同質）
22．淡黄灰色粘質土（12と類似）
23．茶灰色粘質土
24．暗灰～黒色粘質土（15・20と類似）
25．暗黄色粘土
26．礫多い淡黄褐色粘土（12・19と基本的に同じ）
27．黄灰色粘質土
28．黄色粘土（地山）

区域に及ぶものと考えられる。出土遺物がないので所属時期は不明である。

なお建物としてまとまらないその他のピット出土の土器からは、平安時代末（Ⅰ期）から室町時代後半（Ⅳ期）にかけての建物の存在が想定される。

中世墓

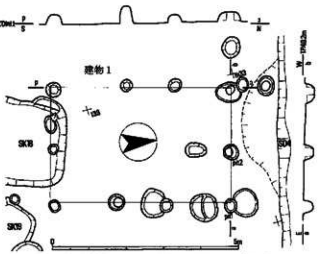


fig.33. B地区建物1平面・断面図（scale＝1/100）

※断面では、建物に関係のない遺構を省略している。

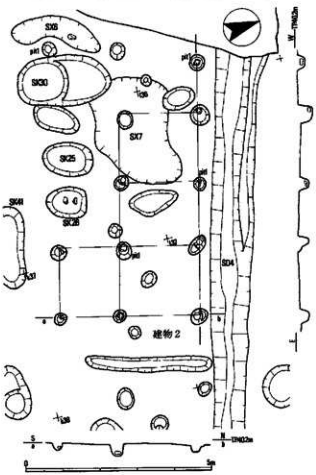


fig.34. B地区建物2付近平面・断面図（scale＝1/10）

明らかに中世墓と考えられるものと、その可能性が考えられるものをその他の土坑とは区別して記述しておく。明らかに中世墓と考えられるのはＳＸ３、ＳＫ４・23・25・33・43・44であり、その可能性のあるものはＳＫ２・３・26・35・45である。

中世墓ＳＸ３(fig.36)は調査区南端の斜面上に存在する。墓壙は長さ約1.8m、幅約1.3mの南北に長い不整楕円形を呈する。検出面からの深さは約0.3mである。木棺直葬で、棺痕跡は縦1.21m、幅0.42mのものである。小片ではあるが木棺の木質が一部残っている部分もあった。木片にはほぞ穴が残っているものもある。少量ではあるが鉄釘が出土していることから、釘の使用が想定される。棺内からは土師器小皿(fig.61-18）が小刀の直上から出土したが、不手際があり、実測図作成前に取り上げてしまった。棺の東寄りにある小刀は、出土状況から棺外副葬品の可能性も想定できるが、木棺底面に近いことから棺内にあったものが木棺腐朽とともに外へ出たものと考えておきたい。墓壙内の棺両木口側と棺の上部には礫が認められ、特に両木口のものは棺を押さえるために密に詰められている。出土土器は土師器小皿と若干の土師器細片のみであるため時期は特定しがたいが、室町時代後半以降（Ⅲ期後半～Ⅳ期）と思われる。

中世墓ＳＫ４（fig.37）は南側斜面部中央に位置している。墓壙は長軸が約1.6m、短軸が約0.9mで、南北に長い隅丸長方形を呈している。検出面からの深さは約0.2mである。墓壙内南側には土師器小皿が５点と鉄釘が１点出土し、北側には自然石が１個あった。時期は出土土器から室町時代後半（Ⅲ期後半～Ⅳ期）と考えられる。

中世墓ＳＫ23は調査区北平坦部の東寄りに存在する。付近には中世墓ＳＫ33・43・44がある。墓壙は長軸約1.7m、短軸約1.0mで南北に長い形状を呈する。検出面からの深さは約0.5mを測る。墓壙内北寄りから土師器小皿が３枚出土した。時期は出土土器から鎌倉時代後半（Ⅱ期）と考えられる。

中世墓ＳＫ25(fig.38)は調査区北平坦部のほぼ中央に位置し、建物２の敷地と重なっている。長軸約1.3m、短軸約0.9mの南北に長い楕円形を呈しており、検出面からの深さは約0.35mである。埋土上層

には陶器椀と不明鉄製品のほか、常滑産の大甕が破片となってかたまっていた。この大甕はfig.38およびPL.24 にみえるように、底部片が口縁部片よりも上にあり、体部片の一部は墓壙北側に立てられた状態にある。そして接合したものは大甕を縦に半載した半分のみであった。これらのことからＳＫ25は大甕を用いた甕棺墓ではなく、土器片を埋葬時に集積させた墓であると考える。埋土中層から下層には完形の土師器小皿が４枚出土した。出土遺物から鎌倉時代後葉（Ⅱ期後半）と考えられる。

中世墓ＳＫ33(fig.38)は調査区北平坦面の西寄りに位置する。付近には中世墓ＳＫ23・43・44がある。墓壙は長軸が約2.6m、短軸が約1.3mの、南北に長い隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは約0.15mである。木棺直葬と考えられるが、木棺痕跡は検出できなかった。墓壙内西端で鉄製の小刀が出土した。時期を決定出来る要素に乏く、切り合い関係からＳＫ43・44より新しいといえるのみである。

中世墓ＳＫ43(fig.38)はＳＫ33の東隣に位置する。長軸約1.9m、短

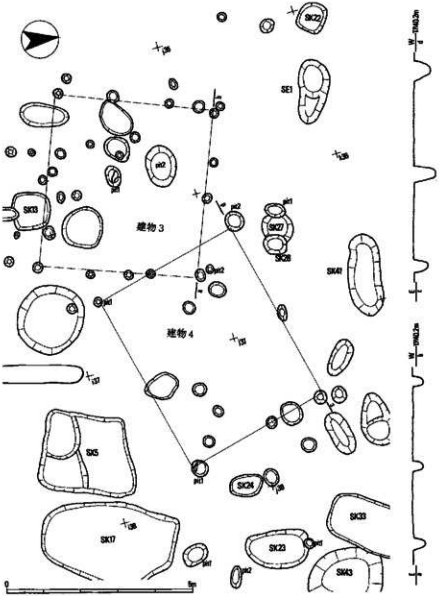


fig.35. Ｂ地区建物３・４他平面・断面図（scale＝1/100）

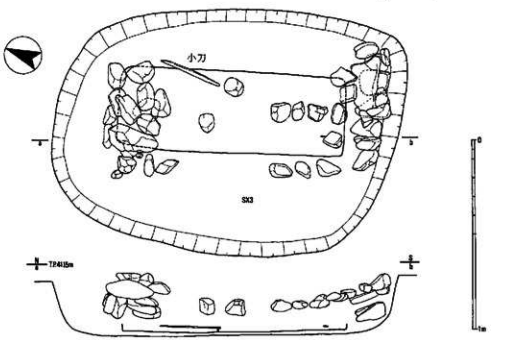


fig.36. Ｂ地区中世墓ＳＸ３平面・立面図（scale＝1/20）

軸約1.5mの南北に長い不整楕円形を呈する。検出面からの深さは約0.6mである。墓壙内北寄りに湿美産（？）の陶器壷、土師器鍋、皿（２個）、小皿（2個）を副葬品として置いている。鍋は底の一部が墓壙内から出土せず、底を打ち欠いて副葬している可能性が大きい。またこの鍋は煤が厚く付着していた。自然石が墓壙底からやや浮いた状態でほぼ同一レベルに認められるが、規則性はない。時期は出土土器から南北朝時代頃（Ⅱ期後半～Ⅲ期前半）と考えられる。

中世墓ＳＫ44(fig.38)はＳＫ43の北側に位置する。長軸約1.6m、短軸約1.2mの南北に長い楕円形を呈する。検出面からの深さは約0.6mである。墓壙内北側で土師器小皿が３点出土した。出土土器から鎌倉時代後半（Ⅱ期後半）と考えられる。

以上が出土遺物の状態や遺構の形態などから中世墓と判断したものである。以下は個々の項で述べるように、中世墓の可能性が考えられるものである。

土坑ＳＫ２(fig.37)は南側斜面やや西寄りに位置する。規模は長軸約1.6m、短軸約1.3mのずんぐりした楕円形を呈している。検出面からの深さは約0.6mである。埋土上部には多くの土器片を含んでいたが、遺構に伴うものかどうかは不明である。底から約0.15mほど浮いた状態で河原石と土師器皿が出土したので中世墓の可能性を考えた。時期は埋土上部にて認められた土器から南北朝時代頃（Ⅱ期前半）と考えられる。

土坑ＳＫ３は南側斜面、ＳＫ２とＳＫ４の間にある。長軸約1.2m、短軸約0.8mの東西に長い楕円形を呈している。検出面からの深さは約0.25mである。埋土は赤褐色砂質土で、鉄製の小刀と思われる破片が出土したために中世墓の可能性を考えた。時期は不明である。

土坑ＳＫ26は調査区北平坦面のほぼ中央に位置している。中世墓ＳＫ２５の東隣で、それと並列して構築されているので、中世墓と考えてよいであろう。長軸約0.7m、短軸約0.8mの南北に長い楕円形を呈している。土坑内には自然石が２個存在していた。出土土器から鎌倉時代後半頃（Ⅱ期後半）と考えられる。

土坑ＳＫ35・45は調査区北平坦部

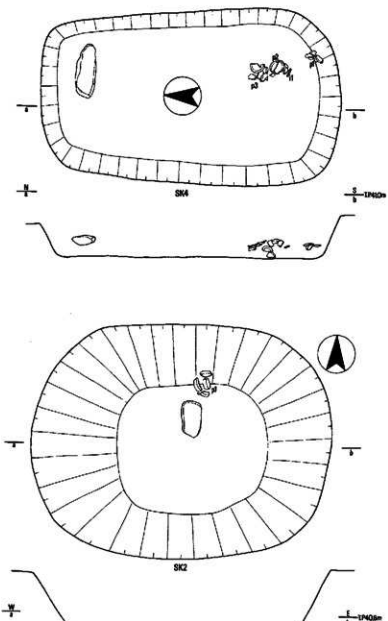


fig.37. Ｂ地区中世墓ＳＫ４、土坑ＳＫ２平面・断面図（scale=1/20）

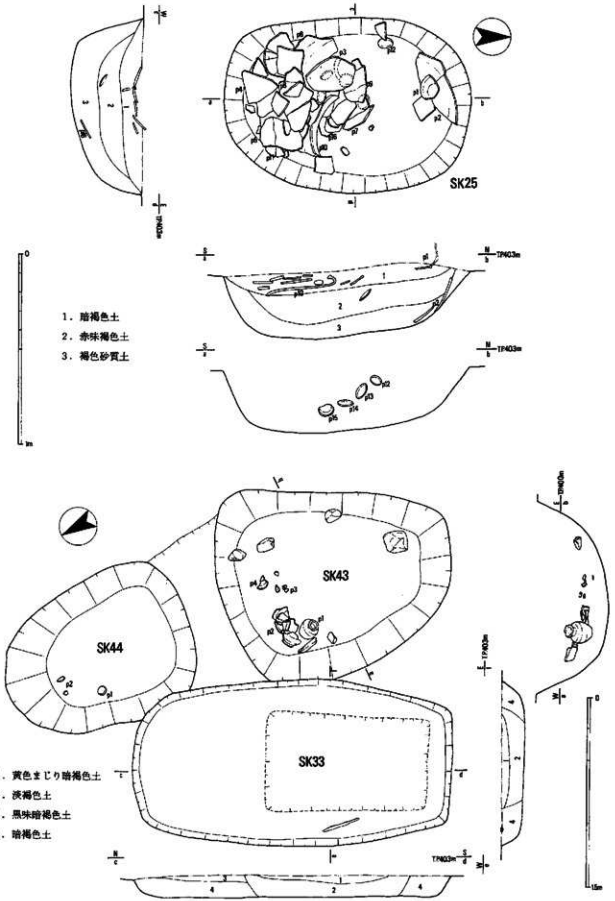


fig.38. B地区中世墓SK25（scale＝1/20）・SK33・43・44（scale＝1/30）平面・立面・土層断面図

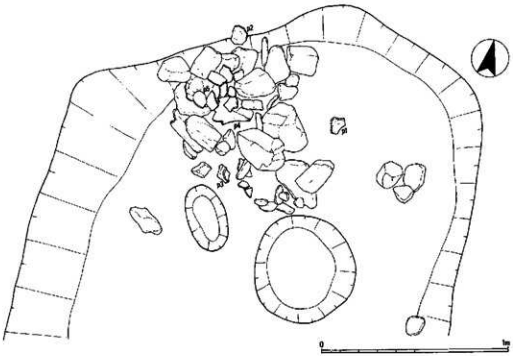


fig.39. B地区落ち込みＳＫ１土器・礫群出土状況平面図（scale=1/20）

の中央東に位置する。付近には中世墓ＳＫ33・43・44などがある。これらの埋土上部からは焼土が認められた。出土遺物は皆無に近いので時期は不明である。

その他の土坑・落ち込み

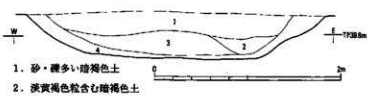
中世墓以外の土坑である。このなかには、比較的明瞭な掘り方のもの（ＳＫ５・ＳＫ１６・ＳＫ18・ＳＫ31ＳＫ39）などのほか、浅い落ち込み状を呈するもの（ＳＫ１・ＳＫ17・ＳＸ５）もある。これらのうち、主なものについて記述していく。

土坑ＳＫ５は南側斜面の東端に位置する。遺構は検出時には浅い落ち込み状を呈していたが、最終的には長軸約2.7m、短軸約1.9mの不整長方形状を呈するものとなった。遺物は落ち込み状の部分から土坑状の部分にかけて土器類や砥石などがかなり多く出土している。また、土坑内には多くの自然石が含まれていた。土器はその型式からはほとんど単一時期に投棄されたものと考えられる。時期は出土土器から室町時代後半（Ⅲ期後半）と考えられる。なお、土坑内には弥生土器が混入していた。

土坑ＳＫ16は北平坦部の西寄りにあり、建物１の南に位置する。土坑ＳＫ７・ＳＫ11がこの土坑の南西部分を切り込んでいるが、３者の時期は極めて近接しているようである。長軸約3.4m、短軸約2.7mのやや膨張りの方形を呈する。断面形は摺鉢状である。時期は、出土土器から室町時代後半（Ⅳ期）と考えられる。

土坑ＳＫ18は北平坦部の西寄りにあり、建物１の南側と重なっている。長軸約3.8m、短軸約2.2mの隅丸長方形状を呈している。掘立柱建物に伴う土坑かと思われたが、周囲にそれらしいピットは認められなかった。出土土器は主に北寄りに認められ、時期的には平安時代末（Ⅰ期）と考えられる。

土坑ＳＫ31(fig.40)は北側平坦部北寄りに位置する。この土坑は長軸約4.0m、短軸約2.7mの楕形を呈している。掘形は垂直に近く、土坑の壁に沿って薄く淡黄灰色の粘質土



1．砂・礫多い暗褐色土
2．淡黄褐色粒含む暗褐色土
3．淡黄褐色ブロック含む暗褐色土
4．明黄褐色土

※土層の位置はfig.31

fig.40. B地区土坑ＳＫ31土層断面図（scale=1/40）

が貼り付くように認められた。出土遺物には、釘などの鉄製品類が比較的多く認められた。時期は、室町時代前半（Ⅲ期後半）と考えられる。

土坑ＳＫ32（fig.41）は北側平坦部の西寄りに位置している。南側は溝ＳＤ４に切られている。形状は南北に長く、溝状を呈しているが、溝ＳＤ４の南にはそれに対応するものがないため、土坑と考えた。埋土は赤褐色系土であり、焼土も含んでいた。検出面からの深さは約0.1mである。南寄りで土師器甕や甑がかたまって出土したが、これらは破損後に火を受けているものであった。時期は奈良時代頃と考えられる。なお、全地区を通じて奈良時代の遺構はこの土坑のみであった。

土坑ＳＫ39は北側平坦部の西寄りに位置し、溝ＳＤ５と重なっている。土層の観察からはＳＫ39の方が後出する。土器はＳＤ５のものが混入しているので、時期については確実なことは言えない。

落ち込みＳＫ１（fig.39）は南側斜面の東寄りに位置し、北にはＳＫ５がある。この遺構は長軸約3.2m、短軸約2.2mの不定形のものである。北寄りのところから礫群とともに土師器・陶器類が多く出土した。完形に近いものも含まれており、良好な一括資料となるものである。時期は、平安時代末（Ⅰ期）と考えられる。

落ち込みＳＫ17は調査区北平坦の東寄りに位置している。その北には中世墓ＳＫ23・３３・43・44がある。平面形は不整長方形を呈し、検出面から約0.2mの深さが残存している。室町時代前半（Ⅲ期後半）の土器類が出土している。

落ち込みＳＸ５は調査区北平坦面の東寄りに位置し、落ち込みＳＫ17の西隣に当たる。遺構はやや歪んだ方形を呈し、南側は２段に落ち込むものである。したがって人為的な土坑である可能性も十分に想定し得るが、あまり明確な掘り込みでないために落ち込みと考えた。室町時代後半（Ⅳ期）の土器が出土しているが細片のため実測は不能である。

落ち込みＳＤ８は調査区北平坦面の北端に位置している。南は溝ＳＤ７によって切られている。検出面からの深さは約0.1mと極めて浅く、当初は溝としたが落ち込みとした。土師器の羽釜が出土しており、時期は室町時代後半（Ⅳ期）と考えられる。

井戸

井戸は２基確認された。いずれも調査区北平坦面の中央付近にあり、近接して築かれている。

井戸ＳＥ１は建物３の北西方向に位置している。遺構検出時には東西約1.7m、南北約0.8mの楕円形を呈していたが、東側はおよそ0.35mでテラス状になり、井戸そのものは径約0.6m、検出面からの深さ約2.95mを測り、素掘りのものと考えられた。出土遺物は極めて少量で時期の判断は難しいが、陶器椀（山茶椀）、土師器皿などがあり、鎌倉時代後半以降と考えられる。

井戸ＳＫ30（fig.42）は井戸ＳＥ１の北に位置す

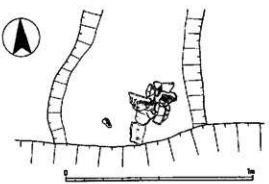


fig.41. Ｂ地区土坑ＳＫ32土器出土状況平面図（scale＝1/20）

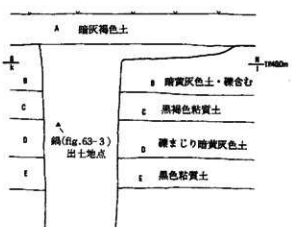


fig.42. Ｂ地区井戸ＳＫ30断面図（scale＝1/40）

る。井戸ＳＥ１と同様、検出時には南北約2.4m、東西約1.4mの楕円形を呈しており、北側は検出面から約0.2mでテラス状となる。井戸そのものの径は約0.8mで、検出面からの深さは約3.2mを測る。素掘りのものと考えられる。出土遺物は少量ではあるが良好なものが認められた。埋土上部にはほぼ完形の土師器鍋が、井戸底付近からは鍋の口縁部が出土している。時期は室町時代後半（Ⅳ期）と考えられる。

溝

溝には、区画溝と考えられるもの（ＳＤ２・３・４・５）とその他のもの（ＳＤ６など）がある。

溝ＳＤ２・３は調査区中央部の北平坦面と南斜面との境目にある。両者は中央付近で重なっているが、ともに赤褐色系の粘質土であるため土層の観察によっても両者の前後関係を識別することができなっかったため、同一に記述していくこととしたい。調査区内では東西方向の部分が主に検出されたが、西隅ではそれに直行するかたちで南北方向の落ち込みを検出しており、方形に巡らされていたものと考えられる。西側は不明瞭であるが、その場所には丘陵尾根があるので、この部分で途切れているものと考えられる。出土遺物は平安時代末頃（Ⅰ期）のものと室町時代後半（Ⅳ期）のものに大きく分けられ、２時期に掘削された可能性が想定される。

溝ＳＤ４は調査区北平坦面の中央北寄りを東西に走るものである。埋土は赤褐色系の粘質土である。溝の幅は約1.1mで逆台形を呈する。中央付近では北側に１段テラスが認められた。出土土器から鎌倉時代（Ⅱ期）に存在していたものと考えられる。

溝ＳＤ５は調査区北平坦面の北寄りに存在し、南北方向に走るものである。南寄りでは幅約0.5m、検出面からの深さ約0.15mであるが、北側では幅約0.8m、深さ約0.25mとなる。北端で埋土最下部に焼土や木炭が認められた。出土土器はⅠ期からⅡ期（平安時代末～鎌倉時代）のものが認められる。

溝状を呈する遺構として、北平坦部の北寄り、溝ＳＤ５より東側にあるＳＤ６・７付近のものや、調査区南斜面東寄りのＳＤ１などがある。これらは出土遺物がほとんどないので時期的には不明である。近年の植林に伴うものとも考えられる。

Ｂ地区のまとめ

Ｂ地区の中世関係では平安時代末から室町時代後半に至る時期（Ⅰ期～Ⅳ期）の遺構を検出した。遺構の傾向をみると、平安時代末から鎌倉時代には溝（ＳＤ２・３とＳＤ４）に囲まれた一画が形成され、それは室町時代後半に至って再度区画されているようである。検出した建物や井戸など、人間の生活が想定でき得る遺構はこのあいだに主に認められると考えてよいであろう。ただし、出土土器や遺構をみるとⅡ期前半に相当するものが極めて少ない状況にある。

注目するべきことは、生活に関する遺構という点ではＡ地区のものと比べて規模の点で格段に劣っていることである。建物跡は合計５棟確認できるものの、Ａ地区のように棟方向を揃えているわけではなく、雑然としており、規模も小さい。このことはⅡ期後半からⅣ期あたりまで継続して墓域として利用されていることと係わっているのかも知れない。

墓域は調査区の南東寄りにある丘陵尾根の裾付近に形成されたものとみてよいであろう。Ｂ地区の居住域は規模が小さいことから、この墓地の形成にはＢ地区に居住していた集団以外のものの関与も充分想定できよう。

遺構番号	小地区	性格	時期	その他	
SK1	d23	落ち込み	Ⅰ期	落ち込み状。土器多量。	*
SK2	f32	中世墓？	Ⅲ期	Ⅱ期の土器混入。	*
SK3	f32	中世墓？	不明	刀片出土。	*
SK4	f32	中世墓	Ⅳ期？	小皿約７枚。	*
SK5	f34	土坑	Ⅲ期後半	弥生土器混入。	*
SK6	h32	土坑	Ⅱ期		
SK7	i33	土坑	Ⅳ期		
SK8	j34	土坑	Ⅲ期後半以降		
SK9	i34	土坑	Ⅲ期後半以降		
SK10	j32	土坑	Ⅳ期		
SK11	j33	土坑	Ⅳ期		
SK12	h35	落ち込み	不明		
SK13	h35	土坑	Ⅲ期？		
SK14	h36	土坑	Ⅱ期		
SK15	h36	土坑	Ⅲ期後半	木炭混じる。	
SK16	j33	土坑	Ⅳ期		*
SK17	h38	落ち込み	Ⅳ期		
SK18	k33	土坑	Ⅰ期		*
SK19	k33	土坑	Ⅳ期		
SK20	j33	土坑	Ⅲ期？		
SK21	j33	落ち込み	Ⅲ期？		
SK22	k35	土坑	Ⅲ期		
SK23	j38	中世墓	Ⅱ期	小皿３枚。	*
SK24	j37	土坑	Ⅲ期後半		
SK25	k36	中世墓	Ⅱ期後半		*
SK26	k36	土坑	Ⅱ期後半～Ⅲ期前半	中世墓の可能性あり。	*
SK27	j36	土坑	Ⅱ期前半		
SK28	j36	ピット？	Ⅱ期前半		
SK29	j34	土坑	Ⅳ期		
SK30	k35	井戸	Ⅳ期		*
SK31	n36	土坑	Ⅲ期後半		*
SK32	m33	土坑	奈良時代	焼土混じる。	*
SK33	j33	中世墓	不明	小刀出土。	*
SK34	m35	土坑	Ⅱ期以降		
SK35	k38	中世墓？	Ⅲ期後半	上部に焼土層あり。	
SK36	n37	土坑	Ⅱ期後半	上部に炭層あり。中世墓？	
SK37	n37	土坑	Ⅱ期		
SK38	m37	土坑	Ⅱ期		
SK39	n34	土坑	Ⅱ期後半	溝ＳＤ５より新。	
SK40	o35	土坑	Ⅱ期以降	溝の可能性あり。	
SK41	j36	土坑	Ⅲ期以降		
SK42	m35	土坑	Ⅲ期前半		
SK43	j38	中世墓	Ⅱ期後半		*
SK44	j38	中世墓	Ⅱ期		*
SK45	k39	中世墓？	Ⅱ期？	上部に炭層あり。	
SX1	b32	落ち込み	Ⅰ期～Ⅳ期		*
SX2	d32	落ち込み	Ⅰ期～Ⅳ期		
SX3	d30	中世墓	Ⅳ期？	小刀・小皿出土。	*
SX4	e31	落ち込み	Ⅰ期～Ⅳ期	Ⅰ期のもの多い。	
SX5	h37	落ち込み	Ⅳ期		
SX6	k35	落ち込み	Ⅱ期後半～Ⅲ期前半		
SX7	l36	落ち込み	Ⅲ期		
SE1	j35	井戸	Ⅱ期		*
SD1	e34～	溝	不明		
SD2	i31～	溝	Ⅱ期～Ⅳ期		*
SD3	i31～	溝	Ⅱ期～Ⅳ期		*
SD4	m33～	区画溝	Ⅱ期		*
SD5	n34～	溝	Ⅱ期後半		*
SD6	l37	溝	Ⅱ期		
SD7	n37	溝	不明		
SD8	n36	溝	Ⅳ期	土坑の可能性あり。	

tab. 5　楠ノ木遺跡Ｂ地区遺構一覧表　　＊は文中にて記述している遺構。

遺構名	棟方向	主軸方向	規模 桁行（ｍ）×梁間（ｍ）	礎石の有無	時期	備考
建物１	南北棟	Ｎ５°Ｅ	３間（4.7m）×２間（３m）	無	Ⅳ期	桁行の柱間は 不統一。
建物２	東西棟	N70°Ｗ	４間（6.6m）×２間（3.3m）・１間	有	Ⅲ期	南西 部は不明瞭。
建物３	東西棟	N80°Ｗ	２間（4.5m）×３間（4.3m）	無	不明	
建物４	東西棟	N68°Ｅ	２間（5.1m）×２間（3.9m）・１間	無	Ⅲ期？	
建物５	南北？	Ｎ４°Ｅ	１間（1.2m）×２間（3.6m）を確認	無	不明	

tab. 6　Ｂ地区堀立柱建物一覧表

3. C地区の層位と遺構

層位　(fig.44)

C地区は標高42～43mの平坦な丘陵上に位置している。層位的には表土下の灰褐色土が遺物包含層となり、その下の層である黄灰色混礫土を基盤層として中世遺構面が検出された。層位は黄灰色混礫土と基本的には同質の土壌が遺構面下約0.4mまで堆積しており、さらに間層を挟んでその下に黒灰色系粘質土が堆積している。この層はA・B地区に認めら

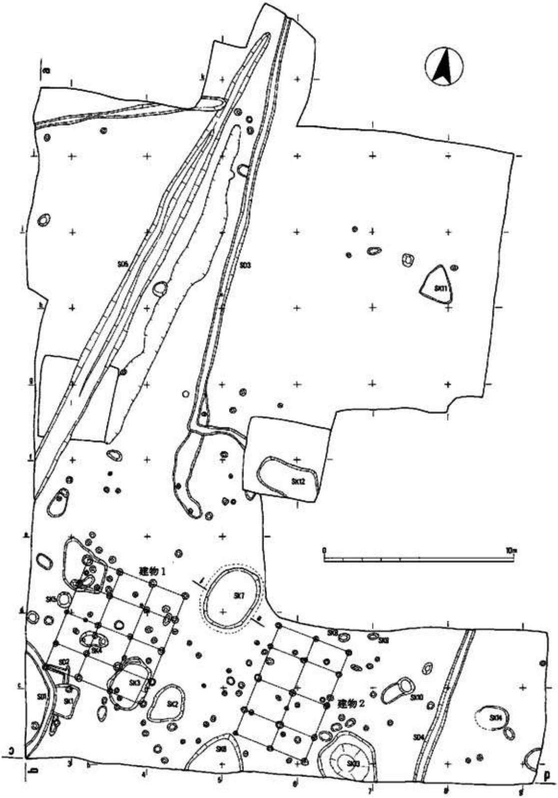


fig.43. C地区平面図 (scale=1/200) 土層 a～d は fig.44、e～f は fig.47

れる層と基本的には同質のものであると考えられる。地山は検出できなかったが、A・B地区と同様であると考えられる。地形的状況から、堆積土は西から東にかけて傾斜していくものと考えられる。遺構としては中世のものが検出されたのみであるが、遺構基盤層である黄灰色混礫土層中に縄文土器が極めて少量であるものの含まれており、この層が縄文時代の遺物包含層に相当するものと考えられる。

遺構（fig.43ほか）

中世の遺構は掘立柱建物、土坑、井戸、溝などがあり、これらは調査区の南側に集中している。以下、個々の遺構について記述していく。

掘立柱建物、その他ピット

掘立柱建物は２棟確認できたが、検出されたピットの数からさらに数棟存在しているものと考えるのが妥当である。確認された建物２棟は、ほぼ梁軸を揃えており、同時存在と見なしてよいであろう。

建物１（fig.45）は調査区南側で確認された。南北棟で桁行４間（約6.1m，約20尺）、梁間３間（約5.5m，約18尺）の総柱建物である。梁間は３間それぞれが約1.8m（６尺）で統一されているのに対し、桁行は南北端２間がそれぞれ約1.2m（４尺）、中央２間はそれぞれ約1.8m（６尺）となっている。建物を構成しているピットには部分的ではあるものの根石が認められる。建物の敷地内の南東隅には長楕円形を呈した土坑（土坑ＳＫ３）があり、当建物に伴うものと考えてよいであろう。この土坑は検出面からの深さは約0.25mで、断面は皿状を呈している。出土遺物から南北朝時代（Ⅱ期後半～Ⅲ期前半）と考えられる。

建物２（fig.45）は調査区南側で確認された。南北棟で桁行４間（約6.1m，約20尺）、梁間２間（約3.6m，約12尺）の総柱建物である。梁間２間はそれぞれ約1.8m（６尺）、桁行は南北端２間がそれぞれ約1.2m（４尺）、

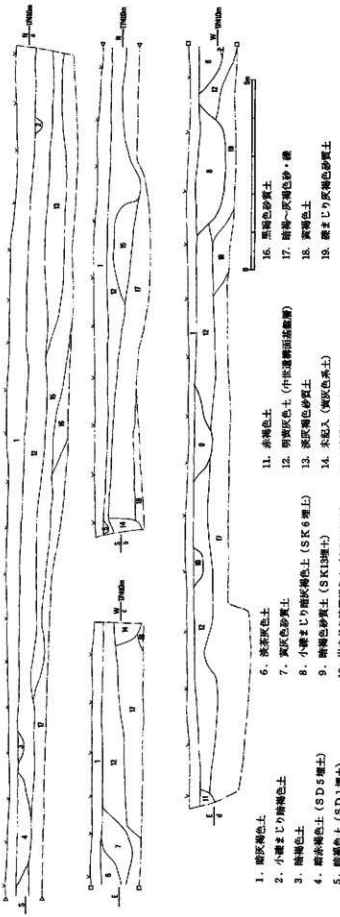


fig.44. Ｃ地区西・南壁土層断面図（scale＝1/100）

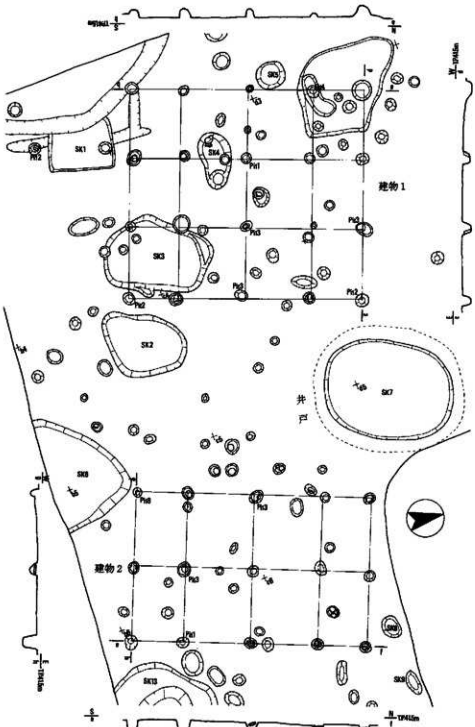


fig.45. C地区掘立柱建物1・2平面・断面図（scale=1/100）

物1から18尺離れて建てられており、ほぼ並行させていることや出土遺物からも建物1と同時期と考えられる。

なお、建物としてまとまるもの以外にも多くのピットが検出されている。これらは建物1・2付近に多く認められ、この付近が居住地であったことを示している。ピットは出土土器から平安時代末～室町時代後半（Ⅰ期～Ⅳ期）までのものがあり、その時期の建物が存在する可能性を示唆する。なかには鉄滓を出土したもの（d4pit1）もある。

土坑

土坑状の遺構は14基確認できた。これらのうちで特徴的なものには、焼土の認められるもの（SK1・11）、ピット状の小さなもの（SK4・5・8・9・10）、建物に付随するもの（SK3）、がある。それ以外のものは、断面摺鉢状のもの（SK6・13）、不定形で浅いもの（SK2・12・14・SX1）がある。

焼土を伴うSK1・11は検出面からの深さが約0.～0.15mの浅いものである。SK11（fig.46）は土坑の壁際に焼土があるものの底面には認められなかった。SK1はブロック状に焼土があるもので面的には認められなかった。SK1の平面形は方形、SK11の平面形は三角形状である。共に10数個の土器の出土をみたが、特にSK11からは完形の土師器

中央2間がそれぞれ約1.8m（6尺）である。建物を構成しているピットには部分的ではあるものの根石が認められる。そのうち、c6pit1の根石には円形に窪んだような痕跡が認められ、あるいは柱の位置を示すものかもしれない（PL.37）。建物の敷地内には建物1のような土坑は認められなかった。建

皿・小皿が多い。ＳＫ11の形態は土器焼成坑に類似するが、焼土の状態からはそうであると断定はできない。ＳＫ１は鎌倉時代後半（Ⅱ期後半）、ＳＫ11は南北朝時代頃（Ⅲ期前半）と考えられる。

ピット状の小さな土坑のうち、ＳＫ４・５・８・10からは良好な土器類が出土している。いずれも完形の土器を覆いた状態ではなく、投棄したものと考えられる。ＳＫ10からは南北朝時代（Ⅲ期前半）、ＳＫ４（PL.34）・５からは室町時代前半（Ⅲ期後半）に相当する土器類が出土している。ＳＫ８（PL.33）・９から出土した土器は井戸ＳＫ７から出土したものと接合し、３者が近接した時期のものであることを示している。

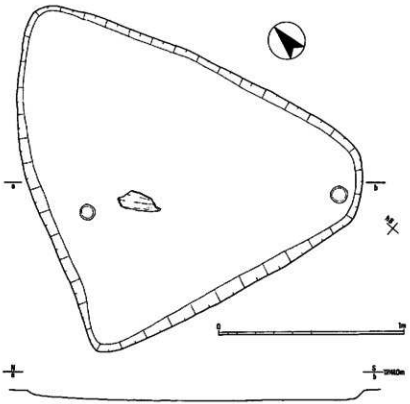


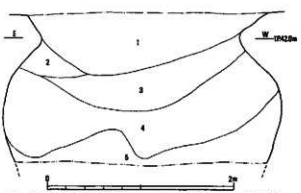
fig.46. Ｃ地区土抗ＳＫ11平面・断面図（scale＝1/20）

断面摺鉢状を呈する土坑（ＳＫ６・13）は調査区の南端に存在している。２基とも検出面からの深さは約0.3mである。出土遺物（土器）は細片が大部分でまとまった出土は見られなかった。

形状が不定形のものも調査区南側に集中している。ＳＫ２,14およびＳＸ１からはあまり多くの出土遺物はみなかったが、ＳＫ12（PL.34）からは南北朝時代（Ⅲ期前半）の良好な土器が出土した。

井戸

井戸は１基検出した。ＳＫ７（fig.47）は建物１と２のあいだの北側にある。検出面から約1.6mまでは調査を行ったが、それ以下は湧き水と地盤が軟質であったために調査を断念した。検出面からおよそ0.3mのところで大きくオーバーハングしているが、その部分にも土器類が認められ、この遺構が機能していた時期にはすでに崩壊が始まっていたものと考えられる。出土遺物は大部分が土器類で、若干の鉄製品を含む。土器類には完形に近いものもある。出土した土器は鎌倉時代前半（Ⅱ期前半）以降のもので、量的に最も多いのはⅡ期後半～Ⅲ期のものである。埋土最上層からは室町時代後半（Ⅳ期）のものも認められる。なお、下部の層には縄文時代早期末頃および弥生時代後期の土器が混入していた。



1．炭・礫まじり暗褐色土
2．黄色まじり暗褐色土
3．礫多い灰褐色砂質土
4．礫・暗褐ブロックまじり褐色砂質土
5．礫多い黄褐色土

fig.47. Ｃ地区井戸ＳＫ７土層断面図（scale＝1/40）

溝

溝は合計８条検出された。性格的には、区画溝と考えられるもの（ＳＤ３・４・５）とそれ以外のもの（ＳＤ１・２・６・７など）とに分けられる。

区画溝と考えられるＳＤ４は調査区の東側、ＳＤ５は西側にある。ＳＤ５は部分的に２重になっており、ある時期に作り直しを行っているものと考えられる。出土遺物は皆無であったが、埋土の状態がＢ

地区溝ＳＤ４やＡ地区溝ＳＤ１・２・３などと類似するために、この溝も土地を区画する溝と考えてよいであろう。ＳＤ４はＳＤ５と比べて浅く細いものである。出土遺物は図示不可能であるが土師器皿があり、時期的には鎌倉時代前半（Ⅱ期前半）であろう。

ＳＤ３は調査区中央から北方向に向かって認められるもので、断面形は逆台形を呈した明確なものである。出土土器から室町時代後半以降で、おそらくは江戸時代のものと考えられる。ＳＤ６はＳＤ５と並行するものであるが、非常に浅く不明瞭なものである。ＳＤ１・２は調査区南端にあるもので、浅く細いものである。ＳＤ２から土師器（ロクロ土師器）杯が出土しているが、この溝と重なっていたピットのものである可能性もある。ＳＤ７は調査区北端にあるもので、埋土の状態からは比較的新しいものと考えられる。ＳＤ１・６・７は出土遺物がなく時期は不明である。

Ｃ地区のまとめ

Ｃ地区の遺構・遺物からは、おおよそ平安時代末（Ⅰ期）から室町時代後半（Ⅳ期）にかけて形成された居住地であったと考えられる。出土土器の様と遺構からは、その中心時期は鎌倉時代後半（Ⅱ期後半）から室町時代前半（Ⅲ期後半）と考えられるが、時期的な幅のみを見るとＢ地区の状況と同様である。また、墓と考えられる遺構が認められないことから、墓域は別の地に求められる。なお、ピットから鉄滓が出土していることから、この付近に鍛冶（鍛造）の遺構の存在も想定しえる。

遺構番号	小地区	性　格	時　期	そ　の　他	
ＳＫ１	ｂ１	焼土坑	Ⅱ期後半		*
ＳＫ２	ｂ４	土　坑	Ⅲ期前半		*
ＳＫ３	ｂ３	土　坑	Ⅱ期～Ⅲ期	建物１に伴う土坑	*
ＳＫ４	ｃ３	小土坑	Ⅲ　期		*
ＳＫ５	ｄ２	小土坑	Ⅲ　期		*
ＳＫ６	ｂ４	土　坑	Ⅲ　期		
ＳＫ７	ｄ５	井　戸	Ⅱ期～Ⅳ期	縄文・弥生土器混入	*
ＳＫ８	ｃ６	小土坑	Ⅲ期？	ＳＫ７出土土器と接合	*
ＳＫ９	ｃ７	小土坑	Ⅲ期？	ＳＫ７出土土器と接合	*
ＳＫ10	ｃ７	土　坑	Ⅱ期後半		*
ＳＫ11	ｈ７	焼土坑	Ⅲ期前半？		*
ＳＫ12	ｅ５・６	土　坑	Ⅲ期前半		*
ＳＫ13	ｂ６	土　坑	不　明		
ＳＫ14	ｂ８	落ち込み	不　明		
ＳＸ１	ｄ３	土　坑	Ⅱ期？		
ＳＸ２	ｅ２	土　坑	不　明		
ＳＤ１	ｂ１	溝	不　明		
ＳＤ２	ｂ１	溝	不　明		
ＳＤ３	ｅ４～ｇ４	溝	江戸時代？		*
ＳＤ４	ｂ７	区画溝	Ⅱ期前半		*
ＳＤ５	ｅ２～Ｋ５	区画溝	Ⅲ期？		*

tab. 7　楯ノ木遺跡Ｃ地区遺構一覧表　　＊は文中にて記述している遺構。

遺構名	棟方向	主軸方向	規　模 桁行（ｍ）×梁間（ｍ）・	礎石の有無	時　期	備　考
建物１	南北棟	N11° E	４間（6.1m）×３間（5.5m）	有	Ⅱ期後半～Ⅲ期	土坑ＳＫ３が伴う。
建物２	南北棟	N11° E	４間（6.1m）×２間（3.6m）	有	Ⅱ期後半～Ⅲ期	

tab. 8　Ｃ地区掘立柱建物一覧表

Ⅳ. 調査の成果－出土遺物－

出土遺物は整理箱（テンパコ）にしておよそ125箱ある。その大部分が中世の土器類であり、2箱分の金属製品、12箱分の鉄滓、少量の石製品および木製品がある。それぞれの詳細については観察表を参照されたい。なお、土器類は正式には「鍋形土器」のように呼称するべきものであるが、以下「鍋」のように呼称していくこととする。

1．中世集落形成以前の遺物

中世以前のものは、大きく縄文・弥生時代のものと奈良時代のものとに分けられる。前者には土器と石鏃、後者には土器がある。前者の遺構は確認されず、中世の遺構に混入しているか、あるいは中世の基盤層の黄灰色系土に含まれていたものである。

縄文・弥生時代の遺物

土器類（fig.48 ）

縄文土器には外面にポジティヴな楕円文を回転施文する押型文土器、条痕文を施すもの、爪型文を施すもの、の3種類がある。押型文土器は2点のみの出土である。小型の楕円文を持つもの(1)と大型の楕円文のもの(2)がある。前者は内面に縦位に凹線状の施文をするもので、高山寺式の範疇に含まれるものである。条痕文を施すものには内外面に条痕を施すものと外面にのみ条痕を施すもの、および外面には縄文を施し内面には条痕を施すものがある。条痕はすべて二枚貝で行っている。外面に縄文を施すもの(4)は口縁端部上面に巻き貝状のもので刺突して施文するものである。外面の縄文は無節である。爪型文を施すものは1点のみである(3)。爪型は外面の拓影右側にある隆帯に沿って湾曲させて施文している。天地は逆かも知れない。

これらは全体としておおよそ縄文時代早期末頃に比定できようが、若干の時期幅をもつものかと考えられる。[1] 資料的には少量であるため、明確なことは不明と言わざるを得ない。

弥生土器には甕・壺・高杯がある。甕の1例(fig.48－18）は中期に比定できようが、その他は後期のものと考えられる。

石器類（fig.48 ，PL.37）

石器類には石鏃の他、剥片などの未製品がある。石鏃は無茎式のものが認められる。大部分がチャート製であるが、一部サヌカイト製のもの（fig.48－13～14）もある。時期的には縄文時代早期末の土器類に伴うものかと思われる。未製品にはサヌカイト・チャートのものがある。これらについては旧石器時代のものである可能性もある。

奈良時代の遺物（fig.48,58）

当該時期のものは土師器杯・甕および甑がある。fig.58－30は平安時代のものかも知れない。

2．中世の遺物

中世に相当する遺物には金属製品、石製品、木製品、土器類がある。ここで中世とするのはおおよそ平安時代末（およそ12世紀以降）から室町時代後半（およそ16世紀中葉まで）にかけての時期である。この時期の出土遺物が当遺跡の中心を占める。時期比定については掘橋の基準[2]に従っている。そのうち（仮）A段階に相当する時期を楠ノ木Ⅰ期（平安時代末、12世紀後半）、第1段階を楠ノ木Ⅱ期前半（鎌倉時代前半、13世紀前葉～中葉）、第2段階c型式までを楠ノ木Ⅱ期後半（鎌倉時代後半、13世紀後葉～14世紀前葉）、第3段階a型式を楠ノ木Ⅲ期前半（南北朝時代、14世紀中葉～後葉）第3段階b型式を楠ノ木Ⅲ期（室町時代前半、14世紀後葉～15世紀中葉）、第4段階を楠ノ木Ⅳ期（室町時代後半、15世紀中葉～16世紀前葉）とした。なお、Ⅱ期後半からⅢ期後半の実年代につ いては確証はなく、おおよその目安と考えていただきたい。

金属製品類（fig.49）

金属製品には大きくは鉄製品と銅製品がある。すべて中世遺構からの出土であり、出土地点等については金属製品類観察表(tab.10)を参照されたい。

鉄製品は中世墓から出土した小刀のほか、毛抜き・火打ち鎌・鍔・釘などがある。最も多いのは釘で、A・B地区からの出土が目立つ。火打ち鎌は松阪市南山遺跡[3]、神奈川県鎌倉市内遺跡[4]などから出土して

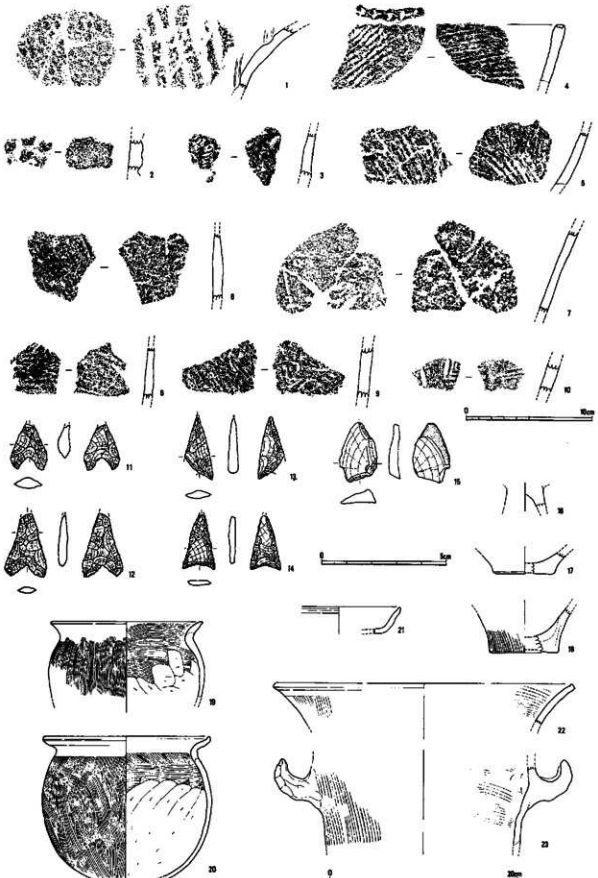


fig.48. 出土縄文・弥生・奈良時代土器・石器（1～10は⅓、11～15は⅔、16～23は¼）

いるものとの類似から判断した。これらの鉄製品は小刀を日常的に使用するナイフに相当するものと考えれば、武器類の出土がなく、すべて通常の生活に用いるものと考えられよう。

銅製品には環状の用途不明製品と銅銭がある。前者は断面形が六角形を呈している。後者は中国北宋時代のもののみであった。銅銭の出土はⅡ期前半からⅢ期にかけての遺構 から認められた。

石製品類（fig.50,PL.37）

石製品は砥石と掘立柱建物のピット模石（PL.37）がある。特にＣ地区建物２のピット模石は中央から少しずれたところが円形に窪んでおり、柱を受けた部分の可能性を考えたい。

木製品類

木製品はＣ地区井戸ＳＫ７から小さな枕状のものとＢ地区中世墓ＳＸ３出土のものがある。前者は腐朽がひどく、図示し得ない。後者は小片であるが方形のほぞ穴が認められ、木棺の一部かと思われる。

土器類（fig.48, fig.50～65）

土器類は陶器類と土師器類および瓦器類の３種に大きく分けることができる。個々の記述の前に、楠ノ木Ⅰ～Ⅳ期の傾向を見ておくこととする。

楠ノ木Ⅰ期

南伊勢系土師器（以下「南伊勢系」と呼称）成立以前の、（仮）Ａ段階に相当する時期である。Ｂ地区落ち込みＳＫ１出土土器を典型とする。

土師器類では甕・小皿・皿の他、ロクロ製の土師器（以下、ロクロ土師器）がある。甕では口径20～25cmの中形のものと口径20cmに満たない小形のものがある。Ｂ地区土坑ＳＫ１の資料では小形のものには偏平な形態のものも含まれている。小皿はfig.51-18～20のように形態的なヴァリエーションが大きい。これはⅠ期の特徴と考えられる。皿は15cm前後のもので、形態的なヴァリエーションの多いことは小皿と同様である。

瓦器は１点認められるが、当該地域で一般的なものではなく、大和ないしは伊賀地域からの搬入品と考えられる。

陶器類では椀・小椀（「山茶椀・（小椀）山皿」と俗称。以下この呼称を用いる）が大多数を占め、その他常滑産の三筋壺が認められた。また、この時期に比定できるねり鉢は明確にし得なかった。山茶椀には輪花をもつものもある。小椀は高台が付くのが通常のようである。藤澤良祐氏による編年[5]（以下「藤澤編年」）のⅡ段階第３～４型式を主体とする。

磁器類では確実な共伴は見当たらないが、型式的にはfig.55-4はⅠ期に相当するであろう。

楠ノ木Ⅱ期

南伊勢系第１段階から第２段階に相当する時期である。前半はＡ地区井戸ＳＥ１下層出土土器を典型とし、後半はＡ地区土坑ＳＫ39、Ｃ地区土坑ＳＫ３・10出土土器をその参考とする。

土師器類では鍋・小皿・皿の他、後半には羽釜も認められる。しかし羽釜はfig.61-26 がおそらく当該時期、fig.58-13 がその可能性があるという程度で、少量であることは確実である。ロクロ土師器は確認されていない。鍋は口径が20cmの小形、25～30cmの中形、35cm前後の大形の３種類に大別できる。小皿はⅠ期のような形態的ヴァリエーションが消失し、口径８cm内外で口縁部外面に面をなすものに集約している。なお、胎土の特徴からは赤褐色系と淡褐色系のものが存在しており、「赤土器」「白土器」の意識が想定される。皿は口径13cm前後もので若干薄手となり、Ⅰ期と比べれば形態・手法的ヴァリエーションに乏しいが、Ⅱ期後半からⅢ期のものと比較すると形態のなばらつきが認められ る。

陶器類では山茶椀・山皿がⅠ期同様陶器類の大部分を占め、その他常滑産の大甕・壷・ねり鉢が認められる。山茶椀は藤澤編年のⅢ段階４～７型式が主体である。山皿で高台 を持つものはない。

磁器類では青磁が認められる。

楠ノ木Ⅲ期

南伊勢系第３段階に相当する時期である。前半はＣ地区土坑ＳＫ12・焼土坑ＳＫ11を、後半はＢ地区土坑ＳＫ５を、それぞれ典型とする。

土師器類では鍋・小皿・皿が多い。また、羽釜がⅡ期に比べて相対的に増加する。土器型式的に系譜の追えない器形の鍋（fig.56-1・15～16）や茶釜（fig.57-10）が認められるのもこの時期である。鍋は前半では小形・中形・大形が存在するようであるが、後半では大形のものが消滅するようである。小皿は口径はⅡ期とほとんど変化ないが、やや偏平な形態

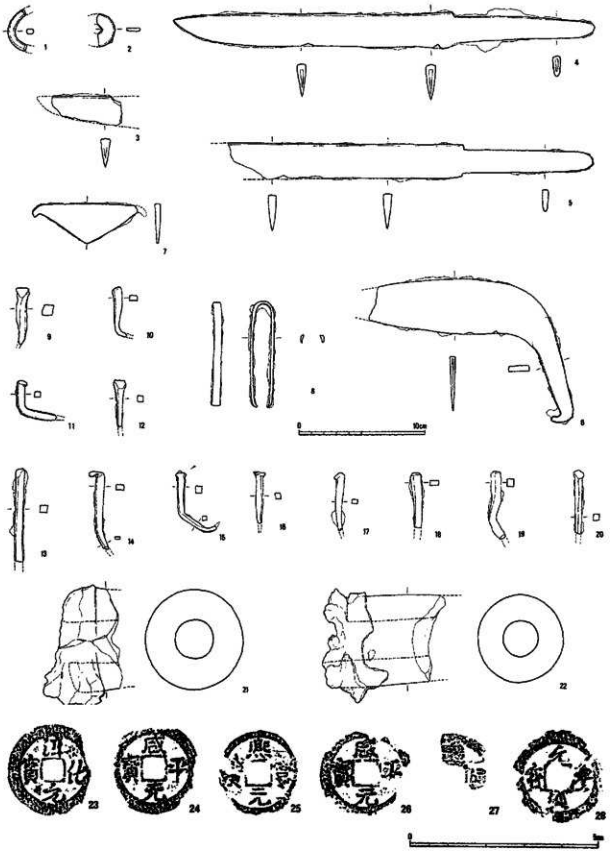


fig.49. 出土金属製品・鏃羽口実測図（1/3）および貨幣拓影（1/1）

になる。皿は口径が12cm前後（Ⅲ期前半）から次第に縮小していき、形態的なヴァリエーションが極めて少なくなる。羽釜については後に詳述するが、C地区土坑ＳＫ６に認められることからその増加はⅢ期前半から始まる可能性が極めて大きい。

陶器類では山茶椀・山皿が急激に減少する傾向にあり、後半では全く認められなくなる。藤澤編年のⅢ段階第８型式に相当するものが認められる（fig.65-14）。その他のものとして、常滑産のねり鉢や卸皿などが前半から存在するようである（fig.61-21～22）。陶器類の増加は後半に認められ、美濃・瀬戸産の平椀・緑釉皿（小皿）・卸皿・ねり鉢・壺、常滑産の甕・ねり鉢などが出土している。

磁器類ではfig.54-28 がⅢ期に相当するかと考えられるが詳細は不明である。

楠ノ木Ⅳ期

南伊勢系第４段階に相当する時期で、当遺跡ではｃ型式にて終了する。Ｂ地区井戸ＳＫ30・土坑ＳＫ11出土土器を典型とする。絶対量が少ないので、器種構成は明確でない。

土師器類では鍋・羽釜・皿が確認できる。鍋では中形と小形に相当するものは確認できるが、大形のものはⅢ期後半同様、確認できない。また、口径20cmにも満たない小さなもの（fig.63-22）も認められるが、あまり類例がない。皿は口縁部が２段に屈曲して開くもので、Ⅲ期の皿との連続性は今後の検討課題である。羽釜には、南勢地域では系譜を辿えないもの（fig.63-25）も出土しており、中・北勢地域からの搬入品と考えられる。

陶器類では美濃・瀬戸産の平椀・擂鉢、常滑産のねり鉢・甕が確認できた。擂鉢は大窯期[5]に属するものであろう。

磁器類は当遺跡では確認できなかった。

以上、Ⅰ～Ⅳ期の土器組成について概述した。以下、個々の問題について記述する。

陶器類

陶器類の多くのものは常滑・渥美・美濃瀬戸の３地域のいずれかで生産されたもののようで、そのなかでも常滑産あるいは渥美産のものが多いようである。信楽・越前・東播系などの製品は認められなかった。これは当遺跡にのみ言えることではなく、南勢地域平野部の一般的傾向かと思われ、胎土分析などの手法を用いて確定していく必要がある。

甕で体部に模様の描かれた叩き目（スタンプ文）の付くものは、常滑産のものと考えられる。この形状から常滑のなかでの産地が特定できる可能性があるという。[7]

fig.58-38 は渥美産かと思われる壺の破片であるが、肩部に焼成前のヘラ書き文字がある。仏教関係の文句かと思われるが断定はできない。観察表に推定した判読文[8]を掲載したので参照されたい。

山茶椀・ねり鉢のうち高台が付くものには、少量ではあるが高台部分と体部（椀部）の胎土が明らかに異なっているものが認められる。胎土は、椀体部が淡灰色系を呈するのに対し、高台部は青灰色系を呈するものである。形態的特徴やＢ地区落ち込みＳＫ１など（仮）Ａ段階の土器に伴出していることからは山茶椀の古い段階に相当するようである。形態や胎土の特徴を主観的に判断すると、その多くが渥美産のようであるが、瀬戸・常滑産のものにも散見され、[10]断定はできない。三重県内では、管見におよぶ

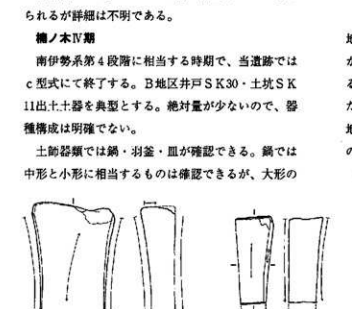


fig.50. 出土砥石実測図（scale＝½）

限り二見町荘遺跡、[08]津市宮ノ前遺跡[09]に類例がある。確認事例が増加すると特定生産地からの流通状況が判明する可能性があるため、今後注意して見る必要があると言える。

磁器類

磁器類では青磁・白磁が認められるが、量的には前者が圧倒的に多い。椀形態が大部分であるが、少量の小皿も認められた。壺などの製品は認められない。白磁のなかにはfig.55-28 のように口禿のものも認められる。

土師器類

土師器類には基本的に甕・鍋・羽釜・茶釜という煮沸形態と、皿・小皿[10]という供膳形態がある。大部分が南伊勢系土師器の範疇に相当するが、少量ではあるが皿類の一部にロクロ土師器も認められた。また、搬入品と思われる羽釜も認められる。土師器と同様の焼成状態のものに風炉・土錘および鞴の羽口がある。

鍋・甕類　鍋・甕類には南伊勢系系統のものと金属器模倣形の非在地的形態のものがある。これらは全て南伊勢系的手法によって製作されたものと見做せるものである。

南伊勢系系統の甕・鍋は、(仮) A段階のものから第4段階c型式のものまでが型式的に連続して認められる。

金属器模倣形のものは手法的には南伊勢系系統のものであり、土器そのものが搬入されたものとは考えられない。形態的にはfig.56-1や15のように口縁部が受け口状を呈するものが主体である。fig.56- 16のように鉢形を呈したものも存在している。ただし、鉢形のものが金属器模倣形なのかどうかは今後の検討が必要である。この鉢形のものは未だ類例がない。この系統にあるものとして、第5段階以降に相当する焙烙（A地区SK1・SD7など）も認められるが、当遺跡では型式的に連続しない。当遺跡の調査によって、Ⅱ期後半からⅢ期前半までの資料が充実したことが大きな成果といえる。

羽釜　羽釜は鍋に比べて量は相対的に少ない。また南勢地域の羽釜は基本的に金属器模倣形と考えられるので純粋な型式学的変遷をたどることは極めて困難な状況にある。羽釜が量的に増加する時期は鍋の第3段階b型式以降であることは当遺跡出土土器から指摘できる。鍋第3段階に並行するもの（中世後期）を中心に器形上の特徴も鑑みてfig.51に口縁部の手法的な分類案を提示した。[04]大分類として大・中形（口径30cmを越えるもの）、小形（口径25cm内外のもの）があり、これらはさらにA～E類の5系統に大別できる。羽釜C・D類は基本的に金属器模倣形で、B類もその可能性がある。B類は口縁部手法によって2者に細分したが、この差は手法以上に大きい地域差である可能性もある。E類はC・D類とD類の折衷形的な形態である。

口縁部の手法的特徴でみると、擬口縁を作り、その上端を包むように素地を付加するもの（口縁部a手法）、成形時の口縁部上端に相当する部分を外側に折り返し、広い面をなすもの（同b手法）、成形時の口縁部上端に相当する部分を内側に折り返し、上端に面を持つもの（同c手法）とが存在している。a手法はC・D類ともに認められる手法であるが、主体はC類のようである。c手法は南伊勢系に普遍的な手法に通じるものであろう。なお当遺跡では確認されなかったが、C類のものにc手法を用いられているものもある(fig.69-84)。

このように、形態・手法の状況からは、折衷形的な形態であるE類を除けば、大きくはC・D類系統とB類系統の2者が存在していることが指摘できる。前者は大和地域を経由して流入してきた金属製品ないしは土製の羽釜の模倣、後者は東海地域に見られる羽釜（土器）の系統と考えられる。後者が金属器の模倣かどうかは今後の検討課題である。

B類のものに形態的には類似するが内面への折り返しがないものとして、口縁部の下に焼成前に穿孔を行うもの（fig.63－25）がある。この個体については先述のように中・北勢地域からの搬入品である可能性を想定すべきである。この土器が南勢地域に搬入されている事実も見過ごせない。

皿・小皿類[04]　皿・小皿の類には南伊勢系系統のものとロクロ土師器と呼称されるものとがある。皿は概略Ⅰ期では口径15cm、Ⅱ期で13cm、Ⅲ期で12～11cmと次第に縮小していくことが考えられる。胎土はⅠ～Ⅱ期にかけては粗い小石粒を多く含むものであったものがⅢ期あたりから小石粒の少ない精緻

なものへと変化する傾向が窺われる。小皿はⅠ期には口径9cmであったものがⅡ～Ⅲ期では7.5 ～8cmほどのものとなっている。胎土の変化は皿と同様である。ロクロ土師器はⅠ期にのみ認められる。

その他　風炉（fig.52-17）は外面がいぶされており、厳密には瓦質土器の類に相当するものである。Ⅰ期の土器が伴っているが当該時期に比定される風炉は管見に及ばず、検討を要する。鞴の羽口はA地区土坑ＳＫ36とその周辺で３～５個体分が出土している。時期的にはⅢ期後半に最も多いようである。

瓦器類

瓦器椀（fig.52-12）は、山田猛氏の編年[12]によるⅡ段階第２型式に相当しよう。

瓦鍋（PL.47）

１点のみ出土している。A地区井戸ＳＫ21から出土しており、平瓦である。凹面・凸面ともなで調整しているもので布目は認められない。

３．近世以降の遺物（fig.59）

中世以降の出土遺物は主にA地区で出土した近世～近代のものがある。出土量は極めて少量である。土師器類では鍋・焙烙がある。陶磁器類では染付け椀類のほか、仏具かと思われる高杯状のものや合子状のものがある。また、実測は不可能であるが、瓦質の煮沸用具片がある。

註

(1) 奥義次・山田猛・千葉豊の各氏に御教示いただいた。
(2) 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Miehistory』vol.1 1990）
(3) 下村登良男『南山遺跡発掘調査概報』Ⅰ（松阪市教育委員会1979）
(4) 石井進・大三輪龍彦ほか『よみがえる中世３』武士の都鎌倉（平凡社　1989）
(5) 藤澤良祐「穴田南窯址群発掘調査報告」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅱ　1983）
(6) 藤澤良祐『瀬戸大窯の編年的研究』（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ　1986）
(7) 中野晴久氏のご教示による。
(8) 判読文は小坂宜広氏のご教示による。
(9) 瀬戸産の資料については藤澤良祐氏・服部郁氏・大藏輔子氏のご教示を、常滑産の資料については中野晴久氏のご教示を、それぞれ得た。
(10) 新田洋『荘遺跡発掘調査報告』（三重県教育委員会　1980）
(11) 平成元年度三重県埋蔵文化財センター調査。
(12) 小皿は新田洋氏の分類による「皿Ｂ」、皿は「皿Ａ」にほぼ相当する。新田洋「中・南勢における中世土師器一特に「在地系」皿一の変遷と地域色解明への一視点」（『マージナル』No.91988）
(13) A類は図示していないが、中世前期に相当するfig.58-13がそれに相当する。
(14) 南伊勢系系統の皿・小皿については別稿にて検討する予定である。
(15) 山田猛「伊賀の瓦器に関する若干の考察」（『中近世土器の基礎研究』Ⅱ　1986）

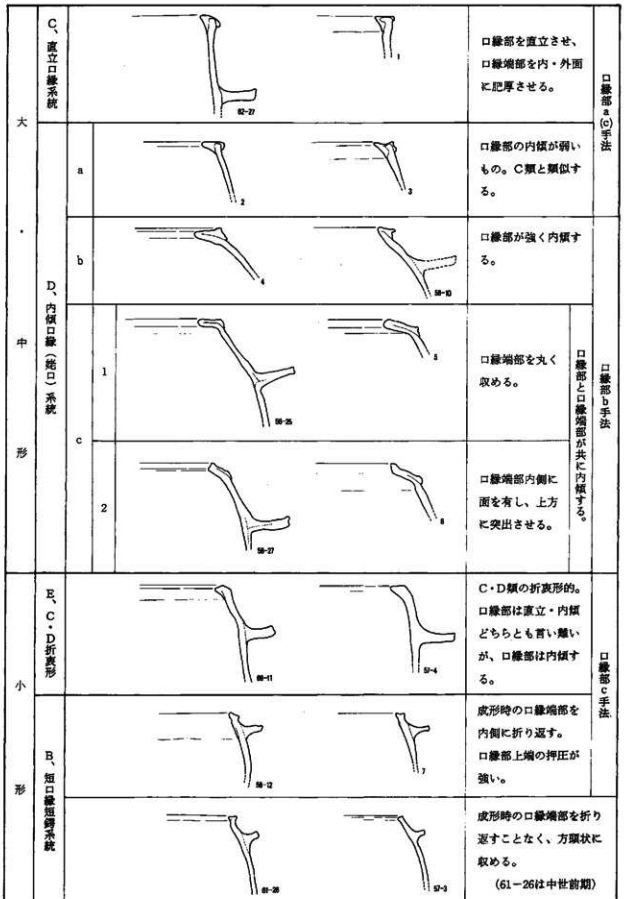


fig.51. 楠ノ木遺跡出土羽釜形土器分類図（scale=1/3） ※横の並びは時期差を表したものではない。

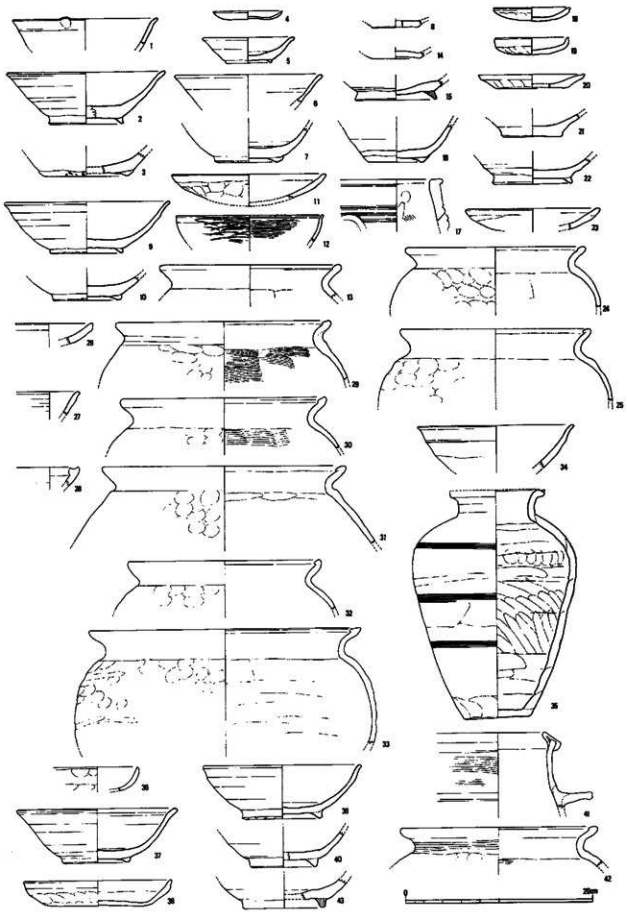


fig.52. A地区土坑SK20・65他出土土器（scale＝¼）

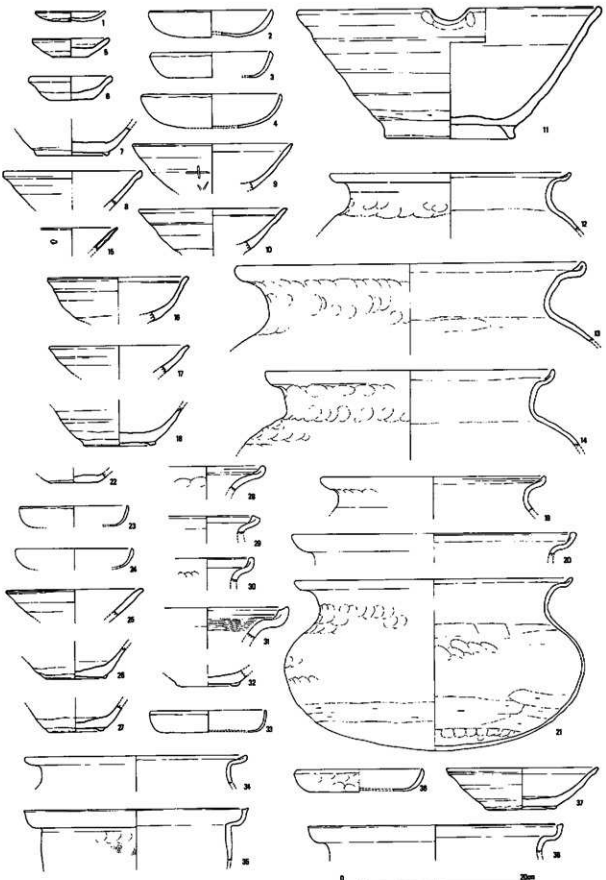


fig.53. A地区井戸ＳＥ１、土坑ＳＫ17他出土土器（scale=¼）

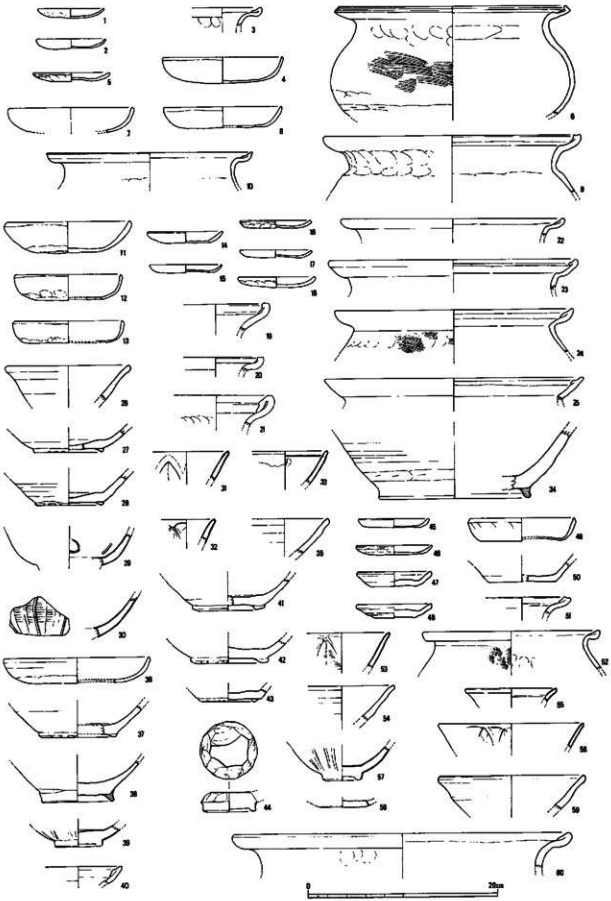


fig.54. A地区土坑ＳＫ５・７他出土土器（scale＝¼）

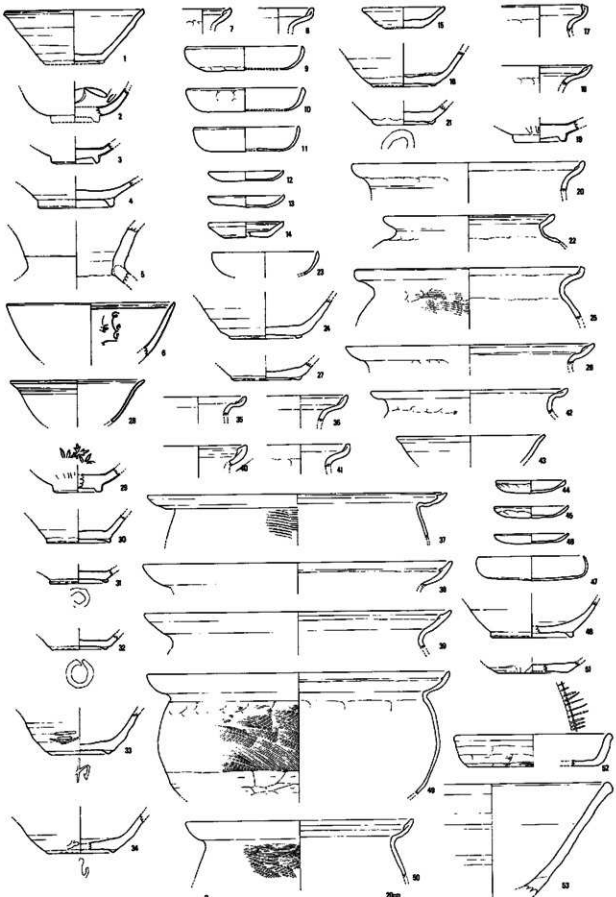


fig.55. A地区土坑ＳＫ55他出土土器（scale＝¼）

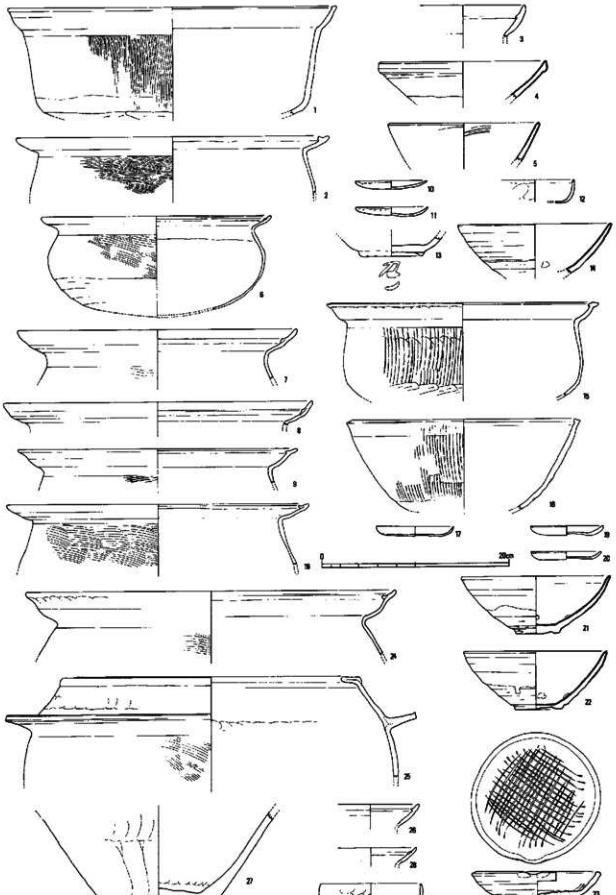


fig.56. A地区土坑ＳＫ37、ＳＸ９他出土土器（scale＝¼）

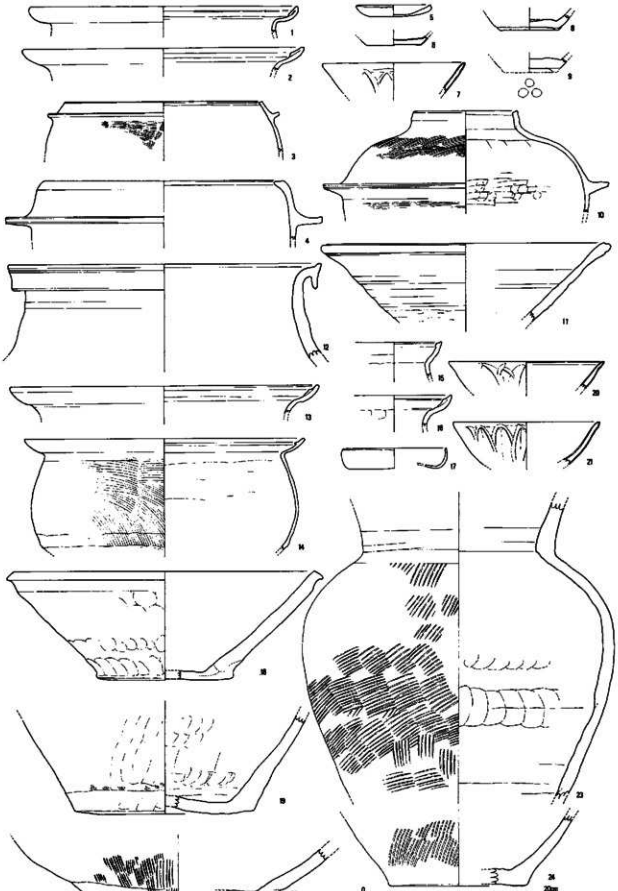


fig.57. A地区井戸ＳＫ３、ＳＥ２他出土土器（scale＝¼）

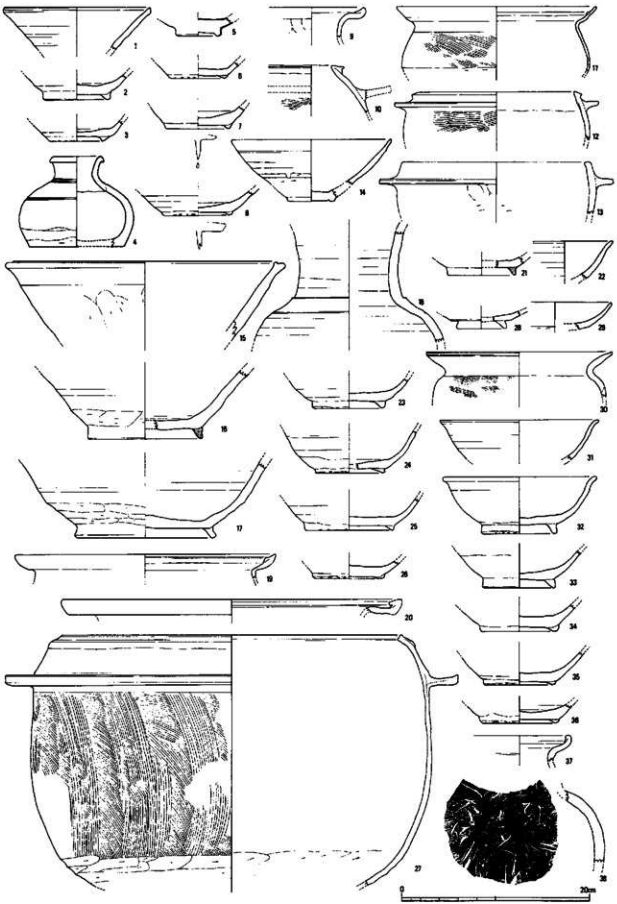


fig.58. A地区溝ＳＤ１・２・３出土土器（scale＝¼）

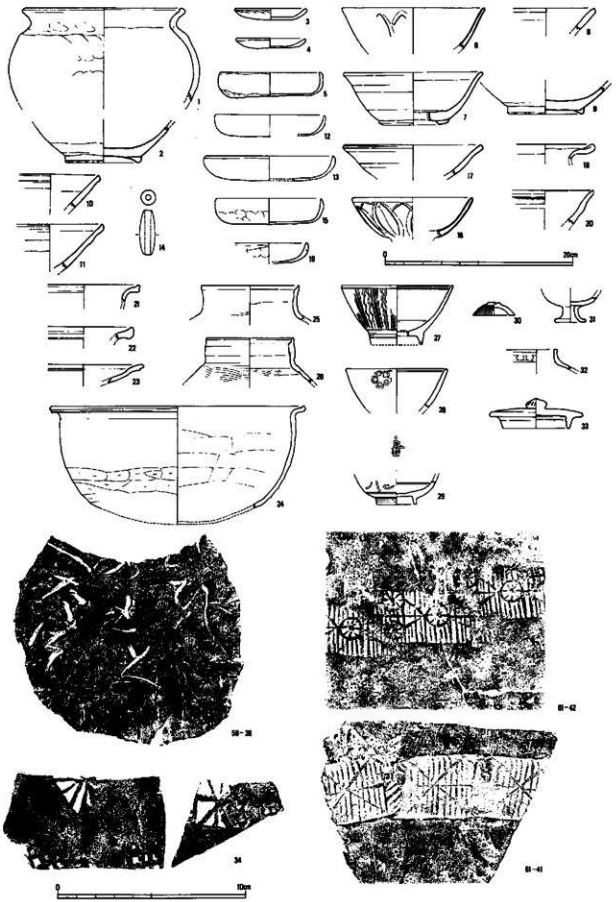


fig.59. 掘立柱建物・近世以降他出土土器（scale＝¼）およびA・B地区出土土器拓影（scale＝½）

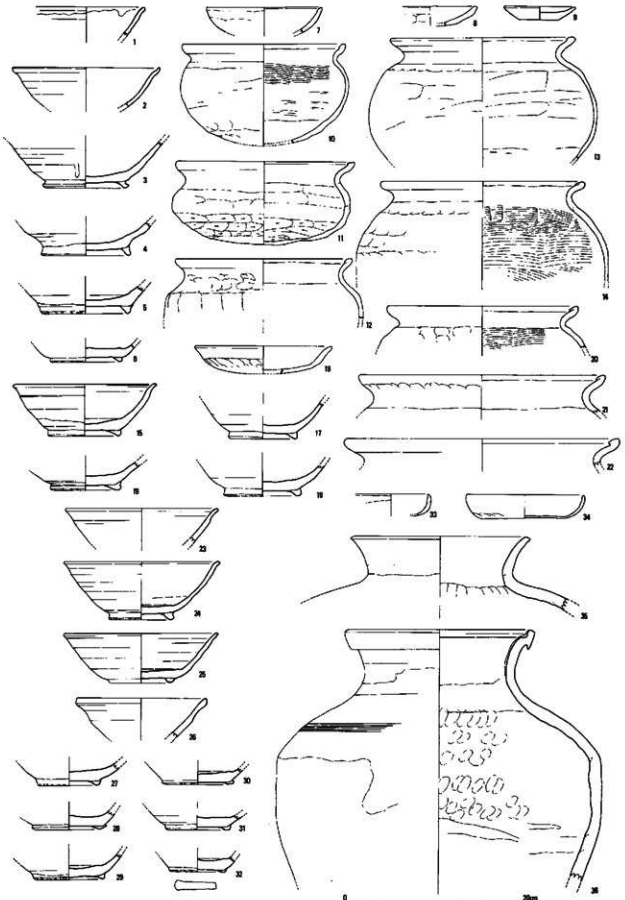


fig.60. B地区落ち込みＳＫ１、土坑ＳＫ18他出土土器（scale＝¼）

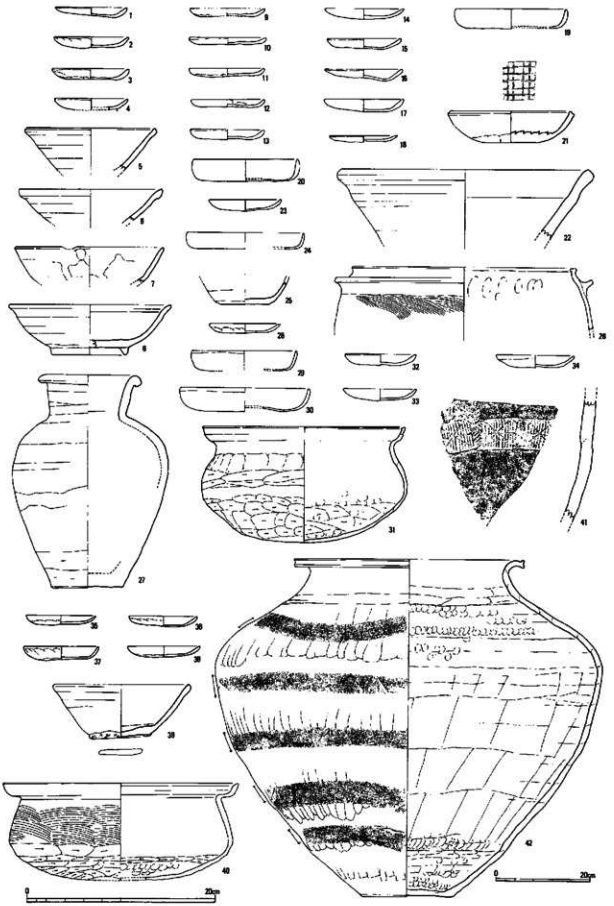


fig.61. B地区中世墓SK25・43他出土土器（scale=¼、42は⅛）

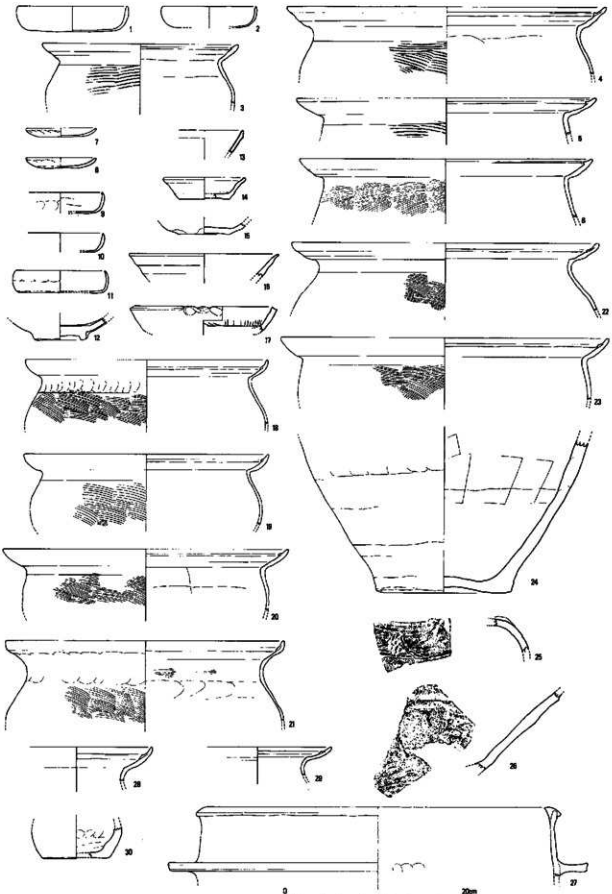


fig.62. B地区七坑ＳＫ５他出土土器（scale=¼）

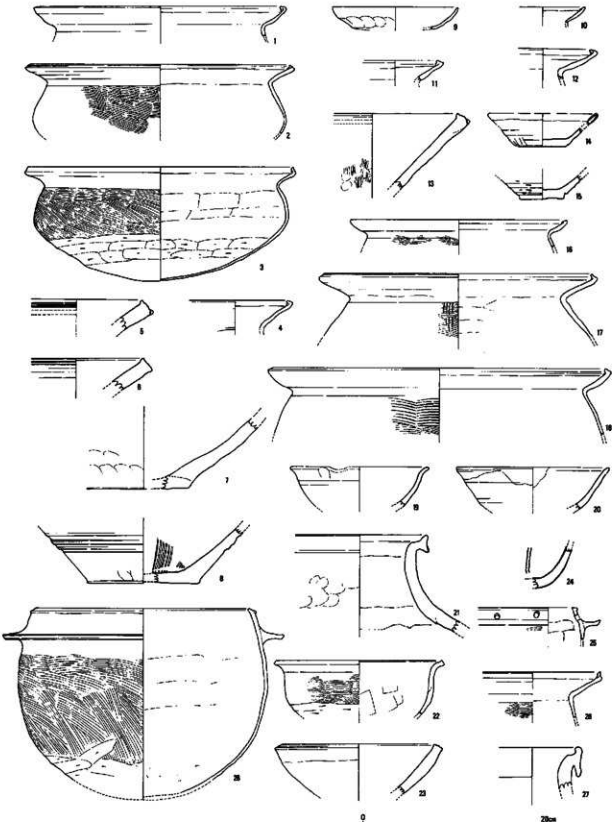


fig.63. B地区井戸SK30、溝SD2・3他出土土器（scale＝¼）

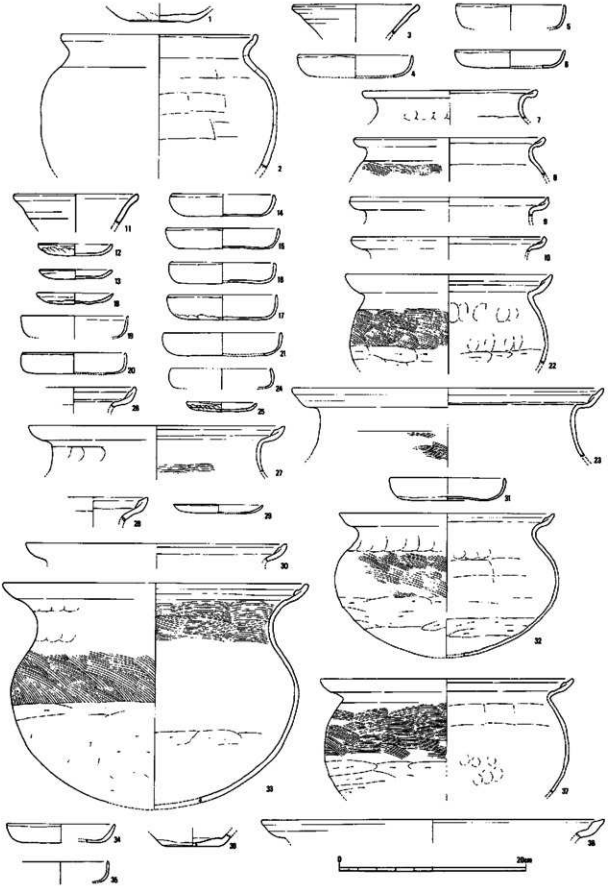


fig.64. C地区土坑SK10・11・12他出土土器（scale＝¼）

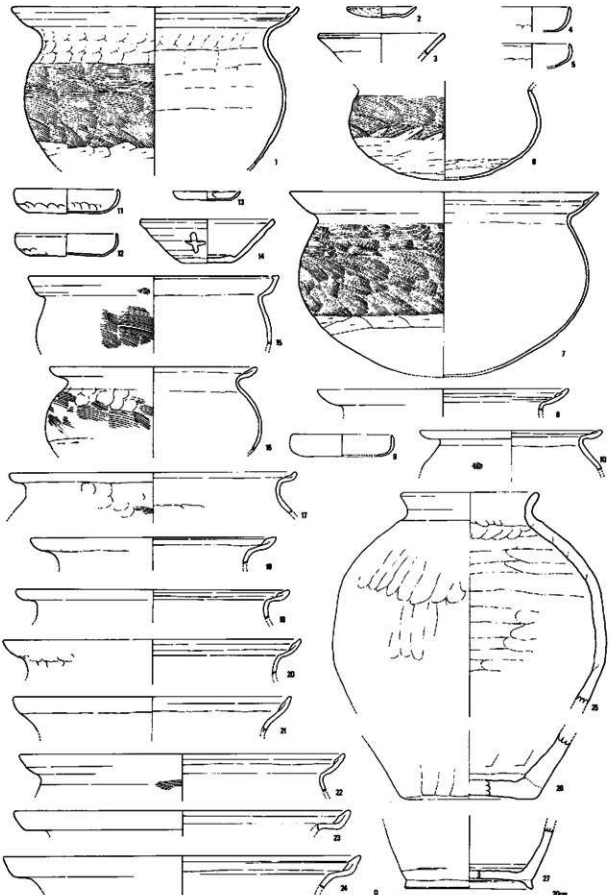


fig.65. C地区土坑ＳＫ４・５他出土土器（scale＝¼）

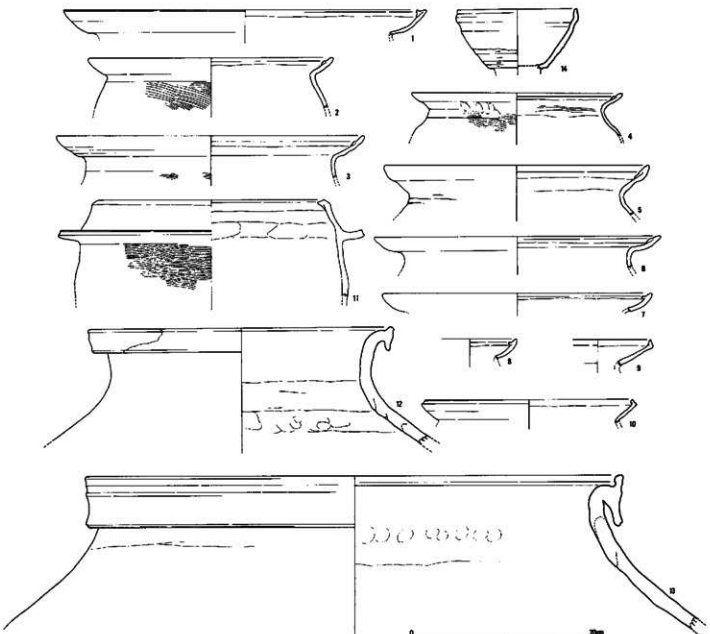


fig.66. C地区井戸ＳＫ７他出土土器（scale=¼）

4．出土遺物の観察

遺物観察表の凡例

1．「No.」　：　報告書内の実測図の番号である。35－11（例）とはfig.35の11番の土器のことである。

2．「器種」　：　土器の種類によって「土師器」、「陶器」などに分けた。また、どちらとも言えないようなものの場合には「備考」の項で触れた。

3．「地区」　：　A・B・C地区の別と出土小地区を記入した。A－k21（例）とはA地区k21グリットのことである。

4．「遺構・層名」：　出土遺構あるいは層名を記入した。また、遺物出土状況を作成している場合にはその取り上げ番号（p）を添えた。

5．「法量」　：　遺物の寸法について記入した。(口）は口縁部径、(高）は高さ、(底）は底部径、(高台）は高台部径、(径）は直径、(長）は長さ、(残長）は残存している長さを示す。法量の計測部位はそれぞれの部位の最大幅である。ただし歪んでいるものは全体の平均値を求めている。

6．「調整・技法の特徴」　：　外面調整は「外：」内面は「内：」で指示した。表現のなかで「・」でつながれているものは両者の前後関係が不明なもの、「のち」でつながれているものは前後関係を、それぞれ示す。「ヨコナデ」は基本的に口縁部に施されているものであるため、それ以外の部位についてのもののみ場所を記述した。手法の基本的な用語については『纏向』(桜井市教育委員会1976）に準じた。

7．「胎土」　：　素地の細かさによって「密」「粗」を判断し、混入物としての「小石」などを表現した。

8．「焼成」　：　見た目の基準である。「堅緻」の表現は陶器類の通常のものについてのみ行った。したがって、土師器類で焼成の良いものは「良好」とした。

9．「色調」　：　見た目と『新版標準土色帖』(日本色研事業株式会社1988）との折衷によった。土器の色と土の色とは必ずしも一致しないからである。

10．「残存度」　：　実測した土器のおおよその残存を示した。この項目によって口径などが復用できるかどうか判断されたい。

11．「備考」　：　その他の補足的事項を記入した。

12．「実測No.」　：　実測時の登録番号を記入した。土器そのものにはこの番号が記入してあるので、実見される時の参考とされたい。

No.	名称	地区	遺構・層	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	備考	登録番号
48−11	鏃	B f 32	S D 2	1.85	1.45	0.4	1.0	チャート		590
48−12	鏃	B j 33	S K16	2.5	1.65	0.35	1.2	チャート		589
48−13	鏃	A l 21	表土	2.35	1.1	0.4	0.8	サヌカイト		592
48−14	鏃	A c 16	検出面	2.15	1.3	0.25	0.7	サヌカイト		591
48−15	鏃?	A l 21	P i t 1	2.35	1.5	0.5	1.7	サヌカイト	未製品?	593
50−1	砥石	A	表採	7.3	4.4	1.8	69.7	砂岩	近世?	586
50−2	砥石	C b 3	遺構面	3.3	4.9	1.2	27.0	砂岩?		585
50−3	砥石	B f 34	S K 5	4.7	1.8	1.9	23.2	砂岩		94
50−4	砥石	B f 34	S K 5	4.4	4.5	1.8	51.4	砂岩		93

tab. 9. 石製品類観察表

No.	質	名称	地区	遺構・層	法量 (cm)	備考	登録番号
49−1	銅	不明製品	A − e 23	S K37	(径)0.55	断面六角形	550
49−2	鉄	不明製品	A − d 14	S K48	(径)2.6		538
49−3	鉄	小刀?	B − f 32	S K 3	(残長)5.5	内部の鉄質は外部と異なる	537
49−4	鉄	小刀	B − d 30	S X 3	(長)33.5	内部の鉄質は外部と異なる	535
49−5	鉄	小刀	B − j 38	S K33	(残長)29.1		536
49−6	鉄	鏃	A − m22	S X 1	(刃幅)4.3	内部の鉄質は外部と異なる	547
49−7	鉄	火打ち鎌	B − o 34	S D 5	(幅)3.1		542
49−8	鉄	毛抜き	A − k 15	P i t 1	(長)8.4		546
49−9	鉄	釘	A − d 25	S X 9	(幅)0.6	断面正方形状	548
49−10	鉄	釘	A − e 23	S K48	(幅)0.6	断面長方形状	569
49−11	鉄	釘	B − m35	S K42	(幅)0.6	断面正方形状　L字状に屈曲	541
49−12	鉄	釘	B − n 34	S K39	(幅)0.45	断面正方形状	540
49−13	鉄	釘	B − f 34	P i t 1	(幅)0.6	断面正方形状	539
49−14	鉄	釘	B − n 34	S K39	(幅)0.6	断面長方形状	545
49−15	鉄	釘	A − k 15	S K17	(幅)0.55	断面正方形状	543
49−16	鉄	釘	A − d 25	S X 9	(幅)0.5	断面長方形状	549
49−17	鉄	釘	B − f 32	S K 4 i 1	(幅)0.45	断面長方形状	588
49−18	鉄	釘	B − m36	S K31	(幅)0.7	断面長方形状	568
49−19	鉄	釘	B − m36	S K31	(幅)0.55	断面正方形状	567
49−20	鉄	釘	B − n 34	S K39	(幅)0.45	断面正方形状	544

鞴の羽口

49−21	土器	鞴羽口	A − d 22	S K36	(径)8.0	鉄分付着	519
49−22	土器	鞴羽口	A − c 24	SB2下層	(径)6.9	鉄分付着	518

銭貨

No.	名称	地区	遺構・層	初鋳の年代	備考	登録番号
49−23	淳化元寶	C − d 5	S K 7 下層	北宋淳化元年(990)		595
49−24	咸平元寶	C − d 5	S K 7 下層	北宋咸平元年(998)		596
49−25	熙寧元寶	C − d 5	S K 7 下層	北宋熙寧元年(1068)		597
49−26	咸平元寶	A − k 26	S K49	北宋咸平元年(998)	S K49には元豊通寶	598
49−27	皇宋通寶	A − k 26	S K49	北宋皇元２年(1039)	の他２枚ある	599
49−28	元豊通寶	A − g 17	S K21	北宋元豊元年(1078)		600

tab.10. 金属製品類観察表（鞴の羽口、貨幣を含む）

tab.11　出土土器観察表

No.	器種	地区	遺構・層名	法量（cm）	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
7-1	陶器　椀	字土山口	表採	（高台）7.6	外：ロクロナデのち糸きりのち高台にヨコナデ 内：回転ナデ	粗0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台40	山茶椀 高台に刻殺痕	594
7-2	陶器　椀	字小清水	表採	（高台）8.0	外：ロクロナデのち糸きりのち高台にヨコナデ 内：回転ナデ	粗0.5～1.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶椀 高台に刻殺痕	517
7-3	土師器　皿	A区北東尾根	字ヤケ山表採	—	外：剥離 内：剥離	粗0.5～2.0mmの小石	やや軟	暗褐～黒褐	口縁10		573
7-4	土師器　皿	A区北東尾根	字ヤケ山表採	—	外：剥離 内：剥離	粗0.5～2.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	口縁10		574
48-1	縄文　深鉢	A-k21	SD2	—	外：押型文（ポジティブな楕円文） 内：斜行沈線	粗0.5～3.0mmの小石	やや軟	茶灰		広畑の高山寺式	523
48-2	縄文	A区中央	淡黄灰褐層	—	外：押型文（ポジティブな楕円文）	粗0.5～3.0mmの小石	やや軟	茶～淡茶			526
48-3	縄文	B-d30	SX3	—	外：隆帯・爪型文 内」ナデ	粗0.5～1.0mmの小石、繊維	良好	茶灰			527
48-4	縄文　深鉢	C-d5	SK7 下層　最下	—	外：縄文・口縁部に刺突（巻き具？） 内：条痕文	粗0.5～2.0mmの小石、繊維、赤色小粒	良好	暗褐		縄文早期末？	522
48-5	縄文	A-k24	SX8	—	外：条痕 内：条痕	粗0.5～3.0mmの小石、繊維	良好	暗褐		縄文早期末	524
48-6	縄文	A-e13	がりかけ中	—	外：条痕 内：条痕	粗0.5～3.0mmの小石、繊維	良好	暗褐		縄文早期末	529
48-7	縄文	A-m16	黄色粘質土	—	外：一部条痕	粗0.5～4.0mmの小石、繊維	良好	暗褐		縄文早期末	531
48-8	縄文	A-e13	黄色粘質土	—	外：条痕 内：条痕	粗0.5～3.0mmの小石、繊維	良好	暗褐		縄文早期末	530
48-9	縄文	C-b6	SK13	—	外：条痕 内：条痕	粗0.5～1.0mmの小石、繊維	良好	茶灰～茶		縄文早期末	528
48-10	縄文	A-k22	SX2	—	外：条痕 内：条痕	粗0.5～2.0mmの小石	良好	暗茶灰			525

No.	器種	地区	遺構・層名	法量（cm）	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
48-16	弥生 高杯	C-e7	ＳＫ７下層	（脚注）3.9	外：刻線 内：刻線	粗0.5～2.0㎜の小石	やや軟	明褐	脚柱上端100	弥生後期	532
48-17	弥生 壺	B-s34	ＳＫ５	（底）6.6	外：刻線 内：刻線	粗0.5～4.0㎜の小石	やや軟	淡褐	底30	弥生後期	533
48-18	弥生 甕	A-p13	がりかけ中	（底）7.4	外：ハケメのちナデ	粗0.5～3.0㎜の小石	良好	淡赤褐 淡褐	底25	弥生中期	534
48-19	土師器 甕	B-m33	ＳＫ32	（口）16.1	外：ハケメのちヨコナデ 内：ハケメのちヨコナデ・ケズリ	密0.5～6.0㎜の小石	良好	淡褐 黒灰	口縁95		187
48-20	土師器 甕	B-m33	ＳＫ32	（口）17.8 （復元）15.7	外：ハケメのちヨコナデ 内：ハケメのちヨコナデ・ケズリ	密0.5～2.0㎜の小石 赤色粒	良好	淡褐	口縁90	破損後に熱を受けて破片ごとで色が異なる	186
48-21	土師器 坏	B-m34	ＳＤ４	—	外：刻線 内：刻線	密0.5～1.0㎜の小石、 赤色粒	良好	赤褐	10以下	ＳＫ32の混入	188
48-22	土師器 甑	B-m33	ＳＫ32	—	外：ナデ・ハケメのちヨコナデ 内：ハケメのちヨコナデ	粗0.5～3.0㎜の小石	良好	淡褐	口縁10		189
48-23	土師器 甑	B-m33	ＳＫ32	—	外：ナデ・オサエのちハケメ 内：オサエ・ハケメ	粗0.5～3.0㎜の小石	良好	淡褐	把手部分20		190
51-1	土師器 羽釜	A-d28	ＳＤ１	—	外：ヨコナデ 内ヨコナデ	密0.5～1.0㎜の小石 （多）	良好	乳灰	口縁５		581
51-2	土師器 羽釜	A-g24	ＳＤ１	—	外：ヨコナデ 内ヨコナデ	密0.5～2.0㎜の小石 （多）	良好	暗乳灰	口縁10		582
51-3	土師器 羽釜	A-d21	ＳＫ43	—	外：ヨコナデ 内ヨコナデ	密0.5～1.0㎜の小石 （多）	良好	乳灰	口縁10		579
51-4	土師器 羽釜	B-j33	ＳＫ20	—	外：ヨコナデ 内ヨコナデ	密0.5～1.0㎜の小石 （多）チャート・赤色小粒	良好	淡褐	口縁10		575
51-5	土師器 羽釜	A-h23	ＳＤ１	—	外：ヨコナデ 内ヨコナデ	密0.5～1.0㎜の小石	良好	淡茶灰	口縁10		580
51-6	土師器 羽釜	B-h35	ＳＫ13	—	外：ヨコナデ 内ヨコナデ	密0.5～1.0㎜の小石 （多）	良好	白茶灰	口縁10		576
51-7	土師器 羽釜	A-d23	ＳＫ37	—	外：ハケメのちヨコナデ 内ヨコナデ	密0.5～3.0㎜の小石 （多）	良好	乳灰	口縁５		577

No.	器種	地区	遺構・層名	法量（cm）	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
52-1	陶器 椀	A-p20	SK40	（口）15.4	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁25	山茶椀 輪花あり 外面に釉	251
52-2	陶器 椀	A-p20	SK40	（口）16.8 （高）5.5 （高台）8.0	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	淡灰	30	山茶椀 内外面に自然？釉（緑灰・黒灰）	250
52-3	陶器 椀	A-p20	SK40	（高台）10.0	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台30	山茶椀 高台に剥離痕	252
52-4	土師器 小皿	A-d15	SK13	（口）7.3 （高台）0.9	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～2.0mmの小石	良好	淡黄	完形		275
52-5	陶器 小椀	A-d15	SK13	（口）9.8 （高）2.7 （高台）4.9	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁10 高台100		277
52-6	陶器 椀	A-d15	SK13	（口）15.7	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁20	山茶椀	279
52-7	陶器 椀	A-d15	SK13	（高台）7.4	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～3.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶椀 高台に剥離痕 内面に自然釉	278
52-8	土師器 小皿	A-d15	SK13	（底）5.0	外：糸切り・剥離 内：剥離	密0.5～1.0mmの小石	やや軟	淡褐	底25	ロクロ土師器	276
52-9	陶器 椀	A-f13	SK20p1	（口）17.7 （高）5.5 （高台）7.8	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台60 口縁20	山茶椀 高台に剥離痕 内面に自然釉	203
52-10	陶器 椀	A-f13	SK20p2	（高台）7.2	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	灰	高台100	山茶椀 高台に剥離痕 内面に自然釉	207
52-11	土師器 皿	A-f13	SK20	（口）16.4	外：オサエ・ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡黄灰	口縁25		204
52-12	瓦器 椀	A-f13	SK20 礫群下	（口）15.8	外：ナデのちヨコナデ・ミガキ 内：ヨコナデのちミガキ	密0.5～1.0mmの小石	良好	暗灰 白灰	口縁20		206
52-13	土師器 甕	A-f13	SK20	（口）19.3	外：ナデのちヨコナデ 内：板ナデのちヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石	軟	淡褐	口縁12		205
52-14	土師器 小皿	A-d22	SK45	（底）5.0	外：ロクロナデのち糸切り 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	やや軟	淡褐	底100	ロクロ土師器	255
52-15	陶器 椀	A-d22	SK45	—	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密 体部0.5～2.0mm 高台部～1.0mmの小石	堅緻	淡灰 灰	高台50	山茶椀 体部と高台部の胎土が異なる	256

No.	器種	地区	遺構・層名	法量（cm）	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
52-16	陶器 椀	A-d22	SK45	（高台）6.0	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	粗0.5～1.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台60	山茶椀	253
52-17	土師器 風炉	A-d22	SK45	—	外：凹線状のヨコナデ 内：ナデ・ハケメ	粗0.5～3.0mmの小石	良好	明褐	口縁10未満	外面にいぶし（黒灰）	254
52-18	土師器 小皿	A-m16	SK23	（口）8.2 （高）1.4	外：オサエ・ナデのちヨコナデ 内：ナデ	粗0.5～3.0mmの小石	軟	淡褐	80		310
52-19	土師器 小皿	A-m16	SK23	（口）7.9 （高）1.8	外：オサエ・ナデのちヨコナデ 内：ナデ	粗0.5～2.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	70		311
52-20	土師器 小皿	A-m16	SK23	（口）11.2 （高）1.5	外：オサエ・ナデのちヨコナデ 内：ナデ	粗0.5～3.0mmの小石	良好	淡茶灰	15	ロクロ土師器か陶器小皿の模倣か？	312
52-21	陶器 椀	A-m16	SK23	（底）6.6	外：ロクロナデのち糸切り 内：ロクロナデ	密0.5～6.0mmの小石	堅緻	淡灰	底100	山茶椀 高台は成形時から付けていない	309
52-22	陶器 椀	A-k23	SX2	（高台）8.5	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台70	山茶椀 重ね焼き痕あり 内面に自然釉	281
52-23	土師器 皿	A-j16	SK24	（口）14.2	外：剝離 内：剝離	粗0.5～1.0mmの小石	軟	淡茶灰	口縁12		488
52-24	土師器 甕	A-j16	SK24	（口）19.2	外：オサエ・ナデのちヨコナデ 内：板ナデのちヨコナデ	粗0.5～1.0mmの小石	良好	明褐	頸部20	内面に炭化物	487
52-25	土師器 甕	A-m20	SK42	（口）20.2	外：オサエ・ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石	やや軟	淡～明褐	口縁20	外面に煤付着	486
52-26	土師器 皿	A-c22	SK65	—	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデ	粗0.5～2.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	口縁10未満	外面は剝離している	381
52-27	陶器 椀	A-c22	SK65	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁10未満	山茶椀 内面に一部釉がかかるが人為的かどうか不明	382
52-28	土師器 甕	A-c22	SK65	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石	良好	淡褐	口縁5未満		380
52-29	土師器 甕	A-c22	SK65	（口）22.8	外：オサエ・ナデのちヨコナデ 内：ハケメのちヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石	良好	淡茶～淡黄灰	口縁25	外面に煤付着	378
52-30	土師器 甕	A-c22	SK65	（口）21.8	外：オサエ・ナデのちヨコナデ 内：ハケメのちヨコナデ	粗0.5～3.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	口縁20	外面に煤付着	379

No	器種	地区	遺構・層名	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
52-31	土師器 甕	A-c22	SK65	(口) 25.8	外：オサエ・ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗0.5～3.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁25	外面に煤付着	377
52-32	土師器 甕	A-l14	SK28	(口) 20.6	外：オサエのちヨコナデ 内：剥離	粗0.5～1.0mmの小石	やや軟	淡黄灰	口縁20		271
52-33	土師器 甕	A-l14	SK28	(口) 28.9	外：オサエ・ナデのちヨコナデ 内：板ナデのちヨコナデ	密0.5～2.0mmの小石	良好	淡褐	口縁20	外面に煤付着 内面に炭化物？	270
52-34	陶器 椀	A-d15	SD11	(口) 16.8	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁25	山茶椀 内面に自然釉	209
52-35	陶器 壺	A-d15	SD11	(口) 10.0 (高) 24.2 (底) 7.2	外：ナデのちロクロナデのち櫛描回転施文 内：オサエ・ナデのちロクロナデ	密0.5～10.0mmの小石	堅緻	褐～淡褐	口縁30 体部70	常滑産 三筋壺	208
52-36	土師器 皿	A-d16	SK8		外：ナデ・オサエ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡灰 黒灰	口縁20	歪み大きい	216
52-37	陶器 椀	A-d16	SK8	(口) 17.0 (高) 7.2 (高台) 5.7	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～3.0mmの小石	やや軟	淡灰～灰	60	山茶椀	215
52-38	土師器 皿	A-j17	SK9	(口) 15.8 (高) 2.7	外：ナデ・オサエのちヨコナデ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	乳灰～淡黄灰	口縁40		505
52-39	陶器 椀	A-f15	SX5	(口) 16.8 (高) 5.7 (高台) 8.6	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～1.0mmの小石、黒色粒	堅緻	淡灰	口縁20 高台30	山茶椀 高台に顆粒痕 口縁部片（2片）と高台部片を合成	283
52-40	陶器 椀	A-f15	SX5	(高台) 5.1	外：ロクロナデのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台50	山茶椀	282
52-41	土師器 羽釜	A-f15	SX5	—	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗0.5～3.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	口縁10 鍔 10	外面に煤付着	284
52-42	土師器 甕	A-f15	SX5	(口) 21.0	外：ハケメ・オサエのちヨコナデ 内：ハケメのちヨコナデ	粗0.5～3.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	口縁25	外面に煤付着	285
52-43	陶器 椀	A中央	SD7	(高台) 8.8	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	体部：淡灰 高台 暗灰	高台20	山茶椀 体部と高台部の胎土が異なるもの。遺構は近世以降	402
53-1	土師器 小皿	A-k19	SE1下層	(口) 7.6 (高台) 1.1	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～2.0mmの小石	良好	明褐	口縁40		321
53-2	土師器 皿	A-k19	SE1下層	(口) 13.4 (高) 2.8	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	粗0.5～2.0mmの小石	良好	明褐	口縁25	内面に煤付着	316

No.	器種	地区	遺構・層名	法量（cm）	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No
53-3	土師器 皿	A-k19	SE1下層	(口) 13.2 (高) 2.7	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデ	粗0.5～2.0mmの小石	良好	明褐	口縁25		320
53-4	土師器 皿	A-k18	SE1(上層)	(口) 15.0	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁30	内面に煤付着	325
53-5	陶器 小皿	A-k19	SE1下層	(口) 8.2 (高) 2.0 (底) 5.0	外：ロクロナデのち糸切り 内：ロクロナデ	粗0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	60	山皿	315
53-6	陶器 小皿	A-k19	SE1下層	(口) 9.0 (高) 2.5 (底) 4.8	外：ロクロナデのち糸切り 内：ロクロナデ	粗0.5～3.0mmの小石	堅緻	淡灰	30	山皿	318
53-7	陶器 椀	A-k18	SE1(上層)	(高台) 7.8	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶椀 内面に自然釉	324
53-8	陶器 椀	A-k19	SE1下層	(口) 14.8	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	粗0.5～3.0mmの小石・粒状	やや軟	淡灰	口縁13	山茶椀	317
53-9	陶器 椀	A-k18	SE1(上層)	(口) 17.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁30	山茶椀 外面に墨書あり	323
53-10	陶器 椀	A-k19	SE1下層	(口) 15.9	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	粗0.5～3.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁13	山茶椀　内面に煤付着	319
53-11	陶器 ねり鉢	A-k19	SE1下層	(口) 32.6 (高) 13.9 (高台)14.1	外：ロクロナデのちケズリのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	粗0.5～6.0mmの小石	良好 一部瓦質	淡灰～灰	体部100 高台60	常滑？	322
53-12	土師器 鍋	A-k19	SE1下層	(口) 25.8	外：ロクロナデ・ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石（多）	良好	淡茶灰	口縁40（2片）		314
53-13	土師器 鍋	A-k19	SE1下層	(口) 37.4	外：オサエのちヨコナデ 内：指ナデのちヨコナデ	密0.5～3.0mmの小石（多）	良好	淡褐～灰褐	口縁60（3片）	外面に煤付着	313
53-14	土師器 鍋	A-l14	SD12	(口) 30.8	外：オサエ・ナデのちヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～3.0mmの小石（多）	やや軟	明茶灰	口縁40（2片）	外面に煤付着	249
53-15	青磁 椀	A-k15	SK17	—	外：ロクロナデ？刺突文 内：ロクロナデ？	密0.5以下の小石	堅緻	灰	口縁10以下	内外面に釉（緑灰）	219
53-16	陶器 椀	A-k15	SK17	(口) 15.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	良好	淡灰	口縁20	山茶椀	223
53-17	陶器 椀	A-k15	SK17	(口) 14.9	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁20	山茶椀 内面に自然釉（緑黄）	224

No.	器種	地区	遺構・層名	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
53-18	陶器 椀	A-h15	SK17p2	(高台) 7.7	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶椀	218
53-19	土師器 鍋	A-h15	SK17p3	(口) 24.0	外：オサエのちヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石(多)	良好	淡褐	口縁20	内面に煤付着	220
53-20	土師器 鍋	A-h15	SK17 sec内	(口) 30.2	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石(多)	良好	淡褐	口縁12	内面に煤付着	221
53-21	土師器 鍋	A-h15	SK17p1	(口) 29.6 (高) 18.1	外：オサエ・ナデのちヨコナデ・ケズリ　内：オサエ・ナデ・板ナデのちヨコナデ・ケズリ	粗0.5～3.0mmの小石(多)	やや軟	淡褐	65	外面に煤・赤変 内面に炭化物	217
53-22	陶器 小皿	A-h15	SK38	(底) 5.2	外：ロクロナデのち糸切り 内：ロクロナデ	粗0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	底33	山皿	267
53-23	土師器 皿	A-h15	SK38	(口) 11.6	外：剝離 内：剝離	密0.5～1.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	口縁25		268
53-24	土師器 皿	A-h15	SK38	(口) 12.6	外：ナデ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁25		269
53-25	陶器 椀	A-h15	SK38	(口) 14.6	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	粗0.5～3.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁13	山茶椀	266
53-26	陶器 椀	A-h15	SK38	(高台) 6.6	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	粗0.5～3.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶椀　高台に剝離痕 底部に墨書	260
53-27	陶器 椀	A-h15	SK38	(高台) 5.8	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	粗0.5～3.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台70	山茶椀　高台に剝離痕	261
53-28	土師器 鍋	A-h15	SK38		外：オサエ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～3.0mmの小石	良好	淡黄灰	口縁10未満	外面に煤付着	265
53-29	土師器 鍋	A-h15	SK38	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石	良好	暗赤褐	口縁10未満	外面に煤付着	264
53-30	土師器 鍋	A-h15	SK38	—	外：オサエ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石	良好	淡～暗褐	口縁10未満	外面に煤付着	263
53-31	土師器 鍋	A-h15	SK38	—	外：ハケメのちヨコナデ 内：ハケメのちヨコナデ	粗0.5～3.0mmの小石、赤色粒	良好	淡茶灰	口縁10未満	外面に煤付着	262
53-32	陶器 椀	A-k26	SK49	(高台) 6.8	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台30	山茶椀 高台に剝離痕	328

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
53-33	土師器 皿	A-k26	SK49	(口) 12.4	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁20		329
53-34	土師器 鍋	A-k26	SK49	(口) 23.6	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5～2.0mmの小石 (多)	良好	淡茶灰	口縁12	外面に煤付着	327
53-35	土師器 鍋	A-k26	SK49	(口) 23.8	外：オサエ・ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗0.5～3.0mmの小石 (多)	良好	淡褐	口縁20	金属器の模倣形？ 外面に煤付着	326
53-36	土師器 皿	A-b13	Pit 2	(口) 13.8 (高) 2.4	外：オサエ・ナデのちヨコナデ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡褐	口縁25		387
53-37	陶器 椀	A-b13	Pit 2	(口) 16.1 (高) 4.5 (高台) 7.6	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	淡～暗灰	口縁70 高台100	山茶椀	385
53-38	土師器 鍋	A-b13	Pit 2	(口) 27.0	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石 (多)	良好	淡茶灰	口縁12	外面に煤付着	386
54-1	土師器 小皿	A-j10	SK33	(口) 7.1 (高) 1.0	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	白茶	口縁70		272
54-2	土師器 小皿	A-j10	SK33	(口) 7.4 (高) 1.1	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡黄灰	70		273
54-3	土師器 鍋	A-f24	Pit 1	—	外：オサエのちヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石 (多)	良好	淡褐	口縁10以下	外面に煤付着	307
54-4	土師器 皿	A-f24	Pit 1	(口) 12.8 (高) 2.8	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～2.0mmの小石、 赤色粒	やや軟	淡黄灰	口縁30		305
54-5	土師器 小皿	A-f24	Pit 1	(口) 8.1 (高) 0.9	外：オサエ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石、 赤色粒	良好	明褐	口縁40		306
54-6	土師器 鍋	A-f24	Pit 1	(口) 25.2	外：オサエ・ナデ・ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内：ナデ・板ナデのちヨコナデ	粗0.5～3.0mmの小石 (多)	良好	淡褐～明褐	口縁20	外面に煤付着	308
54-7	土師器 皿	A-b15	SK39	(口) 13.4	外：剝離 内：剝離	密0.5～2.0mmの小石	軟	白茶	口縁25		259
54-8	土師器 皿	A-b15	SK39	(口) 12.6 (高) 2.2	外：剝離 内：剝離	密0.5～2.0mmの小石	やや軟	白茶	口縁25		258
54-9	土師器 鍋	A-b15	SK39	(口) 27.4	外：オサエ・ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石	やや軟	淡赤褐～淡褐	口縁25		257

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
54-10	土師器 鍋	A-g22	SK53	(口) 21.8	外：オサエのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗0.5～1.0mmの小石(多)	良好	淡茶灰	口縁12	外面に煤付着	485
54-11	土師器 皿	A-i17	SK5	(口) 13.5 (高) 3.3	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	粗0.5～2.0mmの小石(多)	やや軟	淡茶灰	25		238
54-12	土師器 皿	A-i17	SK5	(口) 11.4 (高) 2.7	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～3.0mmの小石(少)	やや軟	淡茶灰	口縁25		242
54-13	土師器 皿	A-i17	SK5	(口) 11.8 (高) 2.3	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石(少)	良好	淡黄灰	口縁30		239
54-14	土師器 小皿	A-i17	SK5	(口) 8.1 (高) 1.2	外：オサエ・ナデ 内：ナデ・板ナデ	密0.5～2.0mmの小石(少)	やや軟	淡黄灰	60		248
54-15	土師器 小皿	A-i17	SK5	(口) 7.7 (高) 0.9	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～2.0mmの小石(少)	良好	淡黄灰	80		247
54-16	土師器 小皿	A-i17	SK5	(口) 7.6 (高) 0.9	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石(少)	良好	淡黄灰	95		241
54-17	土師器 小皿	A-i17	SK5	(口) 7.6 (高) 0.8	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～2.0mmの小石(少)	良好	淡黄灰	30		240
54-18	土師器 小皿	A-i17	SK5	(口) 7.2 (高) 1.2	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～2.0mmの小石(多)	良好	淡黄灰	90	楕円形	231
54-19	土師器 鍋	A-i17	SK5	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石(多)	良好	淡褐	10未満	内外面に煤付着	230
54-20	土師器 鍋	A-i17	SK5	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石(多)	良好	淡茶褐	10未満	外面に煤付着	228
54-21	土師器 鍋	A-i17	SK5	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石(多)	良好	淡茶灰	10未満		229
54-22	土師器 鍋	A-i17	SK5	(口) 23.8	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～1.0mmの小石(多)	良好	淡茶褐	口縁12	外面に煤付着	246
54-23	土師器 鍋	A-i17	SK5	(口) 26.5	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石(多)	やや軟	淡褐	口縁20	外面に煤付着	227
54-24	土師器 鍋	A-i17	SK5	(口) 25.4	外：オサエ・ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石(多)	良好	淡茶灰	口縁25	外面に煤付着	225

No.	器種	地区	遺構・層名	法量（cm）	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度（%）	備考	実測No.
54-25	土師器 鍋	A-i17	SK5	（口）27.5	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石（多）	良好	淡～暗褐	口縁20	外面に煤付着	226
54-26	陶器 椀	A-i17	SK5	（口）13.3	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	粗0.5～3.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁13	山茶椀 内面に自然釉	245
54-27	陶器 椀	A-i17	SK5	（高台）7.4	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	粗0.5～4.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台30	山茶椀 高台に籾跡痕	244
54-28	陶器 椀	A-i17	SK5	（高台）7.4	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	粗0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台50	山茶椀 高台に籾跡痕	237
54-29	青磁 椀	A-i17	SK5	（高台上部）7.0	内：陰刻	密0.5mm以下の小石	堅緻	淡灰	下部10	内外面に釉（暗オリーブ）	233
54-30	青磁 椀	A-i17	SK5	—	外：蓮弁文	密0.5mm以下の小石	堅緻	淡灰	下部20	内外面に釉（灰オリーブ）	236
54-31	青磁 椀	A-i17	SK5	—	外：蓮弁文	密0.5mm未満の小石	堅緻	淡灰	口縁10未満	内外面に釉（緑灰）	232
54-32	青磁 椀	A-i17	SK5	—	外：蓮弁文	密0.5mm以下の小石	堅緻	淡灰	口縁10以下	内外面に釉（淡緑）	234
54-33	青磁 椀	A-i17	SK5	—	内：陰刻	密0.5mm以下の小石	堅緻	淡灰	口縁10未満	内外面に釉（淡緑灰）	235
54-34	陶器 ねり鉢	A-i17	SK5	（高台）16.1	外：ロクロナデのちケズリのち高台にヨコナデ 内：ナデ	体部 粗0.5~3.0mmの小石（多） 高台 密0.5~1.0mmの小石（少）	堅緻	体部 淡灰 高台 黒灰	高台20	体部と高台部の胎土が異なる	243
54-35	陶器 椀	A-i15	SK34	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	粗0.5～5.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁10未満	山茶椀	384
54-36	土師器 皿	A-o14	SD14	（口）15.6 （高）2.7	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石、赤色粒	良好	淡褐	口縁30	内面に煤付着	390
54-37	陶器 椀	A-o14	SD14	（高台）8.2	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	粗0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁25	山茶椀 高台に籾跡痕	389
54-38	陶器 椀	A-c22	SX7	（高台）7.7	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	粗0.5～2.0mmの小石	堅緻	体部 灰 高台 暗灰	高台100	山茶椀 体部と高台部の胎土が異なる 瀬戸？	298
54-39	青磁 椀	A-g15	SK27	（高台）5.0	外：削り出し高台・蓮弁文のち釉 内：釉	密	堅緻	淡灰 釉緑黄	高台30	釉は高台内面にはない	468

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
54-40	土師器 鍋	A-g15	SK27		外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～1.0mmの小石	良好	暗褐	口縁10未満	内外面に煤付着	467
54-41	陶器 椀	A-g15	SD18	(高台) 7.7	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台40	山茶椀	388
54-42	陶器 椀	A-d16	SD6	(高台) 8.4	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	白灰	高台100	山茶椀 高台に初鋸痕	506
54-43	陶器 椀	A-l22	SX1	(高台) 6.0	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶椀	297
54-44	青磁 椀	A-l22	SX1	(高台) 5.8	外：ケズリ	密0.5以下の小石	堅緻	淡灰	高台100	内外面に釉（緑黄） 円盤状に加工	296
54-45	土師器 小皿	A-b21	SD25	(口) 7.6 (高) 1.0	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡黄～淡茶白	80		383
54-46	土師器 小皿	A-n16	SK29	(口) 8.1 (高) 1.0	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～4.0mmの小石	良好	明褐	100		475
54-47	陶器 小皿	A-g17	SK21	(口) 8.0 (高) 1.6 (底) 4.9	外：ロクロナデのち糸切り 内：ロクロナデのち底に指ナデ	密0.5～5.0mmの小石	堅緻	淡灰	底100	山皿	469
54-48	陶器 小皿	A-g17	SK21	(口) 8.0 (高) 1.5 (底) 4.5	外：ロクロナデのち糸切り 内：ロクロナデのち底に指ナデ	密0.5～3.0mmの小石	堅緻	淡灰	底100	山皿 内面に自然釉	470
54-49	土師器 皿	A-g17	SK21	(口) 11.4 (高) 2.4	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	淡茶灰	口縁40(2片)		472
54-50	陶器 椀	A-g17	SK21	(底) 7.2	外：ロクロナデのち糸切り 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡茶灰	底30	山茶椀 内面に煤付着	473
54-51	土師器 鍋	A-g17	SK21	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石	良好	暗灰褐	口縁10未満	内外面に煤付着	471
54-52	土師器 鍋	A-g17	SK21	(口) 18.8	外：ハケメのちヨコナデ 内：オサエ・ナデのちヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石(多)	良好	淡茶灰	口縁12	外面に煤付着	474
54-53	青磁 椀	A-i17	SK7	—	外：蓮弁文のち釉 内：釉	密	良好	白茶灰 釉黄灰	口縁10未満	青磁にしては軟質である	514
54-54	陶器 椀	A-i17	SK7	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁10	山茶椀	507

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
54-55	白磁 皿	A-i17	SK7	(口) 9.8	外：釉 内：釉	密	堅緻	淡灰 釉緑味淡灰	口縁20	内面には釉で付けた一条の線がある	513
54-56	青磁 椀	A-i17	SK7	(口) 15.6	外：蓮弁文のち釉 内：釉	密	堅緻	白灰 釉淡緑	口縁12		512
54-57	青磁 椀	A-i17	SK7	(高台) 4.1	外：蓮弁文のち釉 内：釉	密	堅緻	白灰 釉淡緑	高台70	高台内面には釉ナシ 高台はケズリ出し	511
54-58	陶器 小皿	A-i17	SK7	(底) 4.9	外：ロクロナデのち糸切り 内：ロクロナデ	密0.5～3.0mmの小石	堅緻	淡灰	底40	山皿	509
54-59	陶器 椀	A-i17	SK7	(口) 15.8	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	粗0.5～5.0mmの小石	堅緻	白灰	口縁12	山茶椀	508
54-60	土師器 鍋	A-i17	SK7	(口) 36.3	外：オサエのちヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石 (多)	良好	淡茶灰	口頸部20	外面に煤付着	510
55-1	陶器 椀	A-c15	Pit 1	(口) 14.9	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	粗0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	椀部70	山茶椀 高台は欠損している	433
55-2	青磁 椀	A-c15	Pit 1	(高台上部) 5.1	外：櫛花文のち釉 内：釉	密	堅緻	淡灰 釉淡緑黄	椀下部25		436
55-3	青磁 椀	A-c15	Pit 1	(高台) 5.1	外：釉 内：釉	密	堅緻	淡灰 釉緑白	高台90	高台削り出し	435
55-4	陶器 椀	A-q16	SD15	(高台) 8.0	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台90	山茶椀	403
55-5	陶器 壺	A-q16	SD15	(頸) 10.2	外：回転ナデ 内：ナデのち回転ナデ	密0.5～3.0mmの小石	堅緻	淡灰	頸部25	口縁部上端破断面に鉄分付着	404
55-6	青磁 椀	A	重機掘削	(口) 17.8	外：釉 内：除釉のち釉	密	堅緻	淡灰 釉緑灰	口縁10		437
55-7	土師器 鍋	A-i16	SK26	—	外：オサエのちヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁10未満	外面に煤付着	376
55-8	土師器 鍋	A-i16	SK26	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石 (多)	良好	淡灰褐	口縁10未満	外面に煤付着	375
55-9	土師器 皿	A-i16	SK26	(口) 12.7 (高) 2.5	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡黄白	口縁40		374

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
55-10	土師器 皿	A-k19	SK22	(口) 12.7	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5~1.0㎜の小石	良好	暗褐~黒褐	口縁20		373
55-11	土師器 皿	A-k24	SK54	(口) 11.2 (高) 2.6	外：剥離 内：ナデ	密0.5~1.0㎜の小石	やや軟	淡茶白	口縁100		371
55-12	土師器 小皿	A-k24	SK54	(口) 8.0 (高) 1.1	外：剥離 内：剥離	密0.5~1.0㎜の小石、赤色小粒	軟	淡茶白	口縁30		372
55-13	土師器 小皿	A-l17	Pit 2	(口) 8.2 (高) 1.3	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5~1.0㎜の小石	良好	淡灰	100		441
55-14	陶器 小皿	A-l17	Pit 2	(口) 8.0 (高) 1.7	外：ロクロナデのち糸切り 内：ロクロナデ	密0.5~2.0㎜の小石	堅緻	淡灰	口縁30	山皿	442
55-15	陶器 小皿	A-e23	SK48	(口) 8.8 (高) 2.2 (底) 3.8	外：ロクロナデのち糸切り 内：ロクロナデ	密0.5~2.0㎜の小石	堅緻	淡灰	50	山皿	476
55-16	陶器 椀	A-e23	SK48	(高) 6.8	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~2.0㎜の小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶椀 高台に剥製痕	477
55-17	土師器 鍋	A-e23	SK48	—	外：オサエのちヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5~2.0㎜の小石(多)	良好	淡褐	口縁10未満	外面に煤付着	478
55-18	土師器 鍋	A-e23	SK48	—	外：オサエのちヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5~1.0㎜の小石(多)	良好	淡茶灰	口縁10未満	外面に煤付着	480
55-19	青磁 椀	A-e23	SK48	(高台) 5.7	外：蓮弁文・削り出し高台のち釉 内：釉	密	堅緻	淡灰 釉緑灰	高台30	釉は高台内面までは及ばない	479
55-20	土師器 鍋	A-e23	SK48	(口) 24.8	外：オサエのちヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5~2.0㎜の小石(多)	良好	淡茶灰	口縁12	外面に煤付着	481
55-21	陶器 椀	A-c23	Pit 2	(高台) 6.7	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	粗0.5~1.0㎜の小石	堅緻	淡灰	高台50	山茶椀 墨書「○」あり	443
55-22	土師器 鍋	A-d27	SK60	(口) 18.2	外：オサエのちヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	粗0.5~1.0㎜の小石(多)	良好	淡茶灰	口縁80		482
55-23	土師器 皿	A-j18	SK6	(口) 11.4	外：剥離 内：剥離	粗0.5~1.0㎜の小石	やや軟	淡茶灰	口縁25		502
55-24	陶器 椀	A-j18	SK6	(高台) 7.8	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	粗0.5~3.0㎜の小石(多)	堅緻	淡灰	高台50	山茶椀 高台に剥製痕	501

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
55-25	土師器 鍋	A-j18	SK6	(口) 24.6	外：オサエのちハケメのちヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	粗0.5～1.0mmの小石	やや軟	暗茶灰	口縁20	内面に炭化物 外面に煤付着	499
55-26	土師器 鍋	A-j18	SK6	(口) 26.6	外：オサエのちヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	口縁12		500
55-27	陶器 椀	A-i22	SX3	(高台) 7.4	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	粗0.5～3.0mmの小石	堅緻	淡灰褐	高台100	山茶椀 高台に剥製痕	280
55-28	白磁 椀	A-d22	SK55	(口) 14.2	外・内：釉のち口縁端部のみ釉を削る	密	堅緻	白灰 釉灰白	口縁20	口禿 外面頸部には釉の滲淡による鉄銹がある	452
55-29	青磁 椀	A-d24	SK55	(高台) 5.2	外：蓮弁文のち釉 内：捺菊花文のち釉	密	堅緻	淡灰 釉緑黄	高台50	ケズリ出し高台	451
55-30	陶器 椀	A-d24	SK55	(高台) 6.8	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	粗0.5～4.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶椀 高台に剥製痕	453
55-31	陶器 椀	A-d24	SK55	(高台) 6.2	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	粗0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台25	山茶椀 高台に剥製痕 墨書「○」あり	454
55-32	陶器 椀	A-d24	SK55	(高台) 5.9	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶椀 高台に剥製痕 墨書「○」あり	449
55-33	陶器 椀	A-d24	SK55	(高台) 6.4	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	粗0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台25	山茶椀 高台に剥製痕 墨書あり 意味不明	448
55-34	陶器 椀	A-d24	SK55	(高台) 7.1	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	粗0.5～1.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台90	山茶椀 高台に剥製痕 墨書あり 意味不明	450
55-35	土師器 鍋	A-d23	SK55	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5～2.0mmの小石(多)	良好	淡茶灰	口縁10未満	外面に煤付着	455
55-36	土師器 鍋	A-d23	SK55	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5～3.0mmの小石(多)	良好	淡茶灰	口縁10未満	外面に煤付着	456
55-37	土師器 鍋	A-c24	SK55	(口) 31.8	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡褐～暗褐 断面黒	口縁30	外面に煤付着	445
55-38	土師器 鍋	A-d24	SK55	(口) 32.8	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石(多)	やや軟	淡茶灰	口縁12		447
55-39	土師器 鍋	A-d24	SK55	(口) 32.6	外：ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶灰 断面黒	口縁20	外面に煤付着	446

No.	器種	地区	遺構・層名	法量（cm）	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
55-40	土師器 鍋	A-i15	S K11	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石（多）	やや軟	茶灰	口縁10未満		491
55-41	土師器 鍋	A-i15	S K11	—	外：オサエのちヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡褐	口縁10未満	外面に煤付着	490
55-42	土師器 鍋	A-i15	S K11	（口）20.9	外：オサエ・ハケメのちヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～1.0mmの小石（多）	良好	淡茶灰	口縁10未満	外面に煤付着	489
55-43	陶器 椀	A-p15	S K35	（口）15.8	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	粗0.5～1.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁12	山茶椀	330
55-44	土師器 小皿	A-p15	S K35	（口）7.6 （高）1.4	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～2.0mmの小石	良好	明褐	70		332
55-45	土師器 小皿	A-p15	S K35	（口）7.9 （高）1.2	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～2.0mmの小石	良好	淡褐	100		331
55-46	土師器 小皿	A-p15	S K35	（口）7.9 （高）1.0	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	粗0.5～2.0mmの小石（多）	良好	淡褐	60		333
55-47	土師器 皿	A-k15	（S K17） 北東部分	（口）11.3 （高）2.6	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	乳灰	60	土坑内出土遺物と時期的に隔たるので、土坑と重なっていたピットのものであろう	222
55-48	陶器 椀	A-c22	S X 7	（高台）8.9	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～1.0mmの小石、黒色の粒子	堅緻	淡灰	高台30	山茶椀 高台に籾殻痕	458
55-49	土師器 鍋	A-c22	S X 7	（口）32.2	外：オサエ・ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内：ナデ・板ナデのちヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡～暗褐	口縁40 2片	外面に煤付着	457
55-50	土師器 鍋	A-k24	S X 8	（口）24.2	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	密0.5～2.0mmの小石（多）	良好	黄灰	口縁25 2片	外面に煤付着	274
55-51	陶器 鉢	A-a23	S K56	（底）7.5	外：ロクロナデのち糸切りのち釉 内：ロクロナデ	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	淡茶灰	底25	片口の付くものか	484
55-52	陶器 卸皿	A-a23	S K56	（口）16.9 （高）3.4 （底）13.8	外：ロクロナデのちケズリ 内：ロクロナデのち蓮による卸し目	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡黄灰	口縁20	底以外に釉がかかる	483
55-53	陶器 ねり鉢	A-m19	S K18	—	外：回転ナデのちケズリ 内：磨耗	粗0.5～5.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁10未満		459
56-1	土師器 鍋	A-d25	S X 9	（口）35.1	外：ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内：ナデのちヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石（少）	良好	淡褐 黒褐	口縁13	外面に煤付着	211

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
56-2	土師器 鍋	A-d25	S X 9	(口) 33.2	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密0.5～2.0mmの小石(多)	良好	淡茶灰	口縁25	外面に煤付着	210
56-3	土師器 鍋	A-d25	S X 9	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石(多)	やや軟	乳灰 黒灰	口縁10未満		214
56-4	白磁 椀	A-d25	S X 9	(口) 17.8	外：ケズリ	密0.5mm以下の小石	堅緻	淡灰	口縁20	内外面に釉（淡緑灰）	212
56-5	青磁 椀	A-d25	S X 9	(口) 16.1	内：陰刻施文のち釉	密0.5mm以下の小石	堅緻	淡灰	口縁13	内外面に釉（淡緑）	213
56-6	土師器 鍋	A-d23	S K37	(口) 24.6	外：ハケメ・ナデのちヨコナデ・ケズリ 内：ナデ・板ナデのちヨコナデ	密0.5～2.0mmの小石、赤色粒	良好	白茶	口縁20		421
56-7	土師器 鍋	A-e22	S K37	(口) 29.6	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	密0.5～2.0mmの小石(多)	良好	淡茶灰	口縁10	外面に煤付着	416
56-8	土師器 鍋	A-e23	S K37 sec	(口) 32.8	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5～2.0mmの小石(多)	良好	淡茶灰	口縁20	外面に煤付着	415
56-9	土師器 鍋	A-d23	S K37	(口) 29.6	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	暗茶灰	口縁12	外面に煤付着	417
56-10	土師器 小皿	A-e22	S K37	(口) 7.6 (高) 0.9	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡黄茶灰	100		418
56-11	土師器 小皿	A-d23	S K37	(口) 7.6 (高) 1.0	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁60		422
56-12	土師器 皿	A-d23	S K37	—	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡黄灰	口縁10		424
56-13	陶器 椀	A-e23	S K37	(高台) 6.6	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	粗0.5～4.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台70	山茶椀 高台に輪積痕 墨書あり 意味不明	423
56-14	陶器 椀	A-d23	S K37	(口) 16.3	外：ロクロナデのち回転ケズリのち釉 内：ロクロナデのち釉	粗0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁25	平椀 内面にトチン跡	414
56-15	土師器 鍋	A-d23	S K37	(口) 29.0	外：ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内：ナデのちヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石(多)	良好	淡褐 暗褐	口縁70	外面に煤付着	419
56-16	土師器 鉢	A-d23	S K37	(口) 25.0	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗0.5～3.0mmの小石(多)	良好	淡茶灰	口縁10		420

No	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
56-17	土師器 小皿	A・e23	SK37 sec	(口) 8.2 (高) 1.0	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～1.0㎜の小石	良好	淡茶灰	口縁50		584
56-18	土師器 鍋	A-a22 A-b22	淵赤褐色土	(口) 32.4	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密0.5～1.0㎜の小石	やや軟	淡茶灰	口縁30		462
56-19	土師器 小皿	A-a22	淵赤褐色土	(口) 7.8 (高) 1.1	外：ナデ・オサエ 内：ナデ・オサエ	密0.5～2.0㎜の小石	やや軟	淡茶灰	完形		463
56-20	土師器 小皿	A-a22	淵赤褐色土	(口) 7.5 (高) 0.9	外：ナデ・オサエ 内：ナデ・オサエ	密0.5～1.0㎜の小石	やや軟	淡茶灰	ほぼ完形		464
56-21	陶器 椀	A-a22	淵赤褐色土	(口) 16.0 (高) 6.1 (高台) 4.2	外：ロクロナデのち糸切りのちケズリ・ケズリ出し高台 内：ロクロナデ	密0.5～2.0㎜の小石	堅緻	淡茶	95	平椀 内面にトチン跡（4ヶ所） 内外面に釉（明緑灰）	461
56-22	陶器 椀	A-b22	淵赤褐色土	(口) 15.4 (高) 6.1 (高台) 5.2	外：ロクロナデのち糸切りのちケズリ・ケズリ出し高台 内：ロクロナデ	密0.5～2.0㎜の小石	堅緻	淡茶黄	90	平椀 内面にトチン跡（4ヶ所） 内外面に釉（淡緑灰）	460
56-23	陶器 卸皿	A-b21	淵赤褐色土	(口) 13.8 (底) 3.1 (底) 7.0	外：ロクロナデのち糸切りのち釉 内：ロクロナデのち筆による卸し目のち釉	密0.5～1.0㎜の小石	堅緻	釉 淡緑黄	100	片口を持つ	465
56-24	土師器 鍋	A-b21	Pit 3	(口) 39.2	外：オサエ・ハケメのちヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	密0.5～2.0㎜の小石 (多)	やや軟	茶灰	口縁12	外面に煤付着	444
56-25	土師器 羽釜	A-c29	SD24	(口) 31.6 (鍔) 43.6	外：オサエ・ハケメのちヨコナデ 内：ナデ・オサエのちヨコナデ	密0.5～3.0㎜の小石 (多)	軟	淡灰～淡褐	口縁20		334
56-26	土師器 小皿	A-c29	SD24	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5～1.0㎜の小石	良好	淡褐	口縁10未満	外面に煤付着	335
56-27	陶器 壺？	A-d22	SK36	(底) 12.2	外：ナデ 内：オサエ・ナデ	密0.5～2.0㎜の小石	堅緻	淡褐 釉緑灰	底60	破断面に鉄付着	494
56-28	土師器 鍋	A-i17	SK4	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～1.0㎜の小石	良好	淡黄灰	口縁5		588
56-29	土師器 皿	A-i17	SK4	(口) 11.0 (高) 2.1	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～1.0㎜の小石	良好	淡茶灰	口縁30		589
57-1	土師器 鍋	A-j19	SK3	(口) 28.6	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5～1.0㎜の小石 (多)	良好	淡黄灰	口縁15		406
57-2	土師器 鍋	A-j19	SK3	(口) 30.0	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～2.0㎜の小石	良好	淡茶灰	口縁10	外面に煤付着	410

No.	器種	地区	遺構・層名	法量（cm）	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
57-3	土師器 羽釜	A-j19	SK3	（口）21.1	外：オサエ・ハケメのちヨコナデ 内：ナデ	粗0.5～2.0mmの小石	良好	淡褐	口縁12	外面に煤付着	409
57-4	土師器 羽釜	A-j19	SK3	（口）25.6	外：ヨコナデ 内：ナデ	粗0.5～1.0mmの小石（多）	良好	淡茶灰	口縁15 鍔部30		407
57-5	土師器 小皿	A-j19	SK3	（口）8.0 （高）1.3	外：剥離 内：剥離	粗0.5～1.0mmの小石	やや軟	淡褐	100		412
57-6	青磁 小皿？	A-j19	SK3	（底）5.8	外：板状痕跡（糸切り？）のち釉 内：釉	密	堅緻	白灰 釉白緑	底25	青白磁？ 釉は底部にも一部かかる	439
57-7	青磁 椀	A-j19	SK3	（口）15.2	外：蓮弁文のち釉 内：釉	密	堅緻	淡灰 釉淡緑灰	口縁10		438
57-8	陶器 椀	A-j19	SK3	（高台）6.8	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	粗0.5～6.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶椀 高台に転釉痕	411
57-9	陶器 椀	A-j19	SK3	（高台） 5.9推定	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	粗0.5～4.0mmの小石	堅緻	淡灰	底100	山茶椀 高台に転釉痕 墨書「.」あり	413
57-10	土師器 茶釜	A-j19	SK3	（口）11.3	外：オサエ・ナデ・ハケメのちヨコナデ 内：オサエ・ハケメのちヨコナデ	密0.5～2.0mmの小石（多）	良好	淡茶灰	口縁50 鍔部25	外面に煤付着 鍔部と口縁部は接合しない	405
57-11	陶器 ねり鉢	A-j19	SK3	（口）30.8	外：回転ナデのちケズリ 内：磨耗	粗0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁20		408
57-12	陶器 甕	A-g17 A-g17 A-j19	SK27 SK21 SK3	（口）33.6	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～3.0mmの小石	堅緻	茶灰	口縁25	外面に釉 異遺構間接合資料	466
57-13	土師器 鍋	A-c24	SE2下層	（口）32.8	外：オサエのちヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	粗0.5～1.0mmの小石（多）	良好	淡茶灰	口縁12	外面に煤付着	431
57-14	土師器 鍋	A-c24	SE2上層	（口）29.8	外：オサエ・ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内：板ナデ・ヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石（多）	良好	淡茶灰	口縁20	外面に煤付着	425
57-15	土師器 鍋	A-c24	SE2上層	－	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石（多）	良好	淡茶灰	口縁10未満	外面に煤付着	426
57-16	土師器 鍋	A-c24	SE2上層	－	外：オサエのちヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	粗0.5～1.0mmの小石（多）	良好	淡茶灰	口縁10未満	外面に煤付着	427
57-17	土師器 皿	A-c24	SE2下層	（口）11.2 （高）2.1	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	粗0.5～1.0mmの小石	良好	淡白灰	口縁25		428

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
57-18	陶器 ねり鉢	A-c24	SE2下層 崩落土下	(口) 33.5 (高) 11.5 (底) 14.6	外：オサエ・ナデのちヨコナデ 内：磨耗	密0.5~6.0mmの小石	堅緻	暗赤褐~灰	口縁10 底25	2片を合成 常滑産	429
57-19	陶器 壺?	A-c24	SF2上層	(底) 19.0	外：ナデ 底部無調整 内：オサエ・ナデ・板ナデ	密0.5~8.0mmの小石	堅緻	淡褐~淡灰 釉淡緑灰	底30	内面の釉は自然釉	430
57-20	青磁 椀	A-c18	SD4	(口) 16.6	外：蓮弁文のち釉 内：釉	密	堅緻	淡灰 釉緑黄	口縁12		504
57-21	青磁 椀	A-c18	SD4	(口) 15.6	外：蓮弁文のち釉 内：釉	密	堅緻	淡灰 釉淡緑灰	口縁20		503
57-22	陶器 大甕	A-l22 A-j19 A-i16	SX3 SK3 SK26	(底) 20.0	外：ナデ・タタキメ 内：ナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	灰~淡灰	底部60(2片)	内面に自然釉 異遺構間接合資料	495
57-23	陶器 壺	A-f25 A-d21 A-c25	SD1 SK44 SK58	(頸部) 20.5	外：タタキメのちヨコナデ 内：オサエのちナデのちヨコナデ	密0.5~3.0mmの小石	堅緻	淡灰	体部30	外面に釉（淡緑） 異遺構間接合資料	497
57-24	陶器 壺	A-e23 A-g24	SK37 SD1	(底) 15.0	外：タタキメ・ナデ 内：ナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	底部25	内面に自然釉 異遺構間接合資料57-23と同一?	496
58-1	陶器 椀	A-f15	SD1	(口) 15.7	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	粗0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁20	山茶椀	347
58-2	陶器 椀	A-f25	SD1	(高台) 7.2	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶椀	342
58-3	陶器 椀	A-h23	SD1	(高台) 6.0	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶椀 高台に剥離痕	343
58-4	陶器 小壺	A-f25	SD1	(口) 5.7 (高) 9.6 (底) 10.0	外：ロクロナデ・ヘラ沈線 内：ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	濃褐	60	内面に鉄分厚く付着 底部に砂付着	336
58-5	青磁 椀	A-f25	SD1	(高台) 4.8	外：釉 内：釉	密	堅緻	白灰 釉淡緑灰	高台80	ケズリ出し高台	440
58-6	陶器 椀	A-g24	SD1	(高台) 5.9	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	粗0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶椀 高台に剥離痕 58-1と同一個体?	346
58-7	陶器 小皿	A-h23	SD1	(高台) 7.0	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台40	山茶椀 高台に剥離痕 墨書「十」? あり	493
58-8	陶器 小皿	A-h23	SD1	(高台) 7.4	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台40	山茶椀 高台に剥離痕 墨書「十」? あり	492

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
58-9	土師器 鍋	A-f25	SD1	—	外：オサエのちヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石(多)	良好	淡茶灰	口縁10未満	外面に煤付着	337
58-10	土師器 羽釜	A-d27	SD1	—	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石(多)	良好	淡黄灰	口縁10未満		341
58-11	土師器 鍋	A-f25	SD1	(口) 21.2	外：オサエ・ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内：ナデのちヨコナデ	密0.5～2.0mmの小石(多) 赤色粒	良好	淡茶灰	口縁20 (2片)	外面に煤付着	338
58-12	土師器 羽釜	A-f25	SD1	(口) 18.0	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密0.5～2.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁20	内外面に煤付着	339
58-13	土師器 羽釜	A-g24	SD1	(口) 20.1	外：オサエのちヨコナデ・ケズリ？ 内：ヨコナデ・ケズリ？	密0.5～3.0mmの小石 赤色粒	良好	淡茶灰	口縁20	外面に煤付着	340
58-14	陶器 椀	A-d27 A-e26	SD1	(口) 16.9	外：ロクロナデのち糸切りのちケズリのち高台ケズリ出し 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡茶灰 釉淡緑	口縁20 高台80	平椀 瀬戸産？	351 352
58-15	陶器 ねり鉢	A-f25	SD1	(口) 29.8	外：回転ナデのちケズリ 内：回転ナデ	密0.5～3.0mmの小石	堅緻	濃褐～淡褐	口縁10	瀬戸産？	345
58-16	陶器 ねり鉢	A-f25	SD1	(高台) 12.2	外：回転ナデ・ナデのちケズリのち高台にヨコナデ 内：回転ナデ	粗0.5～4.0mmの小石	堅緻	体部 淡灰 高台 灰	高台25	常滑あるいは渥美産 体部と高台部の胎土が異なる	350
58-17	陶器 ねり鉢	A-g24 A-f25	SD1	(高台) 15.0	外：回転ナデ・ナデのちケズリのち高台にヨコナデ 内：回転ナデ	密0.5～4.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台40	常滑あるいは渥美産	344
58-18	陶器 壺	A-g24 A-f25	SD1	(頸) 12.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	淡灰	頸部30	外面に自然釉	498
58-19	土師器 鍋	A-g24	SD1	(口) 27.7	外：ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石	良好	淡黄灰	口縁12	外面に煤付着	348
58-20	土師器 鍋	A-f25	SD1	(口) 36.1	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石	良好	淡褐	口縁10	外面に煤付着	349
58-21	陶器 椀	A-j23	SD3	(高台) 7.2	外：ロクロナデのち糸切りのちケズリのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	粗0.5～2.0mmの小石	堅緻	体部 淡灰 高台 暗灰	高台25	山茶椀 体部と高台部の胎土が異なる 高台内面に鉄分厚く付着	353
58-22	陶器 椀	A-h24	SD3	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	粗0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁10未満	山茶椀	369
58-23	陶器 椀	A-h24	SD3	(高台) 7.8	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台90	山茶椀 高台に軟弱痕	366

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
58-24	陶器 椀	A-j22	SD3	(高台) 7.4	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台30	山茶椀 高台に刻彫痕	370
58-25	陶器 椀	A-h24	SD3	(高台) 9.4	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台60	山茶椀 高台に刻彫痕	367
58-26	陶器 椀	A-h24	SD3	(高台) 7.6	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台90	山茶椀 高台に刻彫痕	368
58-27	土師器 羽釜	A-j23	SD3	(口) 36.4 (鍔) 48.1	外：ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内：ナデのちヨコナデ・ケズリ	密0.5～2.0mmの小石	良好	淡褐	鍔部25	外面に煤付着 内面に炭化物付着	365
58-28	土師器 台付皿	A-m19	SD2	(高台) 5.2	外：刻雕 内：刻雕	密0.5～1.0mmの小石	軟	淡褐	高台25	ロクロ土師器？	362
58-29	土師器 皿	A-f26	SD2	—	外：刻雕　下半にケズリ 内：刻雕	密0.5～2.0mmの小石	軟	淡褐	口縁10未満	平安時代のもの	363
58-30	土師器 甕	A-mn19	SD2	(口) 19.8	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石、赤色粒	良好	淡茶灰	口縁20	奈良・平安時代	361
58-31	陶器 椀	A-n19	SD2	(口) 16.8	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	灰	口縁20	山茶椀	356
58-32	陶器 椀	A-b24	SD2	(口) 16.4 (高) 6.0 (高台) 8.0	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～3.0mmの小石	堅緻	淡灰	60	山茶椀　内外面に釉（緑黄・暗青）　重ね焼き痕　高台に刻彫痕	357
58-33	陶器 椀	A-h24	SD2	(高台) 7.8	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台40	山茶椀　内面に墨？	358
58-34	陶器 椀	A-j22	SD2	(高台) 8.4	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶椀	360
58-35	陶器 椀	A-g25	SD2	(高台) 7.7	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶椀 高台に刻彫痕	355
58-36	陶器 椀	A-n19	SD2	(高台) 8.4	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～5.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶椀 高台に刻彫痕	359
58-37	土師器 鍋	A-g25	SD2		外：ハケメのちヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石	良好	淡褐～暗褐	口縁10未満	外面に煤付着	364
58-38	陶器 壺	A-k21	SD2	—	外：回転ナデのち篤書き文字 内：回転ナデ	密0.5～3.0mmの小石	堅緻	淡灰	頸部25	審美産？頸部の文字は「□いひ t□のもと□へたつ」か？	354

No	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
59-1	土師器 甕	A-k16	Pit 2 建物5	(口) 17.2	外：オサエ・ナデのちヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石	良好	明褐	口縁25	外面に煤付着	520
59-2	陶器 椀	A-m13	Pit 1 建物2	(高台) 8.1	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石 植物痕	堅緻	淡灰～灰	高台100	山茶椀 内面に自然釉 内面に重ね焼き痕 高台に籾殻痕	286
59-3	土師器 小皿	A-l16	Pit 4 建物4・10	(口) 7.8 (高) 1.2	外：ナデ・オサエ 内：ナデ	密0.5～2.0mmの小石	良好	明褐	90		301
59-4	土師器 小皿	A-l15	Pit 1 建物4・10	(口) 7.5 (高) 1.1	外：ナデ・オサエ 内：ナデ	密0.5～2.0mmの小石	やや軟	淡茶～明褐	90	胎土はマーブル状	302
59-5	土師器 皿	A-j17	Pit 3 建物4	(口) 11.2 (高) 2.7	外：ナデ・オサエ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶白	70		434
59-6	宥跡 椀	A-j16	Pit 5 建物4・10	(口) 15.4	外：蓮弁文のち釉	密0.5mm前後の砂粒	堅緻	淡灰	口縁15	内外面に釉（淡緑黄）	303
59-7	陶器 椀	A-l16	Pit 3 建物4・10	(口) 15.0 (高) 5.5 (高台) 7.4	外：ロクロナデのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	淡灰	15	山茶椀 内外面に自然釉	299
59-8	陶器 椀	A-j17	Pit 3 建物4	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	粗0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁10未満	山茶椀	304
59-9	陶器 椀	A-l16	Pit 4 建物4・10	(高台) 8.2	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5mm以下の砂粒	堅緻	淡灰	高台50	山茶椀 高台に籾殻痕	300
59-10	陶器 椀	A-i15	Pit 2 建物1	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰～灰	口縁10未満	山茶椀 内面に自然釉	287
59-11	陶器 椀	A-g15	Pit 1 建物1	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	粗0.5～5.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁10未満	山茶椀	290
59-12	土師器 皿	A-h13	Pit 1 建物1	(口) 11.8	外：ナデ・オサエ 内：ナデ	密0.5～2.0mmの小石、赤色粒	やや軟	淡黄白	口縁60		288
59-13	土師器 皿	A-i14	Pit 1 建物1	(口) 14.0 (高) 2.6	外：ナデ・オサエ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁25		289
59-14	土錘	A-e14	Pit 4 建物9	(長) 4.7 (径) 1.7 (孔径) 0.5	棒状工具に巻き付けて成形したものか	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶	完形	重量9.9g	294
59-15	土師器 皿	A-a14	Pit 1 建物9	(口) 11.6 (高) 2.8	外：ナデ・オサエ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	やや軟	淡褐	60		432

No	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
59-16	土師器 皿	A-c14	Pit 2 建物9	-	外：ナデ・オサエ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石、赤色粒	良好	淡褐	口縁13	歪み大きい	295
59-17	陶器 椀	A b14	Pit 9 建物9	(口) 14.9	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	粗0.5～2.0mmの小石、植物腐	堅緻	淡灰	口縁30(2片)	山茶椀	293
59-18	青磁 椀	A-c14	Pit 3 建物9	(口) 12.8	外：蓮弁文のち釉	密0.5mm未満の小石	堅緻	淡灰	口縁25	内外面に釉（淡緑）	292
59-19	土師器 鍋	A-c14	Pit 3 建物9	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石	良好	茶灰	口縁10	内外面に煤付着	291
59-20	陶器 椀	A-m19	Pit 4 建物8	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	粗0.5～1.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁10未満	山茶椀	521
59-21	土師器 焙烙	A中央	SD7	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	明褐	口縁10未満	外面に煤付着	399
59-22	土師器 焙烙	A-l21	SD8	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁10未満	外面に煤付着	394
59-23	土師器 焙烙	A-l21	SD8	—	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密0.5～2.0mmの小石	良好	暗褐	口縁10未満	外面に煤付着	393
59-24	土師器 鍋	A-f18	SK1	(口) 27.2	外：ナデのちヨコナデ・ケズリ 内：板ナデのちヨコナデ	密0.5～2.0mmの小石	良好	濃褐	口縁70	外面に煤付着	391
59-25	土師器 茶釜？	A-l21	SD8	(口) 10.4	外：ハケメのちヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	暗褐	口縁13	内面に炭化物付着	395
59-26	土師器 茶釜？	A-f18	SK1	(口) 9.4	外：ハケメのちヨコナデ 内：ハケメ・ナデのちヨコナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	明褐	口縁20	外面に煤付着	392
59-27	陶器 椀	A-k12	SK31	(口) 12.0	外：染め付け釉 内：染め付け釉	密	堅緻	白灰 釉白・青	高台30	内面見込みにも染め付け施文あり	516
59-28	陶器 椀	A中央	SD7	(口) 10.8	外：染め付け釉 内：染め付け釉	粗0.5～1.0mmの小石	堅緻	淡灰 釉白・青	口縁10		398
59-29	陶器 椀	A中央	SD7	(高台) 4.2	外：染め付け釉 内：染め付け釉	密 磁気質	堅緻	白灰 釉白灰・淡青	高台100	染付端反椀の類？	397
59-30	陶器 仏器？	A中央	SD7	(口) 4.4 (高) 1.4	外：型押し？模様のち釉 内：釉	密	堅緻	白灰 釉淡緑白	40	合子？	400

No.	器種	地区	遺構・層名	法量（cm）	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
59-31	陶器 高杯	A-h15	SD10	（脚部）3.4	外：ロクロナデのち釉 内：ロクロナデのち釉	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	脚70		396
59-32	陶器 瓶？	A中央	SD7	—	外：染め付け釉 内：ロクロナデ	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	淡茶灰 釉 白灰 淡青	口縁10未満		401
59-33	陶器 壺	A-f18	SK1付近	（受部）10.0 （高）3.2	外：回転ナデ・ツマミに列点文のち釉 内：回転ナデ	密0.5～3.0mmの小石	堅緻	淡灰 釉 淡茶	40	釉は鉄釉	515
59-34	陶器 壺	A-j19	SK3	—	外：スタンプ文のち釉 内：ナデ	密0.5～3.0mmの小石	堅緻	白灰 釉 淡緑 灰	体部片	瀬戸産？	587
60-1	陶器 椀	B-d33	SK1p4	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁10	山茶椀 漬け掛け釉（灰）輪花あり	155
60-2	陶器 椀	B-d33	SK1	（口）15.7	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁20	山茶椀	148
60-3	陶器 椀	B-d33	SK1p1	（高台）9.2	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台50	山茶椀	149
60-4	陶器 椀	B-d33	SK1p2	（高台）9.5	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台60	山茶椀 内面に自然釉 重ね焼き痕あり	147
60-5	陶器 椀	B-d33	SK1p3	（高台）9.6	外：ロクロナデのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台40	山茶椀 高台に剥離痕	150
60-6	陶器 椀	B-d33	SK1	（高台）7.5	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台50	山茶椀 高台に剥離痕	154
60-7	土師器 皿	B-d33	SK1	（口）12.5	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密0.5～4.0mmの小石	良好	淡～暗褐	口縁20（2片）		571
60-8	土師器 皿	B-d33	SK1	—	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗0.5～3.0mmの小石（多）	やや軟	淡褐	口縁10		572
60-9	土師器 小皿	B-d33	SK1	（口）7.8 （口）1.4 （底）4.1	外：ロクロナデのち糸切り 内：ロクロナデ	粗0.5～2.0mmの小石	良好	淡褐	30	ロクロ土師器	570
60-10	土師器 甕	B-d33	SK1p4	（口）17.4 （復底）10.7	外：オサエ・ケズリのちヨコナデ 内ハケメのちヨコナデ	粗0.5～3.0mmの小石	やや軟	淡褐	口縁25	外面に煤付着 内面に炭化物付着	152
60-11	土師器 鍋	B-d33	SK1p5	（口）19.0 （高）8.8	外：ナデのちヨコナデ・ケズリ 内：ナデのちヨコナデ・ケズリ	粗0.5～2.0mmの小石	やや軟	明褐～灰褐	80		146

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
60-12	土師器 甕	B-d33	SK1p4	(口) 18.8	外：ナデ・オサエのちヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	粗0.5～3.0mmの小石	良好	暗褐	口縁30	外面に煤付着	151
60-13	土師器 鍋	B-d33	SK1p4	(口) 19.6	外：オサエ・ナデのちヨコナデ 内：ナデ・板ナデのちヨコナデ・ケズリ	粗0.5～3.0mmの小石	良好	淡褐～暗褐	口縁50	内外面に煤付着	153
60-14	土師器 甕	B-d33	SK1p4	(口) 21.8	外：ナデ・オサエのちヨコナデ 内：ハケメのちヨコナデ	粗0.5～3.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	口縁50	外面に煤付着	145
60-15	陶器 椀	B-k33	SK18	(口) 15.2 (高) 5.5 (高台) 7.8	外：ロクロナデのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	淡灰	40	山茶椀	117
60-16	陶器 椀	B-k33	SK18	(高台) 7.5	外：ロクロナデのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶椀 高台に粉袋痕	115
60-17	陶器 椀	B-k33	SK18	(高台) 7.4	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶椀	114
60-18	陶器 椀	B-k33	SK18	(高台) 8.3	外：ロクロナデのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台80	山茶椀 内面に釉（灰）	116
60-19	土師器 皿	B-k33	SK18	(口) 14.6	外：指オサエのちヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石	良好	淡褐	口縁30	外面に黒斑	110
60-20	土師器 甕	B-k33	SK18	(口) 20.4	外：指オサエのちヨコナデ 内：ハケメのちヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石	やや軟	暗褐	口縁25	外面に煤付着（一部赤変）	111
60-21	土師器 甕	B-k33	SK18	(口) 26.2	外：オサエ・ナデのちヨコナデ 内：板ナデのちヨコナデ	粗0.5～3.0mmの小石	やや軟	淡褐	口縁25	内外面に煤付着	113
60-22	土師器 甕	B-k33	SK18	(口) 29.2	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石	良好	淡黄茶灰	口縁20		112
60-23	陶器 椀	B-l37	SD4	(口) 16.2	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5～1.0mmの小石	やや軟	淡灰	口縁30	山茶椀	105
60-24	陶器 椀	B-m33	SD4	(口) 16.6 (高) 6.2 (高台) 7.0	外：ロクロナデのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁10 高台100	山茶椀 高台に粉袋痕	103
60-25	陶器 椀	B-l36	SD4	(口) 16.4 (高) 5.2 (高台) 6.9	外：ロクロナデのち高台にナデ・ヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～1.0mmの小石、ワラ	堅緻	白灰	口縁30 高台100	山茶椀	101
60-26	陶器 椀	B-m34	SD4	(口) 13.8	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁20	山茶椀	109

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
60-27	陶器 椀	B-m34	SD4	(高台) 6.3	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶椀 高台に剥製痕	107
60-28	陶器 椀	B-m34	SD4	(高台) 7.8	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台50	山茶椀	108
60-29	陶器 椀	B-m33	SD4	(高台) 7.6	外：ロクロナデのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～4.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶椀 高台に剥製痕	104
60-30	陶器 椀	B-l37	SD4	(高台) 7.6	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～1.0mmの小石	やや軟	淡灰	高台100	山茶椀 高台に剥製痕	106
60-31	陶器 椀	B-l36	SD4	(高台) 6.9	外：ロクロナデのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～3.0mmの小石	良好	淡灰	高台100	山茶椀 高台に剥製痕	102
60-32	陶器 椀	B-m33	Pit 1	(底台) 6.1	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	粗0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶椀 高台に剥製痕 底部に墨書「一」	202
60-33	土師器 皿	B-j35	SE1	—	外：剥離 内：剥離	粗0.5～1.0mmの小石	軟	淡茶灰	口縁20		561
60-34	土師器 皿	B-n34	SD5	(口) 12.6 (底) 2.5 ～2.6	外：オサエ・ヨコナデ 内：板ナデ・ヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	ほぼ完形		163
60-35	陶器 壺	B-o34	SD5 埋土内	(口) 19.0	外：ヨコナデ 内：オサエ・ナデのちヨコナデ	密0.5～3.0mmの小石	堅緻	灰～暗灰	口縁10 頸部30	外面に釉（緑沢）	165
60-36	陶器 壺	B-o34 B-n34	SD5 SK39	(口) 20.2	外：ナデのちヨコハケ施文・ヨコナデ 内：オサエ・ナデのちヨコナデ	密0.5～4.0mmの小石	堅緻	暗灰	口縁70	常滑産 外面に釉（暗紫灰・淡緑沢） 検合資料	164
61-1	土師器 小皿	B-i36	Pit 1	(口) 7.6 (高) 1.1	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶白	完形	胎土はマーブル状	173
61-2	土師器 小皿	B-i36	Pit 1	(口) 8.0 (高) 1.2	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～2.0mmの小石	良好	淡茶白	完形		172
61-3	土師器 小皿	B-i36	Pit 1	(口) 8.1 (高) 1.2	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶白	ほぼ完形		171
61-4	土師器 小皿	B-i36	Pit 1	(口) 7.8	外：ナデ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶灰	50		174
61-5	陶器 椀	B-i36	Pit 1	(口) 14.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡灰	口縁20	山茶椀	170

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
61-6	陶器 椀	B-k38	SK14	(口) 15.2	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	粗0.5～3.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁30	山茶椀 内面に自然釉（淡緑灰）	169
61-7	陶器 椀	B-e31	Pit 1	(口) 15.8	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁25	山茶椀 輪花あり 漬け掛け釉（灰白）	175
61-8	陶器 椀	B-b32	Pit 1 Pit 2	(口) 17.2 (高) 5.3 (高台) 8.0	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁12 高台30	山茶椀	176
61-9	土師器 小皿	B-f32	SK4p2	(口) 8.0 (高) 0.9	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～2.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁30		160
61-10	土師器 小皿	B-f32	SK4p3	(口) 8.1 (高) 0.7	外：オサエ・ナデ 内：板ナデ・ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁30		159
61-11	土師器 小皿	B-f32	SK4p2	(口) 7.9 (高) 0.9	外：オサエ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶灰	70		156
61-12	土師器 小皿	B-f32	SK4p3	(口) 7.9 (高) 0.9	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁50		158
61-13	土師器 小皿	B-f32	SK4p2	(口) 7.9 (高) 1.1	外：オサエ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁30		157
61-14	土師器 小皿	B-j38	SK44p1	(口) 8.3 (高) 1.1	外：ナデ 内：ナデ	粗0.5～1.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	完形		100
61-15	土師器 小皿	B-j38	SK44	(口) 7.9 (高) 1.2	外：剥離 内：剥離	密0.5～1.0mmの小石	やや軟	乳白	完形		98a
61-16	土師器 小皿	B-j38	SK44p2	(口) 8.3 (高) 1.2	外：剥離 内：剥離	粗0.5～1.0mmの小石	軟	乳白	60		99
61-17	土師器 小皿	B-j38	SK44	(口) 8.4 (高) 1.4	外：剥離 内：剥離	粗0.5～1.0mmの小石 (多)	軟	乳白	60		562
61-18	土師器 小皿	B-d30	SX3	(口) 6.6～7.2 (高) 0.7～1.2	外：オサエ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡黄灰	完形		161
61-19	土師器 皿	B-k35	SX6	(口) 12.0 (高) 2.1	外：剥離 内：剥離	密0.5～1.0mmの小石	軟	乳灰	口縁50		566
61-20	土師器 皿	B-f32	SK2	(口) 11.2 (高) 2.4	外：剥離 内：剥離	密0.5～1.0mmの小石	やや軟	茶灰	口縁60		563

No.	器種	地区	遺構・層名	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
61-21	陶器卸皿	B-f32	SK2	(口) 13.4 (高) 2.3	外：ロクロナデ 内：ロクロナデのち卸目	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	白～淡緑灰	口縁10 底部30	内外面に釉	180
61-22	陶器 ねり鉢	B-f32	SK2	(口) 27.2	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ・磨滅	密0.5～4.0mmの小石	堅緻	淡灰	25	常滑産？	179
61-23	土師器 小皿	B-k36	SK26	(口) 7.8 (高) 1.2	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁30		143
61-24	土師器 皿	B-k36	SK26	(口) 12.6 (高) 1.7	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡乳灰	口縁20		144
61-25	陶器 壺？	B-k36	SK26	(底) 5.1	外：ロクロナデのち糸切り・篤ナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	底部50		142
61-26	土師器 羽釜？	B-k36	SK26	(口) 23.8	外：ハケメのちヨコナデ 内：オサエ・ナデ	粗0.5～3.0mmの小石、赤色粒	良好	淡黄灰	口縁10 (2片)		141
61-27	陶器 壺	B-j38	SK43p1	(口) 11.0 (高) 22.7 (底) 7.8	外：回転ナデのちケズリ 内：回転ナデ	粗0.5～11.0mmの小石	堅緻	暗灰	口縁70 体部 完形	瀬美？ 外面に自然釉（白灰）	77
61-28	土師器 小皿	B-j38	SK43p3	(口) 7.7 (高) 1.0	外：オサエ・刻線 内：刻線	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶灰	70		78
61-29	土師器 皿	B-j38	SK43	(口) 11.3 (高) 2.1	外：ナデ 内：ナデ	粗0.5～1.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	口縁20		80
61-30	土師器 皿	B-j38	SK43p4	(口) 14.0 (高) 2.5	外：ナデ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁25		79
61-31	土師器 鍋	B-j38	SK43p2	(口) 21.6 (高) 12.3	外：ナデのちヨコナデ・ケズリ 内：ナデ・オサエのちヨコナデ・ケズリ	粗0.5～2.0mmの小石	良好	淡褐	口縁95 体部80	外面に煤付着	76
61-32	土師器 小皿	B-j38	SK23下	(口) 7.6 (高) 1.1	外：刻線 内：刻線	粗0.5～3.0mmの小石、赤色粒	やや軟	淡茶灰	完形		167
61-33	土師器 小皿	B-j38	SK23下	(口) 7.8 (高) 1.2	外：オサエのちナデ 内：板ナデのちナデ	粗0.5～2.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	95		166
61-34	土師器 小皿	B-j38	SK23下	(口) 8.7 (高) 1.3	外：オサエのちナデ 内：ナデ	密0.5～2.0mmの小石	良好	淡黄灰	40	外面に黒斑？	168
61-35	土師器 小皿	B-k36	SK25p13	(口) 7.3 (高) 1.0	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～2.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	完形		127

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
61-36	土師器 小皿	B-k36	SK25p14	(口) 7.3 (高) 1.2	外：オサエ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	95		129
61-37	土師器 小皿	B-k36	SK25p12	(口) 8.0 (高) 1.4	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～2.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	完形		130
61-38	土師器 小皿	B-k36	SK25p15	(口) 7.6 (高) 1.2	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡黄褐	80		128
61-39	陶器 椀	B-k36	SK25p1	(口) 14.6 (底) 5.6 (高台) 6.6	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	粗0.5～4.0mmの小石	良好	淡灰	口縁40 高台100	山茶椀　底部に墨書「・」あり 高台に刷毛痕	126
61-40	土師器 鍋	B-k36	SK25p11	(口) 25.0 (復高) 10.3	外：ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内：ナデ・指オサエのちヨコナデ・ケズリ	粗0.5～2.0mmの小石、赤色粒	やや軟	淡茶灰	40	外面に煤付着	125
61-41	陶器 大甕	B-k36	SK25p16	…	外：ナデのちタタキメ 内：板ナデ	粗0.5～3.0mmの小石	堅緻	赤褐	小片	常滑	131
61-42	陶器 大甕	B-k36	SK25p2～11	(口) 49.6 (高) 71.2 (底) 19.6	外：ナデ・板ナデのちヨコナデ・タタキメ（5列）　内：指オサエ・ナデ・板ナデのちヨコナデ	粗0.5～5.0mmの小石	堅緻	淡灰	50	常滑 外面に自然釉（淡緑灰）	124
62-1	土師器 皿	B-k37	Pit 1 建物2	(口) 11.7 (高) 2.7	外：ナデ・オサエ 内：ナデ	粗0.5～1.0mmの小石	やや軟	淡褐	80	外面に煤付着	162
62-2	土師器 皿	B-h37	SK17	(口) 10.2	外：ナデ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡褐	口縁15		135
62-3	土師器 鍋	B-h37	SK17	(口) 20.8	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデ・板ナデのちヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶灰～暗褐	口縁20	外面に煤付着	133
62-4	土師器 鍋	B-h37	SK17	(口) 34.0	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	明茶灰	口縁25	外面に煤付着	132
62-5	土師器 鍋	B-h37	SK17	(口) 31.8	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡褐	口縁12	外面に煤付着	134
62-6	土師器 鍋	B-i37	SK24	(口) 31.2	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密0.5～2.0mmの小石	良好	淡黄灰	口縁40	外面に煤付着	81
62-7	土師器 小皿	B-e34	SK5	(口) 7.5 (高) 0.9	外：オサエ 内：ナデ	粗0.5～3.0mmの小石	やや軟	淡黄灰	70		87
62-8	土師器 小皿	B-e34	SK5	(口) 7.6 (高) 1.1	外：オサエ・ナデ 内：ナデ・板ナデ	密0.5～1.0mmの小石（少）	やや軟	淡茶灰	50		557

No.	器種	地区	遺構・層名	法量（cm）	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
62-9	土師器 皿	B-f34	SK5	（高）2.2	外：ナデ・オサエ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁10		559
62-10	土師器 皿	B-f34	SK5	（高）2.1	外：ナデ・オサエ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁10		560
62-11	土師器 皿	B-f34	SK5	（口）9.7 （高）2.3	外：ナデ・オサエ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	白茶灰	口縁30		558
62-12	青磁 椀	B-f34	SK5	（高台）5.6	外：ケズリ	密0.5mm前後の小石	堅緻	白灰	高台25	内外面に釉（淡緑）	91
62-13	白磁 椀	B-f34	SK5	－	内外面とも白色釉かかる	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	白灰	10弱	内外面に釉（白）	92
62-14	陶器 小皿	B-f34	SK5	（口）8.8 （高）2.3 （底）5.4	外：ロクロナデのち糸切り 内：ロクロナデ	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	淡黄灰	口縁20	内外面に釉（淡緑灰～淡黄灰）	95
62-15	陶器 壺？	B-f34	SK5	（底）5.6	外：ロクロナデのち糸切りのち釉 内：ロクロナデのち釉	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	白茶灰 地 淡緑灰	底部80	瀬戸産？	556
62-16	陶器 椀	B-e34	SK5	（口）15.9	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	淡茶灰	口縁12	平椀 内外面に釉（淡緑灰）	88
62-17	陶器 卸皿	B-f34	SK5	（口）15.6	外：ナデのちヨコナデ 内：ヨコナデのち卸目	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁25	外面に釉（白）	96
62-18	土師器 鍋	B-e34	SK5	（口）25.8	外：オサエ・ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁20	外面に煤付着	82
62-19	土師器 鍋	B-e34	SK5	（口）26.0	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデ？のちヨコナデ	粗0.5～1.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	口縁20	外面に煤付着	83
62-20	土師器 鍋	B-e34	SK5	（口）30.3	外：ハケメのちヨコナデ 内：板ナデのちヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	口縁20	外面に煤付着	84
62-21	土師器 鍋	B-f34	SK5	（口）30.2	外：オサエのちハケメのちヨコナデ 内：ハケメ・ナデのちヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石、赤色小粒	良好	淡灰褐	口縁30	外面に煤付着	555
62-22	土師器 鍋	B-e34	SK5	（口）32.6	外：ハケメのちヨコナデ 内：オサエのちヨコナデ	粗0.5～1.0mmの小石	やや軟	白灰	口縁20	外面に煤付着	85
62-23	土師器 鍋	B-e34	SK5	（口）34.8	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	茶灰	口縁12	外面に煤付着	86

No.	器種	地区	遺構・層名	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
62-24	陶器 壺	B-e34	SK5	(底) 14.4	外：ナデ 内：ヨコナデのち板ナデ	粗0.5～8.0mmの小石	堅緻	暗灰 淡褐	底60		97
62-25	陶器 壺	B-f34	SK5	—	外：筆状工具による施文・ハリツケ把手？ 内：ナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	暗灰	10以下	瀬戸？外面に釉（黒灰～白灰）	90
62-26	陶器 ねり鉢	B-f34	SK5	—	外：ヨコナデのちケズリ 内：磨滅	粗0.5～4.0mmの小石	堅緻	淡灰	10以下	瀬戸産	89
62-27	土師器 羽釜	B-e34	SK5	(口) 38.8	外：ヨコナデ 内：ナデ	粗0.5～1.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	口縁20	外面に煤付着	98
62-28	土師器 鍋	B-h36	SK31	—	外：ヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗0.5～3.0mmの小石	やや軟	乳灰	10以下	外面に煤付着	199
62-29	土師器 鍋	B-h36	SK31	—	外：ヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石	やや軟	淡褐	10以下		200
62-30	陶器 小壺	B-h36	SK31	(底) 7.1	外：ナデ 内：ナデ・オサエ	粗0.5～1.0mmの小石	堅緻	暗褐～ 淡茶灰	底部25	常滑 内外面に釉（外：淡緑灰・内：暗褐）	201
63-1	土師器 鍋	B-j33	Pit 2	(口) 26.8	外：ハケメのちヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶褐	口縁20	外面に煤付着	177
63-2	土師器 鍋	B-k32	SK30 下層下	(口) 28.5	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡褐～褐	口縁30	外面に煤付着	120
63-3	土師器 鍋	B-k30	SK30 下層	(口) 28.8 (高) 12.3	外：ナデ・オサエ・ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内：ナデ・板ナデのちヨコナデ・ケズリ	密0.5～2.0mmの小石	やや軟	淡褐	口縁60	外面に煤付着	119
63-4	土師器 鍋	B-k35	SK30	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石 (少)	良好	淡茶灰	口縁10		565
63-5	陶器 ねり鉢	B-k35	SK30 下層下	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石	堅緻	褐	10未満		123
63-6	陶器 ねり鉢	B-k35	SK30	—	外：オサエのち回転ナデ 内：ナデ	粗0.5～3.0mmの小石	堅緻	赤茶	口縁10未満	常滑産	564
63-7	陶器 甕？	B-k30	SK30 下層下	—	外：ナデ 内：ナデ	粗0.5～2.0mmの小石	堅緻	濃褐～褐	底10	壺の可能性あり	122
63-8	陶器 擂鉢	B-k30	SK30 下層下	(底) 12.0	外：ロクロナデのち糸切り 内：ロクロナデのちハケメ	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	淡灰	底12	瀬戸産 内外面に釉（濃褐）	121

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
63-9	土師器 皿	B-j33	Pit 1 建物1	(口) 13.3	外：ナデ・オサエ 内：ナデ	密0.5～1.0㎜の小石	良好	淡茶灰	口縁30		185
63-10	土師器 鍋	B-j33	SK16	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5～1.0㎜の小石	やや軟	淡褐 黒灰	10以下	外面に煤付着	183
63-11	土師器 鍋	B-j33	SK16	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5～1.0㎜の小石	やや軟	淡黄灰	口縁10		184
63-12	土師器 鍋	B-j33	SK16	—	外：ハケメのちヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5～2.0㎜の小石	良好	淡褐	10	外面に煤付着	182
63-13	陶器 ねり鉢	B-j33	SK16	—	外：ハケメのちヨコナデ 内：ヨコナデ・磨滅	粗0.5～2.0㎜の小石	堅緻	赤褐	10未満		181
63-14	陶器 皿	B-j33	SK11	(底) 5.1	外：ロクロナデのち糸切り 内：ロクロナデ	密0.5～2.0㎜の小石	堅緻	淡灰	口縁5 高台80	緑釉皿 口縁部に釉（黒茶） 口縁部片と体部片を合成	140
63-15	陶器 椀	B-j33	SK11	(高台) 4.8	外：糸切りのち高台ケズリ出し	密0.5～2.0㎜の小石	堅緻	淡灰	高台100	平椀 瀬戸産 内面に釉（淡緑灰）	138
63-16	土師器 鍋	B-j33	SK11	(口) 23.0	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密0.5～1.0㎜の小石	良好	淡茶灰	口縁30(2片)		137
63-17	土師器 鍋	B-j33	SK11	—	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密0.5～1.0㎜の小石	堅緻	淡黄灰	口縁10	口縁部片と体部片を合成	139
63-18	土師器 鍋	B-j33	SK11	(口) 36.4	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデ？のちヨコナデ	密0.5～1.0㎜の小石	良好	淡茶灰 黒灰	口縁25	外面に煤付着	136
63-19	陶器 椀	B-g37	SD2	(口) 14.7	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5～1.0㎜の小石	堅緻	淡灰	口縁20	山茶椀 輪花あり	196
63-20	陶器 椀	B-g37	SD2	(口) 16.2	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	粗0.5～1.0㎜の小石	良好	淡灰	口縁20	山茶椀 漬け掛け釉（白灰）	195
63-21	陶器 壺	B-i32	SD2・3	—	外：ヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗0.5～3.0㎜の小石	堅緻	茶 淡灰	口縁10	常滑産 内外面に釉（淡緑灰）	197
63-22	土師器 鍋	B-g37	SD2	(口) 18.0	外：ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内：板ナデのちヨコナデ	密0.5～1.0㎜の小石	良好	淡茶灰 黒灰	口縁12		193
63-23	陶器 ねり鉢	B-i31	SD2	(口) 17.8	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密0.5～2.0㎜の小石	堅緻	赤褐～淡褐	口縁20		191

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
63-24	青磁 椀	B-h34	SD3	—	内：クシノ状施文のち釉	密0.5mm前後の小石	堅緻	淡灰	椀下部20	内外面に釉（暗緑灰）	198
63-25	土師器 羽釜	B-i31	SD2	—	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡褐 黒灰	口縁10	口縁部に焼成前穿孔（2ヶ所）北勢産	192
63-26	土師器 鍋	B-g37	SD2	—	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶灰 黒灰	口縁10		194
63-27	陶器 大甕	B-i34	SK9	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5～2.0mmの小石	堅緻	淡褐	口縁10以下	常滑産	178
63-28	土師器 羽釜	B-e36	SD8	(口) 24.0	外：ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内：ナデ・板ナデのちヨコナデ・ケズリ状のナデ	粗0.5～2.0mmの小石	良好	淡褐	口縁20	外面に煤付着	118
64-1	土師器 皿	C-b1	SD2	(底) 6.6	外：剥離、糸切り 内：剥離	密0.5～1.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	底部40	ロクロ土師器	554
64-2	土師器 甕	C-b2	Pit2	(口) 21.0	外：ナデ・オサエのちヨコナデ 内：ヨコナデ・板ナデ	粗0.5～3.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁20	外面に煤付着	75
64-3	陶器 椀	C-b1	SK1	(口) 13.6	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁20	山茶椀	54
64-4	土師器 皿	C-b1	SK1	(口) 12.4	外：ナデ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡黄灰	口縁25	外面に煤付着	56
64-5	土師器 皿	C-b1	SK1	(口) 11.8	外：ナデ 内：ナデ	密0.5～2.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	口縁30		55
64-6	土師器 皿	C-b1	SK1	(口) 11.8	外：ナデ 内：ナデ	密0.5～2.0mmの小石	良好	淡黄灰	口縁25		57
64-7	土師器 鍋	C-b1	SK1	(口) 18.6	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ・板ナデ	粗0.5～2.0mmの小石	良好	暗茶灰	口縁25	外面に煤付着	50
64-8	土師器 鍋	C-b1	SK1	(口) 20.4	外：ハケメのちヨコナデ 内：ヨコナデ・ナデ	粗0.5～2.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁25	外面に煤付着	51
64-9	土師器 鍋	C-b1	SK1	(口) 21.3	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石	良好	淡黄灰	口縁12	外面に煤付着	53
64-10	土師器 鍋	C-b1	SK1	(口) 20.8	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁20	外面に煤付着	52

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
64-11	陶器 椀	C-ｈ7	SK11	(口) 13.4	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	粗0.5～3.0mmの小石	堅緻	淡茶灰	口縁12	山茶椀	74
64-12	土師器 小皿	C-ｈ7	SK11	(口) 7.9 (高) 1.3	外：オサエのちナデ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡黄灰	口縁95		69
64-13	土師器 小皿	C-ｈ7	SK11	(口) 7.8 (高) 1.0	外：オサエのちナデ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡黄灰	完形		68
64-14	土師器 皿	C-ｈ7	SK11	(口) 11.2 (高) 2.3	外：オサエのちナデ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁70		73
64-15	土師器 皿	C-ｈ7	SK11	(口) 12.2 (高) 2.2	外：オサエのちナデ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	茶灰	口縁30		71
64-16	土師器 皿	C-ｈ7	SK11	(口) 11.4 (高) 2.2	外：オサエのちナデ 内：ナデ	粗0.5～1.0mmの小石	やや軟	黄灰	口縁80		72
64-17	土師器 皿	C-ｈ7	SK11	(口) 11.8 (高) 2.6	外：オサエのちナデ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁50		70
64-18	土師器 小皿	C-ｈ7	SK10	(口) 8.2 (高) 1.2	外：指オサエ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁25		49
64-19	土師器 皿	C-ｅ7	SK10	(口) 11.3	外：刻線 内：刻線	密0.5～1.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	口縁50		46
64-20	土師器 皿	C-ｅ7	SK10	(口) 11.0 (高) 2.3	外：ナデ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡乳灰	口縁40		47
64-21	土師器 皿	C-ｅ7	SK10	(口) 12.6	外：刻線 内：刻線	密0.5～1.0mmの小石	やや軟	淡乳灰	口縁25		48
64-22	土師器 鍋	C-ｅ7	SK10	(口) 22.0	外：ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内：オサエ・ナデのちヨコナデ・ケズリ	粗0.5～3.0mmの小石	良好	淡茶褐	口縁25	外面に煤付着	44
64-23	土師器 鍋	C-ｅ7	SK10	(口) 33.2	外：ハケメのちヨコナデ 内：ヨコナデ・ナデ	粗0.5～2.0mmの小石	良好	淡褐	口縁20	外面に煤付着	45
64-24	土師器 皿	C-ｂ3	SK3	(口) 10.6	外：ナデ 内：ナデ	粗0.5～1.0mmの小石	良好	淡褐	口縁20		41
64-25	土師器 小皿	C-ｂ3	SK3	(口) 7.4 (高) 1.0	外：ナデ・オサエ 内：ナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁30		43

No.	器種	地区	遺構・層名	法量（cm）	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
64-26	土師器 鍋	C-b3	SK3	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～2.0㎜の小石	やや軟	淡茶灰	口縁10以下	外面に煤付着	42
64-27	土師器 鍋	C-b3	SK3	(口) 27.1	外：ヨコナデ・オサエ 内：ナデ・ハケメのちヨコナデ	粗0.5～3.0㎜の小石	やや軟	暗褐	口縁25	外面に煤付着	40
64-28	土師器 鍋	C-d4	Pit3 建物1	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～2.0㎜の小石	良好	淡茶灰	口縁10		38
64-29	土師器 小皿	C-d3	Pit4 建物1	(口) 9.5 (高) 0.9	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5～1.0㎜の小石	良好	淡乳灰	口縁20		39
64-30	土師器 鍋	C-b5	Pit6 建物2	(口) 27.8	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～2.0㎜の小石	やや軟	淡茶灰	口縁12	外面に煤付着	37
64-31	土師器 皿	C-e6	SK12	(口) 12.4 (高) 2.4	外：オサエのちナデ 内：ナデ	密0.5～1.0㎜の小石	良好	淡黄灰	口縁30 底100		2
64-32	土師器 鍋	C-e6	SK12	(口) 23.2	外：オサエ・ハケメ・ナデのちヨコナデ・ケズリ 内：オサエ・ナデ・板ナデのちヨコナデ	粗0.5～2.0㎜の小石	良好	淡灰褐 暗褐	口縁50		6
64-33	土師器 鍋	C-e6	SK12	(口) 32.4	外：オサエ・ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内：ハケメ・ナデのちヨコナデ・ケズリ	粗0.5～2.0㎜の小石 (多)	やや軟	淡茶灰	口縁60	外面に煤付着	1
64-34	土師器 皿	C-b4	SK2	(口) 11.7 (高) 2.0	外：ナデ・オサエ 内：ナデ	粗0.5～1.0㎜の小石	良好	暗褐～ 淡茶灰	口縁12		65
64-35	土師器 皿	C-b4	SK2	—	外：ナデ 内：ナデ	粗0.5～1.0㎜の小石	やや軟	淡茶灰	口縁10未満		64
64-36	陶器 椀	C-b4	SK2	(底) 6.6	外：ロクロナデのち糸切り 内：ロクロナデ	粗0.5～1.0㎜の小石	堅緻	淡灰	底30	山茶椀	63
64-37	土師器 鍋	C-b4	SK2	(口) 27.0	外：ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内：オサエ・板ナデのちヨコナデ	粗0.5～2.0㎜の小石	良好	暗茶灰	口縁10 体部上半30	外面に煤付着 内面に炭化物？	62
64-38	土師器 鍋	C-b4	SK2	(口) 36.6	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～2.0㎜の小石	良好	淡茶灰	口縁10	外面に煤付着	66
65-1	土師器 鍋	C-d2	SK5	(口) 30.6	外：オサエ・ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内：オサエ・板ナデのちヨコナデ	密0.5～1.0㎜の小石	良好	淡黄灰	口縁25 体部上半40	内外面に煤付着	5
65-2	土師器 小皿	C-c3	SK4	(口) 7.4 (高) 1.2	外：ナデ・オサエ 内：ナデ	粗0.5～2.0㎜の小石	良好	淡黄灰	60		4

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
65-3	陶器 椀	C-c 3	SK 4	(口) 13.5	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5～3.0㎜の小石	堅緻	淡茶灰	口縁10	山茶椀	61
65-4	土師器 皿	C-c 3	SK 4	(高) 2.6	外：剝離 内：剝離	密0.5～1.0㎜の小石、赤色粒	良好	やや軟	口縁10		553
65-5	土師器 皿	C-c 3	SK 4	—	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	粗0.5～1.0㎜の小石	良好	淡茶灰	口縁10		552
65-6	土師器 鍋	C-c 3	SK 4	(頸) 18.6	外：ナデ・ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内：ナデのちケズリ	粗0.5～2.0㎜の小石(多)	良好	乳灰	体部30	外面に煤付着	551
65-7	土師器 鍋	C-c 3	SK 4	(口) 32.8	外：ハケメ・ナデのちヨコナデ・ケズリ 内：ナデのちヨコナデ	粗0.5～3.0㎜の小石	良好	淡茶灰	口縁30	外面に煤付着	3
65-8	土師器 鍋	C-b 4	SK 6	(口) 26.8	外：ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	密0.5～1.0㎜の小石	良好	淡茶灰	口縁12	外面に煤付着	58
65-9	土師器 皿	C-b 4	SK 6	(口) 11.0 (高) 2.4	外：剝離 内：剝離	密0.5～1.0㎜の小石	やや軟	淡黄茶灰	口縁50		60
65-10	土師器 鍋	C-b 4	SK 6	(口) 19.4	外：ナデ・ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗0.5～1.0㎜の小石	良好	淡茶褐	口縁12	外面に煤付着	59
65-11	土師器 皿	C-d 5	SK 7 下層下	(口) 11.3 (高) 2.6～3.0	外：ナデ・オサエ 内：ナデ・オサエ	粗0.5～1.0㎜の小石	良好	淡茶灰	60		23
65-12	土師器 皿	C-d 5	SK 7 下層下	(口) 11.0 (高) 2.4	外：ナデ・オサエ 内：剝離	密0.5～2.0㎜の小石	やや軟	乳白	25		31
65-13	土師器 小皿	C-d 5	SK 7 下層下	(口) 7.2 (高) 0.5～1.7	外：ナデ 内：ナデ	密0.5～2.0㎜の小石	良好	淡赤褐～淡黄褐	完形		24
65-14	陶器 椀	C-d 5	SK 7 下層下	(口) 14.4 (高) 4.7 (底) 5.3	外：ロクロナデのち糸切りのちハケ 内：ロクロナデ・ナデ	密0.5～4.0㎜の小石	堅緻	淡灰	口縁25	山茶椀　体部外面に墨書「＋」 鉄分付着	29
65-15	土師器 鍋	C-d 5	SK 7 下層最下	(口) 26.7	外：オサエ・ハケメのちヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	粗0.5～2.0㎜の小石	良好	淡褐	口縁20	外面に煤付着 内面に黑斑あり	26
65-16	土師器 鍋	C-d 5	SK 7 下層下	(口) 22.0	外：オサエ・ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内：ナデ・ヨコナデ	粗0.5～2.0㎜の小石	良好	淡黄灰	口頸30		16
65-17	土師器 鍋	C-d 5	SK 7 下層最下	(口) 30.3	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	粗0.5～2.0㎜の小石	良好	淡茶灰	口縁12	外面に煤付着	25

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
65-18	土師器 鍋	C-d5	SK7 下層最下	(口) 26.2	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～2.0㎜の小石	良好	淡褐	口縁12	外面に煤付着	28
65-19	土師器 鍋	C-d5	SK7 下層	(口) 29.0	外：ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	粗0.5～1.0㎜の小石	良好	淡茶灰	口縁12	外面に煤付着	14
65-20	土師器 鍋	C-d5	SK7 下層上	(口) 31.6	外：オサエのちヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	粗0.5～1.0㎜の小石	良好	淡茶灰	口縁10	外面に煤付着	11
65-21	土師器 鍋	C-d5	SK7 下層最下	(口) 29.6	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～2.0㎜の小石	良好	淡褐	口縁12	外面に煤付着	27
65-22	土師器 鍋	C-d5	SK7 下層	(口) 34.6	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	粗0.5～1.0㎜の小石、赤色粒	良好	淡茶灰	口縁10	外面に煤付着	7
65-23	土師器 鍋	C-d5	SK7 下層下	(口) 35.8	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～1.0㎜の小石	やや軟	淡黄灰	口縁20		17
65-24	土師器 鍋	C-d5	SK7 下層	(口) 38.0	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～2.0㎜の小石	良好	淡茶灰	口縁20	外面に煤付着	13
65-25	陶器 壺	C-d5 C-e7	SK7 下層下 SK9	(口) 14.8	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	粗0.5～4.0㎜の小石	堅緻	淡灰～灰	口縁30 体部40	瀬美？ 外面に釉（淡緑灰） 典遺構間接合資料	32
65-26	陶器 壺	C-d5	SK7 下層	(底) 14.8	外：ナデ 内：ナデ・板ナデ	粗0.5～5.0㎜の小石	堅緻	淡灰	底部30	瀬美？ 内面に釉（淡緑灰） 65－25と同一？	33
65-27	陶器 壺	C-d5	SK7 下層	(高台) 13.6	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5～2.0㎜の小石	堅緻	淡灰	高台30	瀬戸？ 外面に釉（淡緑灰） 内面に炭化物	34
66-1	土師器 鍋	C-d5	SK7 下層最下	(口) 38.6	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5～2.0㎜の小石	良好	白茶灰	口縁20	外面に煤付着	18
66-2	土師器 鍋	C-d5	SK7 下層下	(口) 26.0	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデ？・ヨコナデ	粗0.5～1.0㎜の小石	良好	淡茶灰	口縁12	外面に煤付着	19
66-3	土師器 鍋	C-d5	SK7 下層	(口) 32.6	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデ？・ヨコナデ	粗0.5～2.0㎜の小石	良好	白灰	口縁12	外面に煤付着	12
66-4	土師器 鍋	C-d5	SK7 下層最下	(口) 22.6	外：オサエ・ハケメのちヨコナデ 内：ハケメ・ナデのちヨコナデ	密0.5～1.0㎜の小石	良好	白灰	口縁25		20
66-5	土師器 鍋	C-d5	SK7 下層最下	(口) 28.2	外：板ナデ？のちヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	粗0.5～2.0㎜の小石	良好	淡褐	口縁12	外面に煤付着	22

No.	器種	地区	遺構・層名	法量（cm）	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
66 -6	土師器 鍋	C-d 5	SK 7 下層	(口) 30.6	外：ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	粗0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁12	外面に煤付着	15
66 -7	土師器 鍋	C-d 5	SK 7 下層下	(口) 28.6	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5～2.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁20	外面に煤付着	30
66 -8	土師器 鍋	C-d 5	SK 7 上層	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡黄灰	口縁10弱	外面に煤付着	10
66 -9	土師器 鍋	C-d 5	SK 7 上層	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁 5	外面に煤付着	9
66 -10	土師器 鍋	C-d 5	SK 7 上層	(口) 22.9	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5～1.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	口縁10	外面に煤付着	8
66 -11	土師器 羽釜	C-d 5	SK 7 下層最下	(口) 25.4	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	粗0.5～1.0mmの小石	良好	淡褐	口縁20	外面に煤付着	21
66 -12	陶器 甕	C-d 5 C-e 6	SK 7 下層下 SK 8	(口) 32.5	外：ヨコナデ 内：指オサエ・ナデのちヨコナデ	粗0.5～2.0mmの小石	堅緻	暗茶	口縁50	常滑 外面に釉（明緑灰） 奥東横間接合資料	36
66 -13	陶器 大甕	C-d 5	SK 7 下層	(口) 57.1	外：ナデのちヨコナデ 内：オサエ・ナデのちヨコナデ	密0.5～3.0mmの小石	堅緻	暗褐～褐	口縁20	常滑 外面に釉（淡灰）	35
66 -14	陶器 椀	C-i 5	SD 3	(口) 12.8	外：ロクロナデのちケズリ 内：ロクロナデ	密0.5～1.0mmの小石	堅緻	淡茶灰	口縁25	内外面に鉄釉（茶） 天目茶椀	67

Ⅴ．調査資料の化学分析

1．分析の目的

楠ノ木遺跡の調査の一環として化学分析を行った。分析は土壙墓と考えられる遺構の土壙分析と、出土した鉄滓と土器を中心として、その成分分析を行ったものとがある。分析は、土壙分析を三重県農業技術センターに、鉄滓と土器の成分分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。具体的な成果は後述されているので、ここでは分析資料の出土遺構・遺跡とおおよその所属時期や分析の目的などについて触れておく。

土壙分析

B地区で検出した中世墓ＳＫ25・33・43・44の土壙中に含まれる成分を分析し、当該遺構が墓であることを確定しようとした。結果は土壙サンプルを採集した地点が良くなかったため、墓であることを傍証するには至らなかった。特にＳＫ33・43・44は遺構をやや掘りすぎたことが影響しているようである。

鉄滓の成分分析

鉄滓の成分に時期的な傾向があるかどうかを知ることを目的とした。鉄滓に関する分析は当県でほとんどなされておらず、今後分析事例を増やす必要がある。

鉄滓関係の分析は10点の資料を抽出した。1～4は楠ノ木遺跡A地区土坑ＳＫ36から出土したものである。時期はⅢ期で、おおよそ15世紀前半と見做し得る。5は員弁郡大安町・中貝戸遺跡土坑ＳＫ1[1]から出土した鉄滓である。時期は伴出した土器類から15世紀から16世紀と考えられる。6は度会郡玉城町・蚊山遺跡包含層[2]から出土した鉄滓である。時期的には13世紀代の可能性が高い。7は一志郡嬬野町・東野B遺跡ｈ28グリット井戸ＳＥ1[3]から出土した鉄滓である。時期は伴出した鍋が第3段階ｂ型式[4]で、おおよそ15世紀前半と見做し得る。8・9は一志郡白山町・家野遺跡包含層[5]から出土した鉄滓である。遺跡の時期からは15世紀前半から16世紀初頭までの間と考えられる。10は松阪市伊勢寺町・榎長遺跡土坑ＳＫ10上面[6]から出土したるつぼである。時期は奈良時代と考えられる。

土師器の胎土分析

土師器の胎土分析は楠ノ木遺跡出土土器を中心として、比較資料も含めておもに平安時代末から明治時代あたりまでの時期のものについて行った。おおよそ中世から近代にかけての南伊勢系土師器の胎土上の動向をさぐることを目的としたのである。

比較資料として多気郡明和町・黒土遺跡[7]・外山遺跡・北野遺跡[8]、多気郡勢和村・若宮遺跡[9]、松阪市伊勢寺町・伊勢寺遺跡[10]、一志郡白山町・家野遺跡[11]、安芸郡芸濃町・下川遺跡[12]、志摩郡阿児町・東海道遺跡の出土土器の分析も行った。これは南勢地域の遺跡（楠ノ木・黒土・外山・北野・若宮・伊勢寺）、中勢の遺跡（家野・下川）、志摩の遺跡（東海道）に土器の胎土のうえで差が認められるのかどうかの確認のためである。また南伊勢系とは異なる土師器として、家野遺跡・下川遺跡の資料を含めた。分析資料としてはごく少量であり、今後中北勢地域の胎土上の特徴を抽出することを主題とした分析をしていく必要がある。

南勢地域の遺跡を多く抽出したのは対象土器類が南勢で生産されている可能性が極めて高いからである。そして遺跡ごとで胎土の異なりが認められるかどうかによっては、土器が一定の場所で製作されていたかどうかの追求も可能と考えたのである。そのために、時期的には離れるが土器焼成坑出土の資料である北野遺跡の出土土器も含めた。

なお、楠ノ木遺跡以外は長期的に形成された集落ではない。時期的な変動の確認のためには今後も各遺跡で随時分析を行っていく必要がある。

分析資料の時期と型式については分析資料一覧表のなかに入れてあるので参照されたい。

註

(1) 田中久生「中貝戸遺跡」（「昭和63年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告」第1分冊1989三重県教育委員会）なお、共伴土器は山茶椀ではないことが後に判明した。

(2) 小坂宣広・前川嘉宏・植本賢治「度会郡玉城町・蚊山遺跡」（「『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅴ

1 1990三重県教育委員会三重県埋蔵文化財センター)
(3) 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報』18 (1988)
(4) 伊藤裕偉「中世常伊勢系の土師器に関する一試論」(『Miehi story』vol.1 1990)
(5) 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報』1 (1990)
(6) 河北秀実「優良遺跡」(『近畿自動車道(久居～勢和)埋蔵文化財発掘調査報告』第2分冊1 (1990三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター)
(7) 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報』19 (1989)
(8) 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報』2 (1991)
(9) 伊藤裕偉「丹生地区内遺跡群」(註(1) 文献に同じ)
(10) 伊藤裕偉『磯部大王台転車道整備事業に伴う東海道遺跡発掘調査報告』(1989 三重県教育委員会)

2. 土壌分析結果報告

三重県農業技術センター　広瀬和久・原正之

調査の目的

玉城町楠ノ木遺跡から検出された土壙墓と推定される土坑4基について、その埋土および周辺土壌中のカルシウムおよびリンを分析することにより、遺構の性格を明らかにするとともに、遺骸が埋葬されていたかどうかの確認、遺骸の埋葬位置および身長推定等を行う資料とする。

分析結果（別表）および考察

埋蔵文化財発掘調査において、遺構の性格を明らかにする目的で採集された資料（土壌）を分析することにより遺骸が埋葬されていたかどうかの確認、遺骸の埋葬位置および身長の推定を行うためには、人骨の成分中で含有量の多いカルシウム（Ｃａ）とリン（Ｐ）を分析する必要がある。

この分析値について、土坑内部土壌の値と対照となる周辺土壌の値を比較し、内部の値が高い場合は外部からＣａやＰ濃度の高い物質、すなわち人骨・遺骸等が持ち込まれたものと推察される。しかし、ＣａやＰは肥料の含有成分でもあるため、人骨等の存在を判定する場合は、この点にも注意が必要である。

今回採集された試料は大きく分けると、土坑内の埋土を点的に採集したＳＫ33・43・44の試料と土坑内の最下層の一部を採集したＳＫ25の試料、およびＳＫ43から出土した陶器壺（fig.61－27）内の試料の計3種類である。

このうちＳＫ43・44の2土坑については、表にしめしたように、土坑内部の土壌のＣａおよびＰの分析値（平均値）は周辺土壌の分析値（平均値）より低いため、人骨または遺骸の存在の有無を判定することができなかった。しかしＳＫ33については表に示したように土坑内部土壌は対照土壌に比べて、Ｐは低かったがＣａは高かった。分析値からＣａまたはＰが高い地点は土坑中央部に多く、遺骸埋葬されていた可能性は高いが、分析値の高い地点の広がりが大きいため、遺骸の明確な身長推定はできなかった。

ＳＫ43から出土した壺の埋土については、埋土上半部・下半部ともＳＫ43の対照土壌に比べてＣａは低いがＰは高い。Ｃａは雨等により溶出し易く、Ｐは残留しやすいので人骨等が存在していた可能性もあるが、Ｐのみ高い場合は肥料の施用によるＰ濃度の上昇も考えられる。

またＳＫ25小皿p5下の土については土坑外の土壌（対照）に比べてＣａ・Ｐとも高く、人骨等の存在していた可能性が高い。

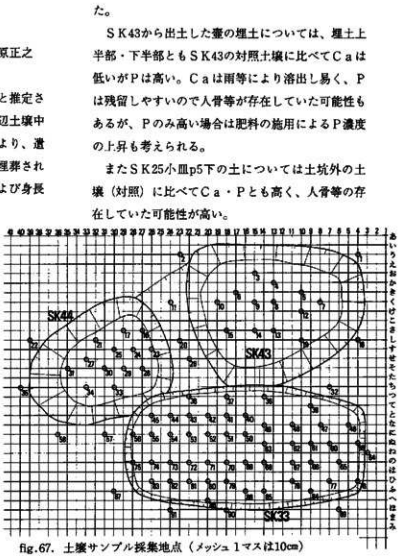


fig.67. 土壌サンプル採集地点（メッシュ 1マスは10cm）

No	試料名	Ca (ppm)	P (ppm)	No	試料名	Ca (ppm)	P (ppm)
1	う－4	352	1317	53	〃－22	211	1409
2	〃－23	211	1329	54	〃－24	129	1144
3	お－15	222	691	55	〃－26	145	1494
4	か－13	129	780	56	〃－28	157	1336
5	き－10	124	910	57	〃－31	129	1459
6	〃－17	102	872	58	〃－36	145	1448
7	く－8	167	1144	59	ぬ－4	184	1306
8	〃－13	113	1121	60	〃－7	189	1286
9	〃－15	107	914	61	〃－9	167	1536
10	〃－19	91	1490	62	〃－11	162	1064
11	〃－24	134	1091	63	〃－14	205	1064
12	け－10	102	914	64	ね－3	189	1536
13	さ－13	140	853	65	の－6	172	1563
14	〃－15	113	983	66	〃－9	145	2089
15	〃－18	107	1279	67	〃－11	199	2077
16	〃－27	140	741	68	〃－14	238	1628
17	〃－29	86	691	69	〃－16	194	1367
18	し－4	151	1306	70	〃－18	216	1133
19	〃－10	118	768	71	〃－20	227	1125
20	〃－23	167	1271	72	〃－22	243	1425
21	〃－32	86	672	73	〃－24	205	1094
22	〃－39	172	1302	74	〃－26	113	1068
23	す－26	151	591	75	〃－28	172	1171
24	〃－28	118	703	76	ひ－4	297	1336
25	〃－30	107	737	77	〃－7	281	1651
26	せ－22	184	845	78	〃－11	281	1678
27	〃－33	86	822	79	〃－18	265	1079
28	そ－27	96	791	80	〃－20	129	1190
29	〃－29	59	1114	81	〃－22	140	1206
30	〃－31	69	952	82	〃－24	107	995
31	〃－35	80	1079	83	〃－26	91	1164
32	ち－7	222	1398	84	ふ－9	162	1889
33	〃－30	80	1263	85	〃－14	199	1459
34	〃－33	75	941	86	〃－16	172	1194
35	〃－40	172	1237	87	〃－30	102	1452
36	つ－14	157	1002	88	へ－20	205	1379
37	〃－18	249	1467	89	ほ－6	172	1628
38	〃－22	211	1306	90	〃－18	222	1475
39	て－9	162	1444	91	〃－24	124	1509
40	と－16	232	1129				
41	〃－18	249	1313				
42	〃－20	314	1379				
43	〃－22	184	1025				
44	〃－24	162	1352				
45	〃－26	157	998				
46	な－5	199	1087				
47	〃－8	216	883				
48	〃－10	238	1352				
49	に－14	238	902				
50	に－16	276	1175				
51	〃－18	265	1398				
52	〃－20	276	991				

Ⅱ．分析結果一覧（遺物）

No	試料名	Ca (ppm)	P (ppm)
101	表埋土上段	129	1455
102	〃 下段	134	1536

No	試料名	Ca (ppm)	P (ppm)
103	ＳＫ25埋土	379	1498
104	ＳＫ25外の土	319	887
	平均値	±170	1200
	（標準偏差値）	±62	302

（注）Ca，Pの濃度は風乾土当たりで表示。

tab. 12　土壌分析結果表

3．鉄滓に関する分析調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

1．はじめに

今回の分析調査では、まず中世の遺跡から出土した鉄滓やその他の関連遺物に付着していたものの成分を把握する。一方、鉄滓のなかには繊維状の物質を含むものが認められ、鉄滓が溶解状態で放棄された際、周辺に放置されたり繁殖したりしていた草本類がその内部に取り込まれたものと見られている。そこでこれらの繊維部分を対象に当時の植生等を推定することを試みる。

2．分析資料と手法

1）鉄滓・るつぼ付着物の成分確認

鉄滓等の成分を定性的に確認するため、鉄滓9点（資料番号1～9）、るつぼ1点（資料番号10）の計10点について、ＥＰＭＡによる定性分析を実施し、遺跡・時代による成分差が存在するか否か検討する。

2）鉄滓中の繊維

鉄滓に繊維が取り込まれた経緯については、溶解状態にあるうちに近辺に成育する草本類が混入した可能性や、燃料材の一部として利用された稲ワラなどが混入した可能性など様々な状況が想定できる。いずれにしても、イネ科植物が混入しているのであれば、植物珪酸体が遺存しているものと予想されるところから、繊維が顕著に混入する楠ノ木遺跡ＳＫ36出土の２試料について繊維のみを抽出し、植物珪酸体分析を実施して当時の植生等に関する情報を得ることを試みる。

3．鉄滓に含まれる植物繊維の珪酸体分析

1）分析試料

繊維を含む鉄滓（試料番号１～４）の観察結果を示す（tab.13）。

試験番号	状　況
1	表面に繊維が薄く付着する部分と樹木の節部状のものが埋没している部分が認められる。繊維は、酸化鉄の付着が著しい。
2	表面に繊維が薄く付着する部分が認められる。また、酸化鉄の付着が著しい樹木の表皮状のものが付着する。
3	鉄滓内部に炭化物が混入する。
4	表面に、酸化鉄の付着が著しい樹木の表皮状のものが付着する。

tab. 13　鉄滓中の繊維の観察結果

これらの試料のうち、繊維の保存が比較的良かったNo. 2・4から採集した繊維を分析試料とした。

2）分析方法

鉄滓から繊維を分離する。繊維内に残留する有機物を過酸化す水素水（H0）で分解し、表面に付着する酸化鉄を塩酸（HCl）で除去する。続いて、繊維を水洗して酸を除去し乾燥する。

これを電気炉内で500～600℃、１時間を目安に燃焼させ、灰化する。灰化試料を封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡（簡易偏光装置装備）下で観察する。その間に、出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）と葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）および樹木起源の植物珪酸体を近藤・佐藤（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

3）結果と考察

分析結果をtab.14に示す。

灰化試料中には、珪化した植物繊維が多く認められるが、その保存状態は悪い。植物珪酸体は試料番号２で栽培植物とされるイネ属短細胞列と稲籾に形成されるイネ属顆珪酸体が、試料番号４でイネ属顆珪酸体が検出されただけである。このことから、繊維の一部はイナワラであったと思われる。また、繊維には樹木の表皮のように見えた（tab.13）ものもあることから、イネ属以外の植物も鉄滓中に取り込まれていたと考えられる。

ところで、鉄滓中の繊維は鉄滓が溶解状態にあるうちに周辺の草本類がその内部に取り込まれたものと見られている。しかし、取り込まれた経緯については、遺跡周辺の同時期に堆積した土層について調査していないので、近辺に成育する草本類が混入した可能性や燃材料の一部が混入した可能性など様々な状況が想定できるものの確定はできない。ただし、ＳＫ36が鉄器鍛造に関連する遺構である可能性を考慮すれば、近辺の稲作耕作地に鉄滓を放棄したとは

試料番号	検出された種類	計測数
2	イネ族イネ属（短冊胞列） イネ族イネ属（顆珪酸体）	1 1
4	イネ族イネ属（短冊胞列）	1

tab. 14　鉄滓中の繊維の同定結果

考えにくく、むしろイネ属などの植物が燃材料として利用されていた可能性が考えられる。燃材料の調査を行った例として、千葉県印旛村平賀遺跡群から検出された炉跡焼土を対象とした調査（大越1985）がある。これによれば、古墳時代から奈良時代には住居内の炉では燃材料としてススキ属やイネ属が多く使用されていたと推定されている。イネ属などの草本類を鉄器鍛造時の燃材料に利用していたと考えるには火力の点で問題があろうが、薪などの焚きつけ用に利用されたことは考えられる。

引用文献

近藤錬三・佐藤隆「植物珪酸体分析，その特性と応用」『第四紀研究』25　（1986）P31～64

大越昌子「プラント・オパール分析」（『平賀遺跡群発掘調査報告書』平賀遺跡調査会　1985　P803～815）

4．鉄滓の成分定性分析

1）試料

分析対象としたのは、楠ノ木遺跡4点（試料番号1～4）・中貝戸遺跡1点（試料番号5）・蚊山遺跡1点（試料番号6）・東野B遺跡1点（試料番号7）・家野遺跡2点（試料番号8～9）の鉄滓と、榎長遺跡から出土したるつぼ付着物1点（試料番号10）で、合計10点である。

2）分析方法および分析装置

試料番号1～9については、試料が塊状であったため、その一部を粉砕した後、金属光沢のみられた部分について分析を実施した。また、試料番号10については、黒色付着物についてその表面から分析を実施した。

X線マイクロアナライザー（EPMA）による定性分析は、以下の条件で実施した。

装置：日本電子社製　JCXA－840型

加速電圧：20KV

試料電流：8×10^{-8}A

プローブ径：50μmφ

分析範囲：$_{5}B\sim_{92}U$

前処理：金蒸着（試料番号10のみ実施）

3）結果

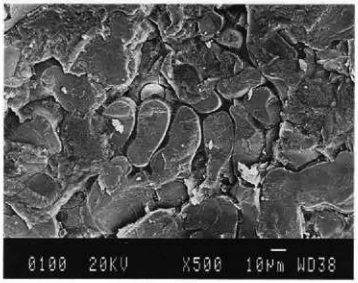
結果から、試料番号1～8についてはその組成は類似しており、鉄（Fe）・酸素（O）・が強く検出された他、アルミニウム（Al）やケイ素(Si)・カルシウム(Ca)・カリウム(K)などを中位に検出した。また、分析位置の電子顕微鏡（SEM）像にみられるように、(pic. 3～4)、その破断面は各試料とも円形の粒子が集合している様子が窺われた。

試料番号9では定性分析の結果、鉄（Fe）・酸素（O）の他、ケイ素（Si）が強く検出され、他にアルミニウム（Al）が中位に検出された。分析位置のSEM 像も試料番号1～8のそれと異なり、数μmの細かい粒子が溶け込んでいるような性状であった。

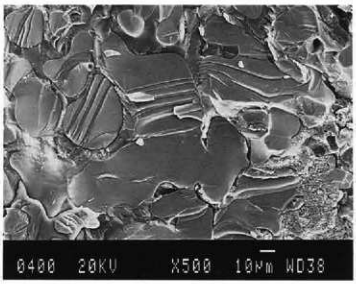
試料番号10の黒色付着物については、分析結果から鉄(Fe)・酸素(O)および銅(Cu)の他アルミニウム(Al)・カルシウム(Ca)・ケイ素(Si)・チタン(Ti)などが主に含まれる成分であることが判った。

試料	楠ノ木				中貝戸	蚊山	東野B	家野		榎長
強度	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
強く検出された元素	Fe, O	Fe, O	Fe, O	Fe, O	Fe, O	Fe, O	Fe, O	Fe,O	Fe, O, Si	Cu, Fe, O
中位に検出された元素	Al, Ca, K Si	Al, Si	Al, Ca, K, Si	Al, Ca, Si	Al, Si	Si	Al, Ca, K, Si.	Al, Si, Ti	Al	Al, Ca, Si Ti
弱く検出された元素	Mg,Mn,Na P, S, Ti	C, Ca, K, Mg,Na,Ti	Mg,Mn,Na, P, S, Ti	K, Mg, Na, P, Ti	Ca, K,Mg, Mn,Na,Ti	Al, Ca, Cl, K,Mg,S,Ti	Mg,Mn,Na P, Ti	Ca, K, Mg, Mn, Na	Ca,K, mG, Na, Ti	C,Cl,K,Mg Mn,Na,P,S

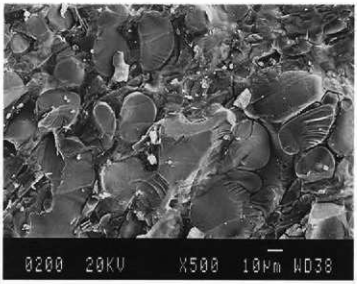
tab. 15　鉄滓の成分定性分析結果



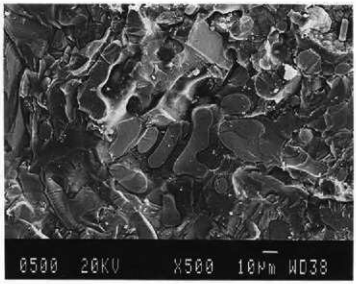
楠ノ木遺跡　試料番号1　×500



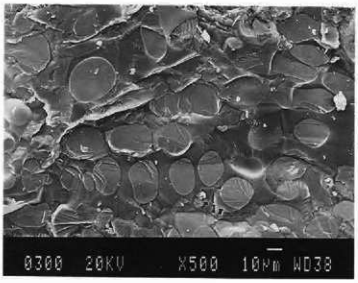
楠ノ木遺跡　試料番号4　×500



楠ノ木遺跡　試料番号2　×500

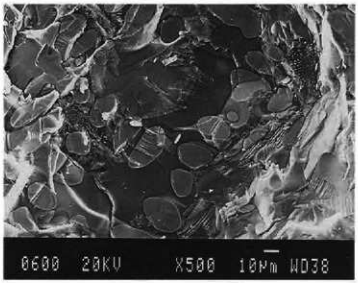


中貝戸遺跡　試料番号5　×500

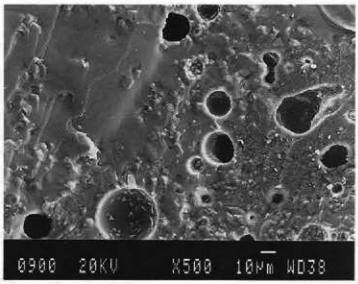


楠ノ木遺跡　試料番号3　×500

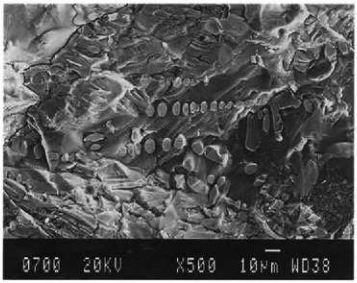
pho. 3　鉱滓の電子顕微鏡写真 (1)



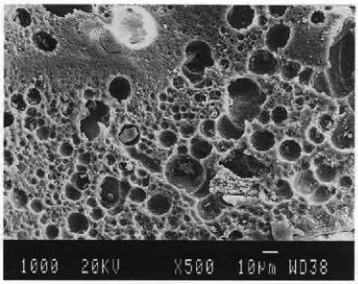
蚊山遺跡　試料番号6　×500



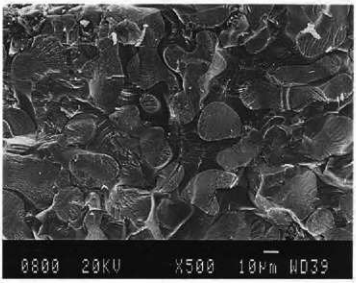
家野遺跡　試料番号9　×500



東野B遺跡　試料番号7　×500



榎長遺跡　試料番号10　×500



家野遺跡　試料番号8　×500

pho. 4　鉱滓の電子顕微鏡写真　(2)

4．中・近世土師器胎土分析調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

1．はじめに

本分析は中世土師器研究の一環として、土器胎土の側面から情報を提供し、その検証の一部を担うものである。本分析では、土器の特徴として胎土中に含まれる細砂粒径の重鉱物の組成を用いる。この重鉱物組成は胎土全ての特徴ではないが、胎土の由来や分類を考える上で良い指標になり得る。重鉱物組成を指標とした胎土の特徴を客観的に捉えることを今回の主要課題とした。

2．分析方法

土器片を鉄乳鉢を用いて粉砕し、水を加え超音波洗浄装置により分散、#250の分析篩により水洗、粒径1／16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた1／14mm～1／8mmの粒子をテトラブロモエタン（比重約2.96）により重液分離、重鉱物のプレパラートを作製し、偏光顕微鏡下にて同定した。同定の際、斜め上方から落射光下で黒色金属光沢を呈するものを不透明鉱物とし、それ以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とした。

3．分析結果

全体的に処理後に得られた重鉱物砂分が非常に少なく、目標とする同定粒数の250 粒を数えた試料は全体の約1／4に相当する23点しかなかった。また、100粒以上の試料を合わせても約半数の42点にしかならなかった。

100粒以上を越えた試料では、「その他」とした変質粒子の多い試料がほとんどであった。「その他」を除くと全体的に主要な鉱物は、角閃石とジルコンである。傾向としては角閃石が多く、それにやや少量のジルコンが伴うという組成を示す。100粒を数えなかった試料でも出現した鉱物は角閃石とジルコンが多かった。また、試料によっては、少量の斜方輝石や単斜輝石、黒雲母や緑レン石などを伴う。各試料の重鉱物組成をtab.17・18に示す。

5．考察

(1) 分析結果から読み取れる胎土の性質

今回試料とした土師器胎土の特徴の第一は、同定粒数100粒未満の試料、すなわち細砂粒分の少ない試料が比較的多かったことである。この原因として、提供された土師器片そのものの量が少なかったこと、および細砂粒径の重鉱物がもともと多く含まれていない胎土であることの両方が考えられる。今回は、同定粒数100粒以上を数えた試料の処理量の最小は2.7ｇで、平均は6.0ｇであった。これらの値を一の目安とするならば、同定粒数100粒未満の試料のうち、処理量が2.7ｇより少ない試料は試料の量の不足、6.0ｇより試料は胎土そのものに重鉱物が多く含まれていない、そして2.7ｇ～6.0ｇの試料は両者の要因によって、このような結果になったと考えられる。さらに今後の検討が必要であるが、現時点でこれらの土師器の胎土の性質として捉えておきたい。

特徴の二番目は、「その他」と分類した細砂粒分が多いことである。「その他」は、顕微鏡下では不透明で不定形の塊状粒であり、落射光下では暗灰褐色、褐色色などの色を呈する。その外見的特徴から、焼成にともなって生成した変質粒子であると考えられる。変質粒子からその地質学的背景を窺うことはできないが、変質粒子の多いことも胎土の特徴のひとつとなり得るものと考えられる。すなわち、これまでの分析例からみて、一般的に第四紀の火山噴出物起源の砕屑物が豊富なため自然堆積物中に混入する重鉱物の遊離結晶も多い関東以北の東日本の遺跡から出土する縄文・弥生・土師の各土器の胎土は、同定可能な重鉱物粒が比較的多い傾向を示し、一方、第四紀の火山噴出物が少なく、第三紀以前の基盤岩の風化砕屑物が多い東海～近畿地方の各土器は「その他」の多い傾向にある。いずれにしても今後、分析例の蓄積を持って再検討する必要があろう。

特徴の三番目は、同定された鉱物の中では角閃石とジルコンが多いということである。これらを含む重鉱物組成から、次のような地質学的背景を考えることができる。

試料中に認められた鉱物の多くは、風化の影響を受けているものが多いことから、岩石の風化砕屑物に由来すると考えられる。ただし、試料番号52などに認められた角閃石は、比較的新鮮で第四紀の火山噴出物に由来する可能性もある。

No.	遺跡名	遺構名	報告No.	実測No.	時期	分類	器種	No.	遺跡名	遺構名	報告No.	実測No.	時期	分類	器種
1	楠ノ木遺跡	ASK65	52—31	377	平安末	仮A	甕	44	楠ノ木遺跡	CSK12	64—33	1	南北朝？	3—a	鍋
2	楠ノ木遺跡	ASK9	52—38	505	平安末	Ⅰ期	Ⅲ	45	楠ノ木遺跡	CSK5	65—1	5	南北朝？	3—a	鍋
3	楠ノ木遺跡	ASE1	53—2	316	鎌倉	Ⅱ期	Ⅲ	46	楠ノ木遺跡	CSK4	65—7	3	室町	3—b	鍋
4	楠ノ木遺跡	ASE1	53—3	320	鎌倉	Ⅱ期	Ⅲ	47	黒土遺跡	ⅢSK3		9	平安末	(仮)A	甕
5	楠ノ木遺跡	ASE1	53—4	325	鎌倉	Ⅱ期	Ⅲ	48	黒土遺跡	ⅢSK3		6	平安末	(仮)A	甕
6	楠ノ木遺跡	ASE1	53—12	314	鎌倉	1—b	鍋	49	黒土遺跡	Ⅲ掘立1		10	鎌倉前半	1～b	鍋
7	楠ノ木遺跡	ASE1	53—13	313	鎌倉	1—b	鍋	50	黒土遺跡	Ⅲ掘立1	—	—	鎌倉前半	1～b	鍋
8	楠ノ木遺跡	ASD12	53—14	249	鎌倉	1—b	鍋	51	黒土遺跡	ⅡSD1		56	江戸以降	5	焙烙
9	楠ノ木遺跡	ASK17	53—21	217	鎌倉	1—b	鍋	52	黒土遺跡	ⅡSD1		57	江戸以降	5	焙烙
10	楠ノ木遺跡	At24pit1	54—4	305	鎌倉後半	Ⅱ期	Ⅲ	53	若宮遺跡	ASK4	18	49	室町後半	4—d	鍋
11	楠ノ木遺跡	At24pit1	54—6	308	鎌倉後半	2—b	鍋	54	若宮遺跡	ASK4	19	65	室町後半	4—d	鍋
12	楠ノ木遺跡	ASK39	54—7	259	鎌倉後半	Ⅱ期	Ⅲ	55	若宮遺跡	ASK24	23	8	室町後半	Ⅳ期	小皿
13	楠ノ木遺跡	ASK39	54—9	257	鎌倉後半	2—b	鍋	56	若宮遺跡	ASK24	31	11	室町後半	Ⅳ期	茶釜
14	楠ノ木遺跡	ASK37	56—11	422	室町	Ⅲ期	小皿	57	若宮遺跡	ASK24	32	12	室町後半	Ⅳ期	茶釜
15	楠ノ木遺跡	ASK37	56—15	419	室町	Ⅲ期	鍋	58	若宮遺跡	ASD3(南)	48	42	室町後半	4—	鍋
16	楠ノ木遺跡	ASK37	56—16	420	室町	Ⅲ期	鍋	59	若宮遺跡	ASD3(北)	65	24	室町後半	Ⅳ期	羽釜
17	楠ノ木遺跡	ASD24	56—25	334	室町	Ⅲ期	羽釜	60	若宮遺跡	ASK34	86	68	室町後半	Ⅳ期	Ⅲ
18	楠ノ木遺跡	ASD3	58—27	365	室町	Ⅲ期	羽釜	61	若宮遺跡	ASK11	103	59	室町後半	Ⅳ期	甕
19	楠ノ木遺跡	ASK1	59—24	391	江戸以降	5	鍋	62	若宮遺跡	CSD1	112	113	室町後半	4—	鍋
20	楠ノ木遺跡	BSK1	60—13	153	平安末	仮A	甕	63	若宮遺跡	CSD1	127	117	室町後半	4—c	鍋
21	楠ノ木遺跡	BSK1	60—14	145	平安末	仮A	甕	64	若宮遺跡	CSD1	—	—	室町後半	Ⅳ期	Ⅲ
22	楠ノ木遺跡	Bi36pit1	61—1	173	鎌倉後半	Ⅱ期	小皿	65	家野遺跡	土坑46		1—2	室町後半	4—	鍋
23	楠ノ木遺跡	BSK4	61—12	158	室町後半	Ⅲ期	小皿	66	家野遺跡	土坑46		13—3	室町後半	4—c	鍋
24	楠ノ木遺跡	BSK43	61—30	79	南北朝？	Ⅲ期	Ⅲ	67	家野遺跡	土坑46		3—2	室町後半	Ⅳ期	羽釜
25	楠ノ木遺跡	BSK43	61—31	76	南北朝？	Ⅲ期	鍋	68	下川遺跡	SK1		17—1	室町後半	4—	鍋
26	楠ノ木遺跡	BSK25	61—40	125	南北朝？	Ⅱ期？	鍋	69	下川遺跡	SK1		18—1	室町後半	Ⅳ期	羽釜
27	楠ノ木遺跡	BSK5	62—7	87	室町	Ⅲ期	小皿	70	下川遺跡	SD1		5—6	室町後半	Ⅳ期	Ⅲ
28	楠ノ木遺跡	BSK5	62—11	558	室町	Ⅲ期	Ⅲ	71	楠ノ木遺跡	BSK44		99	鎌倉後半	Ⅱ期	小皿
29	楠ノ木遺跡	BSK5	62—18	82	室町	3—b	鍋	72	楠ノ木遺跡	ASK20	—	—	平安末	Ⅳ期	Ⅲ
30	楠ノ木遺跡	BSK5	62—20	84	室町	3—b	鍋	73	外山遺跡	土器溜り1	—	H—1	近世～近代		茶釜
31	楠ノ木遺跡	BSK5	62—21	555	室町	3—a	鍋	74	外山遺跡	土器溜り1	—	H—2	近世～近代		焙烙
32	楠ノ木遺跡	BSK5	62—27	98	室町	Ⅲ期	羽釜	75	外山遺跡	土器溜り1	—	H—3	近世～近代		焙烙
33	楠ノ木遺跡	BSK30	63—3	119	室町後半	4—c	鍋	76	外山遺跡	土器溜り1	—	H—4	近世～近代		焙烙
34	楠ノ木遺跡	BSK11	63—17	139	室町後半	4—c	鍋	77	外山遺跡	土器溜り1	—	H—5	近世～近代		焙烙
35	楠ノ木遺跡	BSK11	63—18	136	室町後半	4—b	鍋	78	北野遺跡	SF54		H—6	奈良		甕
36	楠ノ木遺跡	BSD8	63—28	118	室町後半	Ⅳ期	羽釜	79	北野遺跡	SF54	—	H—7	奈良		甕
37	楠ノ木遺跡	CSK11	64—16	72	南北朝？	Ⅲ期	Ⅲ	80	東海道遺跡		13	94	室町後半	4—c	鍋
38	楠ノ木遺跡	CSK11	64—17	70	南北朝？	Ⅲ期	Ⅲ	81	東海道遺跡		16	63	室町後半	4—c	鍋
39	楠ノ木遺跡	CSK10	64—19	46	南北朝？	Ⅱ～Ⅲ期	Ⅲ	82	東海道遺跡		24	29	室町後半	4—a	鍋
40	楠ノ木遺跡	CSK10	64—22	44	南北朝？	2—c	鍋	83	東海道遺跡		27	28	室町後半	4—b	鍋
41	楠ノ木遺跡	CSK10	64—23	45	南北朝？	2—c	鍋	84	伊勢寺遺跡	Mb7SE1			南北朝	Ⅲ期	羽釜
42	楠ノ木遺跡	CSK12	64—31	2	南北朝？	Ⅲ期	Ⅲ	85	伊勢寺遺跡	Mb7SE1			南北朝	3—a	鍋
43	楠ノ木遺跡	CSK12	64—32	6	南北朝？	3—a	鍋	86	伊勢寺遺跡	Mb7SE1			南北朝	3—a	鍋

tab. 16　胎土分析試料一覧表

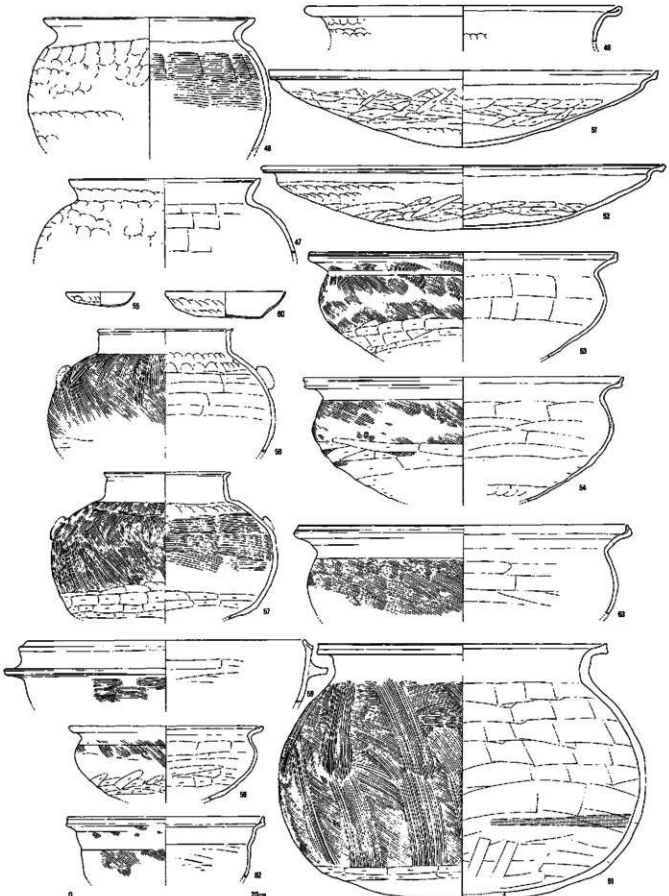


fig.68. 胎土分析資料実測図(1) (scale=¼) ※番号は試料番号と対応する。

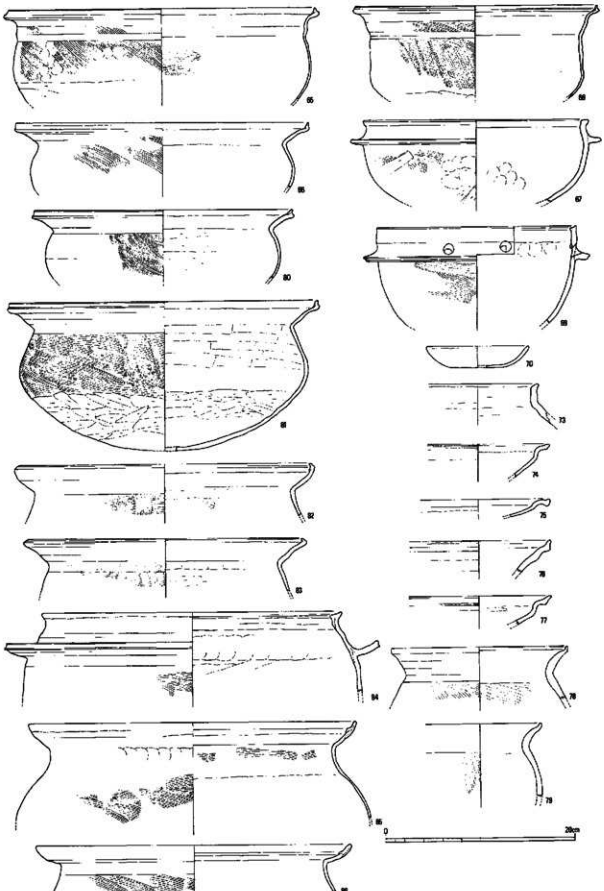


fig.69. 胎土分析試料実測図(2)（樹ノ木遺跡を除く）（scale＝¼）

三重県の概略的な岩石分布は、まず中央構造線のすぐ南側に三波川変成帯の結晶片岩や緑色岩が分布、中央構造線の北側には領家カコウ岩や領家変成帯の片麻岩や角閃石などが分布する。角閃石はカコウ岩や角閃岩に含まれる。また、ジルコンはカコウ岩に含まれることが比較的多い。黒雲母はカコウ岩や片麻岩に多く含まれる。酸化角閃石は普通は火山岩中に含まれることが多い。ただし、角閃石を約800℃で加熱すると酸化角閃石に変化することが知られている。したがって、土器の焼成により胎土中の角閃石が酸化角閃石に変化する可能性がある。つまり、これらの酸化角閃石は角閃石から変化した結果である可能性が考えられる。以上のことから、今回の試料の重鉱物組成は、三重県北半部の地質学的背景と調和的といえる。

(2) 胎土の特徴と土師器の時代について

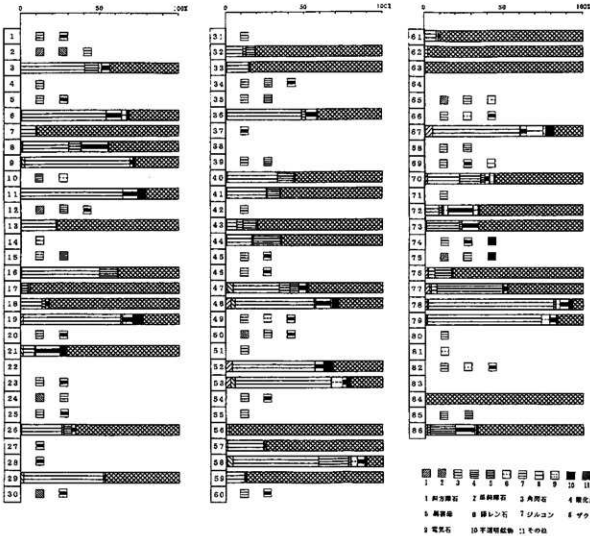
分析試料とした土師器片を器種別・時代別に並べ交えたものをtab.19に示す。今回の試料は点数が少ない上に鉱物組成を求めることのできた試料がさらに少なかったことから、土師器の時代と胎土との対応関係について議論するには、やや制約もある。ただし、得られた分析結果から、次のような傾向を認めることができた。

今回の試料の重鉱物組成の特徴は、「その他」が多いことと角閃石とジルコンが多く認められることである。この特徴は、奈良時代から江戸時代にわたって認められる。前述のような地質学的背景を反映すると考えると、今回の土師器胎土が単味で使用されたとすれば、奈良時代から江戸時代まで同じ地質学的背景を持つ地域で採集されたことが考えられる。このことは、時代を越えてある一定地域でこれらの土師器が製作された土器の一群が存在することを示唆する。

このようないわば時代を越えた共通性が胎土に認められる一方、区分された時代別にも胎土の特徴が明瞭ではないが認められる。今回の分析では奈良時代の試料は2点しかないが、その2点とも非常によく似た胎土の組成を示す。基本的には、角閃石とジルコンの組成であるが、これに少量の緑レン石を伴うことが特徴的である。ただし、類似の組成が室町時代後半の試料である試料番号53と58にも同様の特

試料番号	重鉱物組成																			試料重量(g)当量
	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	黒雲母	褐色	赤褐色	緑レン石	ジルコン	ザクロ石	リン灰石	電気石	不透明鉱物	その他	
1				23	1				10					1	17	52
2			3	1	2										16	21
3				61	19			3	8						86	181
4				3											6	7
5				10					3		1			8	8	41
6			1	93					15	5				3	48	154
7				24					3					1	224	250
8		2	1	73	19			1	42					1	111	250
9		1	8	109					3					2	42	151
10					1			1					1			3
11				102					15					6	32	156
12		3			3				12				1		23	41
13				55					3						193	250
14										1	1					1
15				30	4										50	84
16		1		123		25	2	1							97	250
17				13	10		4								223	250
18				34	5				5	1					205	250
19		3		126	2				14	1			33	47	208	
20				3					1						10	
21			2	10	1				21					5	95	138
22															1	1
23				34	2		1		12					13	33	86
24			1	1											6	11
25		1	1	18					10					6	26	64
26			1	63	3	3	10		6						164	250
27									1						7	8
28									1						2	3
29			2	54					1						53	113
30			1						3						5	9
31				11											16	27
32	1		1	37	5	2	12		1						201	250
33			1	21											125	149
34				5	2				6						8	21
35				1			1									2
36		1	1	104	6				18	1					91	219
37									3						7	10
38															1	1
39				1	2										2	5
40			3	80		17	9		3						139	250
41			2	52	1	13	4		1						133	206
42				2											3	5
43			3	16	10	6	18		3		2			1	193	250
44			2	40	3	26	18							1	161	250
45			4	49	1				10					4	291	364
46			1	22	1				4						19	47
47		1	4	31	7		6		5		1			1	49	105
48		4	3	68		1			11	1				8	33	117
49		3	1	30				6	8					5	38	86
50		2	4	12				1	7	1				9	16	52
51				35									1	2	32	90
52	1	7		85					9					9	51	162
53		8	7	163	1			17	7					8	32	239
54		4		34	2				8					4	42	
55					1										1	2
56			1	4											245	250
57		3		57				1	3						186	250
58		3	9	136	48	1	3	10	17					3	26	250
59				19	1			1							136	159
60				1					3						4	8
61		1		18				3	3						225	250
62				8											244	250
63				1											249	250
64															1	2
65		1		4				1							8	12
66		1	5	50	1			7	6						180	250
67		12		177	1				10	26			4	13	46	250
68		1		9	3				1						2	18
69			3	10	1		1	1	15	5			1	11	232	280
70	1	2		32	14		3		3				3	1	88	187
71				1											1	2
72				9	2	1		3	18	3				1	86	161
73				1	23	1	1		11						72	199
74				10				1	4					3	66	73
75		3		42	1	1								3	3	53
76		4	1	19	27			1	1						208	250
77		6	1	8	89			1	3					1	102	214
78		3	2	196	3			7	14	1				5	17	250
79		1	1	181				13	10					3	41	250
80				10	1	1		1	1						4	18
81				1	1			2	1						3	8
82				10	1			3	2					1	4	20
83	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
84															250	250
85				2	7	1	11	1	3					2	40	48
86				1	2		16		12	1				1	47	100

tab.17　土器胎土重鉱物組成



tab.18　土器胎土重鉱物組成ダイアグラム　※棒グラフになっていないものは同定粒数100粒未満のもので、その未な出現鉱物を棒グラフと同様な凡例で示している。

徴が認められることから、時代的変化とともに粘土採取地および製作地の地域的な条件が介在している可能性がある。平安時代末および鎌倉時代前半の試料は、今回の試料に共通してみられる特徴である角閃石とジルコンの組成が最も顕著である。さらに、試料番号21・72・8のようにジルコンの量比が高いものが存在することや、試料番号72や6のようにザクロ石を少量伴う試料のあることも、この時代の特徴といえる。鎌倉時代後半、南北朝室町時代および室町時代後半の試料は全体に「その他」が多い。また、角閃石とジルコンの組成は比較的少なく、試料番号40・41・43・44・16のように角閃石と黒雲母という組成が特徴的である。江戸時代の試料は、角閃石とジルコンの組成に少量の不透明鉱物を伴う組成（試料番号19・52）と酸化角閃石が特徴である組成（試料番号76・77・73）との2群が認められる。

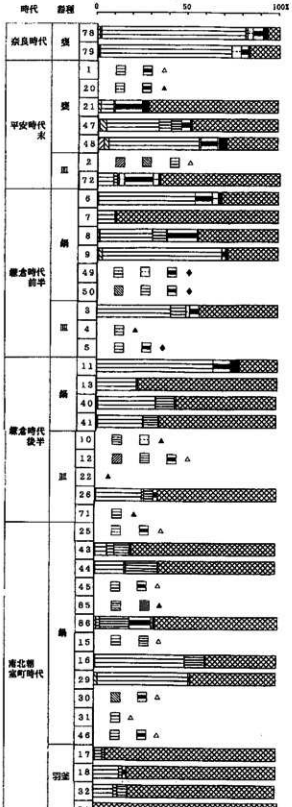
以上の時代別分類のほかに、今回の試料では北伊勢地域のものと考えられる試料が3点（試料番号67～70）がある。試料番号67は角閃石とジルコンの他に、少量ではあるがザクロ石が他の試料と比べて多いのが特徴である。試料番号69は100粒を数えることができなかったが、試料の量からみてもともと重鉱物の少ない胎土である可能性がある。また、少ない中でもザクロ石が認められた。試料番号70は酸化角閃石と微量の電気石を含む。これら3点はいずれも南伊勢系の土師器には認められない特徴を示す。

以上に述べた各時代別および北伊勢に認められた胎土の特徴は現時点で非常に限られたデータから把握したものである。今後、南伊勢系の土師器については比較的大きい破片を選択し、各時代のデータを蓄積するとともに、北伊勢の土師器に関しても同様の分析事例を蓄積して比較検討を重ねることが必要

と考える。

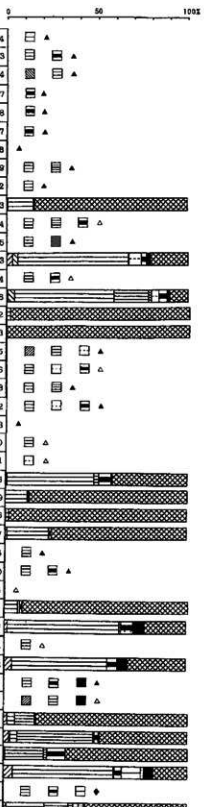
＜参考文献＞

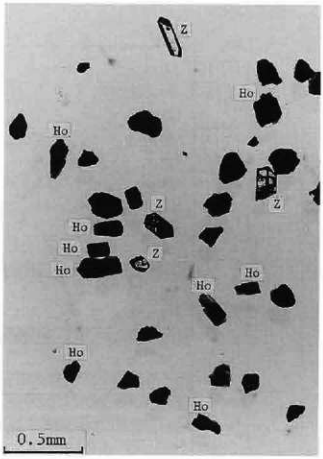
伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Miehistory』vol.1 1990）



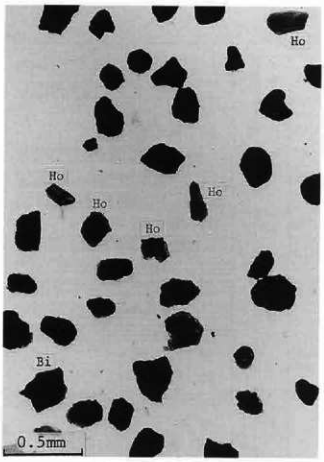
＊遺物の凡例は図1に同じ。同定数値100超赤鉄のものについては次のような分類をした。
▲：処理量が1.7g未満の試料。
△：処理量が1.7g以上6.0g未満の試料。
◆：処理量が6.0g以上の試料。

tab.19　土器胎土重鉱物組成ダイアグラム（時期別）

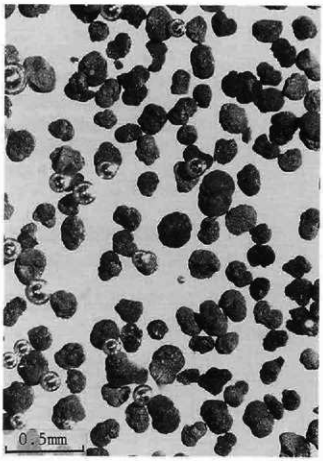




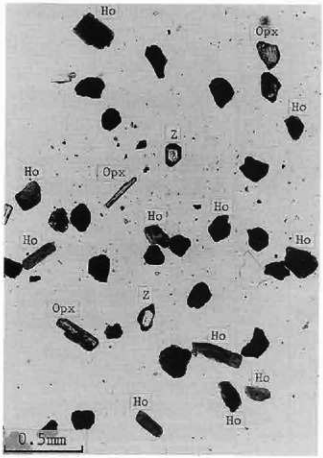
試料番号８（鎌倉時代前半）



試料番号40（鎌倉時代後半）



試料番号63（室町時代後半）



試料番号52（江戸時代）

Opx：斜方輝石，Ho：角閃石，Bi：黒雲母，Z：ジルコン

pho.5　土器胎土中の重鉱物顕微鏡写真

Ⅵ. 調査のまとめと検討

今回の調査によって楠ノ木遺跡の性格の一端が明るみにでることとなった。調査によって得られた成果は単に楠ノ木遺跡のみに関したことではなく、問題は「中世」という時代の持つ特質に関わってくるようなこともあると思われる。その持つ意味が全国的なものかどうかはこれからの課題であろうが、今回の調査によって得られたことから当遺跡の位置づけを行い、報告の責を果たすこととしたい。

1. 楠ノ木遺跡、その集落のあり方

A・B・C地区を通じておおよそ「中世」といわれる時期の遺構・遺物を確認したが、それは必ずしも全時期を通じて各地区毎で安定しているわけではない。全体的には平安時代末に形成が始まり、室町時代後半に途絶えるという事実がある。ある時期のものが比較的多く確認できる状態を「盛行時期」と考えるならば、各地区の遺構が示す盛行時期は3地区毎で異なっているといえる。A地区では平安時代末から室町時代前半（Ⅰ期～Ⅲ期 後半）、B地区では平安時代末（Ⅰ期）・鎌倉時代後半（Ⅱ期後半）・室町時代（Ⅲ期後半～Ⅳ期）の3時期が断続的に(ただし、室町時代後半は南伊勢系土師器第4段階bないしはC型式までに止まる。)、C地区では鎌倉時代後半から室町時代前半（Ⅱ期後半～Ⅲ期後半）という状況にある。

このような盛行時期の差の意味を抽出するにはそれぞれの遺構の特性を考えておく必要がある。A地区のあり方は一定の「屋敷地」を示すものと考えてよいであろうが、B地区の特に東部分から南部分にかけては「墓地」を示すものである。C地区はA地区と同一視することはできないが、やはり居住地と考えて差し支えないであろう。

ここで確認しておかなければならないのは、Ⅱ章でも述べたように、当遺跡は谷に形成された独立性の高い集落跡であることである。すなわち、A・B・C地区という立地上の差はあるものの、全体としてひとまとまりの集落跡であることを再度確認しておきたい。

このことを重視してそれぞれの地区に認められる遺構群の傾向を見てみよう。

A地区では平安時代末（Ⅰ期）から室町時代前半（Ⅲ期後半）にかけての屋敷地が確認できた。B地区では鎌倉時代後半（Ⅱ期後半）から南北朝時代（Ⅲ期前半）のもの2棟と室町時代後半（Ⅳ期）の建物が確実なものとして確認できたが、棟方向がそれほど揃っていることもなく、規則性は明確でない。C地区では南北朝時代頃（Ⅱ期後半～Ⅲ期前半）の建物の単位が確認できたのみである。B地区では溝SD4やピット出土土器から平安時代末～鎌倉時代（Ⅰ期～Ⅱ期）の建物はおそらく存在するであろうし、C地区でも平安時代末～室町時代前半（Ⅰ期～Ⅲ期）の建物が存在する可能性は高い。しかし、A地区のような建物の継続性は存在しないと見做してよいであろう。

すなわち、A地区では土地占有的な建物群が確認できるが、室町時代後半には建物は認められなくなり、B・C地区では平安時代末～室町時代後半まで何らかの生活の痕跡が確認されるものの、恒常性のある占有的な建物群は構成されない、という状況が判明する。C地区においては2棟の建物が並列して構築されている状況が認められたが、継続的でないことからA地区に認められる状況と同様の性格と見做すことはできないであろう。同様なことはB地区のあり方についてもいえる。

これらのことは、楠ノ木遺跡がA地区に認められた占有的な建物群をひとつの核とした集落として存在していたことを示すものと考えられる。そしてA地区の建物群のうち占有性を持つ一群は「屋敷地」として把えることが可能かと考える。さらに地形的に大きく見れば、A地区周辺の平担地にこのような「核」となる別集団の屋敷地が想定でき、隣接する「大グルワ」という小字の存在もあながち無視できないものとなってくる。そして、B・C地区のような丘陵斜面部には付随的な集団の居住域が想定できるのではないかと考えられる。

またB地区で確認した墓地は丘陵斜面の西に立地

している。A地区でも南端に墓かと思われる遺構が存在している。簡単に比較はできないであろうが、丘陵東斜面に相当するC地区では墓と想定できる遺構は認められなかった。このことから当遺跡の東に隣接している丘陵斜面部には当該時期の墓域が設定されている可能性もあろう。B地区に確認された墓地が当遺跡群内のどの集団に属するものの墓であるのかは現状では確認しがたい。墓壙内出土遺物は小刀や陶器・土師器類のみである。小刀は中世の人々が日常的に用いていたものであることからこれを特殊なものとすることはできないであろう。その他の地域で認められる中世墓のように青磁椀などのいわゆる高級品は認められないことから付随的な集団の墓地である可能性の方が高いのではないだろうか。

2．屋敷地の展開 ── A地区を中心に ──

ここではA地区に認められた屋敷地の展開を時期毎に追ってみよう。時期の設定は前述したⅠ～Ⅳ期を用いることとする。

各時期の状況

Ⅰ期（fig. 70上）

区画溝では溝ＳＤ２・15が時期的に相当するようである。両者の溝は同一線上にあり、途切れが西側に認められる。出入り口であろうか。溝の南側に建物２・３・５が、北側に建物11が建造されている。さらに土坑ＳＫ13付近にも当該時期の建物の存在は充分に想定される。井戸

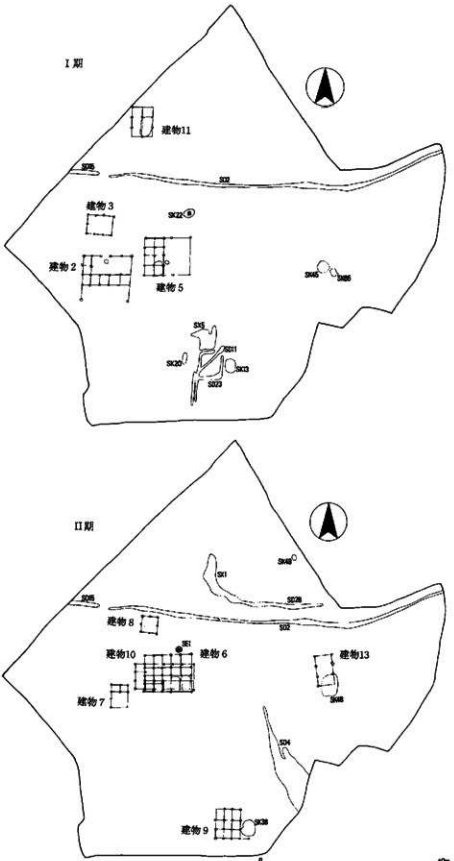


fig.70. A地区 Ⅰ・Ⅱ期主要遺構配置図（scale＝1/600）

はＳＫ22を想定したい。なお、溝の北側に建物が認められるのはこの時期のみである。なお、この時期に限って方形に溝を巡らす遺構（溝ＳＤ23）が存在している。東側拡張部分には目立った遺構は認められない。

南側建物群の主要建物は建物２・５が想定され、やや小規模なものとして建物３がある。井戸が建物５寄りに存在することは、建物２・３が建物５に付随することを示すものと考えることも可能であろう。さらに建物２と３がほぼ並行して建てられていることからは両者が密接な関係を持つことも想定できる。

Ⅱ期（fig. 70下）

区画溝では溝ＳＤ２・15が継続して機能していたものと考えられる。さらに落ち込みＳＸ１～２とそれに接続すると考えられる溝ＳＤ28もこの時期に存在していたものと考えられる。この時期には区画溝の南側にのみ建物群が認められるが、落ち込みＳＸ１を溝（区画溝）と考えればその東にも建物が存在していたことも想定できる。ただし、小規模なものであることは検出遺構や出土遺物から想定できる。落ち込みＳＤ４もこの時期に想定でき、遺構の方向からあるいは落ち込みＳＸ１と同じ遺構かも知れない。井戸ではＳＥ１が想定される。東側拡張部分では前時期と同様、目立った遺構は存在していない。

区画溝南側建物群は建物10・６・７・８・９・13が当該時期に相当し、建物９の近辺にはⅡ期後半の建物の存在が、ピット出土土器から推定される。また、次の時期に建物が多く建造されている建物13付近にはⅡ期後半の土器を出土したピットが他に数カ所存在している。次の時期とした建物１も当該時期から継続しているものである可能性がある。建物10と６は重なっており、この順序で建て替えられたものと考えられる。建物７・８は小規模なもので、特に建物８はその規模から通常の建物と考えることはできない。建物９は総柱の小規模なもので、倉庫の可能性もあるが、土坑ＳＫ38の存在やピットから青磁椀が出土していることから住居と考えるのが妥当であろう。井戸の位置からは前時期と同様、建物10・６付近の優位性が窺われる。

Ⅲ期（fig. 71）

区画溝では溝ＳＤ１・３・19の存在と、ＳＤ27が認められる。建物群は区画溝南側にのみ認められ、北側は遺構・遺物ともに皆無の状態であった。この時期には東側拡張部分にかなりの遺構が存在するようになり、中世墓のようなものも当該時期に存在する。井戸はＳＥ１・ＳＫ３・21が認められる。

建物群は前時期と同じ場所に構築される建物４の他、建物１が存在している。また建物12は全く確証はないが当該時期の建物群中の蔵の可能性を想定してこの時期に含めた。建物４は全時期を通じて最も規模の大きいものであるが、隣接する建物１も相当の規模がある。そして、建物４に伴う井戸がＳＫ３、建物１のそれがＳＫ21と、両者それぞれ井戸を持っていることも重要である。このことは、建物

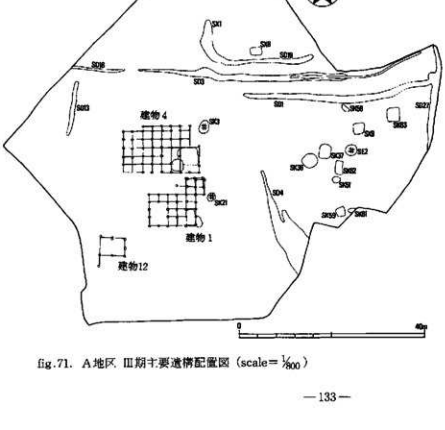


fig.71. Ａ地区 Ⅲ期主要遺構配置図（scale＝1/800）

1を使用していたものが以前の時期に認められた主要建物周辺の建物群とは異なり、質的に大きい存在であることを示している。

東側拡張部分に存在する遺構群は鉄製品鍛造に伴って形成されたものと考えられる。工房に相当する建物は建物13の他この地点に継続して建てられたであろうことがピットの数とピット内出土遺物から想定される。この建物群に伴う井戸はＳＥ２であり、埋土下層から鞴の羽口が出土していることから、鍛造作業に必要な水を補給するための井戸であるものとも考えられる。

Ⅳ期

この時期には全く遺構が認められない。廃絶していると考えるのが妥当であろう。

屋敷地の変遷から考えられること

Ⅰ期に形成を開始した当屋敷地は、当初主要建物である建物５と２を中心として構成されている。この時期においても、後の時期に継続して同じ地点に建物が構築される建物５が、井戸を有していることからその優位性が想定される。しかし、建物２の規模は建物５と比べても劣らず、Ⅰ期では２棟の主要建物が存在していたと見做せる。

このような状況はⅡ期に至って若干の変化が見られる。Ⅰ期に建物５が営まれた地点にはこの時期には建物10・６が認められ、継続的に建物が構築されている状況が確認できるが建物２・３が存在していた地点には建物７が認められるに止まる。Ⅰ期に建物跡が想定された溝ＳＤ23付近には建物９が構築されているが、全く同じ地点に構築されているのではないことが建物10・６が構築された地点とは異なる。また、前時期には建物が認められなかった地点に建物８が構築されている。

このことから建物10・６の建造されている地点は前時期の建物５から継続する主要建物（母家？）の用地と見做すことができよう。その他の建物は前時期と比べて規模が縮小したり全く別の地点に構築されたりしているものと考えられる。

Ⅲ期では主要建物の系列として建物４が存在する。この建物は全時期を通じて最も規 模の大きいものであることは既に触れたが、将筆されることとして比較的規模の大きい建物１の存在がある。建物４と建物１はともに井戸を持つものであり、このような近接する建物が別の井戸を持つことは以前には認められなかったことである。また、建物１はかつて建物が構築された建物２・３付近や建物９付近とは全く異なった地点に構築されていることも見逃せない。建物１のピットからは鞴の羽口が出土していることやこの時期に東側拡張部分に鉄製品鍛造に関する遺構が本格的に形成されていることから、鉄製品鍛造に携わる集団がこの時期に至って居住した建物として構築された可能性も想定される。なお、この集団が建物４を構築した集団と全く別のものではないことは、かなり近接して建物が構築されていることからも想される。

このようなことから、区画溝南側屋敷地内の建物の変遷を以下のようにまとめることができる。Ⅰ期には主要建物が２棟存在していたが、井戸の有無によって後に継続する建物（建物５）の相対的優位性が存在していた。Ⅱ期には主要建物はⅠ期において井戸を有していた建物に後続する１棟のみとなり、その周辺に３～４棟の建物が構築されていた。Ⅲ期においても主要建物の優位性は継続するが、それに隣接するかたちで新たな井戸を持 つ建物（建物１）が構築された。この時期には建物群の東側において鉄製品鍛造が本格化し、工房に相当するであろう建物が継続的に営まれたと考えられる。

さて、これらの建物群をすべて生活の場と考えるか、倉庫などの付属施設も存在すると考えるかによって、この屋敷地の位置づけは全く異なったものとなる。出土遺物は主要建物周辺で青磁・白磁などの出土が多いが、建物９近辺でもまま確認された。このような遺物が認められないのは建物３・７・８・12で、一般的な建物と見做し得ないのは建物３・８・12である。そのためここでは建物３・８・12は蔵の可能性があるものと想定しておきたい。

以上のことから区画溝南側の屋敷地は建物５・10・６・４を構築したものを主体とし、建物２・７、建物９、建物１、建物13などを構築したものがそれに付随する、全体として一集団を示すものと把えておきたい。

3．楠ノ木遺跡の歴史的意義

楠ノ木遺跡成立に関する問題点

楠ノ木遺跡は鍋（仮）A段階に成立している。実年代ではおよそ12世紀中葉頃であろうか。その他の遺跡の成立時期は中ノ垣外遺跡[11]が11世紀後葉頃、蚊山遺跡[20]が12世紀後葉頃と見做される。この100年ほどの時期には山茶椀の広域流通や総柱で根石を持つ掘立柱建物の出現など様々な事象が出現する。これらを基準として見ると、中世集落はこの100年ほどの間に成立を見るものが多い傾向にある。楠ノ木遺跡も大方の中世集落と同様、12世紀代に成立したものと見做される。

楠ノ木遺跡の性格

地理的立地の点からは、当遺跡は3方を丘陵に囲まれた、かなり矮小な土地に位置しているという事実がある。この立地は第Ⅱ章で述べたように、現山神・宮古集落の占地と共通するものである。これは付近の蚊山遺跡や中ノ垣外遺跡のように段丘上の平坦地に立地し、集落の展開が山側以外の3方に可能な立地と比べて、閉鎖性が強く、集落の展開が行いにくい立地であるといえるのである。

このような立地のなかで楠ノ木遺跡は廃絶し、山神・宮古集落は現在に至っている。この事実も楠ノ木遺跡を考えるうえで重要である。

また、山神地区から当遺跡へと通じる古道の存在は、当遺跡の性格を考えるうえで重要な位置を占める。fig.6に示した地図から19世紀代にはこのような道が存在していたことは確実であるが、この道の存在は楠ノ木遺跡の存在を加味してこそ意義があるものではないだろうか。すなわちこの道が成立したのは中世であった可能性は極めて高いと考える。楠ノ木遺跡と山神・宮古地区をつなぐ幹線道として機能していたものと想定しておきたい。また、山神城跡[23]と楠ノ木遺跡の廃絶時期がほぼ等しいという事実は、古道の存在によってさらに両集落の関係の深さを示すものとして理解されよう。

この道（集落間道と仮称）とともに現度会町柳橋地区へと通じる「熊野脇街道」が遺跡の東に通っていることも見逃せない。熊野脇街道から見れば当遺跡の立地は田丸地区を中心とした地域の入口である。このような立地にある楠ノ木遺跡とはまさに交通の要所にある集落といえよう。

次に遺跡そのものの性格を考えてみたい。楠ノ木遺跡の性格に関して重要な要素のひとつと考えられるのが、A地区土坑ＳＫ36で確認された鉄滓の大量出土である。これはA地区建物1の柱穴内や井戸ＳＥ2から鏃の羽口が出土していることや鉄滓が付着した中世土器類が出土していることから当該時期に鉄製品の鍛造を行っていたであろう事実は否定できない。

このことを考えるための事例のひとつとして当遺跡が位置する付近の現在の小字の状況がある。調査区周辺の小字はfig.8に示すような状況である。このなかで興味深いものとして大日山の斜面に相当する「鍛冶屋谷」と、調査したA地区に隣接する「大グルワ」がある。前者からは鍛冶に関したものを想定し得るし、後者からはこの付近に居住地が存在していたような想定ができる。無論、これらの小字がそのまま中世にまで直結したり、そのことのみを表したものであると即断することはできない。だが、山神地区の小字には「櫃宜殿谷」という地名もあり、A地区の調査結果や現状区画の方向が中世の遺構（特に溝の方向）とほぼ揃っていることなどを考えると全く無関係と見做すこともできないのである。発掘調査によって鍛冶関係遺構が確認された近辺に「鍛冶屋谷」という小字地名が存在していることを重視したい。楠ノ木遺跡の状況を示す一端である可能性を想定しておきたい。

以上のことから、楠ノ木遺跡は交通の要所に形成された集落跡であり、その集落内には鍛冶を行う集団が屋敷を構えられるほどの立場で居住していた、と考えておきたい。

楠ノ木遺跡の廃絶に関する問題

最後に、中世を通じて存続していた楠ノ木遺跡が近世を迎えることなく消滅した事実について若干の推論をしておきたい。当遺跡を終焉させた歴史的背景とはどのようなものであったのだろうか。このことに関して直接物語るのは文献史料をおいて他にない。当該地域は、くり返しになるが、神宮の所領地である神三郡に所属する。この状況が変化を見せるのは、戦国大名として存在することとなる北畠氏の

神三郡侵攻によってであることが文献史料などの検討[4]から裏付けられる。『氏経神事記』によると永亨年間（1429～1440年）以降、北畠氏関係の人物による田丸周辺への進軍や、神領の横領の記述が散見される。小林秀氏の御教示によれば寛正年間（1460～1465年）には田丸周辺の神領の多くが北畠氏の知行制のなかに組み込まれていたであろうことが推定されるという。このようなことから北畠氏による当該地域の侵攻・支配はおよそ15世紀中葉あたりに求めるのが妥当であると考えられよう。

楠ノ木遺跡にて確認される最終段階の遺物は、B地区井戸ＳＫ30・区土坑ＳＫ11・ＳＫ16および溝ＳＤ２・３などから出土したもので、南伊勢系土師器では鍋第４段階ｃ型式が最終と見做し得る。さて、この実年代であるが、現在までのところ伴出する美濃・瀬戸産の陶器類からは大窯期に相当し、16世紀以降という比定がなされる。しかし、藤澤良祐氏も述べる[16]ように、美濃・瀬戸産の陶器類についての実年代観はかなりの問題点を含んでいると考えられる。ただ、現状では南勢地域から出土する美濃・瀬戸産陶器以外の土器で型式編年が明確なものは皆無に近い状態である。したがってまわりくどいやり方になるが、当該地域で出土するような土師器類が出土し、しかもその他の実年代の比較的明確な遺物が伴っている地域の遺跡とのクロスチェックによって時期比定を行わざるを得ない。

さて当該地域近辺の出土土器類で実年代が最も正当性を持つのは信楽産の擂鉢であろう。信楽産の擂鉢については山田猛氏による詳細な型式学的検討が加えられている。[17]その実年代に関する位置づけには滋賀県信楽町・長野古墓出土の長禄２年（1458年）銘の資料を基準として用いており、楠ノ木遺跡の存続時期後半の検討にはある程度参考になるものと考えてよいであろう。

信楽産擂鉢と南伊勢系土師器類が共伴している白山町・家野遺跡出土土器を検討しておおよその実年代を想定してみよう。家野遺跡出土の鍋は第４段階ｂ型式を中心とし、一部第３段階ｂ型式のものや第４段階ｃ型式のものも認められる。信楽産擂鉢は山田編年によるⅡａ型式以降、Ⅱｂ型式までのものを含む。土坑13出土の鍋には第３段階ｂ型式のものを少量含むもののその主体は第４段階ｂ型式と見做してよいであろう。共伴すると考えられる擂鉢は山田編年のⅡｂ型式のものが数点認められる。白山町・古市遺跡溝ＳＤ24[18]からは鍋第４段階ｂ型式のものと信楽産擂鉢山田編年のⅡｂ型式のものとが共伴している。ただし破片であるため、確実なことは指摘できないという弱さがある。

この他、伊賀地域にて発掘調査された遺跡（上野市下り谷遺跡[18]・神ノ木館跡[19]・大山田村風呂谷館跡[20]・阿山町菊永氏城跡[21]・伊賀町福地城跡[22]など）に伴う南伊勢系土師器鍋の型式と信楽産擂鉢との関係を考慮するならば、様々な要因による事象を考慮するとしても、鍋第４段階ｂ型式の実年代の一端が15世紀中葉付近にあることが想定できるのである。

このことから、楠ノ木遺跡の終焉は15世紀中葉から後葉あたりの一時期に求められるのではないかと考えておきたい。

15世紀中葉あたりの時期的な動向には、前述したように北畠氏の神三郡侵攻という事実が存在している。これはかなり軍事色が強いもので、『氏経神事記』には寶徳２年（1450年）には北畠氏による大がかりな侵攻があり、原・山神・野篠・刈田（勝田）などの近隣諸郷が焼かれたという事件がが書かれている。[23]すなわち楠ノ木遺跡が終焉を迎えるまさにその頃に、北畠氏による軍事的侵攻が認められるのである。このことに関しては昨年度調査された山神城跡が、腐蝕の結果鍋第４段階ｂ型式ないしはｃ型式をもって終焉していると見做し得ることも重要な意味を持つであろう。

ただし、楠ノ木遺跡の終焉をこの事件によって求めるのは若干無理がある。終末こそ15世紀後葉と考えられるものの、当遺跡の規模は鍋第３段階ｂ型式を最後のピークとして以降は縮小に向かうと考えられるのである。したがって、この事件をはじめとしたいくつかの事象によって当遺跡は終末を迎えたと考えるのが妥当ではないだろうか。いいかえれば、北畠氏による大名支配が展開するなかで、神宮の権力が相対的に低下したことを理由のひとつとして想定しておきたい。すなわちたび重なる北畠氏の神三郡侵攻が当遺跡の廃絶に何らかの関係を持つものと想定されるのである。

いずれにしても、楠ノ木遺跡は近世を迎えることなく廃絶している。前述したように、当遺跡は蚊山遺跡などとは異なり、集落を移動することが困難な立地にある。まさに「消滅」といえる状況である。この事実をどのように解釈すべきであろうか。上述したように、当遺跡は交通の要所に立地している。熊野脇街道の玄関口に相当する占地は、地形的には山神・宮古地区と同様の立地とはいえそれらよりは優位であるといえる。さらに、かつて岩出集落には宮川対岸の津村・佐八集落への渡し船があったとされ、[09] 伊勢本街道が岩出集落を通過していたことが想定される。そうであれば楠ノ木遺跡は熊野と伊勢に向かう街道の交点に立地することにもなる。また、山神集落へとつながる集落間道の存在も無視できない。

これらのことを考えると、当遺跡は独立性が高く分村などではないことが想定されるのである。街道が交差する地点に形成された、文献には地名の記載のない集落と想定しておきたい。

以上、楠ノ木遺跡の性格について若干の考察を加えた。中世、特にその後期の南伊勢地域は、権門勢力である神宮と戦国大名である北畠氏という、性格的に相異なる勢力が同時存在する地域である。このなかで楠ノ木遺跡が示す中世集落の成立と廃絶のあり方は、当時の史的状況の一端を示すものであると考えられ、政治史的にも重要ではないかと考えるのである。

交通の要衝に立地していた当遺跡の上に、近畿自動車道玉城インターチェンジが建造された。楠ノ木遺跡がかつて置かれた歴史的状況を、図らずも平成の時代に再現することとなり、当遺跡は新たな交通の要衝として存在することとなる。

註

(1) 岩中淳之・高見宣雄「伊勢市佐八町・中ノ原外遺跡」『昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』（三重県教育委員会 1984）なお、報告書では当該集落跡を鎌倉時代にて終息し、以降の時期には継続しないものと見ているが、出土土器を見る限り、南北朝・室町時代にも何らかの生活が行われていたことは疑いない。

(2) 小坂直広・新川嘉宏・桜本賢治「度会郡玉城町・蚊山遺跡」『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅵ（三重県教育委員会 三重県埋蔵文化財センター 1990）

(3) 大川勝宏・稲本賢治「度会郡玉城町・山神城跡」（『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅷ 三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1991）

(4) 小林秀「伊勢国司北畠氏の神三郡支配に関する一試論」（『史叢』第38号 1987）

(5) 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Miehistory』 vol.1 1990）

(6) 鳥澤良弥「瀬戸大窯発掘調査報告」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ 1986）

(7) 山田猛「下郡遺跡群出土の捕鉢」（『Miehistory』 vol.1 1990）

(8) 三重県埋蔵文化財センター 『三重県埋蔵文化財センター年報』1.（1990）

(9) 増田安生・田村陽一「一志郡白山町・吉市遺跡」（『昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1985）

(10) 駒田利治・伊勢好久好「下り合遺跡Ⅰ」（『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1981）

(11) 駒田利治「神ノ木遺跡」（『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1980）

(12) 森前佳・伊藤久嗣「阿山郡大山田村瓜呂谷館跡」（『昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1983）

(13) 岡本武和・藤井尚登・仁保晋作 『南永氏城跡発掘調査報告』（阿山町教育委員会 阿山町遺跡調査会 1987）

(14) 駒田利治 『福地城跡発掘調査報告』（三重県教育委員会 1982）

(15) 『大神宮叢書 神宮年中行事大成 前篇』（臨川書店 1976）

(16) 金子延夫 『地名と村の歴史 ― 玉城町歴史散歩 ―』（1989）

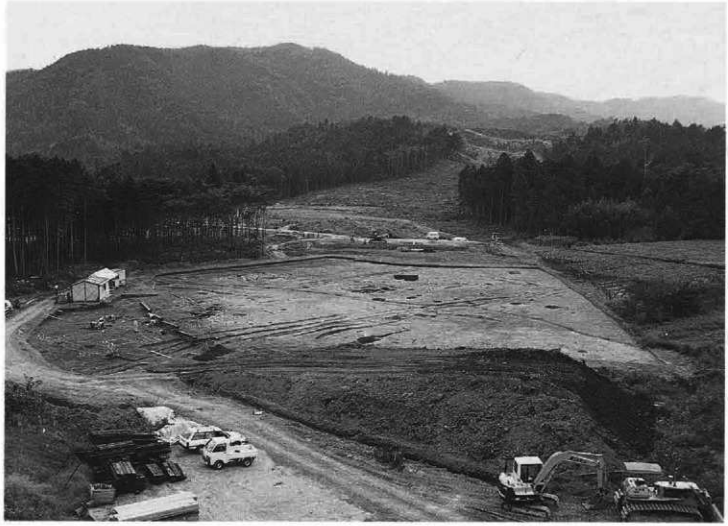
脱稿後、糸川城遺跡の資料に接した（門田了三『糸川城遺跡』名張市遺跡調査会 1991）。ここでは南伊勢系鋼第4段階b型式の資料と信楽擂鉢出田編年のⅢa型式の資料が共伴している。南伊勢系鋼第4段階の開始が15世紀中葉にあたる公算はさらに高くなったといえる。

PLATE

北上空から楠ノ木遺跡を望む（左方道路インター部分）

A地区全景

調査前風景（北東から）



調査区全景（北東から）

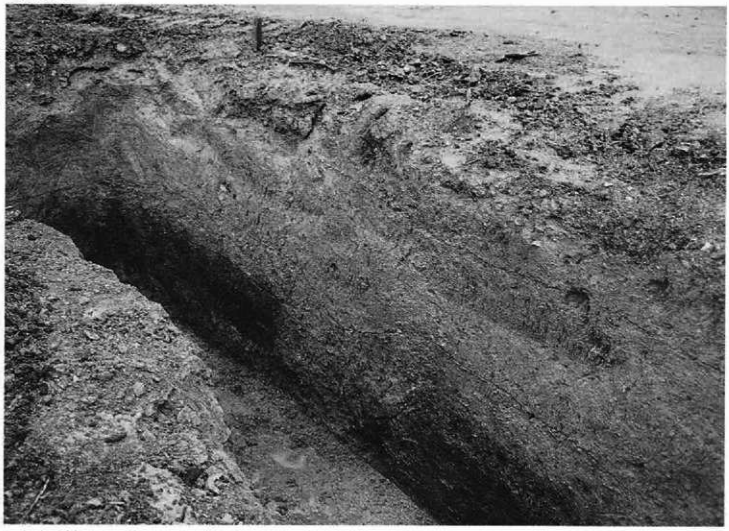
PL. 2

A・B地区航空写真

A・B地区を上空西方より見る

東壁（南）土層（南から）

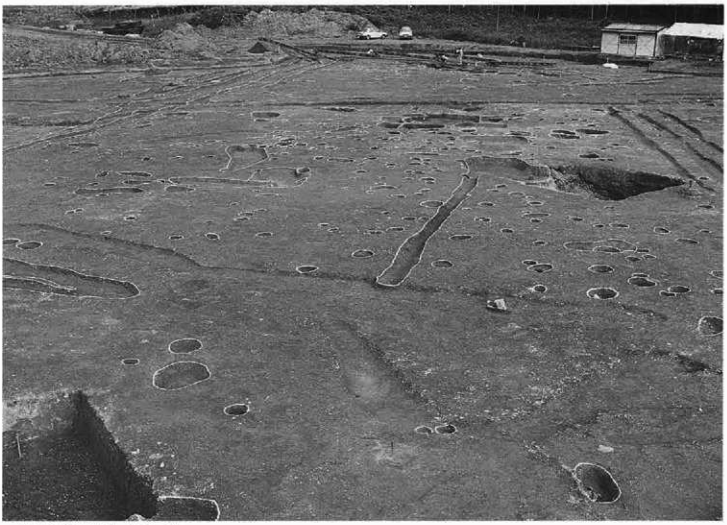
東壁（南）土層（北から）



東壁（南）中世遺構面下の土坑状落ち込み（南西から）

東壁（北）土層（南西から）

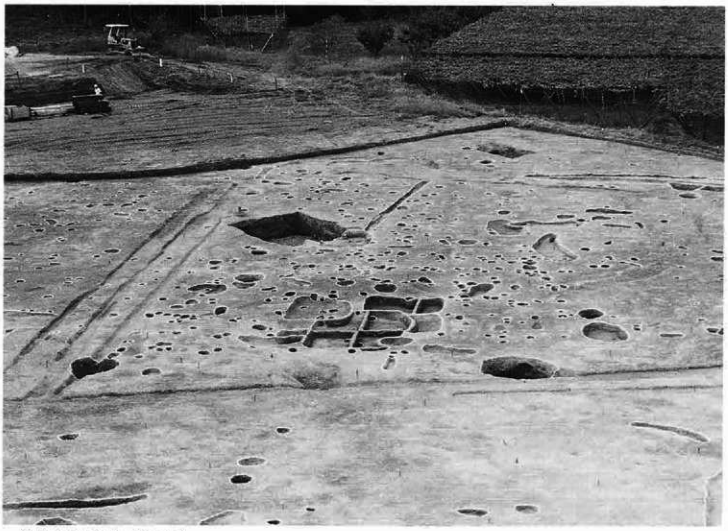
建物跡集中部分航空写真（西から）



建物跡集中部分（西から）

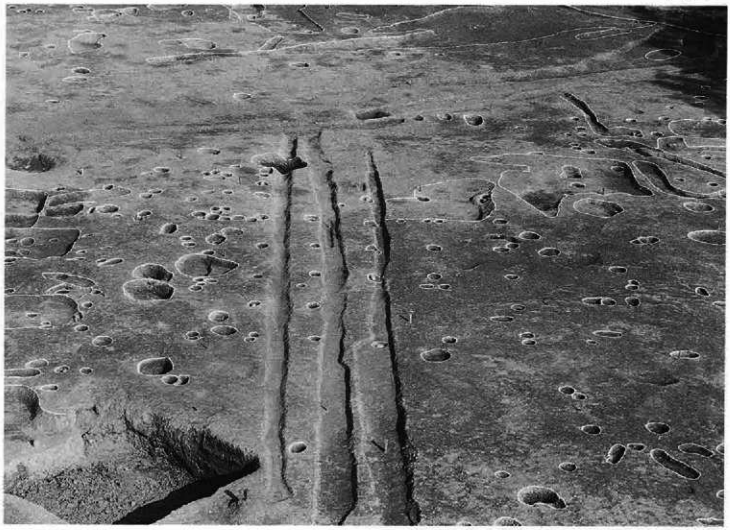
A地区建物跡集中部分(2)

建物跡集中部分（東から）



建物跡集中部分（東から）

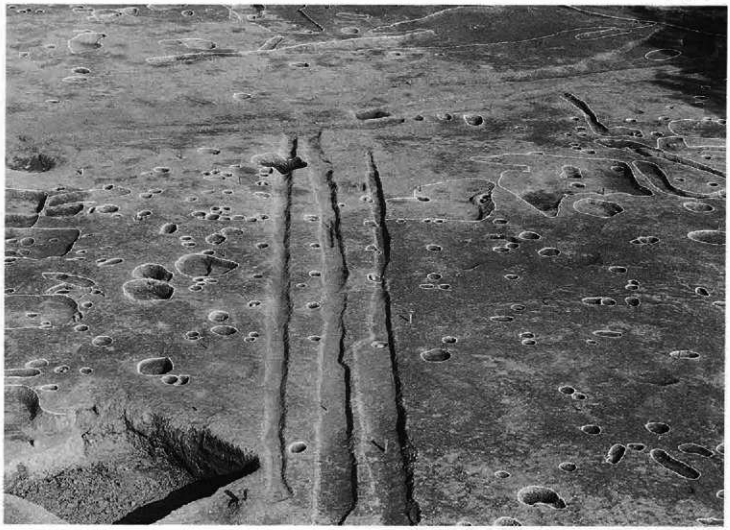
A地区掘立柱建物1



全景（西から）

柱列断面（南西から）

A地区掘立柱建物1



全景（西から）

柱列断面（南西から）

A地区掘立柱建物2・3

建物2全景（西から）

建物3全景（西から）

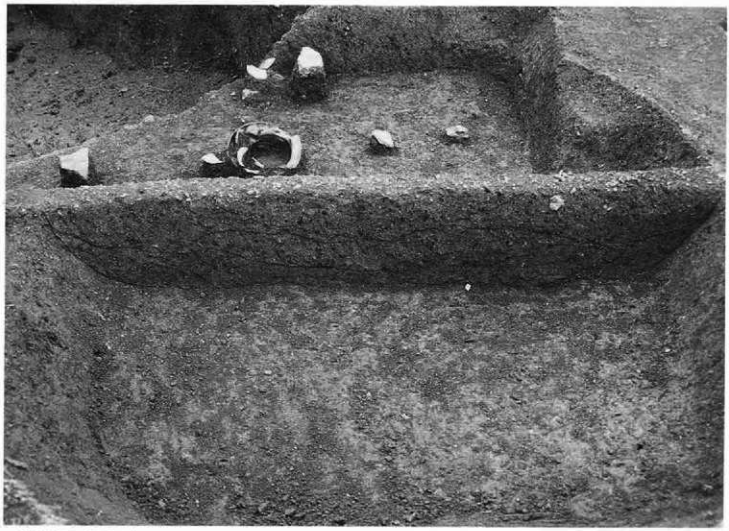
m13ピット1（建物2）土器出土状況（西から）

土坑SK7およびJ17ピット3（建物4）土器出土状況（南から）

建物9全景（東から）

A地区土坑SK17

西側土器出土状況（南から）



土層断面（東から）

土坑ＳＫ20（西から）

土坑ＳＫ38土層（東から）

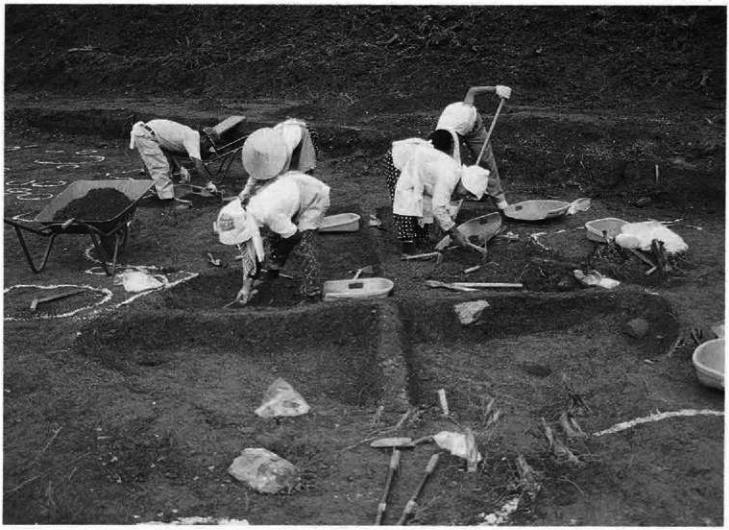
PL.12

A地区土坑SK36・37付近

遠景（東から）

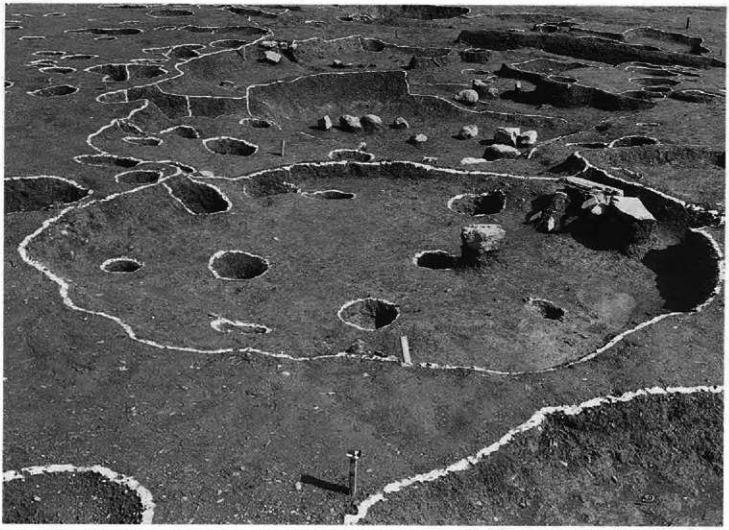
近景（南から）

A地区土坑SK36



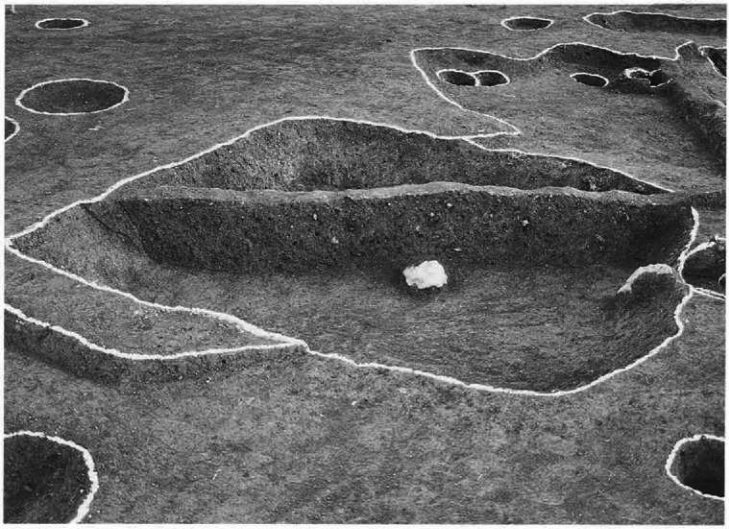
作業風景（西から）

土層断面（南から）



土坑SK36（西から）

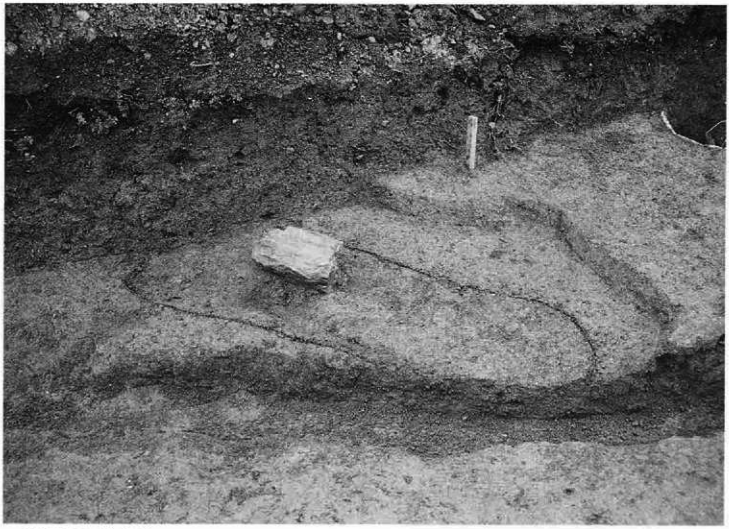
土坑SK37（西から）



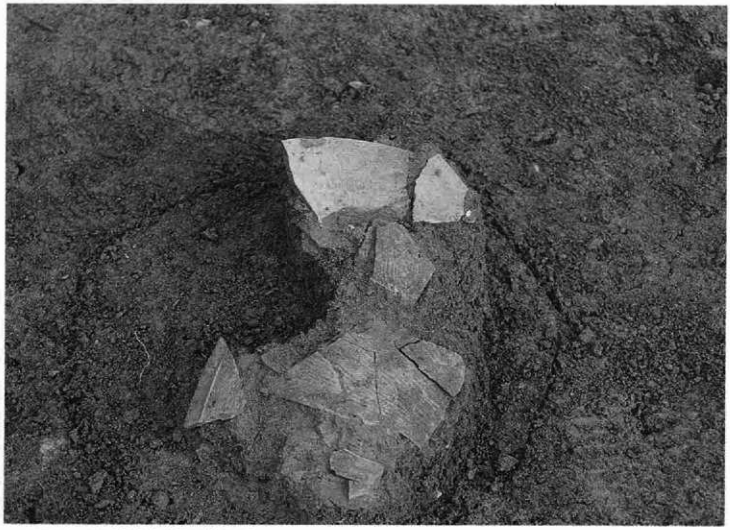
土坑ＳＸ９土層（南から）

土坑ＳＫ63土層（西から）

A地区土坑SK61およびその周辺



土坑SK61（北から）



a22グリッド土器出土状況（南から）

A地区井戸SE1

上部土層（北東から）

断ちわり状況（南東から）

A地区溝SD1・2・3

溝SD1・2・3と土坑・建物群（東から）

溝SD1・2・3（東から）

調査前風景（西から）

作業風景（中世墓ＳＸ３）

B地区全景

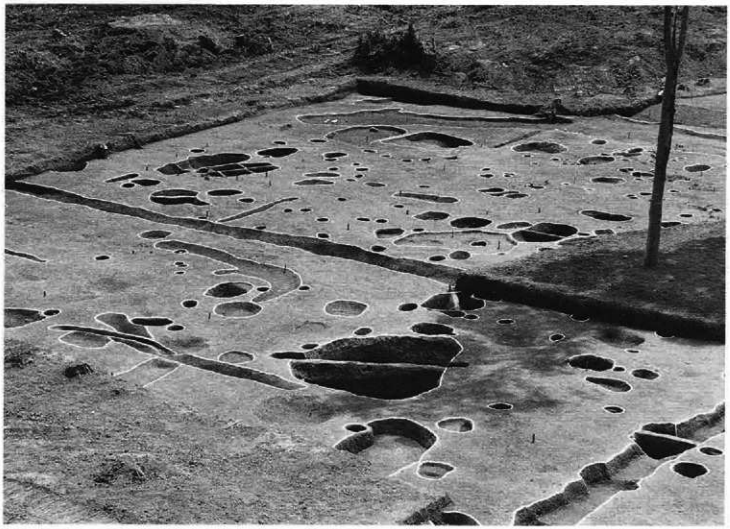
南から

北から

北壁西側（南東から）

東壁（北）南側（北西から）

B地区近景



北側平坦部東側（北から）

北側平坦部西側（北から）

B地区掘立柱建物1・2

建物1（北から）

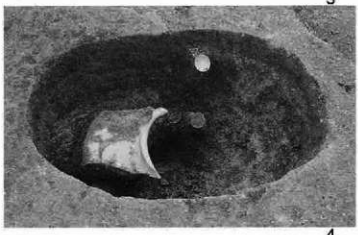
建物2（東から）

B地区中世墓SK25

1

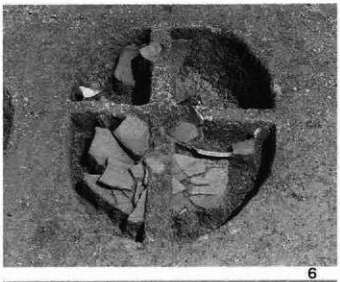
2

3


4

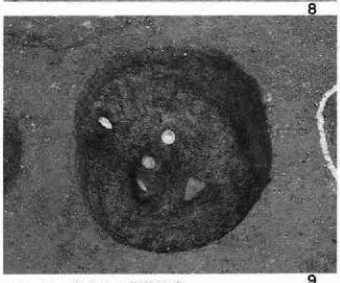
5

1～5：東からの連続写真

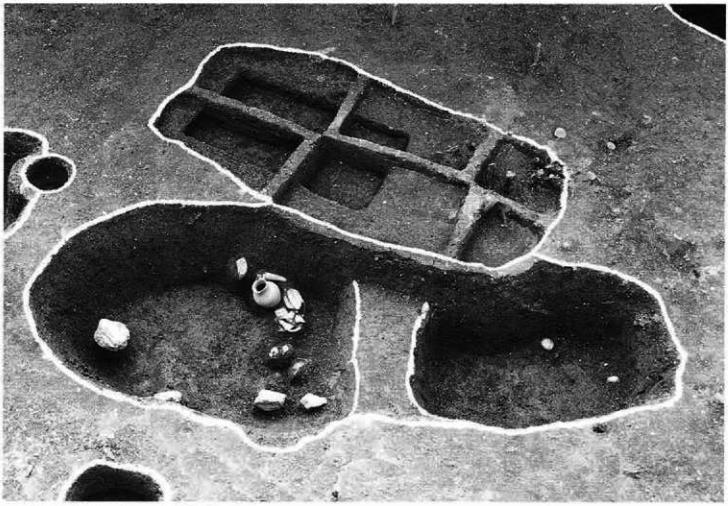

6

7

8


9

6～9：南からの連続写真



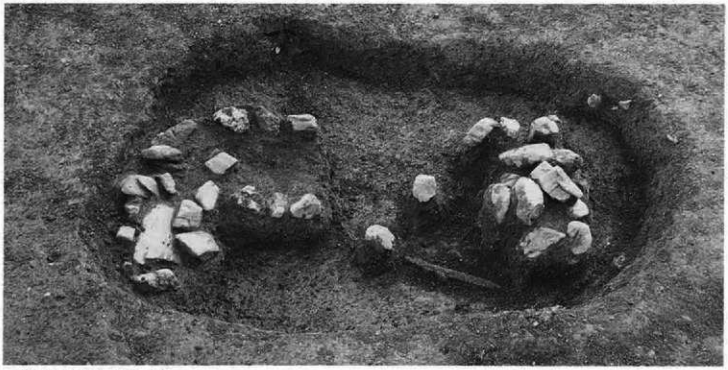
中世墓ＳＫ33・43・44 全景（東から）

中世墓ＳＫ43 土器出土状況（東から）

B地区中世墓SX3

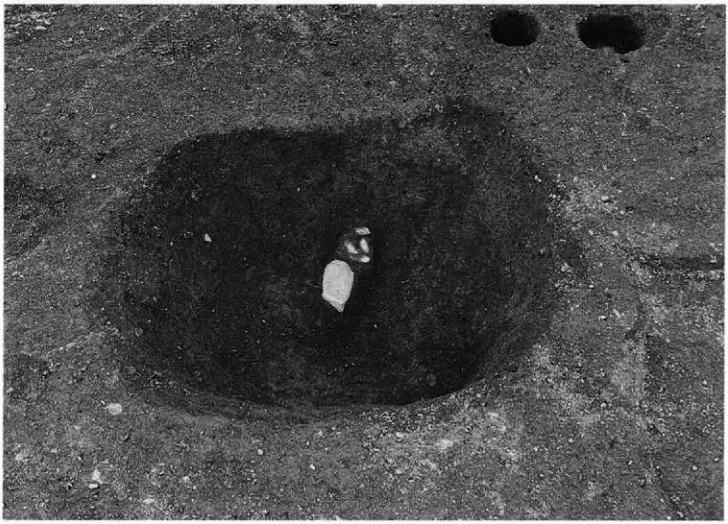
礫群検出状況（南から）

小刀出土状況（南から）



礫群検出状況（東から）

木棺痕跡検出状況（西から）



土坑ＳＫ２（南から）

落ち込みＳＫ１ 土器・礫群出土状況（南から）

土坑ＳＫ32 土器・礫群出土状況（東から）

土坑SK31 土層（南から）

井戸SK30 断ちわり状況（東から）

C地区調査前風景

遠景（西から）

近景（西から）

C地区全景

遠景（西から）

近景（西から）後方はB地区

西壁（南東から）

南壁（北東から）

C地区掘立柱建物1・2付近

南から

近景（西から）

土坑SK11（南から）

土坑SK8（南から）

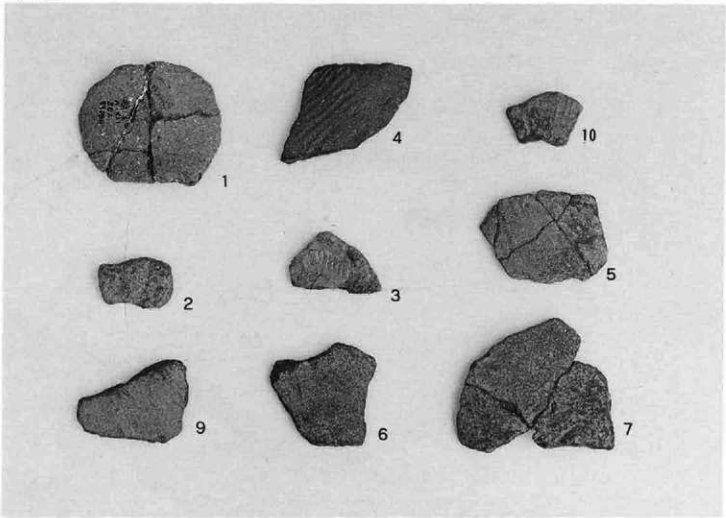
土坑ＳＫ４ 土器・礫群出土状況（北から）

土坑ＳＫ13 土器出土状況（北西から）

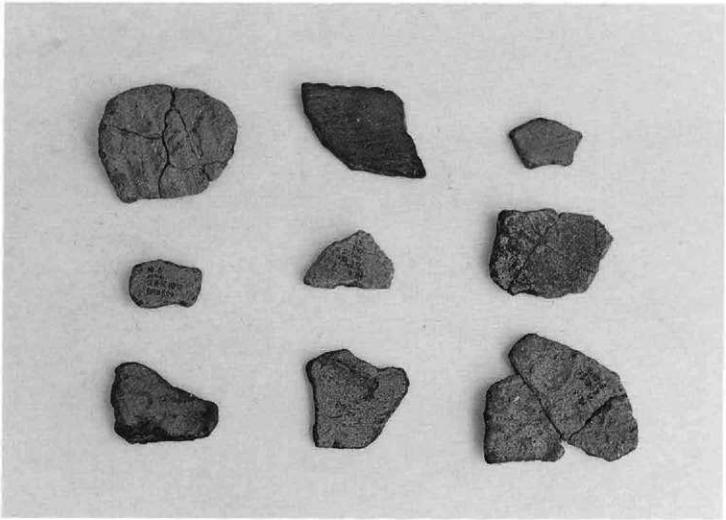
井戸SK7 土層（北から）

溝SD5（南から）

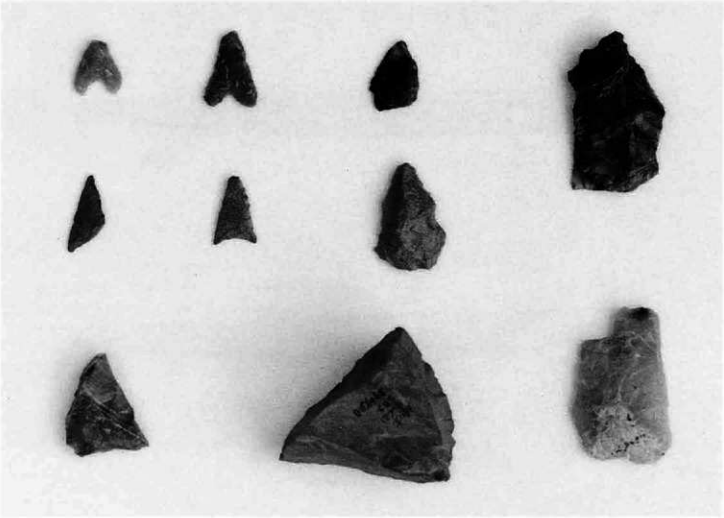
縄文土器



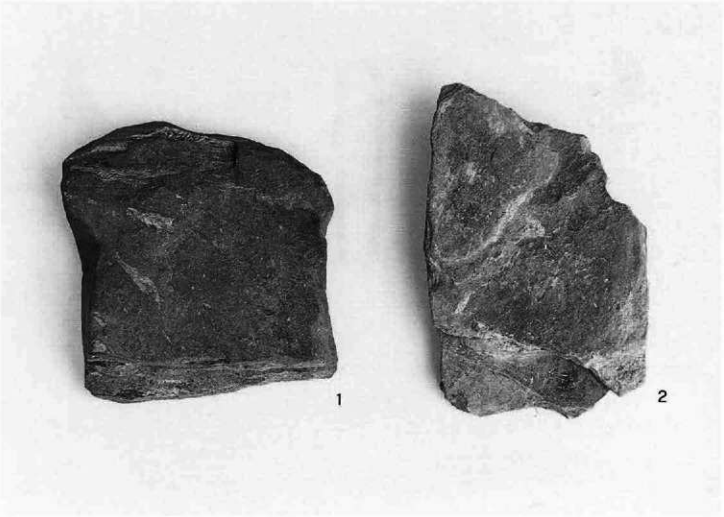
外面 (fig. 48)



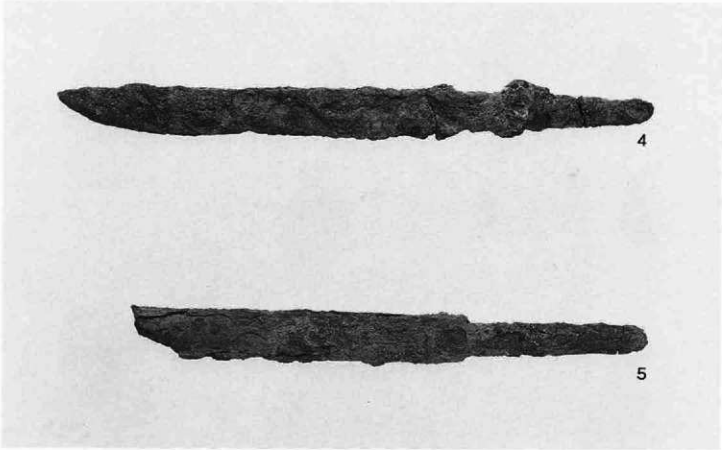
内面



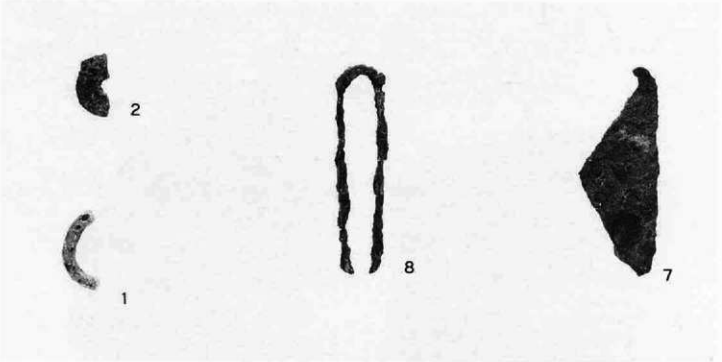
石器（fig. 48）



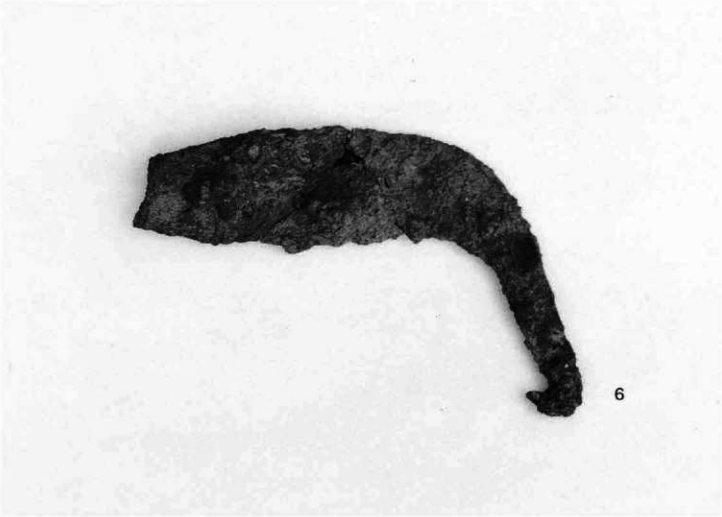
出土根石　1：Cc6 pit4（C地区建物2）　2：Ab15 pit4



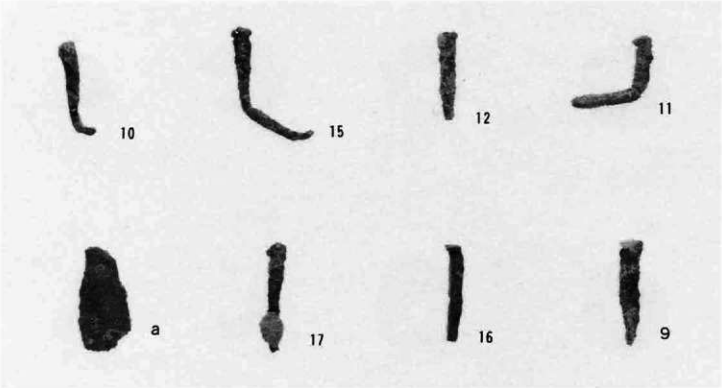
小刀（fig. 49）



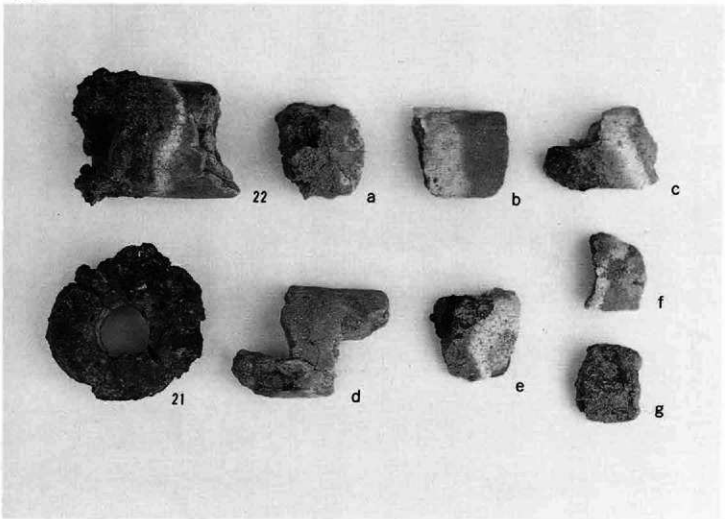
不明鉄・銅製品・毛抜き・火打ち鎌（fig. 49）



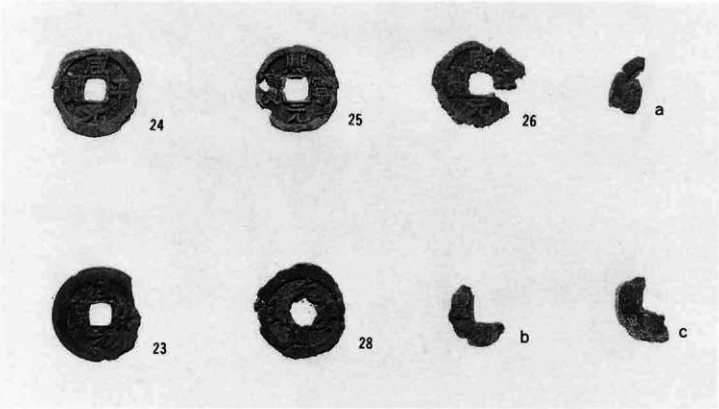
鎌 (fig. 49)



釘・不明鉄製品 (fig. 49)　　a：B地区中世墓SK25



鞴の羽口 (fig. 49)　a：ASE 2，b：Ae22 pit 5，c：ASX 7，d～e：ASK36，f：ASK43，g：ASK55



貨幣 (fig. 49)　a～c：ASK49

fig.48－20

fig.48－19

fig.64－32

fig.60－11

fig.53－21

fig.65－1

fig.65－7

fig.62－1

fig.52－37

fig.63－3

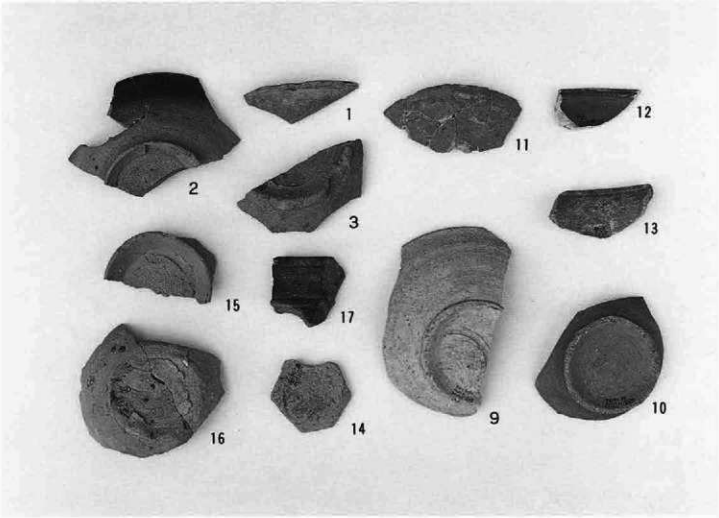
fig.52－35

fig.56－21

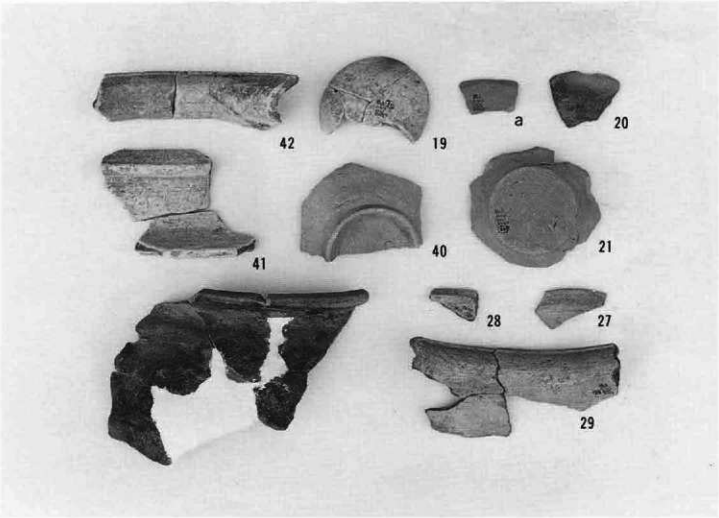
fig.56－22

fig.53－11

fig.58－38

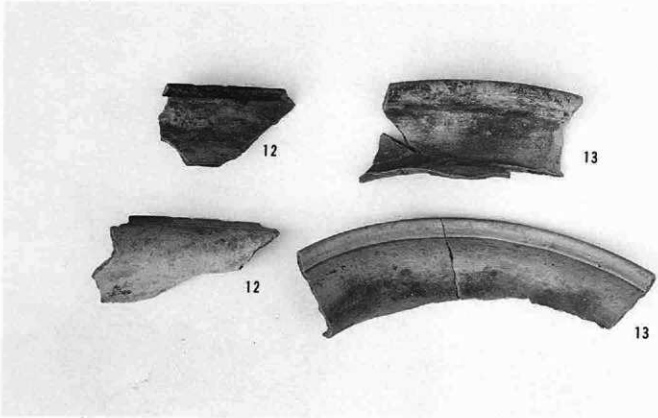


A SK40・20・45 (fig.52)

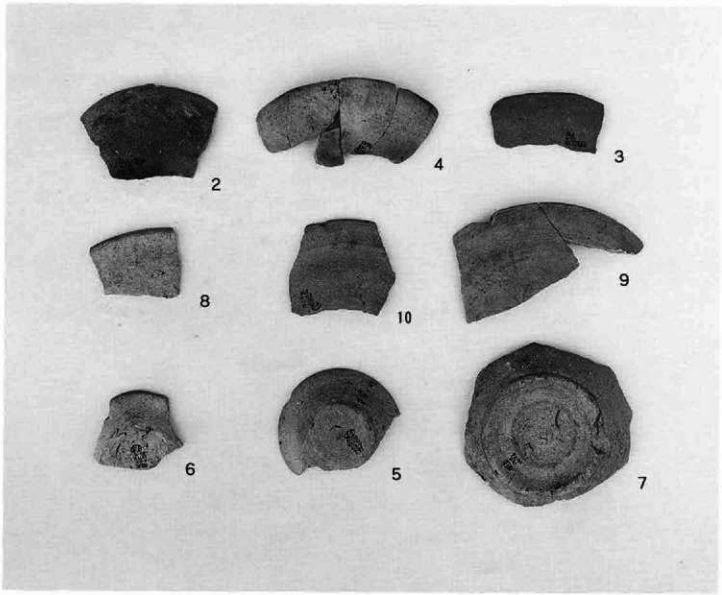


A SX5・SX23・65・28 (fig.52) a：SK23

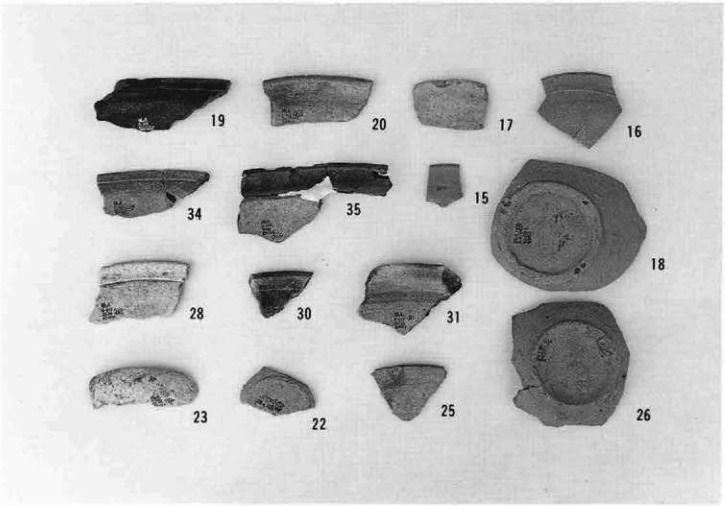
A地区出土土器(2)



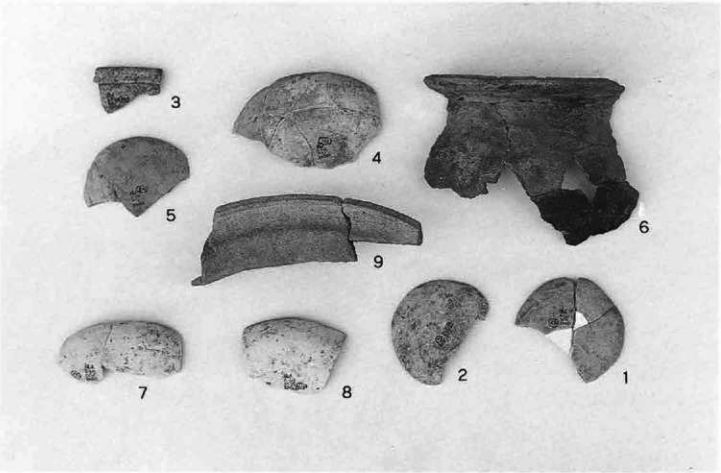
A SE1 (fig.53)



A SE1 (fig.53)

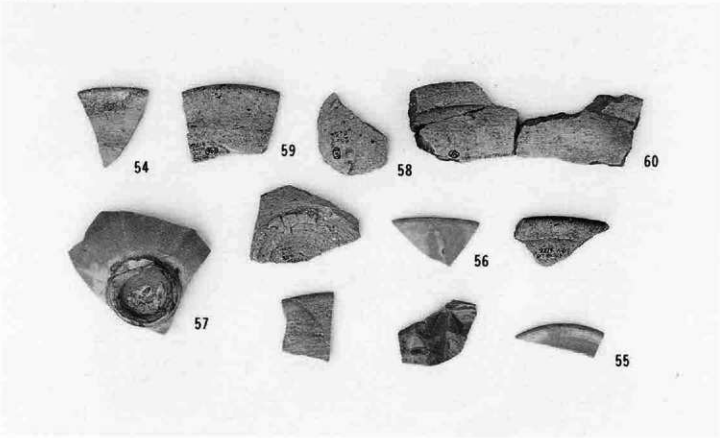


A SK17・38・49 (fig.53)

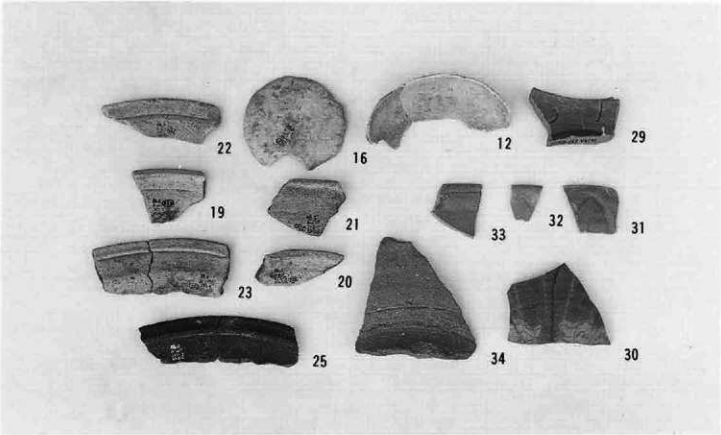


A SK33, f24pit1, SK39 (fig.54)

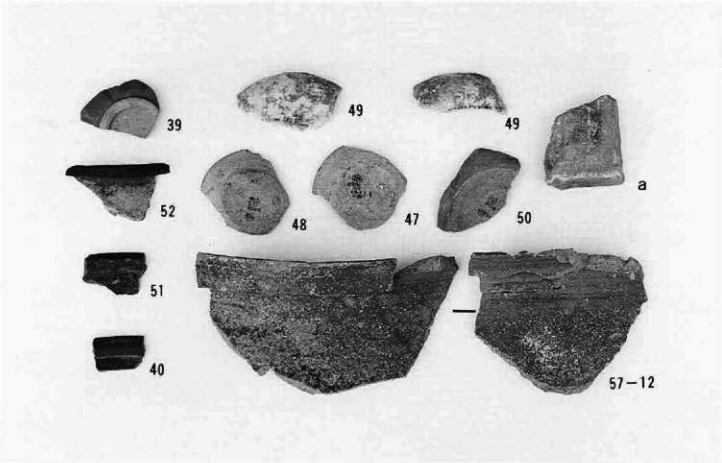
A地区出土土器(4)



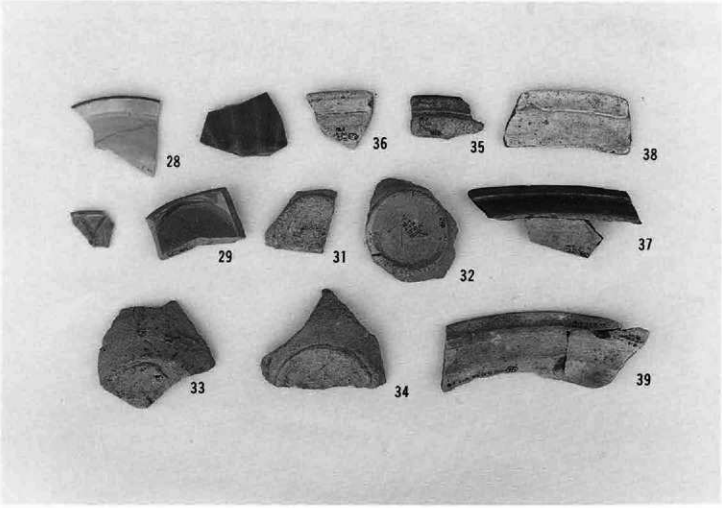
A SK7 (fig.54)



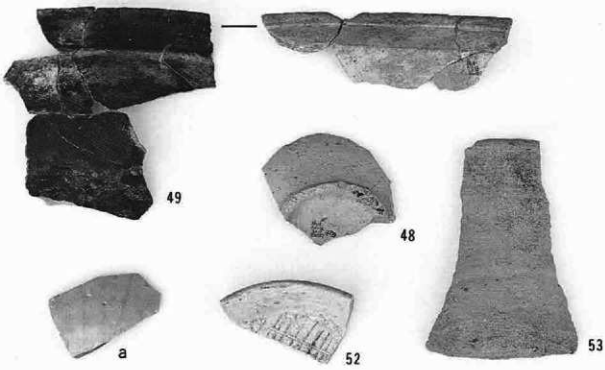
A SK5 (fig.54)



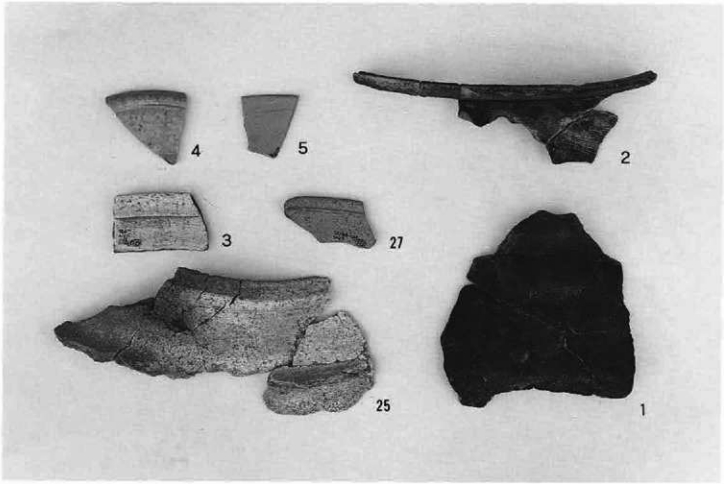
A SK21・27 (fig.54)　　a：SK21出土平瓦



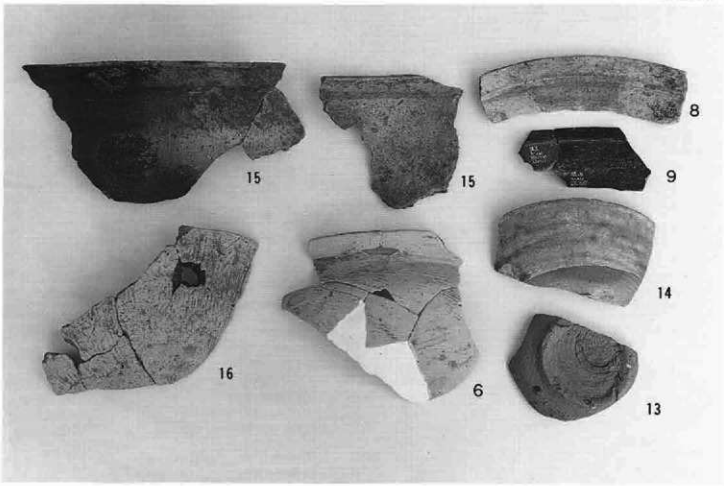
A SK55 (fig.55)



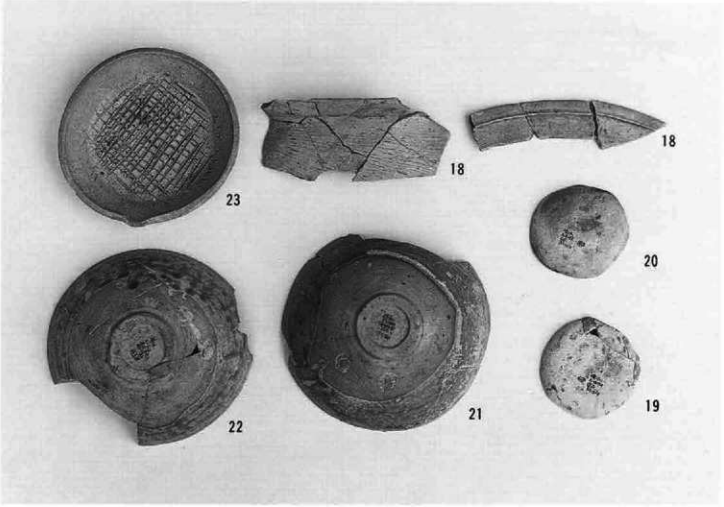
A SX7, SK56・18 (fig.55) a：SK56出土青磁



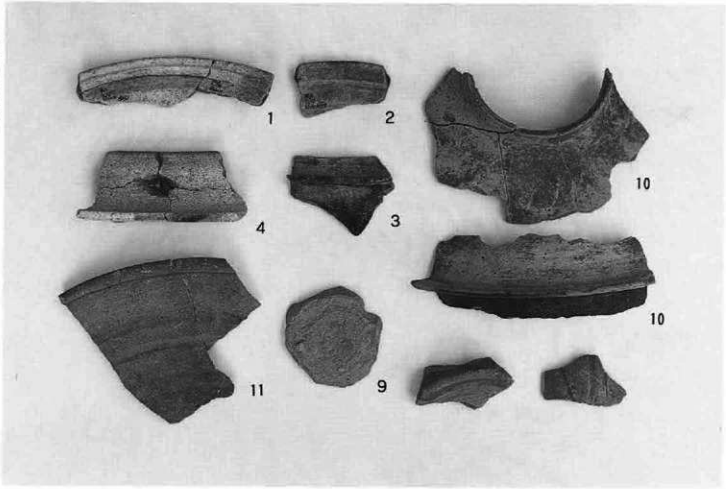
A SX9・SD24 (fig.56)



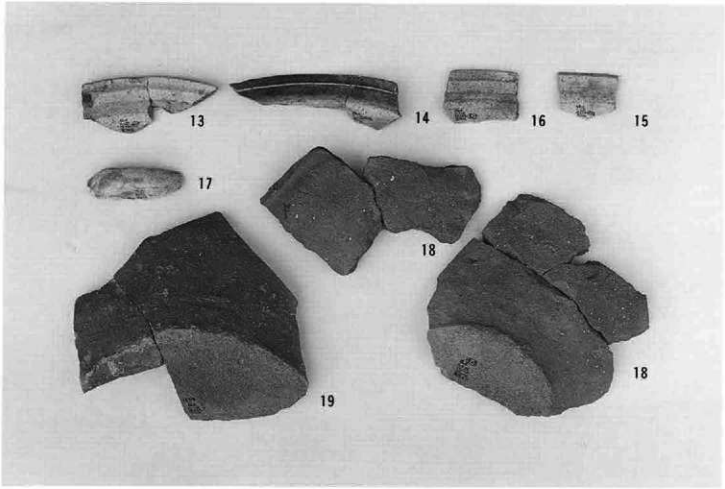
A SK37 (fig.56)



A SK61付近（濁赤褐色土） (fig.56)

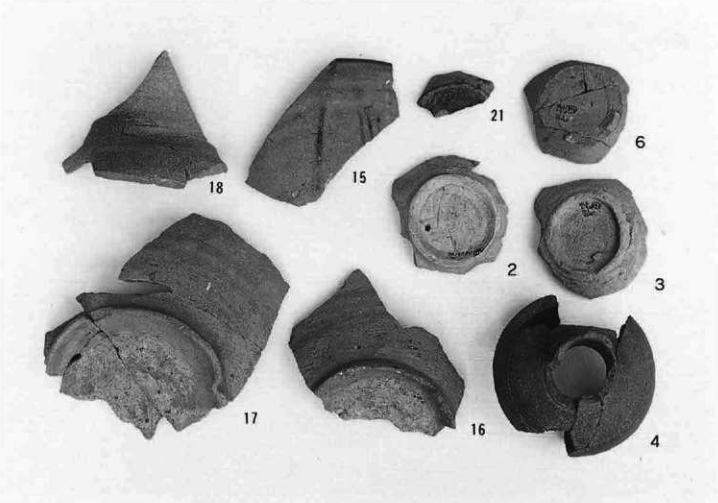


A SK3 (fig.57)

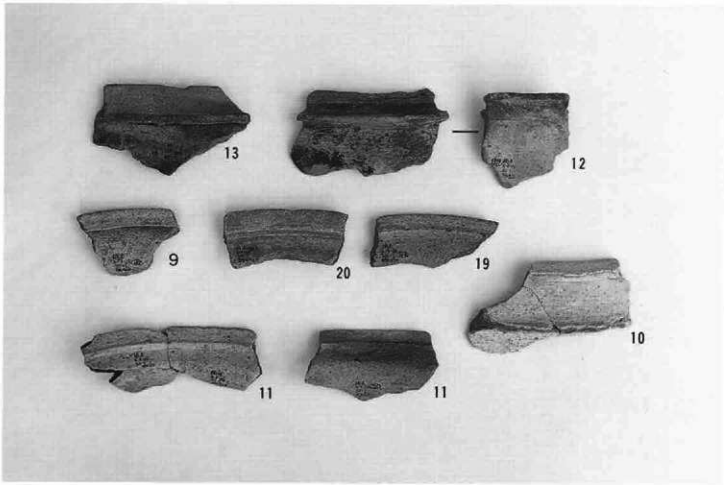


A SE2 (fig.57)

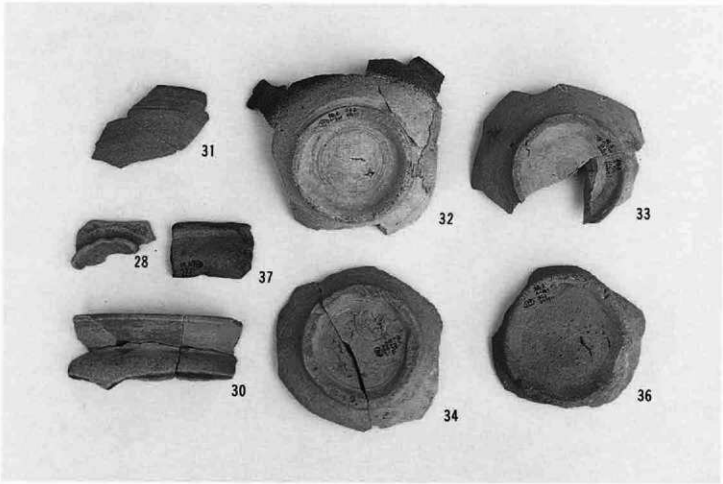
遺構間接合資料　A SD1・SK44・58・37・3・26・4，SX3 (fig.57)



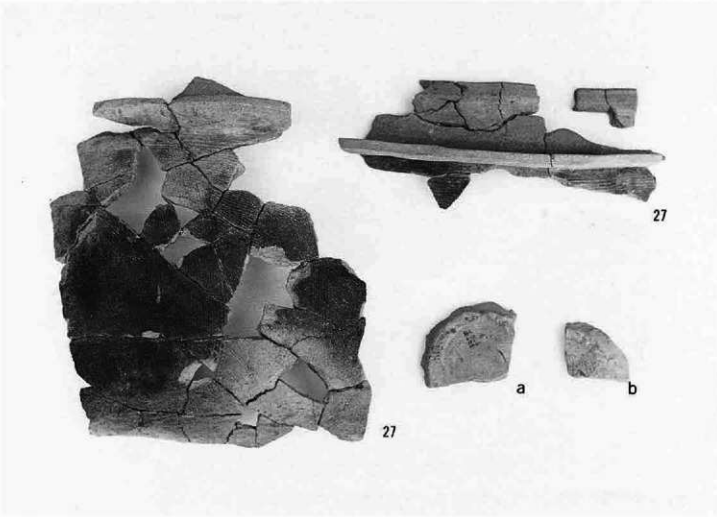
A SD1・3 (fig.58)



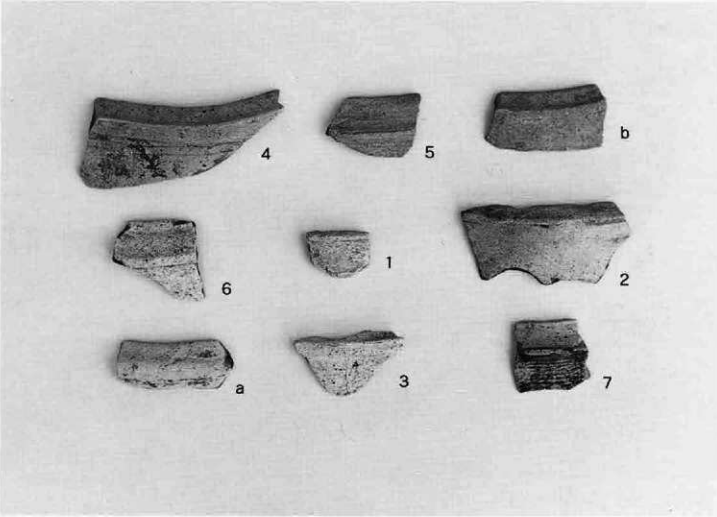
A SD1 (fig.58)



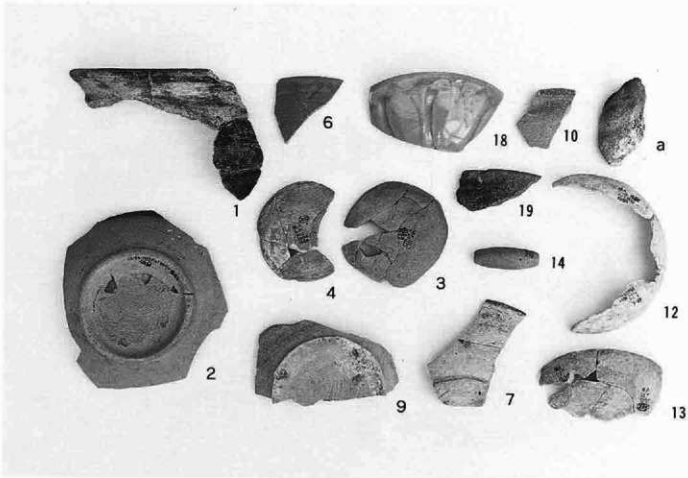
A SD2 (fig.58)



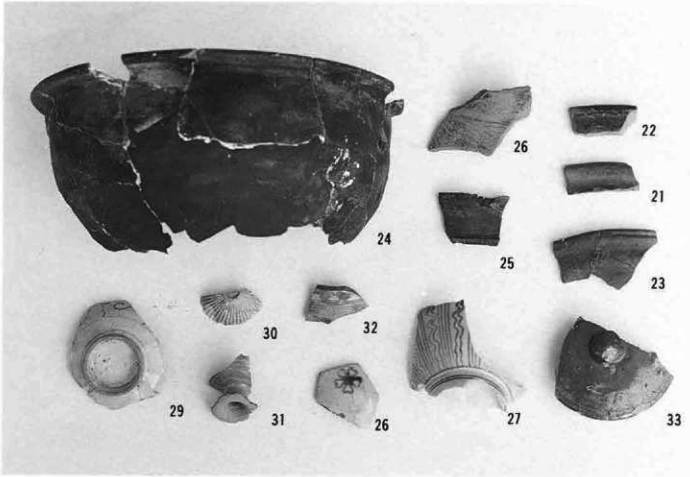
A SD3 (fig.58)　a～b：SD3出土陶器椀



各地区出土羽釜 (fig.51)　a：ASE2，b：ASK55

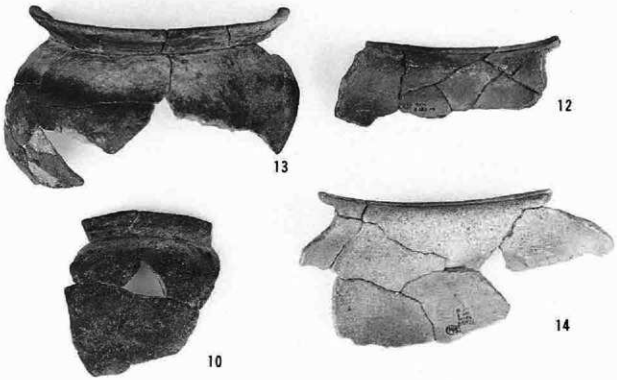


A 掘立柱建物関係（fig.59）　a：A g 15 pit 1（建物1）出土鞴の羽口

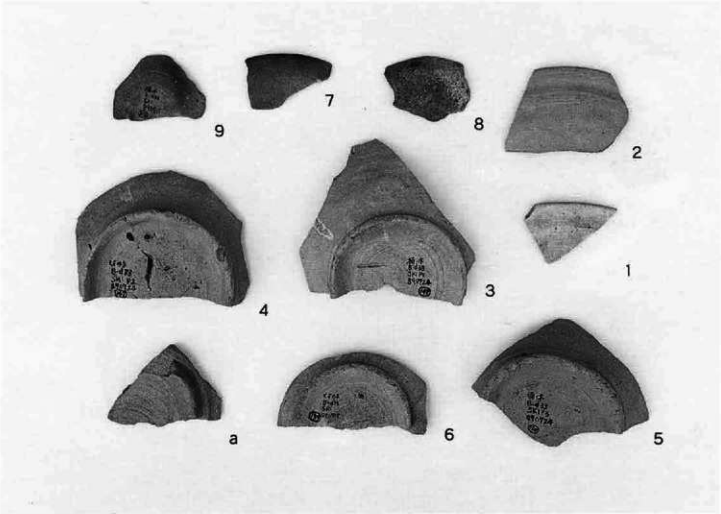


A 近世～近代（fig.59）

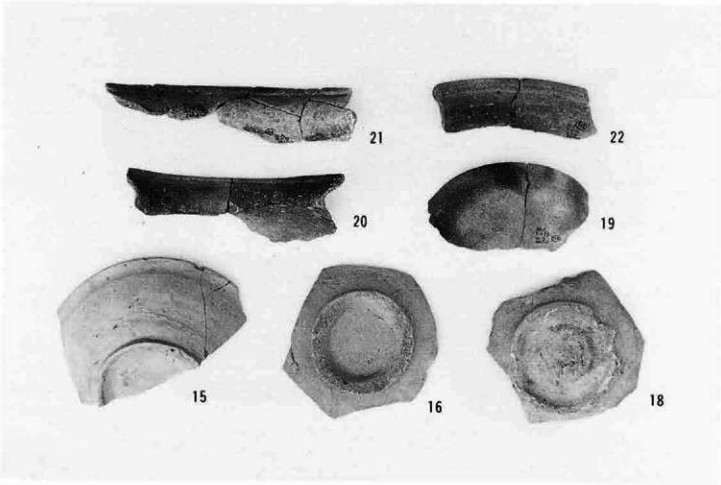
B地区出土土器(1)



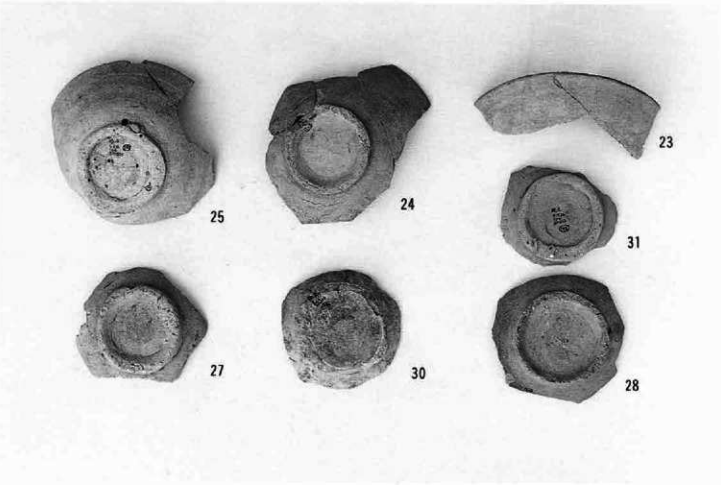
B SK1 (fig.61)



B SK1 (fig.61)　aは椀部と高台部の胎土が異なる。

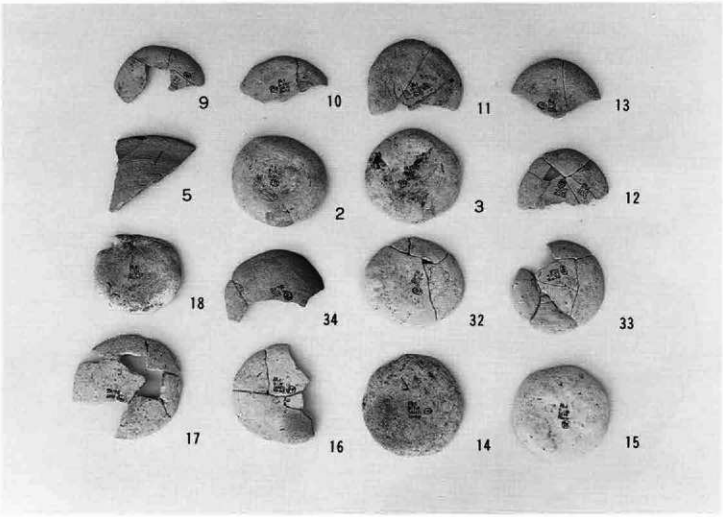


B SK18 (fig.60)



B SD4 (fig.60)

B地区出土土器(3)



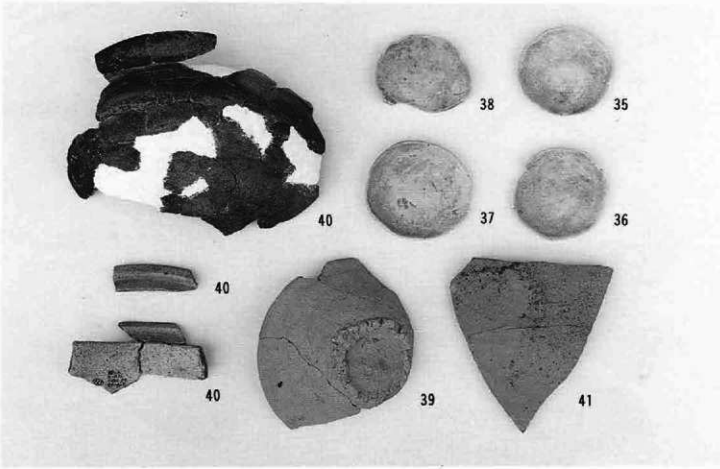
B SK4・23・44, SX3, i36 pit 1 (建物4) (fig.61)

B SD5・SK39 (fig.60)

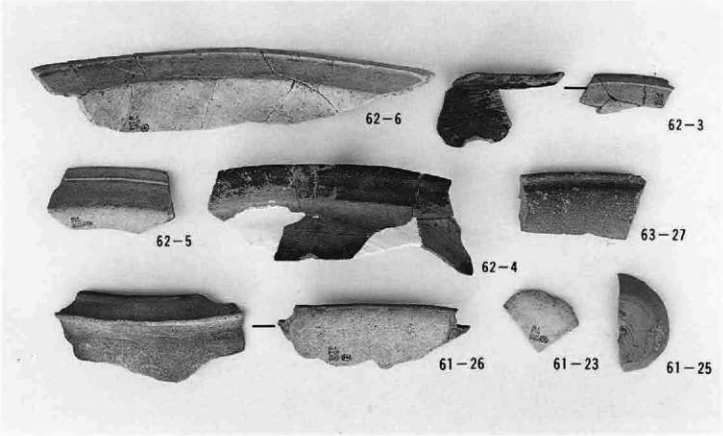
B地区出土土器(4)

B SK43 (fig.61)

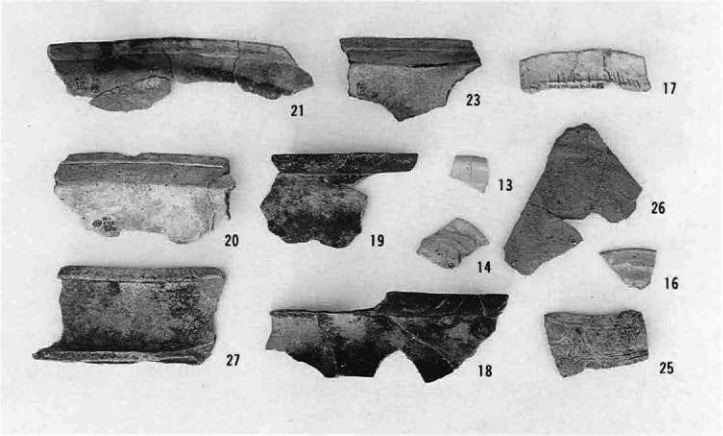
B SK25 (fig.61)



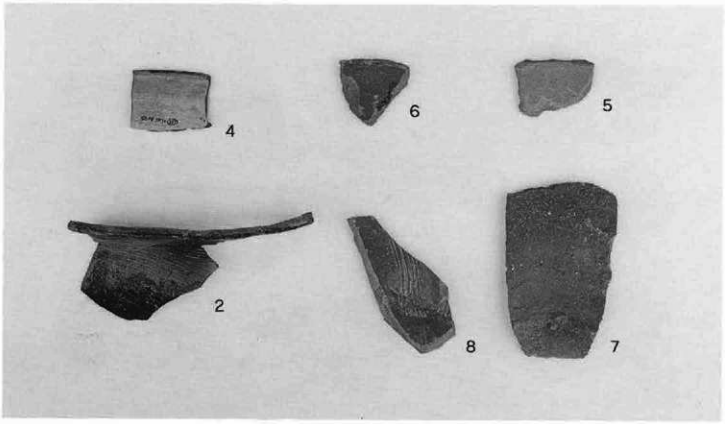
B SK25 (fig.61)



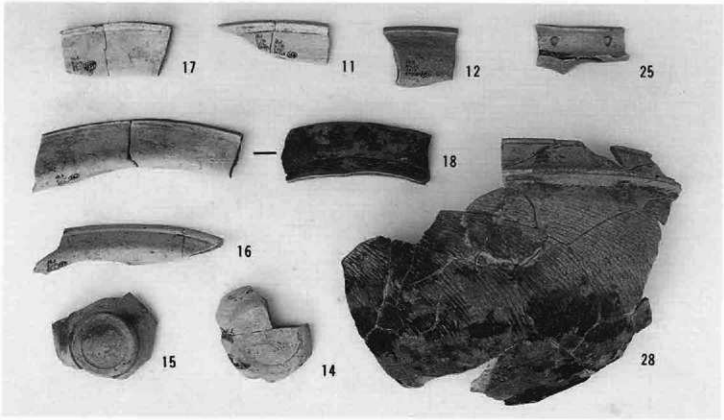
B SK17・24・9・26 (fig.61～63)



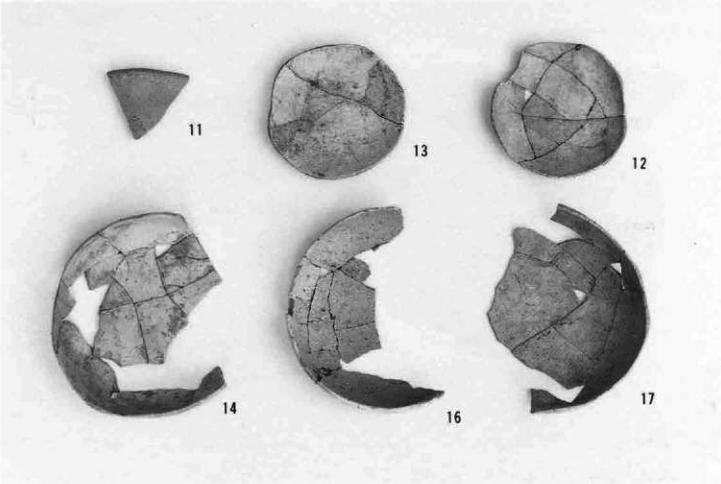
B SK5 (fig.62)



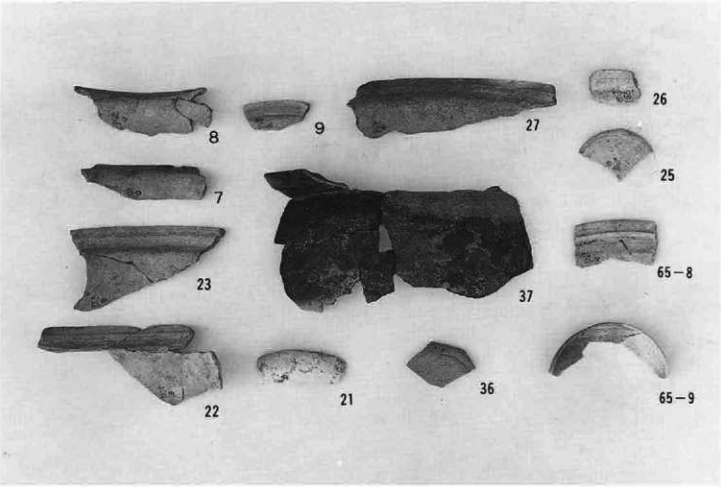
B SK30 (fig.63)



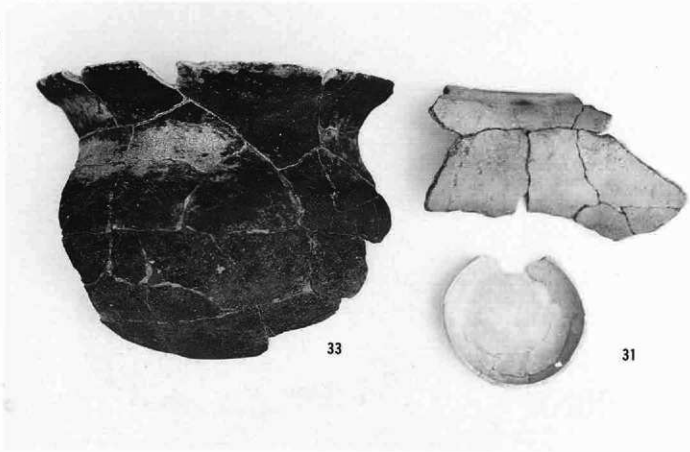
B SK11・16, SD2・8 (fig.63)



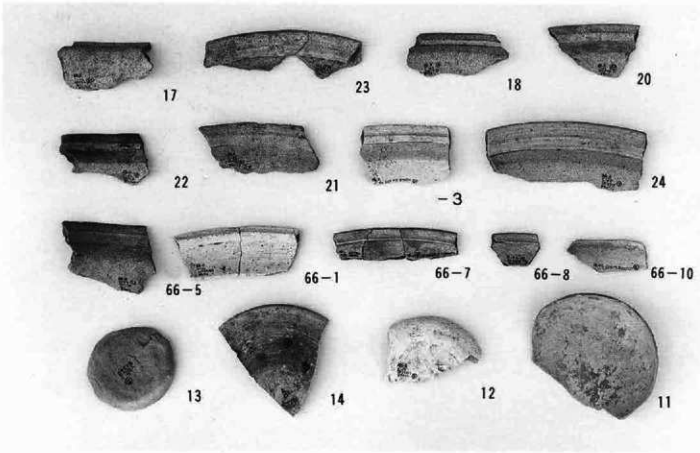
C SK11 (fig.64)



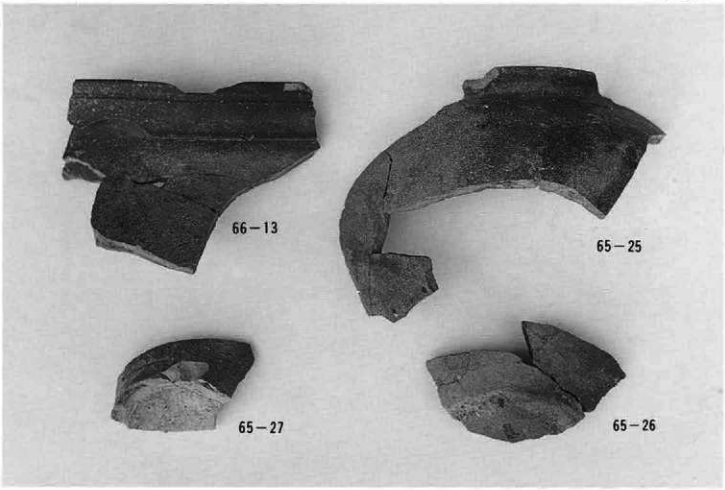
C SK1～3・6・10 (単独番号はfig.64)



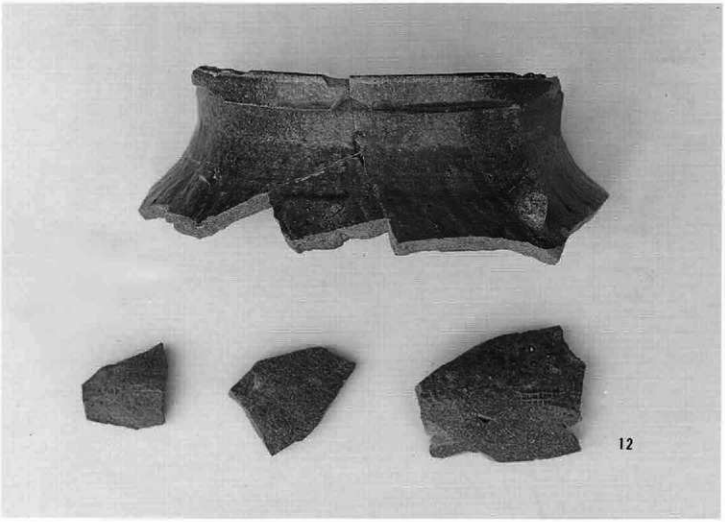
C SK12 (fig.64)



C SK7 (単独番号は fig.65)



C SK7 (fig.65～66)



C SK7 (fig.66)　下は同一個体破片

平成3(1991)年10月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年1月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告101－3

近畿自動車道（勢和～伊勢）
埋蔵文化財発掘調査報告
── 第3分冊 ──
楠ノ木遺跡

1991（平成3年）10月

編集　三重県教育委員会
発行　三重県埋蔵文化財センター
印刷　光出版印刷株式会社

楠ノ木遺跡A地区平面図(等高線図)